

豊浦町
高岡 1 遺跡(3)・高岡 2 遺跡

—北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 7 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



高岡 1 遺跡 包含層調査状況

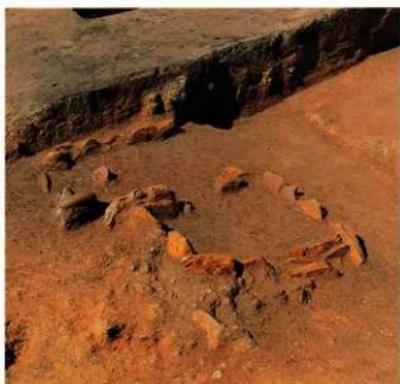


高岡 1 遺跡 遺構 (WH-10・11) 調査状況

口絵 2



高岡1遺跡 WH-7の完掘



高岡1遺跡 WH-7の石組み伊



高岡1遺跡 WH-8の完掘



高岡1遺跡
WP-4 遺物出土状況



高岡1遺跡
WP-5 遺物出土状況



高岡1遺跡
WP-5 出土の土器 (III群b-1類)



高岡1遺跡 包含層出土の土器 (Ⅲ群 a-2類・Ⅲ群 b-1類)



高岡1遺跡 包含層出土の土器 (Ⅲ群 b-3類)



高岡2遺跡 包含層調査状況



高岡2遺跡
包含層出土の土器 (IV群 a類)



高岡1・2遺跡 周辺の空中写真(1976年10月28日撮影)

(これは国土地理院発行の10,000分の1を複製したものである)

豊浦町
高岡 1 遺跡(3)・高岡 2 遺跡

—北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 7 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は、北海道縦貫自動車道建設工事にともない、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成7年度に実施した豊浦町高岡1遺跡・高岡2遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 平成7年度の調査は、第2調査部 第3調査課が担当した。
3. 本書の作成は、立川トマス、末光正卓、袖岡淳子、が担当し、執筆者については、文末に記した。編集は立川トマス、袖岡淳子があたった。
4. 黒曜石の原産地同定は京都大学原子炉実験所 薬科哲男氏に委託した。
5. 動物遺存体の同定は千歳市埋蔵文化財センター 高橋 理氏に依頼した。
6. 石器等の石材鑑定は、第1調査部 資料調査課 花岡正光がおこなった。
7. 出土資料は、豊浦町教育委員会で保管する。
8. 調査にあたっては、下記の機関および人々のご協力、ご助言をいただいた。

豊浦町教育委員会、虻田町教育委員会 角田隆志、伊達市教育委員会 大島直行、福田茂夫 室蘭市民俗資料館 久末信一、釧路市埋蔵文化財センター 石川 朗、稚内市教育委員会 内山真澄、名寄市教育委員会 氏江敏文・鈴木邦輝、枝幸町教育委員会 佐藤隆広、紋別市立郷土博物館 因幡勝雄・佐藤和利、常呂町教育委員会 武田 修、網走市立郷土博物館 和田英昭、北海道立北方民族博物館 青柳文吉、旭川市彫刻美術館 斎藤傑、旭川市教育委員会 瀬川拓朗・友田哲弘、深川市教育委員会 葛西智義、芦別市星の降る里百年記念館 長谷山隆博、富良野市郷土館 杉浦重信、帯広百年記念館 北沢 実・山原敏郎、北海道立アイヌ民族文化研究センター 古原敏弘、札幌市埋蔵文化財センター 加藤邦雄・上野秀一・羽賀憲二・仙庭伸久・秋山洋司、恵庭市郷土資料館 上屋真一・松谷純一・佐藤幾子、千歳市埋蔵文化財センター 大谷敏三・田村俊之・高橋 理・豊田宏良・遠藤昭浩、苫小牧市埋蔵文化財センター 佐藤一夫・工藤 肇・宮方靖夫・渡辺俊一・二階堂啓也・赤石慎三・兵藤千秋、平取町教育委員会 森岡健治、今金町教育委員会 寺崎康史・能條歩、八雲町教育委員会 三浦孝一・柴田信一、森町教育委員会 藤田 登、南茅部町教育委員会 阿部千春・福田裕二・山口 敦・小林 貫、七飯町教育委員会 石本省三・横山英介、函館市教育委員会 田原良信・佐藤智雄・五十嵐貴久、市立函館博物館 野村祐一、函館市北方民族資料館 長谷部一弘、木古内町教育委員会 菅野文二、知内町郷土資料館 高橋豊彦、上ノ国町教育委員会 佐藤一志・柳沼弥生、北海道開拓記念館 平川善祥・右代啓視、北海道大学 林 謙作、札幌大学 木村英明・高宮広土、東京大学 宇田川 洋・大貫静夫、筑波大学大学院 石井 淳、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 工藤利幸、盛岡市教育委員会 神原雄一郎・武田良夫・室野秀文、岩手県滝沢村教育委員会、桐生正一・井上雅孝、秋田県埋蔵文化財センター 櫻田 隆、利部 修、仙台市教育委員会 工藤信一郎、仙台市博物館 原河英二、奥松島縄文村 今野勝彦・會田容弘、長野県埋蔵文化財センター 川崎 保、長野県立歴史館 宮下健司、山梨県立考古博物館 末木 健・今福利恵、山梨県埋蔵文化財センター 長沢宏昌

記号等の説明

1. 遺構の表記は以下に示す記号を用いた。

WH：竪穴住居跡 HP：柱穴および住居に伴うピット

WP：土壇 WF：焼土

2. 遺構図の縮尺は、原則として20分の1である。

遺構平面図の方位は、北がN-20°-Eである。

遺構平面図の・小数字とセクションレベルは標高（単位m）である。

3. 遺構平面図の出土遺物は記載のない限り、以下の記号を用いている。

●：土器（床面出土）

○：土器（覆土出土）

▲：石器（床面出土）

△：石器（覆土出土）

■：フレイク・チップ（床面出土）

□：フレイク・チップ（覆土出土）

4. 遺構の規模は「確認面での長径×短径／底面での長径×短径／確認面からの最大深」で示してある。

一部破壊されているものは現存長を（ ）で示し、不明のものは-で示した。

5. 土層の混在状態は、基本土層や上記の略号などを用いておもに下記のように表わしてある。

A+B：AとBがほぼ同量混じる

A>B：AにBが少量混じる

A>>B：AにBが微量混じる

6. 遺物実測図と土器拓影図の縮尺は、原則として以下のとおりである。適宜変更したものもある。

復元土器：3分の1

剥片石器：2分の1

土器拓影：2分の1

礫石器：3分の1

土・石製品：2分の1

7. 石器・石製品の大きさは、「最大長×最大幅×最大厚」で記してある。

8. 住居に関するスクリーントーンの凡例

⦿：焼土

////：焼土粒・炭化物粒の混じった黒色土

目次

口絵

例言

記号等の説明

I. 調査の概要

1. 調査要項	1
2. 調査体制	1
3. 調査にいたる経緯	1
4. 調査の概要	2

II. 遺跡の位置と環境、周辺の遺跡

1. 位置と環境	5
2. 周辺の遺跡	9

III. 調査の方法、遺物の分類

1. 調査の方法	11
2. 土層の区分	13
3. 土器の分類	14
4. 石器等の分類	16

IV. 高岡 1 遺跡

1. 概要	19
2. 土層の区分	21
3. 住居跡	25
(1)WH-7	25
(2)WH-8	35
(3)WH-9	38
(4)WH-10	39
(5)WH-11	41
(6)WH-12	45
(7)WH-13	50
(8)WH-14	52
(9)WH-15	55
00WH-16	59
01WH-17	60
02WH-18	62
4. 土壌	65
(1)WP-4	65
(2)WP-5	69
(3)WP-6	71
5. 焼土	72
(1)WF-2	72

(2)WF-3、4、5、6	72
(3)WF-7	72
(4)WF-8	74
(5)WF-9	74
(6)WF-10	74
(7)WF-11	76
(8)WF-12	76
(9)WF-13	76
6. 包含層出土の土器	83
7. 包含層出土の石器等	140
V. 高岡2遺跡	
1. 概要	161
2. 土層の区分	161
3. 包含層出土の土器	164
4. 包含層出土の石器等	177
VI. 自然科学的手法による分析結果	
1. 高岡1、2遺跡出土の黒曜石産地同定 藁科哲男	185
2. 高岡1遺跡出土の動物遺存体 高橋理	198
VII. まとめ	
高岡1、2遺跡における時期別の土器分布について	199

目 次

I. 調査の概要

図I-1 高岡1遺跡・高岡2遺跡の位置	3
---------------------	---

II. 遺跡の位置と環境、周辺の遺跡

図II-1 遺跡周辺の地形	7
図II-2 機械ボーリングによる土層柱状図	8
図II-3 豊浦町の遺跡	10

III. 調査の方法、遺物の分類

図III-1 発掘区の呼称	11
図III-2 地区の呼称、グリッドの設定・調査範囲	11
図III-3 基本土層柱状図	13

IV. 高岡1遺跡

図IV-1 高岡1遺跡・川西地区の地形と遺構の位置	20
図IV-2-1 土層柱状模式図	21
図IV-2-2 土層断面(1)	22
図IV-2-3 土層断面(2)	23
図IV-2-4 土層断面(3)	24
図IV-3-1 遺構の位置	25
図IV-3-2 WH-7	26
図IV-3-3 WH-7 石組み炉と床面遺物出土状況	27
図IV-3-4 WH-7 とその出土遺物分布	28
図IV-3-5 WH-7 出土の遺物(土器1)	29
図IV-3-6 WH-7 出土の遺物(土器2)	31
図IV-3-7 WH-7 出土の遺物(石器1)	33
図IV-3-8 WH-7 出土の遺物(石器2)	34
図IV-3-9 WH-8	35
図IV-3-10 WH-8 とその出土遺物分布	36
図IV-3-11 WH-8 出土の遺物(土器・石器)	37
図IV-3-12 WH-9 とその出土遺物分布・出土遺物	38
図IV-3-13 WH-10	39
図IV-3-14 WH-10 とその出土遺物分布	40
図IV-3-15 WH-10 出土の遺物(土器・石器)	41
図IV-3-16 WH-11	42
図IV-3-17 WH-11 とその出土遺物分布	42
図IV-3-18 WH-11 出土の遺物(土器)	43
図IV-3-19 WH-11 出土の遺物(石器)	44
図IV-3-20 WH-12	45
図IV-3-21 WH-12 とその出土遺物分布	46
図IV-3-22 WH-12 出土の遺物(土器)	47

図IV-3-23	WH-12 出土の遺物(石器).....	48
図IV-3-24	WH-13とその出土遺物.....	51
図IV-3-25	WH-13とその出土遺物分布.....	51
図IV-3-26	WH-14.....	52
図IV-3-27	WH-14とその出土遺物分布.....	53
図IV-3-28	WH-14 出土の遺物(土器・石器).....	54
図IV-3-29	WH-15.....	55
図IV-3-30	WH-15とその出土遺物分布.....	56
図IV-3-31	WH-15 出土の遺物(土器).....	57
図IV-3-32	WH-15 出土の遺物(石器).....	57
図IV-3-33	WH-16とその出土遺物分布・出土遺物.....	59
図IV-3-34	WH-17と床面遺物出土状況.....	60
図IV-3-35	WH-17 出土の遺物(土器).....	61
図IV-3-36	WH-18と石組み炉・その出土遺物分布.....	63
図IV-3-37	WH-18 出土の遺物(土器・石器).....	64
図IV-4-1	WP-4.....	65
図IV-4-2	WP-4とその出土遺物分布.....	66
図IV-4-3	WP-4 出土の遺物(土器).....	67
図IV-4-4	WP-4 出土の遺物(土器・石器).....	68
図IV-4-5	WP-5.....	69
図IV-4-6	WP-5とその出土遺物分布.....	70
図IV-4-7	WP-5 出土の遺物(土器・石器).....	70
図IV-4-8	WP-6.....	71
図IV-5-1	WF-2・3・4・5・6・7・8・9 WF-7・9 出土の遺物.....	73
図IV-5-2	WF-10・11・12・13 WF-10 出土の遺物.....	75
図IV-6-1	包含層出土の復元土器とその出土状況(1).....	85
図IV-6-2	包含層出土の復元土器(2).....	87
図IV-6-3	包含層出土の復元土器とその出土状況(3).....	88
図IV-6-4	包含層出土の復元土器とその出土状況(4).....	89
図IV-6-5	包含層出土の復元土器とその出土状況(5).....	90
図IV-6-6	包含層出土の復元土器とその出土状況(6).....	91
図IV-6-7	包含層出土の復元土器(7).....	92
図IV-6-8	包含層出土の土器(1).....	95
図IV-6-9	包含層出土の土器(2).....	96
図IV-6-10	包含層出土の土器(3).....	98
図IV-6-11	包含層出土の土器(4).....	99
図IV-6-12	包含層出土の土器(5).....	101
図IV-6-13	包含層出土の土器(6).....	103
図IV-6-14	包含層出土の土器(7).....	104
図IV-6-15	包含層出土の土器(8).....	105

図IV-6-16	包含層出土の土器(9)	106
図IV-6-17	包含層出土の土器(10)	109
図IV-6-18	包含層出土の土器(11)	110
図IV-6-19	包含層出土の土器(12)	111
図IV-6-20	包含層出土の土器(13)	112
図IV-6-21	包含層出土の土器(14)	113
図IV-6-22	包含層出土の土器(15)	114
図IV-6-23	包含層出土の土器(16)	115
図IV-6-24	包含層出土の土器(17)	116
図IV-6-25	包含層出土の土器(18)	117
図IV-6-26	包含層出土の土器(19)	118
図IV-6-27	包含層出土の土器(20)	120
図IV-6-28	包含層出土の土器(21)	121
図IV-6-29	包含層出土の土器(22)	123
図IV-6-30	包含層出土の土器(23)	124
図IV-6-31	包含層出土の土器(24)	125
図IV-6-32	包含層出土の土器(25)	126
図IV-6-33	包含層出土の土器(26)	127
図IV-6-34	包含層出土の土器(27)	128
図IV-6-35	包含層出土の土器(28)	129
図IV-6-36	包含層出土土器総破片数の分布	130
図IV-6-37	包含層出土土器総個体数の分布	130
図IV-6-38	Ⅲ群 a-2・b-1 類 (サイベ沢・見晴町式) の個体数分布	131
図IV-6-39	Ⅲ群 b-1 類・榎林式の個体数分布	131
図IV-6-40	Ⅲ群 b-1 類・天神山式の個体数分布	132
図IV-6-41	Ⅲ群 b-2 類土器の個体数分布	132
図IV-6-42	Ⅲ群 b-3 類 (ノグッブⅡ式・煉瓦台式) の個体数分布	133
図IV-6-43	Ⅲ群 b-3 類北筒式の個体数分布	133
図IV-7-1	包含層出土石器の分布	141
図IV-7-2	包含層出土の石器(1)	142
図IV-7-3	包含層出土の石器(2)	143
図IV-7-4	包含層出土の石器(3)	144
図IV-7-5	包含層出土の石器(4)	145
図IV-7-6	包含層出土の石器(5)	146
図IV-7-7	包含層出土の石器(6)	147
図IV-7-8	包含層出土の石器(7)	148
図IV-7-9	包含層出土の石器(8)	149
図IV-7-10	包含層出土の石器(9)	150
図IV-7-11	包含層出土の石器(10)	151
図IV-7-12	包含層出土の石器(11)	152

図IV-7-13	包含層出土の石器①	153
図IV-7-14	包含層出土の石器②	154
図IV-7-15	包含層出土の石器③	155
V. 高岡2遺跡		
図V-1	高岡2遺跡の地形	162
図V-2-1	高岡2遺跡土層柱状模式図	161
図V-2-2	土層断面図	163
図V-3-1	包含層出土の土器(1)	165
図V-3-2	包含層出土の土器(2)	166
図V-3-3	包含層出土の土器(3)	167
図V-3-4	包含層出土の土器(4)	168
図V-3-5	包含層出土の土器(5)	169
図V-3-6	包含層出土の土器(6)	170
図V-3-7	包含層出土の土器(7)	171
図V-3-8	高岡2遺跡 包含層出土土器総破片数の分布	174
図V-3-9	高岡1遺跡川東地区・高岡2遺跡 III群土器個体数の分布	174
図V-4-1	包含層出土石器の分布	177
図V-4-2	包含層出土の石器(1)	178
図V-4-3	包含層出土の石器(2)	179
図V-4-4	包含層出土の石器(3)	180
図V-4-5	包含層出土の石器(4)	181
図V-4-6	包含層出土の石器(5)	182
VII. まとめ		
図VII-1-1	I群a類土器の分布	201
図VII-1-2	I群b類土器の分布	201
図VII-1-3	II群b類土器の分布	202
図VII-1-4	III群a-2・b類土器の分布	202
図VII-1-5	III群b-2類土器の分布	203
図VII-1-6	III群b-3類(ノダップII式、煉瓦台式)の分布	203
図VII-1-7	III群b-3類(北筒式)の分布	204
図VII-1-8	IV群a類土器の分布	204
図VII-1-9	IV群b類土器の分布	205
図VII-1-10	統縄文土器の分布	205

表 目 次

IV. 高岡1遺跡

表I-1	高岡1遺跡、高岡2遺跡の調査	1
表II-1	豊浦町の遺跡	9
表IV-1-1	住居跡一覧	77
表IV-1-2	土壇一覧	77
表IV-1-3	焼土一覧	77
表IV-3-1	WH-7 HP一覧	27
表IV-3-2	WH-7 復元土器	78
表IV-3-3	WH-7 掲載土器	78
表IV-3-4	WH-7 掲載石器	79
表IV-3-5	WH-8 HP一覧	35
表IV-3-6	WH-8 掲載土器	79
表IV-3-7	WH-8 掲載石器	79
表IV-3-8	WH-9 掲載土器	79
表IV-3-9	WH-10 復元土器	79
表IV-3-10	WH-10 掲載土器	79
表IV-3-11	WH-10 掲載石器	79
表IV-3-12	WH-11 掲載土器	80
表IV-3-13	WH-11 掲載石器	80
表IV-3-14	WH-12 HP一覧	47
表IV-3-15	WH-12 掲載土器	80
表IV-3-16	WH-12 掲載石器	80
表IV-3-17	WH-13 HP一覧	51
表IV-3-18	WH-13 掲載土器	80
表IV-3-19	WH-14 掲載土器	81
表IV-3-20	WH-14 掲載石器	81
表IV-3-21	WH-15 HP一覧	55
表IV-3-22	WH-15 復元土器	81
表IV-3-23	WH-15 掲載土器	81
表IV-3-24	WH-15 掲載石器	81
表IV-3-25	WH-16 掲載土器	81
表IV-3-26	WH-17 HP一覧	60
表IV-3-27	WH-17 復元土器	81
表IV-3-28	WH-17 掲載土器	81
表IV-3-29	WH-18 掲載土器	82
表IV-3-30	WH-18 掲載石器	82
表IV-3-34	WH-16 掲載土器	59
表IV-4-1	WP-4 掲載土器	82

表IV-4-2	WP-4	掲載石器	82
表IV-4-3	WP-4	復元土器	82
表IV-4-4	WP-4	掲載石器	82
表IV-5-1	WF-7	掲載石器	82
表IV-5-2	WF-9	掲載土器	82
表IV-5-3	WF-10	掲載土器	82
表IV-6-1		包含層出土復元土器一覽	134
表IV-6-2		包含層出土掲載土器	136
表IV-7-1		包含層出土掲載石器属性一覽	158
V. 高岡2遺跡			
表V-3-1		包含層出土復元土器一覽	175
表V-3-2		包含層出土掲載土器一覽	175
表V-4-1		包含層出土掲載石器属性一覽	184

図版目次

- 口絵1 高岡1遺跡包含層調査状況(上)
口絵1 高岡1遺跡 遺構(WH-10・11)調査状況(下)
口絵2-1 高岡1遺跡 WH-7の完掘
口絵2-2 高岡1遺跡 WH-7の石組み炉
口絵2-3 高岡1遺跡 WH-8の完掘
口絵3-1 高岡1遺跡 WP-4遺物出土状況
口絵3-2 高岡1遺跡 WP-5遺物出土状況
口絵3-3 高岡1遺跡 WP-5 出土の土器
口絵4-1 高岡1遺跡 包含層出土の土器
口絵4-2 高岡1遺跡 包含層出土の土器
口絵5-1 高岡2遺跡 包含層調査状況
口絵5-2 高岡2遺跡 包含層出土の土器
口絵6 高岡1・2遺跡 周辺の空中写真

高岡1遺跡

図版1 調査前状況(上)	209
図版1 包含層調査状況(中)	209
図版1 完全掘状況(下)	209
図版2 遺構調査状況	210
図版3 WH-7・8	211
図版4 WH-8・10	212
図版5 WH-11・12・14・15	213
図版6 WH-18 WP-4・5	214
図版7 包含層調査状況	215
図版8 包含層各区の遺物出土状況	216
図版9 WH-7・8・10・15 WP-5 出土の土器	217
図版10 WH-7 出土の土器	218
図版11 WH-9・10・11・13・14 出土の土器	219
図版12 WH-12 出土の土器	220
図版13 WH-15・16・17・18 出土の土器	221
図版14 WP-4・WF-9・10 出土の土器	222
図版15 WH-7 出土の土器	223
図版16 WH-8・10・11・12 出土の土器	224
図版17 WH-14・15・16・18 出土の土器	225
図版18 WP-4・5 WF-7 出土の土器	226
図版19 包含層出土の土器(Ⅲ群a-2類・Ⅲ群b-1類・Ⅲ群b-2類)	227
図版20 包含層出土の土器(Ⅲ群b-3類)	228
図版21 包含層出土の土器(Ⅲ群b-3類)	229

図版22	包含層出土の土器 (Ⅲ群 a-2 類)	230
図版23	包含層出土の土器 (Ⅲ群 b-1 類)	231
図版24	包含層出土の土器 (Ⅲ群 b-1 類)	232
図版25	包含層出土の土器 (Ⅲ群 b-1 類・Ⅲ群 b-2 類)	233
図版26	包含層出土の土器 (Ⅲ群 b-2 類)	234
図版27	包含層出土の土器 (Ⅲ群 b-2 類)	235
図版28	包含層出土の土器 (Ⅲ群 b-2 類)	236
図版29	包含層出土の土器 (Ⅲ群 b-2 類)	237
図版30	包含層出土の土器 (Ⅲ群 b-3 類)	238
図版31	包含層出土の土器 (Ⅲ群 b-3 類)	239
図版32	包含層出土の土器 (Ⅲ群 b-3 類)	240
図版33	包含層出土の土器 (Ⅲ群 b-3 類)	241
図版34	包含層出土の土器 (Ⅲ群 b-3 類)	242
図版35	包含層出土の土器 (Ⅲ群 b-3 類)	243
図版36	包含層出土の土器 (Ⅲ群 b-3 類)	244
図版37	包含層出土の土器 (Ⅲ群 b-3 類)	245
図版38	包含層出土の土器 (Ⅲ群 b-3 類)	246
図版39	包含層出土の土器 (Ⅲ群 b-3 類)	247
図版40	包含層出土の土器 (同部・底部)	248
図版41	包含層出土の土器 (底部)	249
図版42	包含層出土の石器 (石鏃・石槍)	250
図版43	包含層出土の石器 (石鏃・つまみ付きナイフ・スクレイパー)	251
図版44	包含層出土の石器 (石斧・たたき石)	252
図版45	包含層出土の石器 (すり石)	253
図版46	包含層出土の石器 (すり石・石皿・砥石)	254
図版47	包含層出土の石器 (台石)	255
図版48	包含層出土の石器・石製品	256

高岡 2 遺跡

図版49	調査前風景 (上)	257
図版49	包含層調査状況 (下)	257
図版50	包含層調査状況 (上)	258
図版50	Gライン土層断面 (中・左)	258
図版50	北半部完掘状況 (中・右)	258
図版50	全完掘状況 (上)	258
図版51	包含層出土の土器 (Ⅰ群 b-4 Ⅲ群Ⅲ群 a-2 類 b-1 類)	259
図版52	包含層出土の土器 (Ⅲ群 b-2 類)	260
図版53	包含層出土の土器 (Ⅲ群 b-3 類)	261
図版54	包含層出土の土器 (Ⅲ群 b-3 類)	262
図版55	包含層出土の土器 (Ⅲ群 b-3 類・無文)	263

図版56	包含層出土の土器 (IV群 a - 3 類・底部)	264
図版57	包含層出土の石器 (石鏃・石槍・ナイフ・スクレイパー・石核)	265
図版58	包含層出土の石器 (石斧・たたき石・台石)	266
図版59	包含層出土の石器 (砥石・すり石)	267

I. 調査の概要

1. 調査要項

事業名：北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査

事業委託者：日本道路公園札幌建設局

事業受託者：財団法人北海道埋蔵文化財センター

調査期間：平成7年4月1日～平成8年3月31日

表I-1 高岡1遺跡、高岡2遺跡の調査

遺跡・遺跡番号	調査面積	発掘期間	調査員	所在地
高岡1遺跡	4,090㎡	平成5年5月6日～10月29日	西田 茂・立川トマス・藤原 秀樹	虻田郡豊浦町字高岡63-1ほか
	5,372㎡	平成6年5月6日～10月29日	西田 茂・立川トマス・藤原 秀樹・末光 正卓	〃 〃
(J-05-17)	5,550㎡	平成7年5月8日～10月31日	立川トマス・末光 正卓・袖岡 淳子	〃 〃 57-4
高岡2遺跡 (J-05-18)	2,330㎡	平成7年5月8日～6月16日	立川トマス・末光 正卓・袖岡 淳子	虻田郡豊浦町字高岡74-2

下線は発掘担当者

2. 調査体制

理事長 伊藤 一夫

専務理事 佐藤 哲人 中村 福彦（～5月31日）

常務理事 柴田 忠昭（4月20日～） 森田 知忠（6月1日～）

業務部長 山内 清志

調査部長 畑 宏明（第1調査部） 鬼柳 彰（第2調査部）

第2調査部第3調査課長 佐川 俊一

主 査 立川トマス（発掘担当者）

文化財保護主事 末光 正卓（発掘担当者）

袖岡 淳子

3. 調査にいたる経緯

日本道路公園が建設を進めている北海道縦貫自動車道（函館～稚内）のうち、現在供用がなされているのは道央部の虻田洞爺湖インターチェンジ～旭川鷹栖インターチェンジ間270.2kmである。これより南については、整備計画（1978年11月、1986年1月）、施行命令（1978年11月、1988年11月）のもと順次建設工事が行われている。

これらの道路建設工事に先立つ埋蔵文化財の調査は、遺跡所在確認調査、遺跡範囲確認調査が北海道教育委員会によって行われている。豊浦町の遺跡については1991年（平成3年）9月から遺跡範囲確認調査が始められ、この結果にもとづいて発掘調査が必要な範囲が決定されている。

高岡1遺跡1991年（平成3年）9月、1992年（平成4年）10月の範囲確認調査により12,140㎡が発掘必要とされ、1993年（平成5年）5月から財団法人北海道埋蔵文化財センターが調査を行うこととなった。初年度は5月から10月にわたって、川東地区2,545㎡、川西地区1,545㎡の合計4,090㎡の調査がなされた。さらに1993年10月・12月の範囲確認調査によって発掘の必要な範囲4,320㎡が追加された。

第2年度は、1994年5月から10月にわたって、北地区322㎡、中央地区650㎡、川東地区1,600㎡、川西地区2,800㎡の合計5,372㎡の調査がなされた。

最終年度にあたる本年度は、1993年（平成3年）の範囲確認調査によって追加された範囲4,320㎡を含めた、川西地区5,550㎡の調査を行った。

高岡2遺跡1988年（昭和63年）5月に遺跡所在確認調査、1993年（平成5年）6月・10月・11月、1994年（平成6年）10月の範囲確認調査によって2,300㎡が発掘必要とされ、本年度の5月・6月で調査を行った。

4. 調査の概要

豊浦町は、北海道の南西部太平洋側の内浦湾（噴火湾）の北岸に位置する。沿海部は、河川の流入するごく一部の地域を除き、急な斜面となって海に落ちこむ地形である。ここに報告する高岡1遺跡と高岡2遺跡は、豊浦町市街地の西1.5km、海岸線から約500mほどのところにある。

高岡1遺跡豊浦町市街地の西1.5km、内浦湾（噴火湾）に向かって落ちこむ崖堆積物斜面上に立地する。平成5年度から継続して発掘調査が進められており、今年度が最終年度である。調査範囲は、前年度調査区に接する北側である。前年度までの2ヵ年の調査で、調査予定範囲のほぼ南半部分の4,345㎡を調査した。今年度の調査面積は当初5,850㎡であったが、調査の結果、最終的に5,550㎡になった。地形の大局は南に傾斜している。標高は約36～53mである。高速道路の用地になる前は、主に畑地として利用されていた。

調査区のほぼ全域に、耕作による土層攪乱がみられた。調査区の北東部には、住宅建築にとまなう宅地造成による土層攪乱、削平を受けていた。

前年度までの調査で、縄文時代中期後半の竪穴住居6軒（WH-1～WH-6）、土壇3基（WP-1～WP-3）、同中期後半から後期初頭の土器・石器等183,214点の遺物が検出されている。

本年度の調査の結果、縄文時代中期後半の竪穴住居跡12軒（WH-7～WH-18）、土壇3基（WP-4～WP-6）、焼土13ヵ所（WF-1～WF-13）が確認された。竪穴住居跡は、中央部に石組み炉をもつもの（WH-7・15・18）ともないもの（WH-8～14・16・17）がみられる。竪穴住居跡のWH-7・13・16、WH-15・17は重複している。時期は、いずれも縄文時代中期後半から同後期初頭と考えられる。

遺物は、土器32,400点、石器等159,494点の合計191,894点が検出されている。型的特徴の明らかな土器は、縄文時代中期後半のサイベ沢Ⅶ式、見晴町式、榎林式、天神山式、大安在B式、柏木川式、ノグツⅡ式、煉瓦台式、北筒式、このほか少量ではあるが後期初頭の特徴をもつものも出土している。

石器は石鏃、石槍またはナイフ、石鏃、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、すり石、台石もしくは石皿、砥石などがある。縄文中期のものと考えられる垂飾などの石製品もある。

また、黒曜石の礫、残核、剥片・碎片等が多量に出土している。これらの大多数は、近年明らかにされつつある原産地豊泉群（豊浦町）に含まれるものである。

高岡2遺跡高岡1遺跡川東地区の東側、貫気別川と古別川にはさまれ、内浦湾（噴火湾）に向かって落ちこむ尾根状の崖堆積物の西側斜面上に立地する。地形の大局は西に傾斜している。標高は、47～54mである。調査区は、北半部が畑地として使用され、南半部が植林によるカラマツ林である。畑地部分は全域が耕作によりⅧ層上部まで攪乱を受けてい

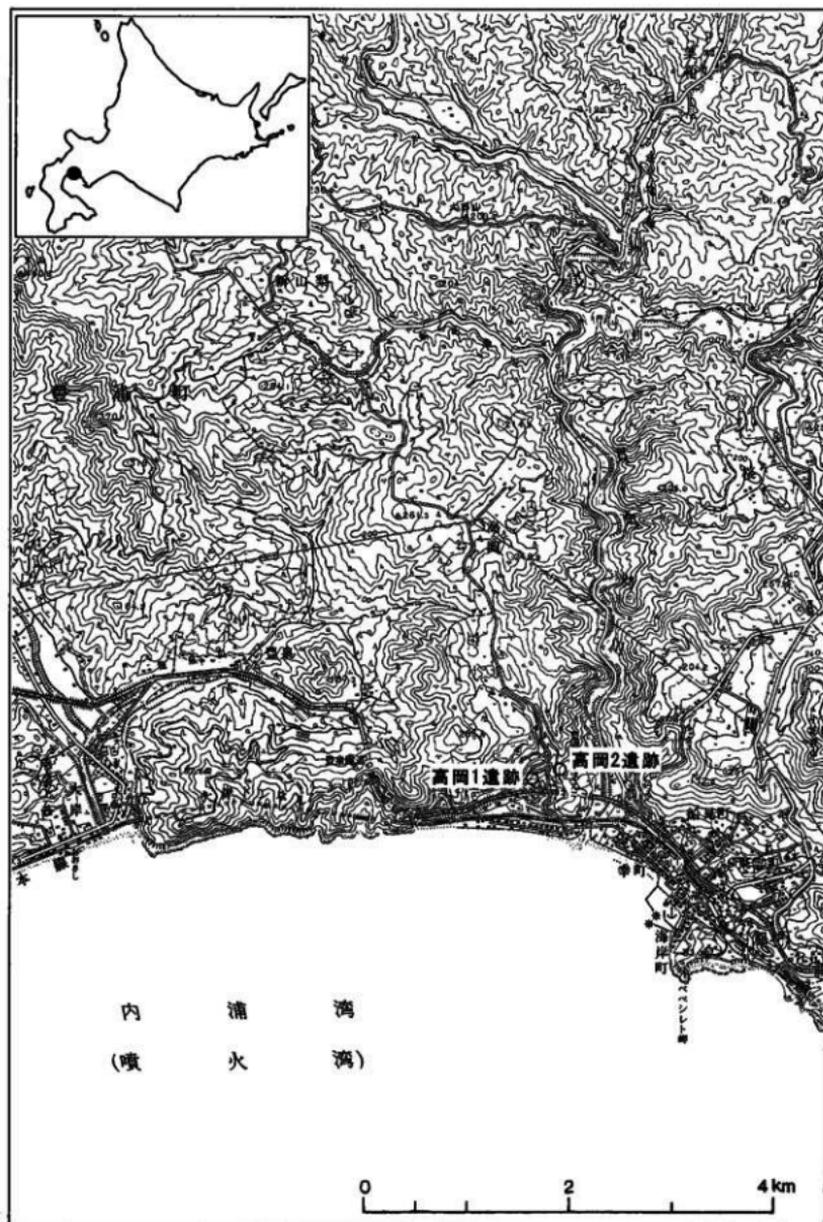


図 I - 1 高岡1遺跡・高岡2遺跡の位置

る。さらに、植林地部分は傾斜が急なため表土が10～20cmほど堆積するだけで、包含層に相当する土層は確認されなかった。

遺物は、土器2,218点、石器等956点の合計3,174点が検出された。型式的特徴の明らかな土器は、縄文時代中期後半のサイベ沢VII式、見晴町式、櫻林式、天神山式、大安在B式、ノグツツII式、煉瓦台式、北筒式などが多く出土している。このほかに、わずかながら縄文時代早期の中茶路式、同後期初頭の余市式、トリサキ式と考えられるものもみられる。

石器は石鏃、石槍またはナイフ、石錐、スクレイパー、石斧、たたき石、すり石、台石もしくは石皿、砥石などがある。

また、黒曜石の礫、残核、裂片・碎片等が出土している。これらの大多数は、高岡1遺跡と同様に、近年明らかにされつつある原産地豊泉群（豊浦町）に含まれるものである。

（立川トマス）

II. 遺跡の位置と環境、周辺の遺跡

1. 位置と環境 (図 I-1、図 II-1)

(1)位置 (図 I-1)

北海道の南西部、太平洋側に内浦湾（噴火湾）があり、この内浦湾の北岸に豊浦町がある。豊浦町の沿海部は、河川の流入するごく一部の地域を除き、急激な斜面となって海に落ちこむ地形である。高岡 1 遺跡は、豊浦町市街地の西1.5km、海岸線から500mほどのところにある。5万分の1地形図によれば遺跡の位置は、東経140度41分55秒、北緯42度35分20秒である。

高岡 1 遺跡 内浦湾に向かって落ちこむ崖列が窟地状になったところの崖堆積物斜面上に立地している。標高100m付近で断崖となって北から南に落ちる傾斜地のなかでは比較的ゆるやかなところである。

高岡 2 遺跡 高岡 1 遺跡の東側、買氣別川と古別川に挟まれ、内浦湾に向かって落ち込む尾根上の崖堆積物の西斜面上に立地する。地形の大略は西に傾斜している。

高岡 1 遺跡、高岡 2 遺跡からは、西、北、東三方の視界はさえぎられているが、唯一開けた南には噴火湾をへだたてて渡島駒ヶ岳が望まれる。標高は26～50mである。

(2)地形 (図 II-1・2)

図 II-1 は道路工事予定図をもとに作成した遺跡周辺地形図である。遺跡の調査予定範囲は白抜き部分で示したが、これは当初計画のものである。1993年、遺跡の周辺にパーキングエリア設置の工事計画変更がなされ、これに伴って調査予定範囲が、標高の高い方へ拡大している（網目で示してある）。遺跡の広がり、概略は、国道37号で区切られる南辺、町道までの東辺と北辺、沢地形の崖で終わる西辺としてとらえられる。

調査区域のなかには古別川と呼ばれる小川が北から南へ急流となってかけ下っており、この川の東側（左岸）を川東地区、西側（右岸）を川西地区と呼んでいる。さらに平成6年度の調査区域として2ヶ所の飛び地があり、北側のところを北地区、中央のところを中央地区と呼んでいる。このうち今回報告するのは川西地区である。

北地区は急な傾斜地であり、中央地区はゆるい傾斜地である。道路用地になる前はともに雑木林であった。川東地区の東辺には町道（旧国道37号）の盛り土が幅15～20mで南北に走っている。この町道は古別川を横切るあたりで大きく西に曲がり、北地区の北辺では東西に延びている。

川東地区の微地形は、窟地地をおもわせるように北から南に傾斜しているが、西辺は古別川の侵食によって急崖をなしているところもある。道路用地になる前は、主に畑地として利用されていたところである。1993年の発掘調査時にはアスパラガス、ジャガイモ、長芋などの残存がみられた。一部に荒地をあらわすヨモギ、クマイササ、イタドリ、ヤナギなどが侵入している様子は、数年間の放置を思わせるものであった。調査区の南辺部分は30年ほど前に操業していたという採石工場の造成時の削平を受けていた。川西地区は傾斜地であり、東側には沢地形が認められる。道路用地になる前には、おもに畑地として利用されていた。調査区のほぼ全域に、耕作による土層攪乱がみられた。南辺部分は、豊浦町の水道管埋設、国道37号建設に伴う私道造成などによる土層攪乱、削平を受けていた。

図Ⅱ-2の柱状図は、高速道路建設にさいしてのボーリングの成果をもとにして作成したものである。B(S T A 394+00 B C)の地点は平成5年度調査のJ-72-b区にあたり、A(S T A 390+20 B L-7)の地点は川東地区(B地点)から西方約400mのところである。A、Bともに礫混じりの層がみられ、崖堆積物であることを示している。B地点では10mの深さまで礫層の繰り返しとなっている。それよりも下部は凝灰岩の基底層である。

(3)周辺の環境(図Ⅰ-1、図Ⅱ-1)

遺跡の周辺を、海岸からみていくとつぎのようになっている。

海岸は、直線的な砂浜の汀線である。この砂浜は、貫気別川(ヌッケベツ)川が運んだ土砂の供給によって形成されたものと考えられる。防潮堤で囲まれた砂浜の内側には、東西にはる舗装道路に沿って浜高岡(はまたかおか)の集落がある。

集落よりも一段高いところに、鉄道線路がはしっている。空中写真をみると、以前の鉄道線は、今よりも強い曲率であったことが読み取れる。集落と鉄道線路との間には、耕作地の区画がある。

ちなみに、旧国道は1890年(明治23年)から馬車がすれ違える幅で建設が始められ、改良が重ねられても小型自動車が進んですれ違える程度のものであった。斜面の腹部を通るものであるから、切り盛りを少なくするためにも、屈曲が多い経路となる。遺跡の東側を海岸近くまで下って、鉄道よりも海側で貫気別川を渡り、豊浦の市街地に延びるものである。

旧国道と現国道とが交差する西北部に水準点(23.6m)がある。

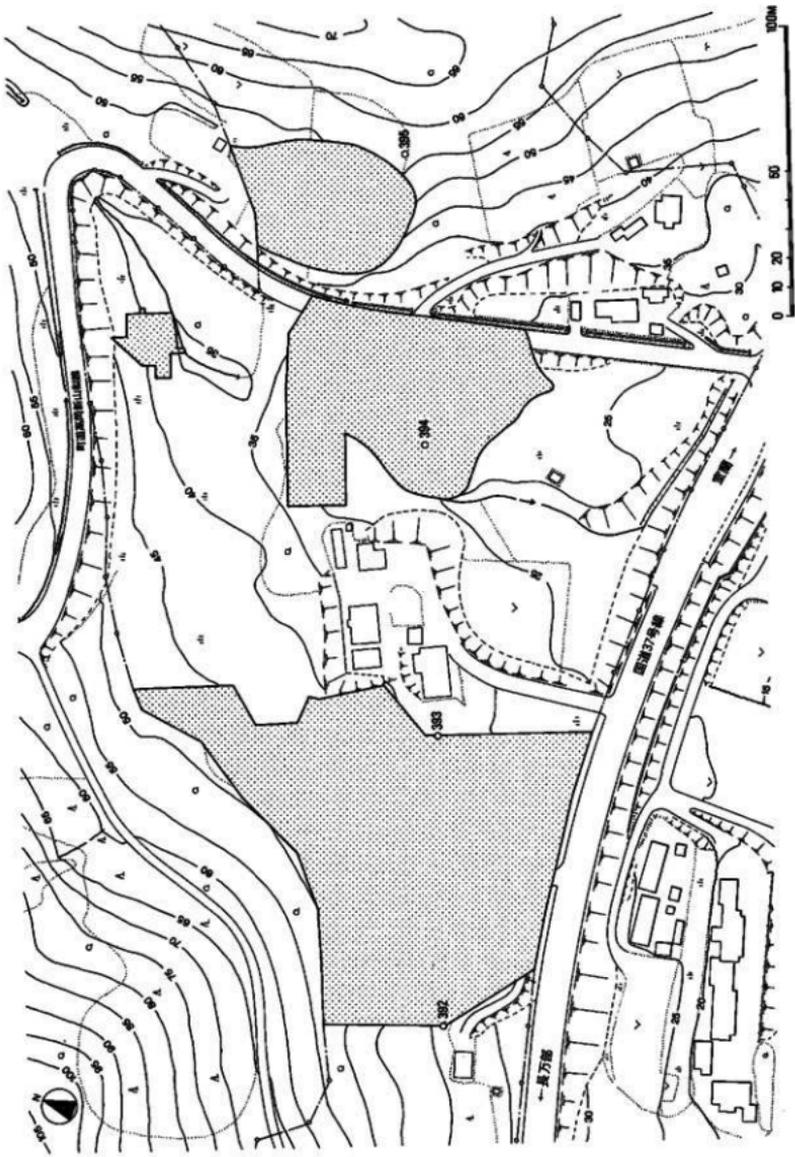
高岡1遺跡よりも高い場所では、比較的平坦なところは畑地、牧草地として利用され、傾斜のきついところは山林である。植林のマツも一部にみられるが、大部分は自然林の落葉広葉樹である。調査区の近辺にはオニグルミ、クリ、ヤマクワ、タラノキ、ヤマブドウ、コクワ、ホオノキなどがみられた。植栽樹として目立つのは、鉄道と国道に挟まれた位置にあるスギ林、国道に沿う街路樹の桜列である。鉄道線路の脇にはドクダミの群落が点在しており、初夏には白色の島となって浮き上がる。

斜面のいたるところに湧き水がみられる。周辺の民家では冬も溜ることのないこの清冽な湧き水を、町営の上水道が配備される1969年まで、飲料水としていたという。

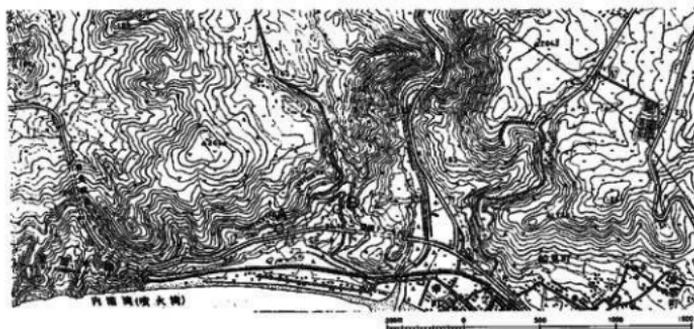
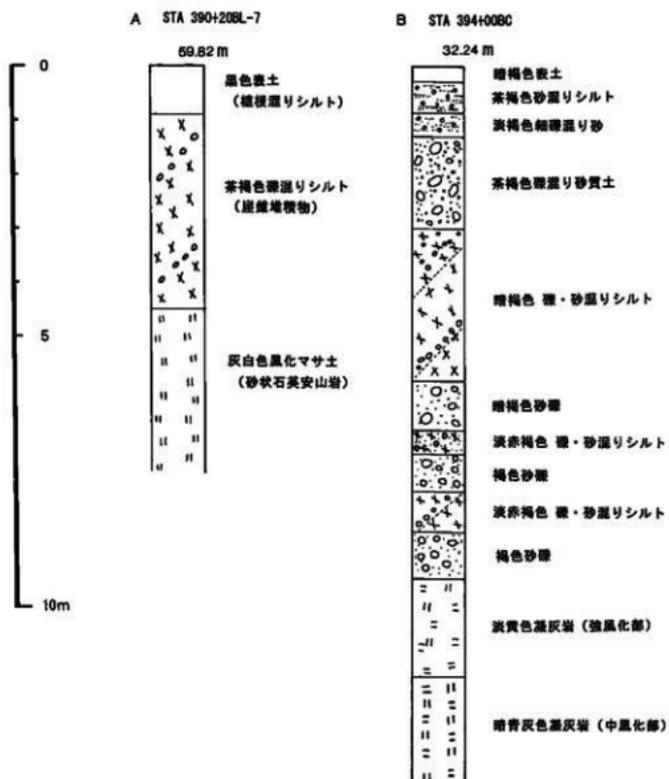
高岡1遺跡から東側に一山越えると、貫気別川である。この川は標高200mほどの台地を強く刻み込んで北から南に流れている。貫気別川の東方の傾斜地、海岸沿いに豊浦の市街地がある。国道を西側に4km行くと豊泉である。豊泉には黒曜石が礫となって産出するところがあり、豊泉川の河床では、現在でも拳大の礫を拾うことが出来る。

遺跡の北側に町道の急斜面を登りつめると、標高150mほどのなだらかな地形になる。この台地状平坦面は、大区画の農地となっており畑地、採草地、放牧地として利用されている。遺跡の北側、西側の断崖の一部は崩壊地となっているが、ここはかつて採石場であったところである。

豊浦町の気象概況は、室蘭地方気象台大岸観測所の資料で知ることが出来る。月別平均気温は高いのが7月8月の20°C前後、低いのが2月の-5°C前後であり、内浦湾に面していることもあって年間の寒暖差は少ない。年間降水量は、年較差が大きく1000~2000mmで変動している。7~10月には、月100mmを越すことが多い。降雪は10月下旬から4月下旬まで、月に100mmを越すことは少ない。夏季の海霧は少ない。高岡1遺跡は西、北、東の三



図II-1 道跡周辺の地形



図II-2 機械ボーリングによる土層柱状図

方を塞がれた地形なので、年間を通して南方から吹き上げる風が卓越する。

2. 周辺の遺跡

図II-3は、北海道教育委員会作成の埋蔵文化財包蔵地カードと『豊浦町史』(1972年、豊浦町)などをもとにして作った豊浦町内の遺跡分布図である。これによると、丘陵斜面と海岸付近に遺跡がみつまっている。

これらの遺跡の時代・時期・立地の特色は、発掘調査等によりその内容が比較的明らかなものをもとに推定すると、次のようになる。

縄文時代早期の遺跡にはアルトリ遺跡、勝木遺跡、大和遺跡、高岡1遺跡などがある。アルトリ遺跡では、1955年(昭和30年)からの調査によって貝殻条痕文土器が検出されている。ここの器形を知りうる良好な資料をもとに「アルトリ式土器」が、設定されている。

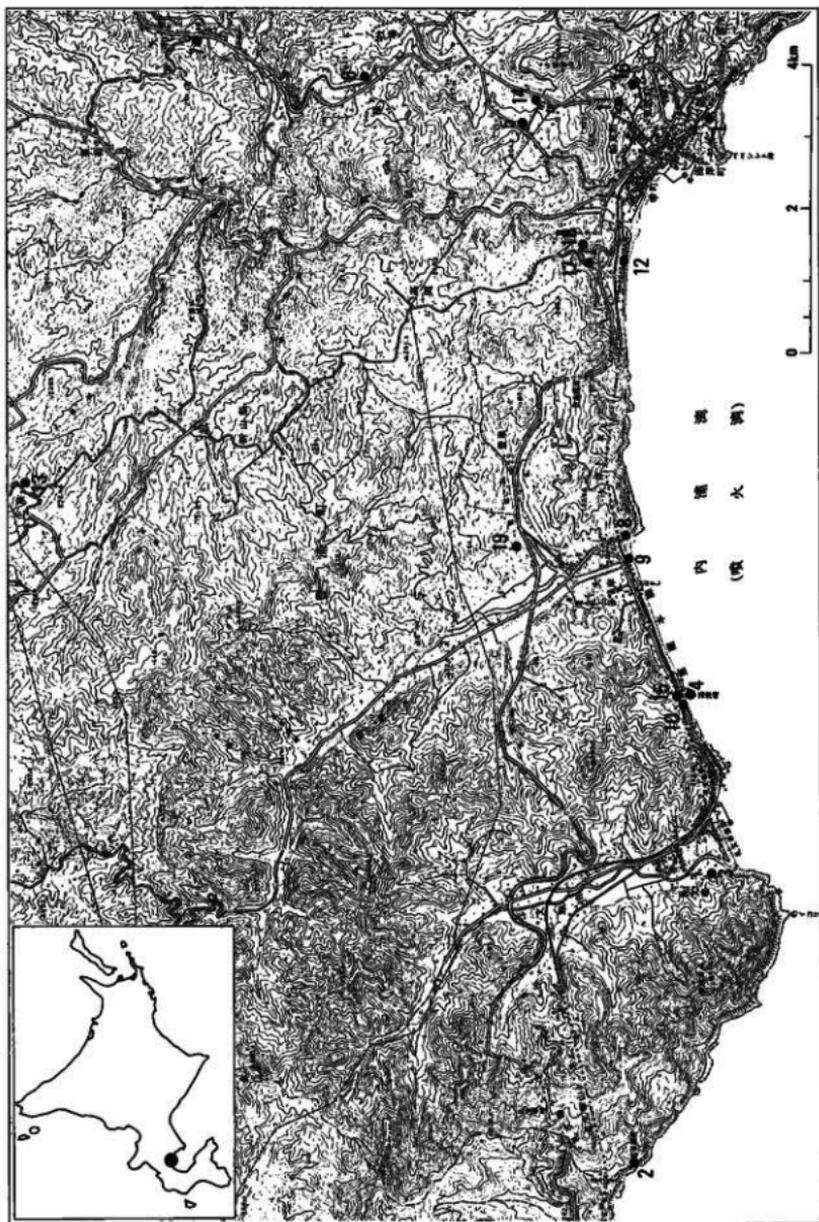
高岡1遺跡では条痕文平底土器や擦糸文平底土器が出土している(北埋調報88集)。縄文時代前期になると、噴火湾沿岸には貝塚の形成をみるが、豊浦町内では貝塚は未確認である。縄文時代中期の遺跡には、アルトリ遺跡、勝木遺跡、アクンナイ川遺跡、青山遺跡、礼文華2遺跡、東雲遺跡、高岡1遺跡(北埋調報88集・91集・本書)などがあり丘陵斜面に立地する遺跡が多い。

縄文時代後期の遺跡には、勝木遺跡、西川遺跡、チャシナイ遺跡、アクンナイ川遺跡、アカ川遺跡、樫遺跡、礼文華2遺跡、東雲遺跡、高岡1遺跡、高岡2遺跡などがある。東雲遺跡は高岡1遺跡、高岡2遺跡と同じく高速道路工事予定地に入っており、今年度当センターで5,670㎡の調査を行っている。この調査によって東雲遺跡は縄文時代中期、後期の遺跡であることが明らかになっている。縄文時代晩期の遺跡には、勝木遺跡がある。

続縄文時代の遺跡には、小橋洞窟遺跡、礼文華遺跡、大岸川口左岸遺跡、大岸川口右岸遺跡、高岡1遺跡などがある。礼文華遺跡は恵山式土器を含む貝塚があり、人骨のみならず、鹿、鯨、イルカの積み石塚がみつまっている。さらに1991年の発掘では、紡錘車が検出されている。続縄文時代の遺跡は小橋洞窟遺跡、チャシの時代の遺跡にはカムイチャシ跡がある。

表II-1 豊浦町の遺跡

番号	遺跡名	所在地	概 要
1	アルトリ	旭町86	縄文時代早期、中期。条痕文土器、擦糸文土器。アルトリ式土器の標識遺跡。
2	小橋洞窟	礼文華小橋	続縄文時代、縄文時代。土器、石器、骨角器、人骨が出土。
3	礼文華	礼文華149-8ほか	続縄文時代。土器、石器、骨角器、人骨が出土。礼文華貝塚とも言う。
4	カムイチャシ	礼文華茶津畔	内陸部に突きでた岬に一島の墓がある。史跡公園として整備されている。
5	勝木	樫138-2ほか	縄文時代早期、中期、後期、晩期。包含層は広い範囲である。
6	西川	樫303	縄文時代後期。
7	大和	大和127-1	縄文時代早期。条痕文土器出土の記録がある。
8	大岸川口左岸	大岸13-1	続縄文時代。川と海に接した崖の下に貝塚を含む遺物包含層がある。
9	大岸川口右岸	大岸	続縄文時代、続縄文時代。砂丘からの遺物出土の記録がある。
10	チャシナイ	礼文華3ほか	縄文時代後期
11	アクンナイ	船見町131-1ほか	縄文時代中期、後期。石斧、石槍などが出土している。
12	アカ川	浜高岡	縄文時代後期。海岸線に沿って細長い範囲である。
13	青山	上原238ほか	縄文時代後期。元上原小学校の南側から遺物出土の記録あり。
14	樫	樫138-5	縄文時代後期。
15	礼文華2地先	礼文華2地先	茶津畔の崖の外側から縄文時代中期の、後期の遺物が検出された。
16	東雲	東雲町83ほか	縄文時代中期～後期。土器、石器が出土している。1995年発掘。北埋調報107集。
17	高岡1	高岡57ほか	縄文時代早期～続縄文時代。古須川の両岸。1993年～1995年発掘。北埋調報88集・北埋調報91集・本書。
18	高岡2	高岡74-2ほか	縄文時代後期。土器、石器が出土している。1995年発掘。本書
19	豊 葉	大岸512-2	縄文時代。つまみ付きナイフ、黒曜石製片が出土している。



図II-3 豊浦町の遺跡

III. 調査の方法、遺物の分類

1. 調査の方法 (図III-1・2)

発掘区の設定 現地調査の基本図は、北海道縦貫自動車道工事予定図1,000分の1を使用した。発掘区の設定は、以下のように行なった。まず、工事予定(下り車線)中央線のSTA392、STA393をそれぞれM-50、M-60とする。これを基軸線として10mの方眼を設定する。この10mの方眼は、北西端の交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称される(例：J-55)。さらにこの10mの方眼は5m四方に分割されて小発掘区となり、反時計まわりに、北西端からa、b、c、dと呼ぶ(例：J-55-a)。高岡2遺跡の発掘区の設定は、高岡1遺跡で用いた基軸線を延長し、これに10mの方眼を設定した。小発掘区の設定、呼称は高岡1遺跡と同じである。

なお、基軸線に用いた点の平面直角座標は、第Ⅺ系で

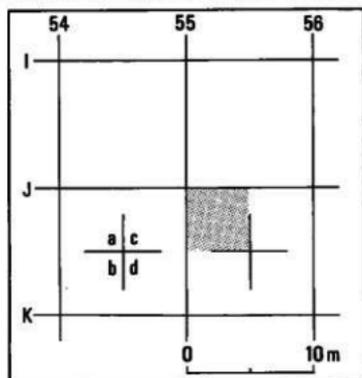
STA392：X=-156,673.2798

Y=36,660.3172

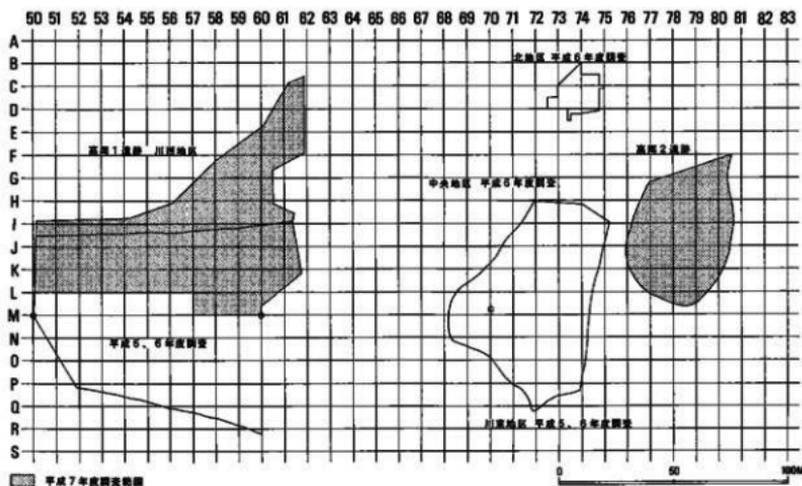
STA393：X=-156,640.4408

Y=36,754.7687

である。



図III-1 発掘区の呼称



図III-2 地区の呼称、グリッドの設定・調査範囲

調査予定地の遺跡内容の推定 北海道教育委員会によって1992年、1993年におこなわれた範囲確認調査、1993年、1994年の北海道埋蔵文化財センターの発掘調査結果などから、以下のように推定された。

高岡1遺跡：1993年、1994年と継続して調査を行った川西地区の未調査部分である。前年度までの調査で、住居跡6軒(WH-1~6)、土壇3基(WP-1~3)が検出された。また、縄文時代中期から同後期の遺物183,214点が出土している。これらの調査結果から、調査区中央部の55ラインから西側にかけては住居跡など遺構の検出や遺物の広がりが見込まれる。調査予定地は、畑として耕作されており、良好な遺物包含層の残存は少ないであろうと思われた。

高岡2遺跡：範囲確認の試掘調査から、縄文時代中期とみられる土器、黒曜石の剥片が出土している。調査予定地は、比較的急斜面に立地し、さらに畑として耕作されているため、良好な包含層の残存は少ないと予想される。

発掘の手順と遺物の取上げ 高岡1遺跡：工事工程、調査時の排土場所の確保の必要から、Iライン以南・55ライン以东、Iライン以南・55ライン以西、Iライン以北の各地区に分割し順に調査を進めた。

各地区について、5m四方の小発掘区を飛び飛びに全体の四分の一を発掘した(25%調査)。これをもとに遺構・遺物の分布状況を推定し全体の調査に取りかかった。全体の調査は人力による手掘り作業で、小発掘区ごとにスコップ、ツルハシ、移植ゴテ、竹ヘラなどを用いて遺物の多寡、土層の変化をみきわめながらおこなった(包含層調査)。休耕によりクマイササが侵入し、この根により人力による手掘り作業が困難な場所については、建設用重機を使って除去した。

遺物は出土の状況に応じて、位置や土層を記録してから発掘区ごとに取り上げた。とりわけ本来的な遺物包含層と考えられるVI層から検出される遺物については、出土状態の詳細な記録化をおこなった。微細遺物の密集部分では、水洗いによって取り上げたところもある。

高岡2遺跡：調査区全域に建設用重機によりトレンチを掘開した。トレンチの幅は1mとし、10mごとにアルファベット列の南側に設定して行った。ただし、K・L列は北側に設定した。トレンチ調査の結果をもとに、遺物集中区は人力による手掘り作業で小発掘区ごとにスコップ、移植ゴテ、竹ヘラなどを用いて慎重に出土状況を記録しながら取り上げた。その他の遺物散在区については、建設用重機と人力による手掘り作業を併用しながら、遺物の収集、遺構の有無、残存包含層の範囲の確認などに主眼をおこなった。

それぞれの調査地区において、VIII層も手掘り作業でいくつか試掘溝を掘ったが、この土層からは遺物が検出されなかった。

遺構の調査 25%調査、包含層調査時に住居跡、土壇などを推定できたときは、その平面形の長軸と短軸方向に土層観察用の土手を残して掘り下げた。想定される床面の検出は、土層観察用の土手に接して小さな先行溝を掘るなどして、慎重に行った。遺物は、出土状況を詳細に記録化してから取り上げた。

遺物整理の方法 出土した遺物は、野外作業と並行して水洗・注記作業を行った。土器は、小片あるいは微細な物を除いて、大多数の遺物は発掘区と出土層位、および取上げ番号を注記した。現地では遺物収集帳の点検・補正(遺物台帳作成)、大まかな遺物の分類ま

でおこなった。冬期の室内整理作業で、土器の個体識別・接合・復元作業、石器や黒曜石剥片類の接合、土器・石器の実測・整図、集計およびそのほかの記録類の整理をおこなった。

土器の接合・復元作業においては、土器の破片個々の出土位置を明記することによって、土器の破損状況を明らかにすることにつとめた。しかし、川西地区は、縄文時代においても繰り返し人が住む場所であったことも禍して遺構・遺物の残存状態が不良のために、土器破損の様子を十分に把握することはできなかった。したがって、これらの地区の住居跡と多量の土器が、どのように関係しているのかは、明確な結論を得たものはいくつかない。

黒曜石の石器・石核・剥片には原産地「豊泉群」と推定されるものが多くあった。これらの接合をおこなうとともに、肉眼観察による特色の理解につとめた。さらに原産地推定に供しうる理化学的な資料の蓄積のために、発掘調査と並行して近辺野外での資料採取もおこなった。
(立川トマス)

2. 土層の区分 (図III-3)

土層の区分は、高岡1遺跡については、昨年度の川西地区に準じ、高岡2遺跡については、平成5年度の川東地区をもとにして、それぞれ行った。

前年度の川東地区での土層の区分は、以下の通りである (図III-3)。

I層：耕作表土、盛土。

II層：黒色腐植土。このなかに灰白色火山灰がある。

III層：褐色土。粒子は細かい。

IV層：灰褐色粘質土。乾燥するとクラックが生じる。
疑似グライ層。

V層：黄褐色火山灰 (概別火山灰)。

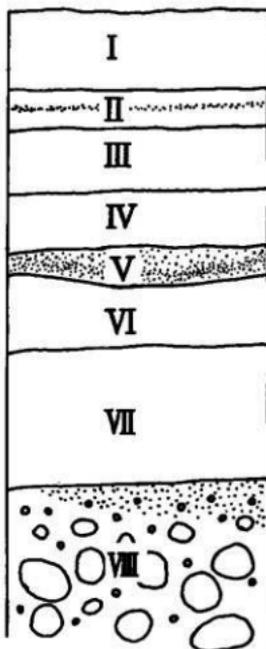
VI層：黒色～黒褐色土。素粒子で、粘性が少ない。

VII層：褐色～暗褐色土細粒子で、弱い粘性がある。

VIII層：黄褐色～褐色土 (岩礫混じり)。上部は砂質。

遺物の本来的な包含層はIII層・VI層 (統縄文時代～縄文時代早期)、VI層・VII層 (縄文時代早期) である。これまで、確認された火山灰は、II層中の灰白色 (U s - b以降の火山灰に対比される)、黄褐色 (V層概別火山灰) がある。また、本年度川西地区において、II層中において黄褐色の火山灰 (K o - dに対比される) が確認されている。

調査区のほぼ全域に自然流失や耕作・風倒木痕による削平・擾乱などが生じており、本年度の調査区では、図のような土層区分が整然と残っているところは、みられなかった。遺物の取上げは、土層区分をもとに行ったが、流失・削平、擾乱の判然としないところでは、区分に一部混乱が生じたものもある。
(末光正卓)



図III-3 基本土層柱状図

3. 土器の分類

土器は、縄文時代のもので、早期のものをⅠ群、前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、晩期をⅤ群とした。

〈Ⅰ群〉縄文時代早期に属する土器群

本群はa、bの2類に分類され、さらに細分される。

a類：貝殻文、条痕文のある土器群

a-1類 貝殻文系尖底土器

a-2類 条痕文系平底土器

b類：縄文、撚糸文、組紐圧痕文等のある土器群

b-1類 東銅路Ⅰ式に相当するもの

b-2類 東銅路Ⅱ式に相当するもの

b-3類 コックロ式に相当するもの

b-4類 中茶路式に相当するもの

b-5類 東銅路Ⅳ式に相当するもの

〈Ⅱ群〉縄文時代前期に属する土器群

本群は、a、bの2類に分類され、さらに細分される。

a類：縄文尖底土器群

a-1類 網文土器に相当するもの

a-2類 春日町式、中野式に相当するもの

b類：円筒下層式土器群

〈Ⅲ群〉縄文時代中期に属する土器群

本群はa、bの2類に分類され、さらに細分される。

a類：円筒上層式土器群

a-1類 円筒上層a式、円筒上層b式に相当するもの

a-2類 サイベ沢Ⅶ式に相当するもの

b類：中期後半の土器群

b-1類 天神山式、見晴町式、榎林式、大木8b式に相当するもの

b-2類 柏木川式、大安在B式に相当するもの

b-3類 北筒式（トコロ6類）、ノグツⅡ式、煉瓦台式、静狩式に相当するもの

〈Ⅳ群〉縄文時代後期に属する土器群

本群はa、b、cの3類に分類される

a類：余市式、天祐寺式、湧元Ⅰ・湧元Ⅱ式、トリサキ式、大津式、白板3式に相当するもの

b類：ウサクマイC式、船泊上層式、手稲式、ホッケマ式に相当するもの

c類：堂林式、三ッ谷式、御殿山式に相当するもの

〈Ⅴ群〉縄文時代晩期に属する土器群

本群はa、b、cの3類に分類される

a類：大洞B式、大洞BC式に相当するもの

b類：大洞C1式、大洞C2式に相当するもの

c類：大洞A式に相当するもの

本年度の調査では、高岡1遺跡からはIII群、高岡2遺跡からはI群、III群、IV群の土器がそれぞれ出土している。
(未光正卓)

参考文献

- 『吉井の沢の遺跡』 1982 北海道埋蔵文化財センター
 『社台1遺跡・虎杖浜4遺跡・千歳4遺跡・富岸遺跡』 1985 北海道埋蔵文化財センター
 『登別市千歳5遺跡』 1985 北海道埋蔵文化財センター
 『木古内町建川1・新道4遺跡』 1986 北海道埋蔵文化財センター
 『登別市川上B遺跡・C地区』 1986 北海道埋蔵文化財センター
 『木古内町新道4遺跡』 1988 北海道埋蔵文化財センター
 『美沢川流域の遺跡群XIII』 1989 北海道埋蔵文化財センター
 『伊達市牛舎川右岸遺跡・稀府川遺跡』 1990 北海道埋蔵文化財センター
 『美沢川流域の遺跡群XIV』 1990 北海道埋蔵文化財センター
 『豊浦町高岡1遺跡』 1994 北海道埋蔵文化財センター
 『豊浦町高岡1遺跡(2)』 1995 北海道埋蔵文化財センター
 『中の平遺跡発掘調査報告書』 1980 青森県教育委員会
 『山崎遺跡(1)(2)(3)発掘調査報告書』 1982 青森県教育委員会
 『入江遺跡発掘調査報告書』 1991 北海道虻田町教育委員会
 『入江貝塚出土の遺物』 1994 北海道虻田町教育委員会
 『静狩遺跡』 1995 大場利夫、田川賢藏
 『サイベ沢遺跡』 1958 市立函館博物館
 『見晴町B遺跡発掘調査報告書』 1979 函館市教育委員会
 『西股』 1974 北海道第四紀研究会
 『元和』 1976 乙部町教育委員会
 『知内川中流域の縄文時代遺跡』 1979 知内町教育委員会
 『礼内台地の縄文時代集落址』 1982 登別市教育委員会区委員会
 『萩ヶ岡遺跡』 1982 江別市教育委員会区委員会
 『南稀府5遺跡』 1983 北海道文化財保護協会
 『陸奥榎林遺跡の研究』 1941 角田文衛『考古学論叢』第十輯
 『入江貝塚』 1958 名取武光、峰山巖『北方文化研究報告』第十三輯
 『函館郊外煉瓦台遺跡』 1965 大場利夫、蛭子千代志『北方文化研究報告』第二十輯
 『函館市天祐寺貝塚』 1963 石川政治『石器時代』第6号
 『函館市見晴町遺跡の資料』 1966 高橋正勝『北海道青年人類科学研究会会誌』8
 『札幌市平岸天神山出土の土器について』 1967 菊池俊彦『北海道考古学』第3輯
 『石狩海岸砂丘地帯の遺跡群について』 1978 井上秀一『北海道考古学』第4輯
 『北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について』
 1981 大沼忠春『考古学雑誌』第66巻4号
 『北海道南部の土器』 1981 高橋正勝『縄文文化の研究』4 縄文土器II
 『北筒式土器様式』 1989 大沼忠春『縄文式土器大観』第1巻

4. 石器等の分類

石器等の分類については、定形的な石器をⅠ～Ⅸ群に分け、石核・剝片類をⅩ群とし、定形的な石器と認定しがたい加工痕や使用痕のある剝片・礫をⅪ群として、記号を用いて分類をした。分類記号を用いなかったものには、礫や土製品、石製品がある。

なお、ⅠXA 1, ⅠXA 2の本文中や一覧表での名称には、R・フレイク、U・フレイクの略称を用いている。

<Ⅰ群> 石鏃・石槍類

A 類 石鏃

- 1: 石刃鏃
- 2: 長身のもの
- 3: 薄身のもの
 - a: 柳葉形のもの
 - b: 五角形になるもの
- 4: 三角形のもの
 - a: 凹基のもの
 - b: 平基のもの
- 5: 木の葉形のもの
- 6: 菱形のもの
- 7: 有茎のもの
- 8: 破片(細分の困難な破片)・未成品など

B 類 石槍またはナイフ

- 1: 茎をもつもの
- 2: 茎が明瞭にみられないもの
(木の葉形・菱形のものを含む)
- 8: 破片(細分の困難な破片)・未成品など

<Ⅱ群> 石鏃

A 類 石鏃

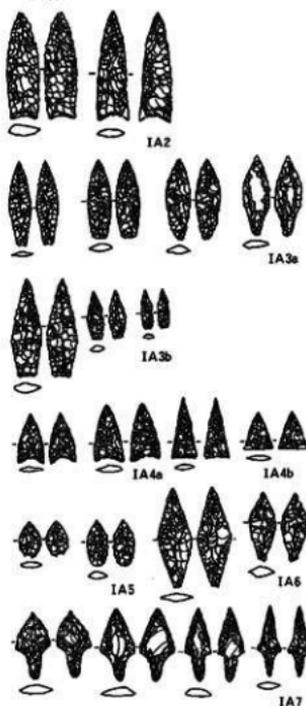
- 1: 刺突部を作り出したもの
- 2: 棒状のものにつまみ部が作り出されたもの
- 3: 棒状のもの
- 8: 破片(細分の困難な破片)・未成品など

<Ⅲ群> つまみ付きナイフ・スクレイパー

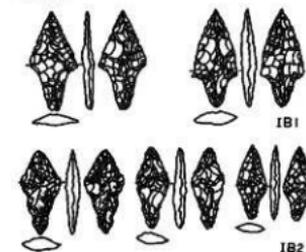
A 類 つまみ付きナイフ

- 1: 片面全面加工のもの
(裏面の側縁に刃部をもつもの)
- 2: 片面全面加工のもの
- 3: 片面周縁加工のもの

Ⅰ群A類



Ⅰ群B類



石器分類模式図(1)

- 4: 両面加工のもの
- 8: 破片(細分の困難な破片)・未成品など

B 類 スクレイパー

- 1: 石べらと称されるもの
- 2: 円形のもの
- 3: 主に縦長で下端部に刃部が設けられるもの
- 4: 素材の縁辺にえぐりを入れ、それを刃部としているもの
- 5: 縦長で、側縁に刃部が設けられているもの
- 6: 素材の形状を大きく変えていないもの
- 8: 破片(細分の困難な破片)・未成品など

<IV 群> 石斧類

A 類 石斧

- 1: 擦り切り手法によって製作されたもの
- 2: 部分的に磨かれているもの
- 3: 全面磨製のもの
- 8: 破片(細分の困難な破片)・未成品など

B 類 石のみ

<V 群> たたき石

A 類 たたき石

- 1: 棒状礫を素材としたもの
- 2: 扁平礫を素材としたもの
- 3: 円礫を素材としたもの
- 4: くぼみ石と称されるもの

<VI 群> すり石

A 類 すり石

- 1: 断面が三角形の礫の稜をすったもの
- 2: 扁平礫を素材としたもの
- 3: 扁平礫を半円状に打ち欠き弦をすったもの
- 4: 円礫を素材としたもの
- 5: 北海道式石冠と称されるもの

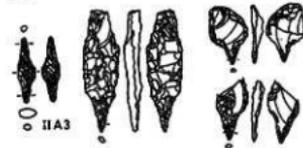
<VII 群> 台石もしくは石皿

A 類 台石・石皿

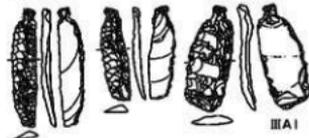
<VIII 群> 石鋸、砥石類

A 類 石鋸

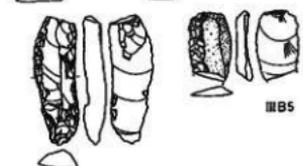
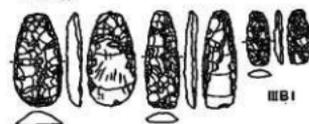
II 群



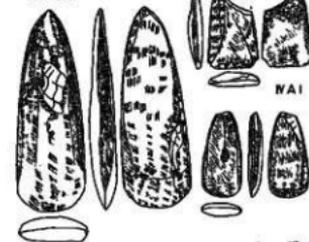
III 群 A 類



III 群 B 類



IV 群 A 類

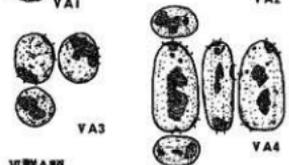
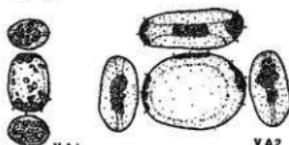


石器分類模式図(2)

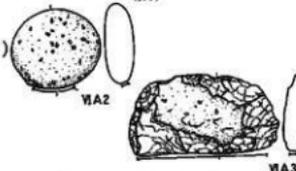
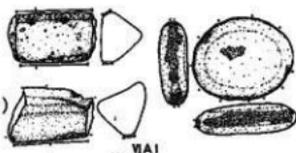
- 1: 石鋸
- B 類 砥石
- 1: 研磨面に溝があるもの
- 2: 板状のもの
- 3: 角柱状のもの
- <IX 群> 石錘
- A 類 石錘
- 1: 4ヵ所の打ち欠きをもつもの
- 2: 長軸の両端に打ち欠きをもつもの
- 3: 短軸の両端に打ち欠きをもつもの
- <X 群> 加工痕、使用痕のみられる剥片や礫など
- A 類 加工痕、使用痕のみられる剥片
- 1: 剥片に加工痕のみられるもの (R・フレイク)
- a: ピエス・エスキーユと称されるもの
- b: 加工痕から器種を特定できないもの。
- 2: 剥片に使用痕のみられるもの (U・フレイク)
- B 類 加工痕のみられる礫
- 1: 擦り切り痕のある礫および礫片
- 2: 意図の不明瞭な加工痕のあるもの
- <XI 群> 石核・剥片類
- A 類 石核・原石
- 1: 石核
- 2: 石器原石と考えられるもの
- B 類 剥片・砕片

(立川トマス)

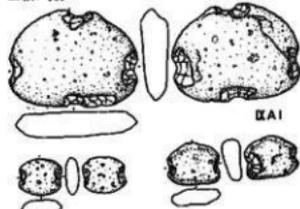
V群A類



VI群A類



IX群A類



石器分類模式図(3)

IV. 高岡1遺跡

1. 概要 (図IV-1-1)

調査範囲は川西地区と呼称される地区で、前年度調査区に接する北側である。前年度までの2カ年の調査で、調査予定範囲のほぼ南半部の4,345㎡の調査が終了している。今年度の調査面積は当初5,850㎡であったが、調査の結果、最終的に5,550㎡になった。標高は約36~53mで、大きくは北西から南東に傾斜している。調査区の西端と東側には沢地形が認められる。道路用地になる前は、主にイチゴ畑や観賞用の花畑として利用されており、調査区のほぼ全域に土層の攪乱がみられる。また、北東端には住宅建設による土層の攪乱、地形の削平がみられた。

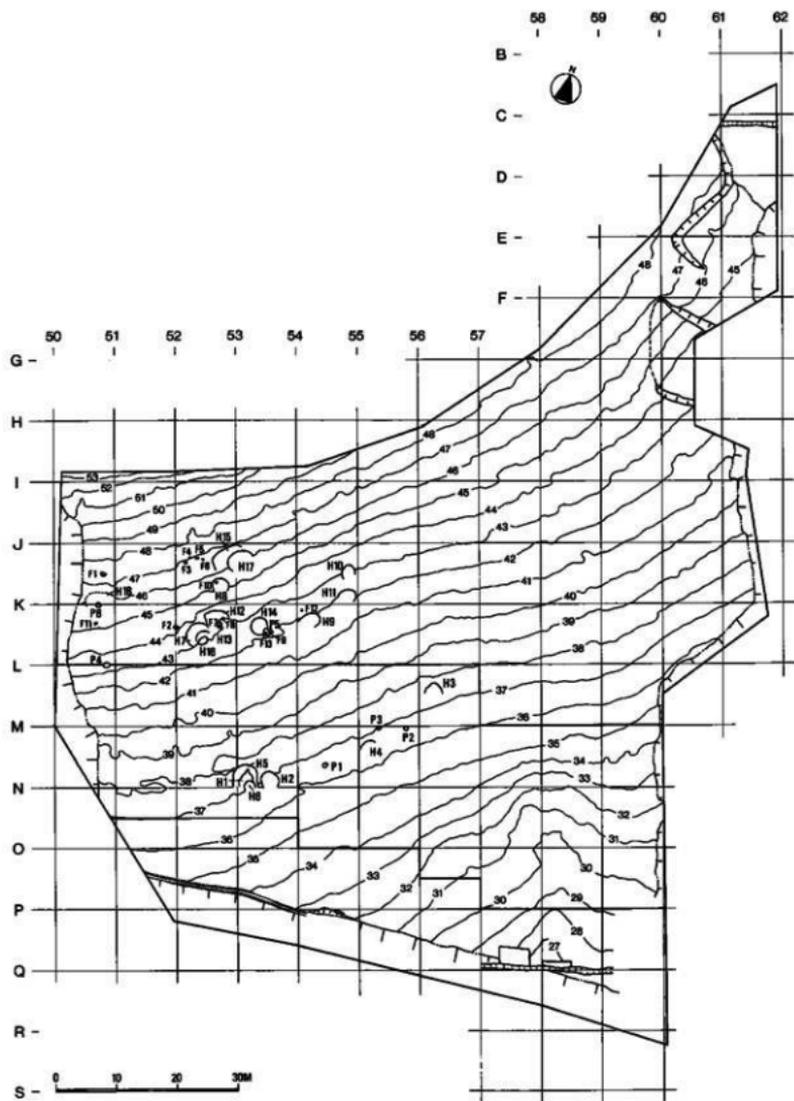
遺構は竪穴住居跡12軒(WH-7~18)、土壇3基(WP-4~6)、焼土13カ所(WF-1~13)を検出した。時期は、いずれも縄文時代中期後半から同後期初頭と考えられる。竪穴住居は、石組み炉をもつもの(WH-7・15・18)ともたないもの(WH-8~14・16・17)がみられる。これらのうち、WH-7・13・16、WH-15・17は重複しており、その時間的差異は[16→13→7]、[17→15]である。石組み炉をもつものは、中期末葉の土器Ⅲ郡b-3類に相当する時期に属している。ただし、傾斜地に構築され、耕作による削平を受けているため、平面形が明確に捉えられたものはない。土壇は出土遺物が少ないものの、WP-5の覆土下位から見晴町式に相当する1個体分の土器が出土している。このことから、形態の類似するWP-4・5の時期は、いずれも中期中葉のものであろう。

遺構は55ラインよりも西側にしか検出できなかった。これは、Jライン付近がわずかながらそれまでの傾斜がいくぶん緩やかになる傾斜変換部の下位に当たるためと考えられる。

遺物は、土器32,400点、石器等159,494点である。豊浦町内原産の豊泉群の黒曜石が非常に多くを占める剥片・碎片等は、石器等の総数の約98.7%である151,112点が出土している。その他に、土製品2点、石製品15点も出土している。遺物点数は昨年度183,481点である。土器の破片数、土器の個体数の分布から見ると大きくは調査区の西方向に偏っている。Iライン以北、及び調査区の57ライン以東では極端に出土量が少なくなる。遺物は遺構の周辺を除くと、D-60、E-59、G-57・58区周辺に多く出土している。但し、その量は遺構周辺部分とは比較にならない数字である。土器は縄文時代中期中葉から末葉にかけてのサイベ沢Ⅶ式、見晴町式、榎林式、天神山式、大安在B式、柏木川式、ノグツブⅡ式、煉瓦台式、北筒式が多く出土し、少量ではあるが後期初頭の特徴をもつものも出土している。なかでも、北筒式土器は石狩低地帯以南では登別市、千歳4遺跡、千歳5遺跡、川上B遺跡や伊達市南福府5遺跡を除くとこれまで断片的にしか出土しなかったものである。今回のようにまとまって出土した例では、分布の南西端となる。また、分布圏を異にすると考えられている北筒式と煉瓦台式土器がまとまって同じ遺跡で出土していることも注目に値する。更に、天神山式土器は胆振地方西部では出土例が少ないものである。

このように、この調査区は縄文時代中期中葉から末葉にかけて、道南と道央に特有のそれぞれの土器型式が出土している。但し、攪乱が多く、また遺構にまとまって出土した例が少ない。そのため、共存関係や編年の位置付けについては明らかにし得なかった。

石器は石鏃、石槍、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、台石、



図IV-1 高岡1遺跡・川西地区の地形と遺構の位置

すり石、石皿、砥石等が出土した。豊浦町豊泉原産の黒曜石の石器、鏃、残核、剥片、破片が大量に出土している。(立川トマス)

2. 土層の区分 [図IV-2-1~4]

昨年度の川西地区での区分をもとにして、以下のように分類した。

I層：暗褐色耕作表土。石英安山岩の風化礫、石英を含む。

II層：黒褐色火山灰性腐植土(黒ボク土)。粒子は細かい。この層中に灰白色火山灰(U s - b以降の火山灰に対比される)と黄灰色火山灰(K o - dに対比される)がみられる。灰白色のものが上位にある。

V層：明黄褐色火山灰(桃別火山灰に対比される)。

VI層：茶褐色～暗褐色～黒褐色土(昨年度のIII層、VI a層～VI b層～VI c層に相当する)。石英安山岩の風化礫、石英を多量に含む。

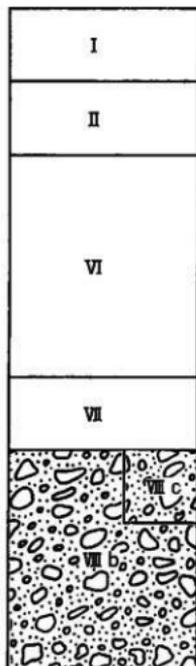
VII層：黄褐色土(昨年度のVII層、VIII a層に相当する)。石英安山岩の風化礫、石英を多量に含む。漸移層、地山の二次堆積。

VIII層：灰褐色を呈する石英安山岩の岩盤の軟質な表層部分(昨年度のVIII bに相当する)と、崖麓堆積物である赤褐色土(昨年度のVIII c層に相当する)がある。

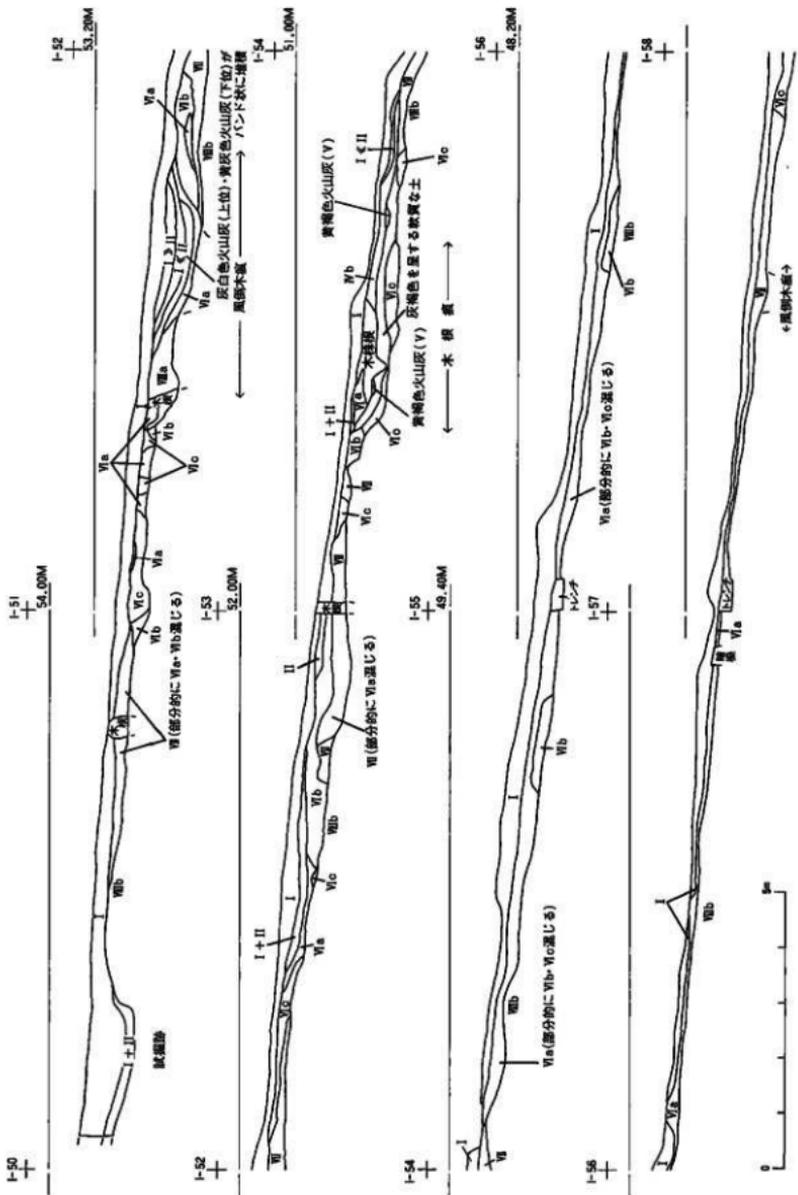
遺物包含層はVI層と思われる。II層は風倒木痕や住居址などの窪地に堆積していた。V層は木根などに堆積がみられた。

石英安山岩の風化礫や石英を多量に含んでいることから、二次堆積と考えられる。VI層は遺物包含層と考えられる。遺跡の立地が斜面であることなどから、茶褐色～暗褐色を呈する様々な腐植・風化段階の土が二次堆積しており、整然と層序を成している部分はみられなかった。VII層は漸移層または風倒木痕などで起き上がった地山の二次堆積である。VIII層は地山で、赤褐色土は角が丸みを帯びた大小様々な玄武岩礫を多量にふくみ、58～60ラインより東側で石英安山岩の岩盤の上位に堆積していた。

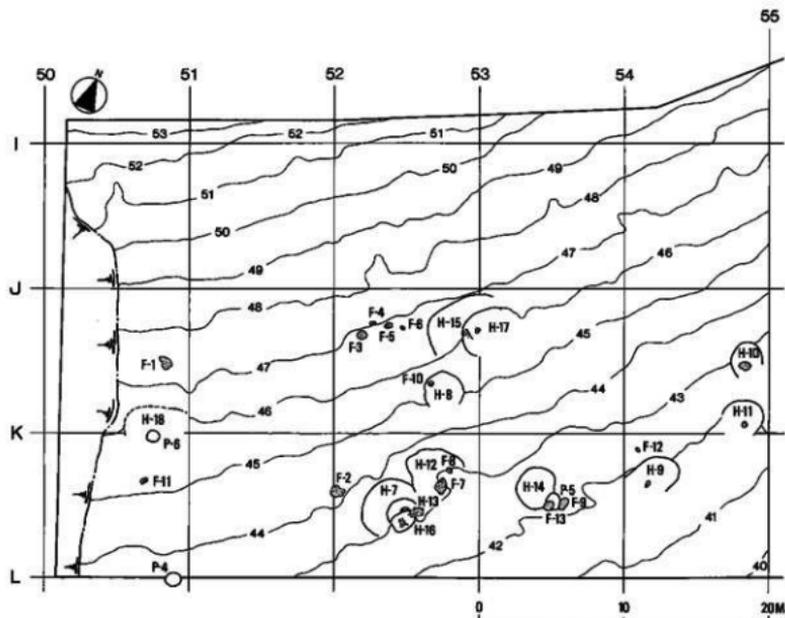
遺跡の立地が斜面であることや風倒木痕が多いことなどから土の移動が著しく、層を判断するのが容易でなかった。しかし、住居址などの遺構では、覆土最下層の土が暗褐色土～黒褐色土(VI b層～VI c層)であったことから、この層が縄文時代中期後半の地表土であった可能性が考えられる。(末光正卓)



図IV-2-1 土層柱状模式図



図IV-2-2 土層断面(1) (東西方向 I-50~I-58)



図IV-3-1 遺構の位置

遺構の概要 [図IV-3-1]

本年度の調査では住居跡12軒 (WH-7~WH-18)、土壇3基 (WP-4~WP-6)、焼土13カ所 (WF-1~WF-13) が検出された。いずれも調査区の西側境界部分50ラインから中央部55ラインの間に位置する。

住居跡は石組み炉をもつもの (WH-7・15・18) ともないもの (WH-8~14・16・17) がみられる。WH-7・13・16、WH-15・17は重複しており、その時間的差異は切り合い関係から [16→13→7]、[17→15] である。時期は、出土遺物から判断して縄文時代中期後半から同後期初頭と考えられる。

3. 住居跡

(1)WH-7 [図IV-3-2~8 表IV-3-1~4 図版-3・9・10・15]

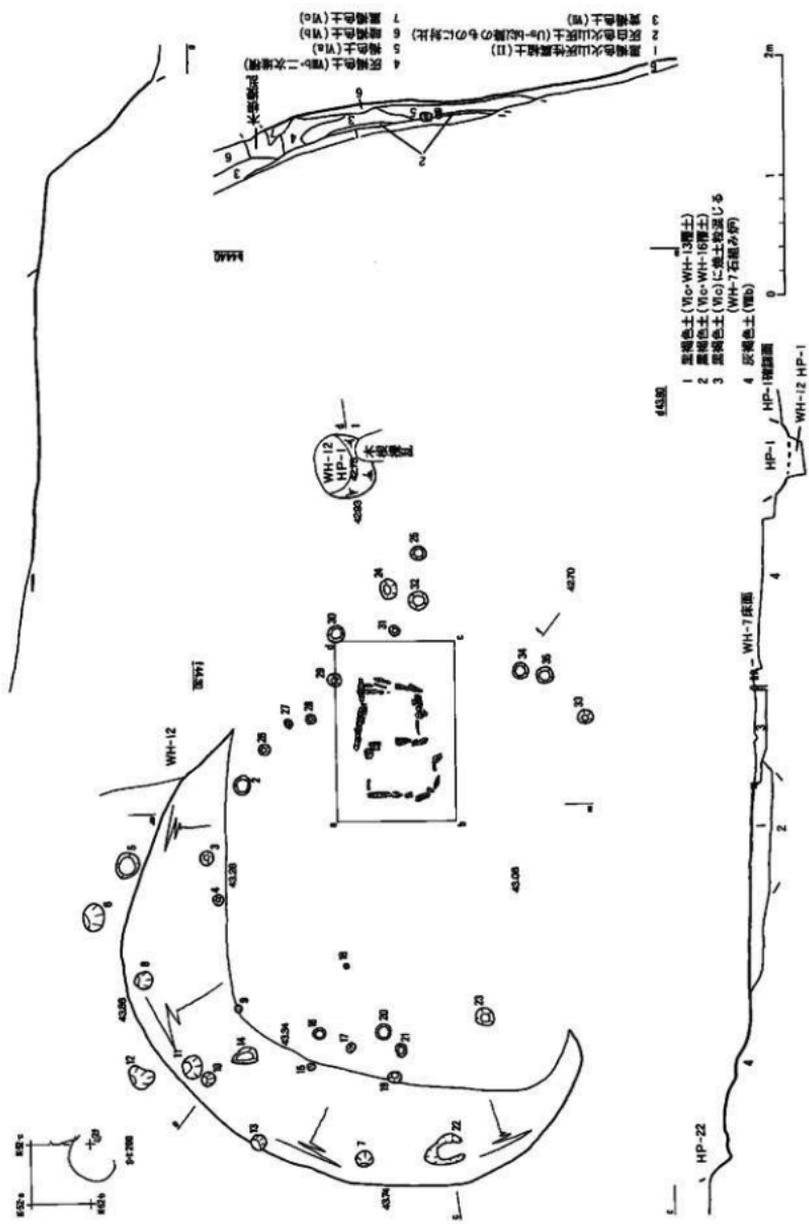
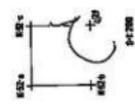
位 置 K-52-a・b・c・d

規 模 (6.28)×(3.90)/(5.32)×(2.90)/(1.00)

平 面 形 長卵形?

確認・調査 I層を除去した時点でII層の堆積がみられた。風倒木痕の落ち込みと判断したが、念のため、土層観察用のベルトを南北方向に設定して掘りすすめたところ、2基の石組み炉を確認したので住居跡と認定した。遺物は、原則として、住居跡と判断した時点から位置・高さを記録して取り上げた。それ以前のは層ごとにとりあげた。

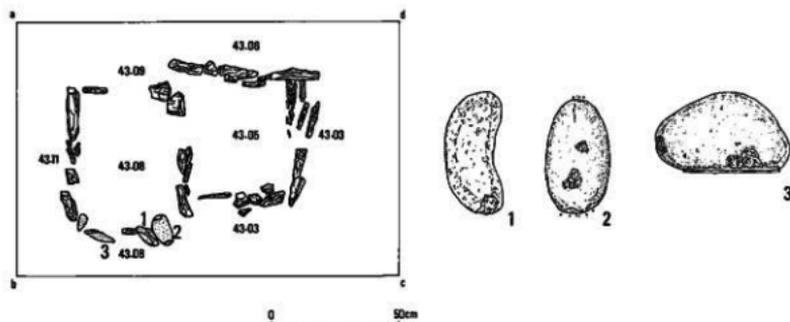
壁・床 南東部分は耕作による削平と傾斜地であるために、壁・床ともに消滅してい



図IV-3-2 WH-7

表IV-3-1 WH-7 HP一覽

HP	礎石面からの深さ (cm)	備 考	HP	礎石面からの深さ (cm)	備 考
HP-1	8		HP-19	11	柱穴 フレイク 1
HP-2	9	柱穴	HP-20	6	# フレイク 1
HP-3	10	#	HP-21	15	# フレイク 2
HP-4	7	# フレイク 1	HP-22	11	# 土器 1 フレイク 3
HP-5	11	# 土器 1	HP-23	21	柱穴 土器 1 フレイク 1
HP-6	30	# フレイク 1	HP-24	28	# 土器 5
HP-7	26	#	HP-25	17	# 土器 1
HP-8	30	#	HP-26	10	#
HP-9	8	# フレイク 1	HP-27	20	#
HP-10	22	#	HP-28	16	# フレイク 1
HP-11	28	# フレイク 1	HP-29	23	#
HP-12	15	# フレイク 1	HP-30	11	# 石鏝 1
HP-13	20	#	HP-31	15	#
HP-14	16	#	HP-32	10	#
HP-15	7	#	HP-33	12	#
HP-16	6	# フレイク 2	HP-34	19	#
HP-17	8	#	HP-35	11	#
HP-18	13	#			



図IV-3-3 WH7石組み炉と床面遺物出土状況

る。しかし、北西部部分においては、明瞭な壁の立ち上りを確認することができた。床面はVIII層であるが、住居跡のほぼ中央部に黒褐色土の堆積がみられた。2基の石組みみ炉のうち西側の1基がこの黒褐色土を掘り込んで構築しているので、この面を床面と判断した。覆土II層の直下にVIa層の堆積と、VII層・VIII層の二次堆積がみられ、その下位にVIb層が堆積していた。掘り込み面は削平を受けたVI層中であつたと推測される。

炉 方形のものが2基確認された。東側のものを1号石組みみ炉、西側のものを2号石組みみ炉と呼称した。これと類似するものとしては、登別市千歳6遺跡「札内台地の縄文時代集落址」(登別市教育委員会1982)で、住居改築に伴う炉がつくりかえられている住居址が多く確認されていることから2基は時間差をもつものと判断した。しかし、半截して断面の観察を行ってみたが、新旧関係は確認できなかった。平面形からは2号が新しいという感じを受ける。それぞれの炉から土壌サンプリングを行い、骨片についての分析を

依頼した (IV章-2 参照)。

土 墳 HP-1 がある。WH-12の床面精査中、WH-7の西側の部分において、床面と考えられる面から約10cm掘り下げた面で確認された。浅い皿状の落ち込みで、覆土は暗褐色土のみである。別の土墳 (WH-12・HP-1としたもの) により切られている。

柱 穴 柱穴と考えられる掘り込みは33箇所確認できた。[表IV-3-1]

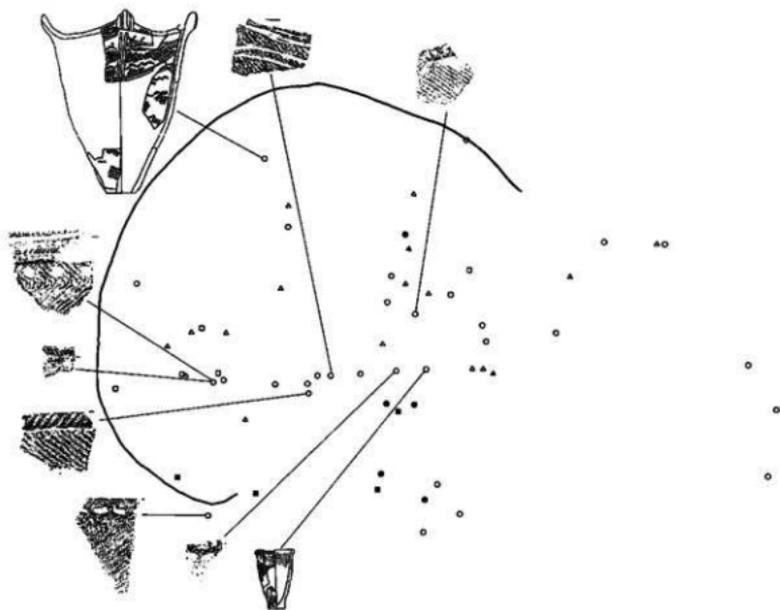
重 複 WH-13・16の上位に構築されている。北東部分ではWH-12と隣接しているが、WH-7との新旧関係を明確に示す状況は確認できなかった。

遺 物 床面出土の遺物は土器5点・礫石器2点・フレイク5点である。2基の石組み炉内からは大量のフレイクチップ、礫片などが出土し、覆土からは土器・石器等が出土した。[図IV-3-4]

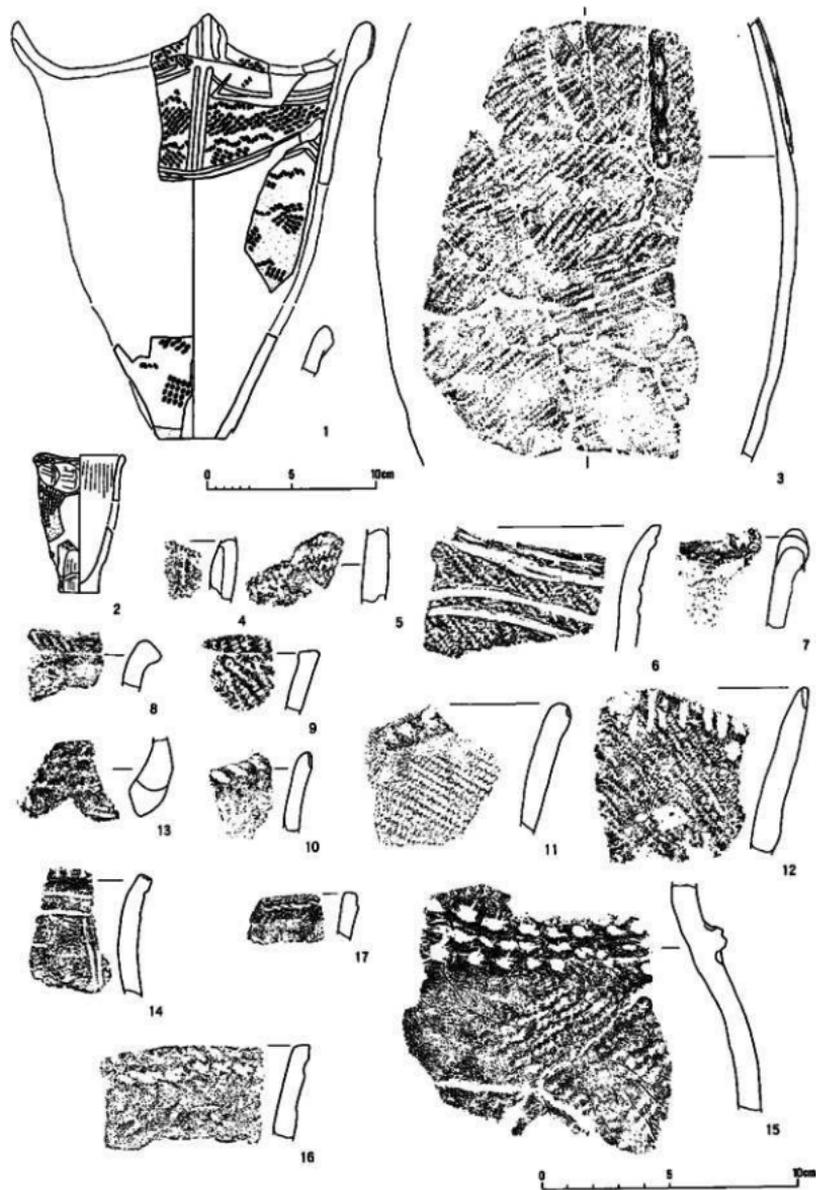
土器は4・5は床面出土、1~3・6~29は覆土出土のものである。4は摩耗が著しい口縁部の破片である。5は胴部の破片で、横走気味の縄文がみられる。内面は縦方向に調整がなされている。Ⅲ群b-2類のものであろう。

1~3は器形を知りうる程度復元できた個体である。

1はⅢ群a-2類のサイベ次VII式に相当するものである。胴部下半から底部の部分は、反対側の外面を突測したものである。4個の山形突起部をもつ波状口縁のものである。器形は、口縁部からゆるやかに胴部下半へとつながり、そこから底部へと急角度ですばまる器形を呈する。口唇は摩耗しており、丸みを帯びているが、断面は切り出しナイフ形を呈す



図IV-3-4 WH-7とその出土遺物分布



図IV-3-5 WH-7 出土の遺物(土器1)

ると考えられる。地文は結束第2種の羽状縄文・斜行縄文である。底部付近の胴部は横方向になでられている。突起部分は縦方向に3本の粘土紐が貼付けられている。縦・横方向の2本組の沈線文が、口縁部から胴部上半にかけて施され、文様を構成している。縦方向のものは突起部から垂下し、横方向のものは、口縁部では波状に、胴部上半では突起部間で山形になる。図示できなかった部分で、縦方向の沈線文と胴部上半の沈線文との交点に、1×1.4cmの楕円形の粘土塊が貼付けられている。また、この個体はWH-12覆土出土の破片が接合した。これはWH-7・12の住居跡の南東側の壁が消滅し、地形的には斜面中の落ち込み状のものとなり、その場所に、この個体が流れ込んできたと推測している。

2はⅢ群b類に分類されると考えられるものである。薄手の小型の土器である。わずかに外反する口縁部から胴部下半はとゆるやかにすぼまり、底部へと直線的につながる器形である。地文の縄文はRL斜行縄文であるが、胴部付近は横走している。口縁部と底部近くの胴部は、指頭によるなで調整がなされている。口唇断面は丸みを帯びた角形を呈する。内面の調整は縦方向になされている。

3はⅢ群b-3のノグツブⅡ式に相当するものである。各水平部位において径をもとめて、実測図上で推定復元したものである。縮尺は1/3である。胴部が曲線的に強く張り出す器形を呈する。地文はLR斜行縄文であるが、横走する部分もみられる。地文施文後に、縦方向に貼付帯を設け、その上に短刻線文を施している。胎土には海面骨針がみられる。6~12はⅢ群a-2類のサイベ沢Ⅶ式・Ⅲ群b類の見晴町式に相当するものである。

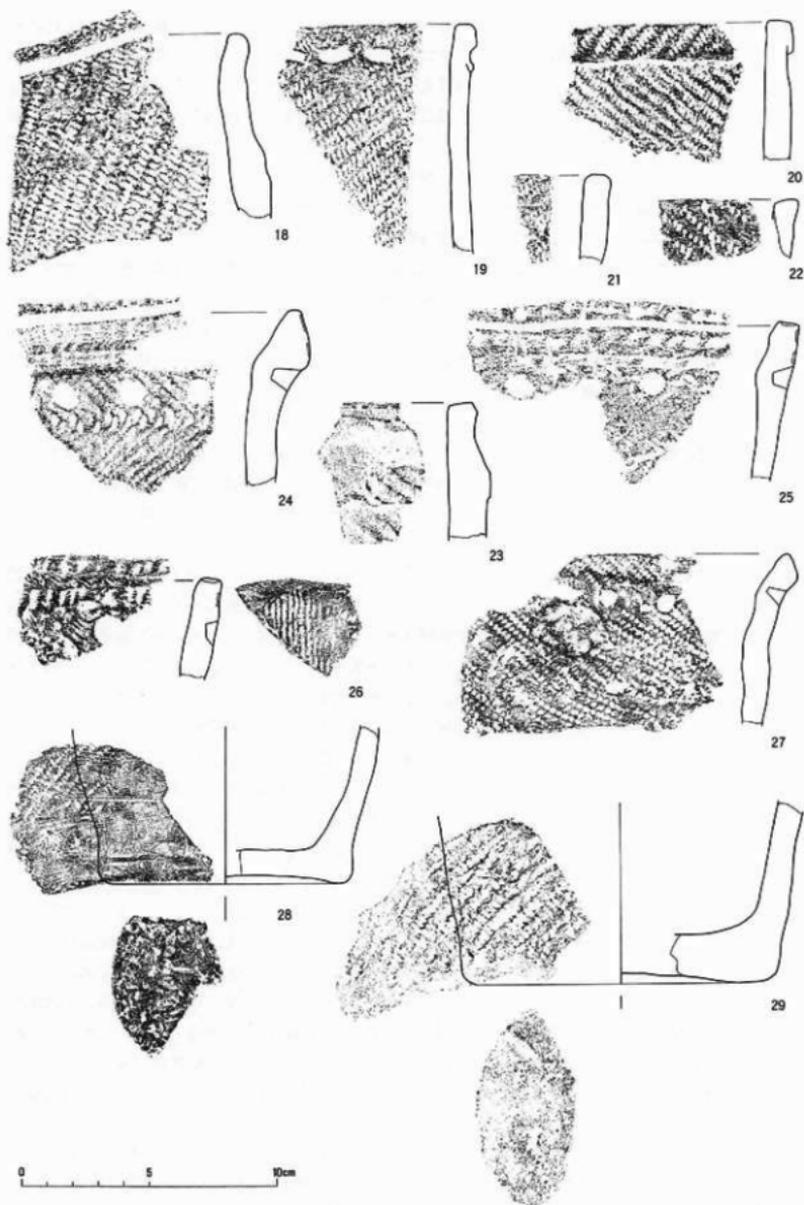
6は地文がRL斜行縄文で、2本組の沈線文が施されている。7は口唇部に2本の粘土紐の貼り付けがみられる。8は口縁部が外反し、口唇に縄文が施されている。9は口唇が角形で、縄文がみられる。10は口唇が切り出しナイフ形で、擦糸が押捺されている。器面は摩耗しているが、左上がりの縄文が観察される。11は口唇が摩耗のため、丸みを帯びた形状を呈する。口唇の文様は判然としませんが、擦糸押捺のようである。地文はRL斜行縄文である。12は口唇が尖り気味のもので、棒状工具による刻み目がみられる。13は把手部分とおもわれる。下方が二股に分かれる三叉状のものである。摩耗が著しいが、節らしき痕跡が観察される。

14~18はⅢ群b-2類に相当するものである。

14は口縁部が外反するものである。口唇は角形で、先端部が二股の工具による刻み目がみられる。器面には縦方向と横方向に沈線文がみられ、縦方向のものから施されている。内面には条痕状の調整痕が横方向にみられる。15は胴部が張り、胴部~胴部上半に貼付帯がある。貼付帯上には縄線文がみられ、先端部が丸形の棒状工具による刺突文が貼付帯を挟むように施されている。地文は摩耗しているため判然としませんが、右上がりの縄文が観察される。貼付帯は地文の後に施したようである。16は摩耗が著しい。口唇断面は角形を呈するようである。口縁部には、LRの縄線文が観察される。17は口唇直下の器面に隆起帯状のものがみられ、その上にLR原体の縄線文が施されている。地文もLR斜行縄文である。口唇断面は角形を呈する。18は波状口縁のものである。口唇は丸形で、縄文を施している。

19~23はⅢ群b-3類の煉瓦台式に相当するものである。

19は口唇直下の器面に貼付帯を施し、地文を器面と同時施文している。貼付帯上には短刻線文がみられる。口唇断面は角形を呈し、胎土は海绵骨針を含んでいる。20は口唇部直



図IV-3-6 WH-7 出土の遺物(土器2)

下の器面に明瞭な貼付帯がみられるものである。貼付帯上と器面は別施文で、羽状縄文を形成している。貼付帯は地文施文後になされている。21は口唇がやや丸みを帯びている。22は内面が剝落している。23は口唇より離れた器面に貼付帯がみられる。地文は無節の斜行縄文を貼付帯上と器面とを同時施文しており、口唇から貼付帯間は指頭によるなで調整がなされている。

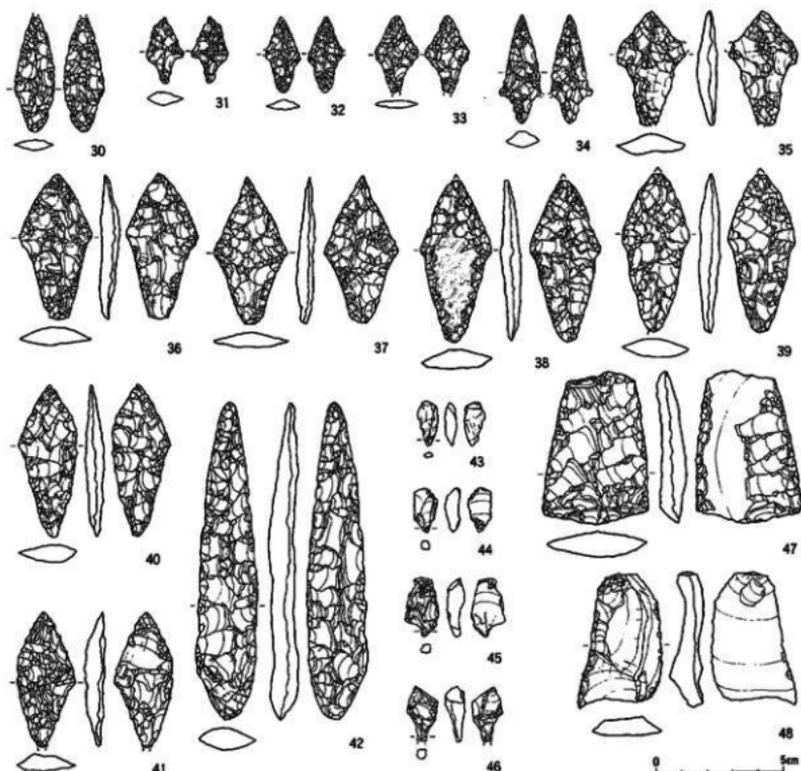
24～27はⅢ群b-3類の北筒式に相当するものである。

24は口縁部が断面三角形に肥厚し、2列の押引文がみられるものである。地文は結束第一種の羽状縄文である。口唇の文様は摩耗のため判然としない。内面は突瘤文を形成している。25は口唇、口縁部に2列の押引文がみられるものである。地文は判然としないが、結束第二種のようなものである。内面は突瘤文を形成している。26は口唇と口縁部に押引文を施している。外面の縄文は判然としない。内面には縦走る条がみられ、節は観察されない。無節であるかもしれない。突瘤文はやや張り出す感じをうける。27は口唇断面が三角形で地文はRL斜行縄文である。内面は突瘤文を形成している。

28・29は底部である。

28は底部がやや張り出して、上げ底のものである。底部近くの器面は横方向になでられている。Ⅲ群a-2・b-1類に相当すると考えられる。29は上げ底で、胴部へと直立気味に立ち上がるものである。胴部にはLR斜行縄文が施されている。Ⅲ群b-3類に分類されよう。

30は木の葉形のもの(IA5)である。尖頭部を欠損する。31～34は、有蓋族(IA7)である。32・34は側縁部のかえし状の張り出しを、33は基部を欠損する。31は加工が粗く粗雑な作りである。33は裏面に一次剝離面がみられる。石質は、30・32～34が黒曜石、31が頁岩である。35～42は石槍またはナイフに分類されるものである。35は茎をもつもの(IB1)で、側縁部のかえし状の張り出しが欠損している。36～42は茎が明瞭にみられないもの(IB2)である。36～39は両側縁に、40は左側縁に、41は右側縁に、小さいながらかえし状の張り出しをもつ。38は、礫表面を残し、素材は黒曜石の角礫が用いられている。36・39は尖頭部を、41は基部を、欠損している。42は、細長いタイプのもので、側縁部に使用によると思われる刃部のつぶれがみられることから、ナイフの可能性が有る。石質は、35～41は黒曜石、42は頁岩である。43～46は、石鏝である。いずれも、刺突部が作り出されたもの(IIA1)である。44・45は、刃部に回転によると思われるつぶれがみられる。46は、使用によるとおもわれる刺突部の欠損がみられる。石質は、いずれも頁岩である。47・48は、スクレイパーである。47は石べらと称されるもの(III B1)で、横割ぎの剝片を縦に使用している。48は、素材の形状を大きく変えていないもの(III B6)である。石質は、いずれも頁岩である。49～51は、全面磨製の石斧(IVA3)の破片である。49は胴部から基部を、50は刃部と基部を欠損する。51は、胴部の破片である。52は、石斧の未成品とおもわれる。表面と側縁部は敲打により器面調整が、裏面には研磨痕がみられる。下端部は、刃部作出のための打ち欠きが施されている。石質は、49・51が片岩、50・52が緑色泥岩である。53・54は、たたき石である。53は、扁平礫を素材としたもの(VA3)である。2号石組み炉の炉石として使用されていたものである。54は、くぼみ石と称されるもの(VA4)である。腹面の中央部に2カ所、背面に1カ所の使用による凹みがみられる。さらに、礫の両端にもたたき痕がみられ、下端部の使用痕が顕著である。石質は、いずれも安

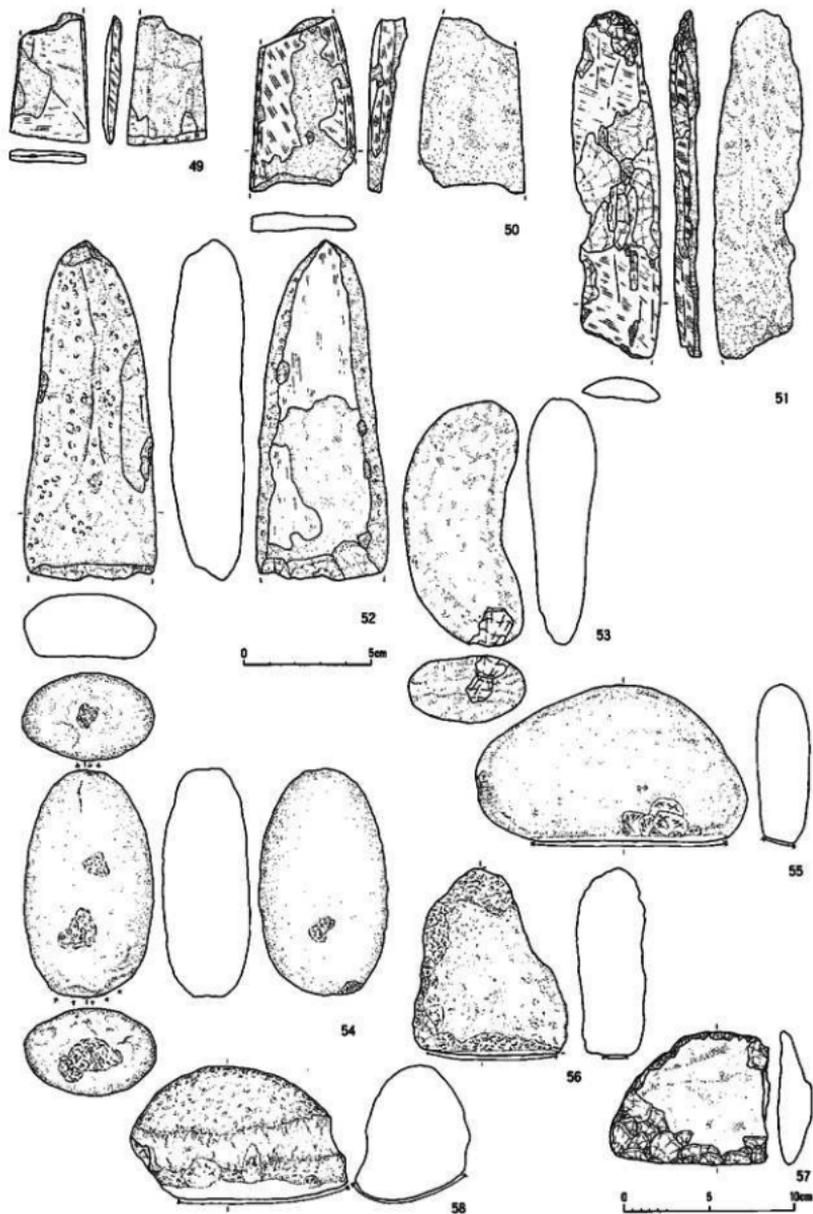


図IV-3-7 WH-7 出土の遺物(石器1)

山岩である。55～58は、すり石である。55は、扁平礫を素材としたもの(VIA 2)である。長軸方向の一端にたたき痕が、すり面のある側縁に打ち欠きがみられる。2号石組み炉の炉石として使用されていたものである。56・57は、扁平礫を半円状に打ち欠き弦をすったもの(VIA 3)である。57は、V字形に打ち欠いた後にはすり跡がみられない。56・57は、ともに破片である。58は、北海道式石冠(VIA 5)である。石質は、いずれも安山岩である。53・55は床面、このほかはすべて覆土からの出土である。

時期 床面出土の土器がⅢ群b-2類であるとおもわれるので、縄文時代中期後半と考えられる。また、WH-13・16の上位に構築されているので、それより新しいといえる。

(末光正卓・立川トマス)



図IV-3-8 WH-7 出土の遺物(石器2)

(2)WH-8 (図IV-3-9~11 表IV-3-5~7 図版-3・4・9・16)

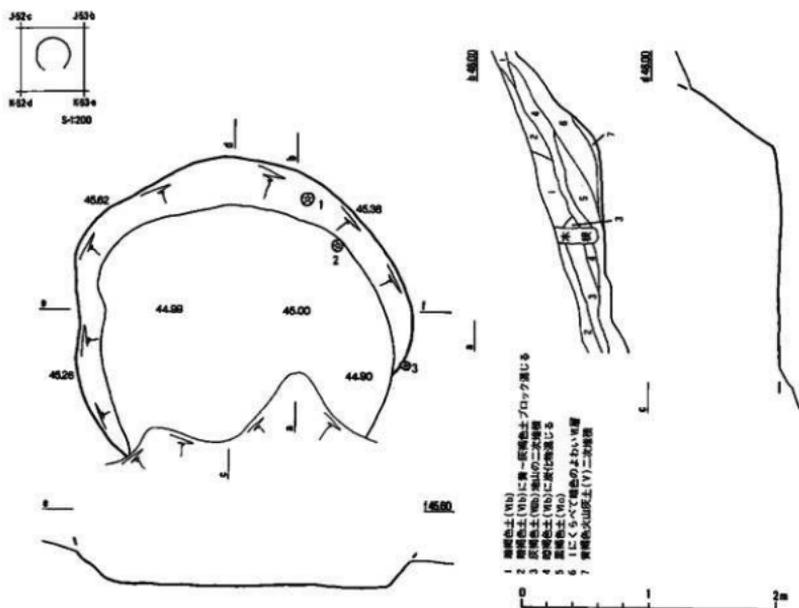
位置 J-52-c

規模 $(2.62) \times (2.24) / (2.20) \times (1.84) / (0.72)$

平面形 円形?

確認・調査 包含層調査中、J-52区を中心に、VII層・VIII層の二次堆積が広範囲にみられた。J~L間の52.8ラインに、南北方向の土層観察用のベルトを設定し、ベルト沿いにトレンチを設けて、掘り下げていったところ、壁の立ち上りらしきものを確認した。風倒木痕であることも考えられたが、平坦な面の広がりも確認できたので、住居跡と認定した。遺物は、原則として、住居跡と判断した時点から位置・高さを記録して取り上げた。それ以前のは層ごとに取り上げた。遺物分布図で、東側の部分に遺物の分布が密集しているのは、そこに土層観察用のベルトを設定していたことによるものである。

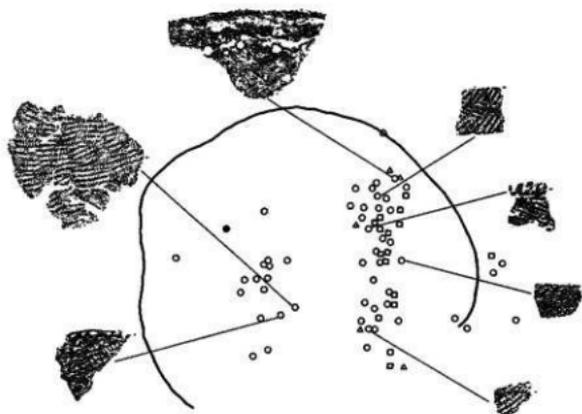
壁・床 南側の部分は耕作による厩平と傾斜地であるために、壁・床ともに消滅して



図IV-3-9 WH-8

表IV-3-5 WH-8 HP一覽

HP	確認面からの 深さ (cm)	備 考
HP-1	42	柱穴
HP-2	3	#
HP-3	11	#



図IV-3-10 WH-8とその出土遺物分布

いる。しかし、北側の部分においては明瞭な壁を確認することができた。確認できた床面はⅦb層である。

覆土 黄～灰褐色土のブロックが混じるⅥb層の下位に、炭化物のまじるⅥb層とⅦb層の二次堆積がみられ、その下位にⅥb～Ⅵc層が堆積していた。壁際から床面にかけてⅤ層の三角堆積がみられる。また覆土中にはWF-10が流れ込んでいる。掘り込み面は削平を受けたⅥ層中であつたと推測される。

炉 炉らしきものは確認されなかった。

柱穴 柱穴と考えられる掘り込み面は3カ所確認できた。[表IV-3-2]

遺物 床面出土の遺物は土器2点である、覆土からは土器・石器等が出土した。[図IV-3-10]

土器は1～9すべて覆土からの出土である。

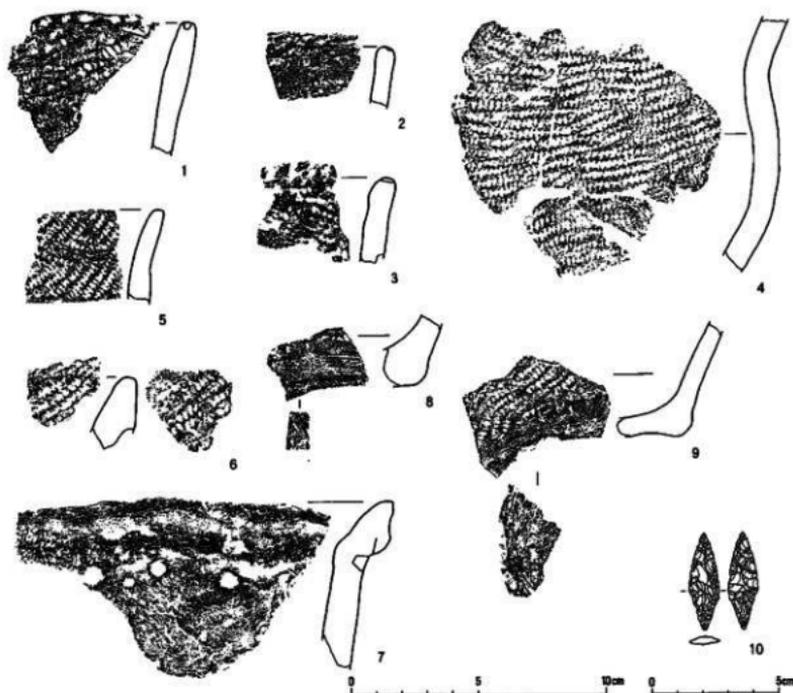
1～3はⅢ群b-2類、4・5はⅢ群b-3類のノグップⅡ式・煉瓦台式、6・7はⅢ群b-3類の北筒式にそれぞれ相当するものである。8・9は底部の破片である。

1は口唇が丸みを帯びた角形で、刺突文が施されている。地文は右上がりの縄文がみられる。2は摩耗が著しいが、口唇に節の痕跡のようなものが観察される。3も摩耗が著しいものである。器面には左上がりの縄文がみられる。口唇部には燃糸の押捺が観察される。Ⅲ群b-1類に分類されるのかもしれない。

4はくびれる頸部から張り出す胴部の破片である。地文はL Rの原体を用いた横走縄文が施されている。内面は丹念に調整されている。5は口縁部が若干すぼまるものである。地文にはL Rの原体を用いている。

6は断面が三角形に肥厚する口縁部の破片である。口唇と内面にも縄文が施されている。7は無文のものである。口縁部は肥厚し、指頭による調整痕が顕著にみられる。内面は突瘤文を形成している部分のみみられる。

8は底部が若干張出し気味で、底部近くの胴部はなで調整がされている。Ⅲ群a-2・



図IV-3-11 WH-8 出土の遺物(土器・石器)

b-1類に相当するとおもわれる。9は底部が張出し、上げ底気味のものである。胴部には右上がりの縄文がみられ、底部近くはなで調整がされている。Ⅲ群b-2類に相当するとおもわれる。

10は石鏃である。明瞭な茎部はみられないものの、両側縁にわずかながらかえし状の張出しがあることから、有茎族のIA7に分類した。石質は、黒曜石である。覆土からの出土である。

時期 床面出土の土器は摩耗が著しく時期は判断できないが、覆土からⅢ群b類土器が出土していることから、縄文時代中期後半と推測される。(末光正卓・立川トマス)

(3)WH-9 [図IV-3-12 表IV-3-8 図版-11]

位 置 K-54-a

規 模 (2.53)×(2.60)/(2.44)×(1.84)/(0.18)

平 面 形 楕円形?

確認・調査 包含層VI層調査中、VII層上面で黒褐色土の広がりを確認した。当初自然地形のくぼみと考えられたが、中央部よりやや西側で剥片・碎片のまとまりを確認した。このため南北方向に土層観察用の土手を設定して掘り下げたところ、床面と思われる平坦面と地床炉を検出したため住居跡と認定した。

壁・床 北半部はほぼ垂直に立ち上がる壁と平坦な床面が確認されたが、南半部は耕作による削平と傾斜地であるため、壁・床ともに検出できなかった。また、南西側は風倒木によりかなり広範囲に攪乱を受けている。掘り込み面はVI層中と考えられる。

覆 土 VI層とおもわれる黒褐色土である。

炉 住居跡中央部よりやや南西側に地床炉が位置する。規模は、0.47m×0.23m×0.05mである。焼土中にはわずかに炭化物粒がみられる。

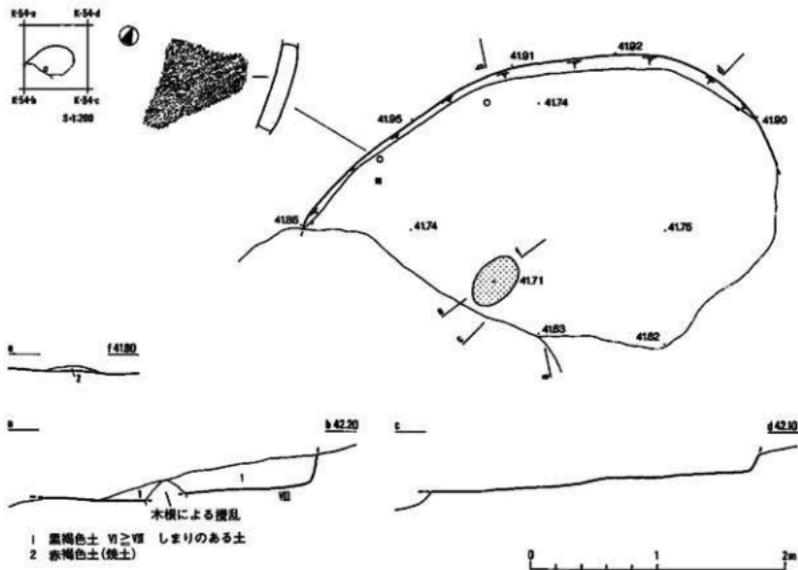
遺 物 覆土からの出土が圧倒的に多く、床面からは黒曜石の剥片1点だけである。

[図IV-3-12]

1は覆土から出土した摩耗が著しい胴部の破片である。地文は右上がりの斜行縄文が観察できる。Ⅲ群b類のものと考えられる。

時 期 覆土と住居跡周辺からⅢ群b類土器が出土していることから、縄文時代中期後半と考えられる。

(立川トマス・末光正卓)



図IV-3-12 WH-9とその出土遺物分布・出土遺物

(4)WH-10 [図IV-3-13~14 表IV-3-9~11 図版-4・9・11・16]

位 置 J-54-c・d

規 模 (1.88)×2.20/(1.76)×2.10/(0.26)

平 面 形 楕円形?

確認・調査 包含層VI層調査中、VII層上面で黒褐色土の広がりを確認した。当初自然地形のくぼみと考えられたが、南北方向に土層観察用の土手を設定して掘り下げたところ、床面と思われる平坦面と焼土を検出したため住居跡と認定した。

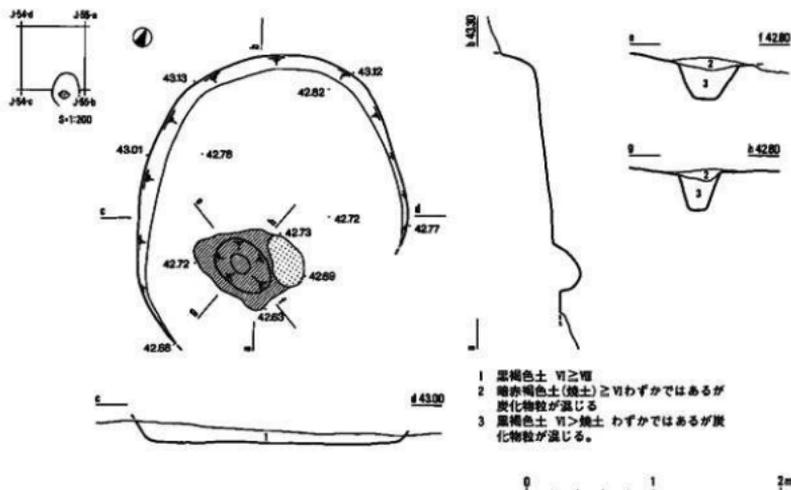
壁・床 北半部はほぼ垂直に立ち上がる壁と平坦な床面が確認されたが、南半部は耕作による削平と傾斜地であるため、壁・床ともに検出できなかった。掘り込み面はVI層中と考えられる。

覆 土 直径2~3mmの小礫の混じる黒褐色土である。VI層の二次堆積と思われる。

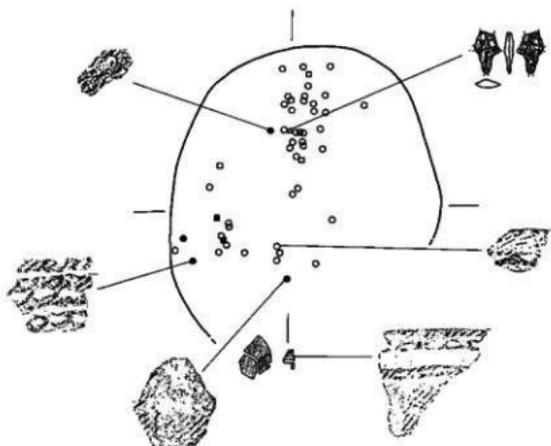
炉 住居跡の中央部よりやや南側に地床炉が位置する。わずかな炭化物粒が混じる。地床炉に接して西側に、焼土粒と炭化物粒の混じる硬くしまった黒色土の広がりが確認された。規模は、0.72×0.58×0.10(m)である。地床炉内の焼土の掻きだしが床面上で混じたものと思われる。

付帯施設 地床炉の西側、焼土粒と炭化物粒の混じる黒色土の広がり中央下部に小ピットが確認された。平面形は、北西-南東に長軸をもつ楕円形を呈する。規模は、0.49×0.34/0.18×0.12/0.29(m)である。覆土は、上部は焼土粒と炭化物粒の混じる固くしまった黒色土である。下部は、わずかに炭化物粒の混じた焼土と思われる、暗赤褐色土である。このピットの床面、壁面ともに焼成を受けた様子がみられないことから、地床炉内の焼土を掻き出し投棄するために作られたものと考えられる。

遺 物 覆土、床面から出土している。覆土からの出土が圧倒的に多い。[図IV-3-



図IV-3-13 WH-10



図IV-3-14 WH-10とその出土遺物分布

14]

1～4は床面、5・6は覆土の出土である。

1～4はⅢ群b-3類の煉瓦台式に相当するものである。

1は器形を判断しうる程度復元できた個体である。口唇は角形で、口縁部から胴部へとゆるやかにすぼまる器形である。地文は斜行縄文で、LR原体を横方向に回転施文している。内面は口縁部では横方向、胴部付近では縦方向に調整がなされている。胎土は砂を含んでいる。

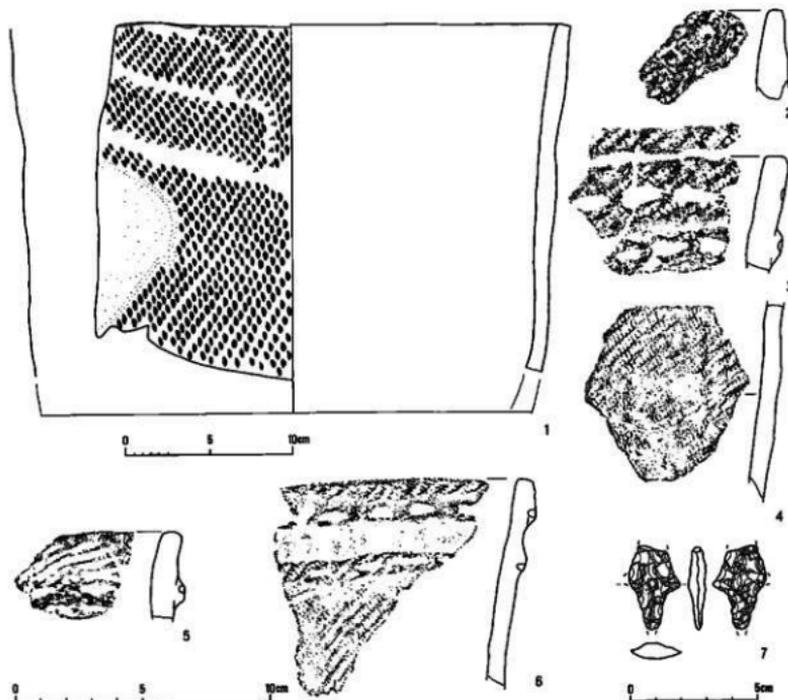
2は口唇が角形を呈する。地文は右上がりの縄文がみられ、内面は横方向に調整がなされている。3は地文施文後に口唇から離れた器面に貼付帯を施し、この上と口唇近くの器面に短刻線文を1列ずつ施している。貼付帯をはさむ両側の器面はなでつけられており地文が消えている。口唇は角形で、縄文が施されている。内面の調整は横方向である。4は胴部の破片である。地文はLRの原体を横方向に回転施文している。内面は縦方向の調整である。

5はⅢ群b-2類、6はⅢ群b-3類の煉瓦台式に相当するものである。5は地文が横走気味の縄文で、条間には、筋が観察されず無筋であるとおもわれる。口唇から離れた器面には、短刻線文の施された明瞭な貼付帯がみられる。口唇は丸形で丹念に磨かれている。内面の調整は、横方向である。6は短刻線文が施された隆起帯状のものが2列みられる。地文はLRの原体を用いて、下位の隆起帯上と器面とを同時施文している。隆起帯間と2列目の隆起帯の下位の器面は丹念になでられている。口唇断面はやや丸みを帯びた角形を呈する。内面の調整は横方向になされている。

7は石槍で、茎を持つもの(IB1)である。加工が粗く、粗雑な作りである。尖頭部、茎下端部、側縁部を欠損する。石質は黒曜石である。覆土からの出土である。

時 期 床面からⅢ群b-3類土器が出土していることから縄文時代中期末葉と考えられる。

(立川トマス・末光正卓)



図IV-3-15 WH-10 出土の遺物(土器・石器)

(5)WH-11 [図IV-3-16~19 表IV-3-12~13 図版-5・11・16]

位 置 J-54-c、K-54-c

規 模 (2.15)×2.70/(2.05)×2.66/(0.42)

平 面 形 楕円形

確認・調査 包含層VI層調査中、VII層上面で黒褐色土の広がりを確認した。当初自然地形のくぼみと考えられたが、南北方向に土層観察用の土手を設定して掘り下げたところ、床面と思われる平坦面と焼土を検出したため住居跡と認定した。

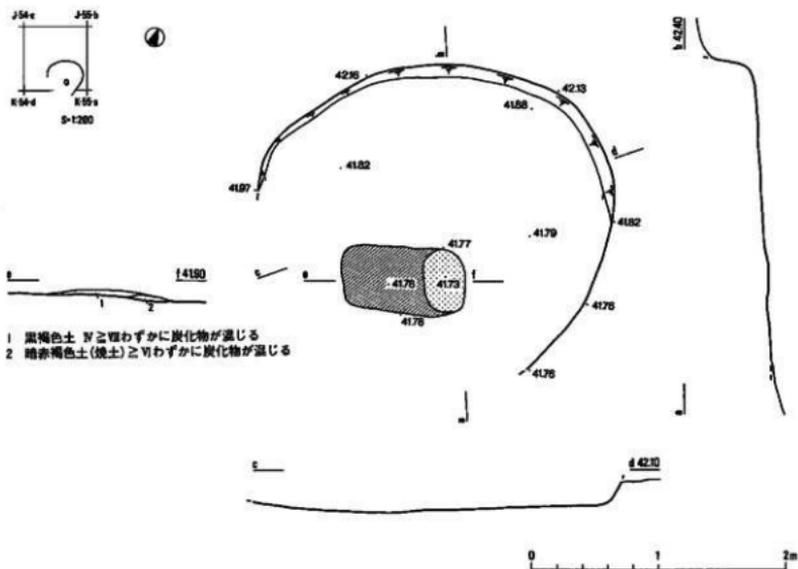
壁・床 北半部はほぼ垂直に立ち上がる壁と平坦な床面が確認されたが、南半部は耕作による削平と傾斜地であるため、壁・床ともに検出できなかった。掘り込み面はVI層中と考えられる。

覆 土 直径2~3mmの小礫の混じる黒褐色土である。VI層の二次堆積と思われる。

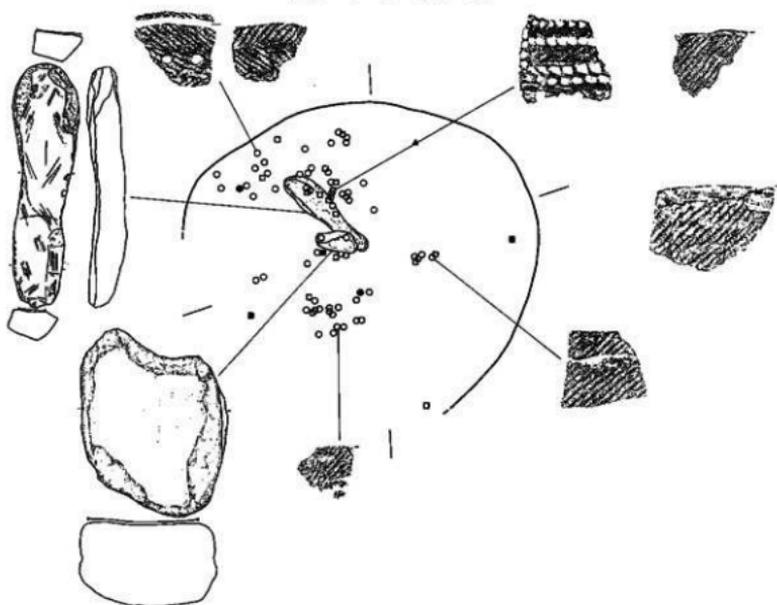
遺 物 覆土、床面から出土している。覆土からの出土が圧倒的に多い。

1~9はすべて覆土からの出土である。

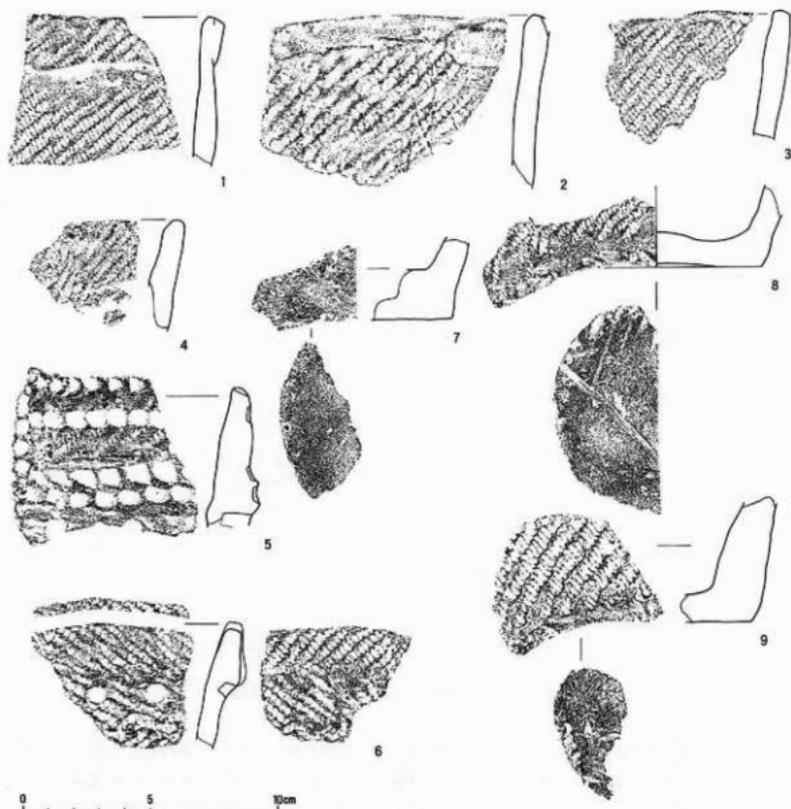
1~4はIII群b-3類の煉瓦台式、5・6はIII群b-3類の北筒式、7~9は底部の破片である。



図IV-3-16 WH-11



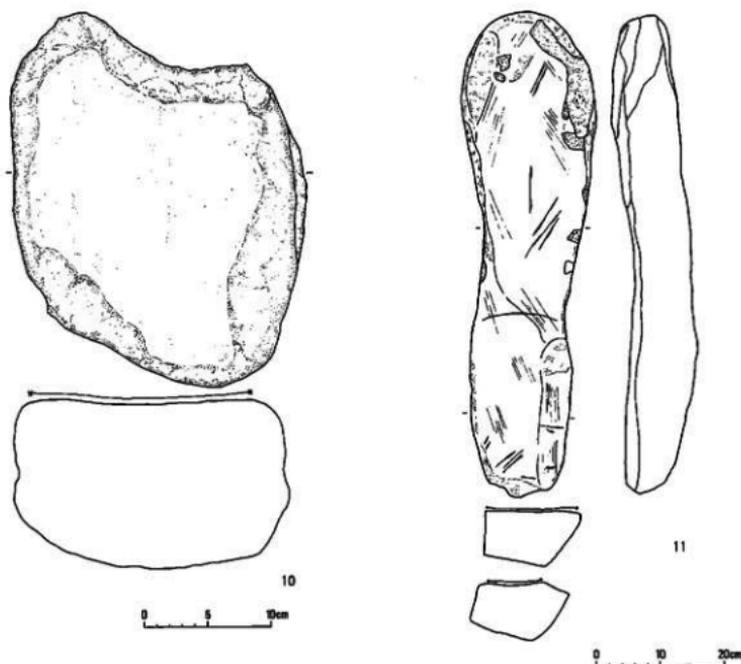
図IV-3-17 WH-11とその出土遺物分布



図IV-3-18 WH-11 出土の遺物(土器)

1は口唇直下の器面に貼付帯を施し、LRの原体を用いて、貼付帯上と器面とを同時施文している。口唇は角形で、なでられているが貼付帯と器面との粘土の境目が観察される。2は口唇直下の器面に貼付帯の剝落痕がみられる。地文は摩耗のため不明瞭であるが、右上がりの斜行縄文がみられる。3・4はともに右上がりの斜行縄文がみられ、口唇は丸形で、なで調整がなされている。ノグップⅡ式に相当するものかもしれない。

5は口唇からはなれた面に貼付帯がみられる。この貼付帯上とその直上の器面との境目、口唇に1列ずつ横方向に、口縁部には縦と横方向に1列ずつ刺突文風の押引文が施されている。縦方向の押引文は口縁部の隆起部に対応するようである。外面全体はなで調整がなされているが、口縁部では右上がりの縄文がかすかに観察できる。円形刺突文は貼付帯からその直下の器面にかけての部分に施されており、内面にはと突縮文がみられる。6は口縁部は断面が三角形に肥厚するもので、緩やかな隆起部をもつと考えられるものである。



図IV-3-19 WH-11 出土の遺物(石器)

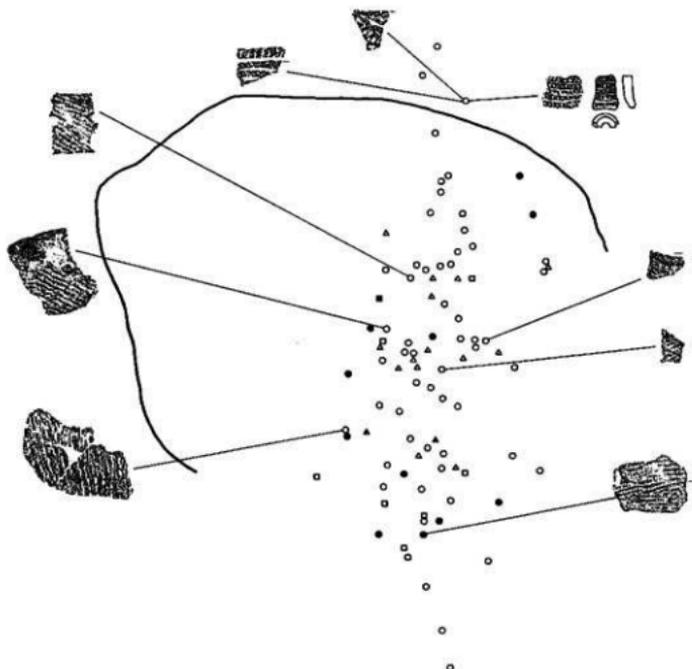
肥厚する口縁部に左上がりの縄文がみられ、器面は結束第2種の羽状縄文である。円形刺突文は地文施文後に施され、内面は突瘤文はみられない。内面の縄文は別原体施文による羽状縄文がみられ、破片の下部では結束部の回転圧痕がみられる。口唇部にも縄文が施されている。

7は底部付近の胴部が無文である。8は胴部に右上がりの縄文がみられ、底部近くの胴部は横方向になでられている。胎土にはわずかではあるが海綿骨針を含んでいる。9は胴部ではLRの縄文がみられる。底部近くの胴部は横方向になでられている。胎土は砂を含んでいる。8・9はⅢ群b-3類に分類されると考えられる。

10は、台石もしくは石皿(VIIA)に分類されるものである。11は砥石(VIIB)である。

非常に大型で長さ約76cm、幅約21cm、重さ約19.9kgである。自然礫を使用し、特に整形などの調整跡はみられない。使用面は一面のみで、中央部に剝片石器の刃部を押し引きしたような深さ約1.0mm、長さ約5cmの溝状の条痕がみられる。昨年度の調査で、川西地区の住居跡WH-2の床面から大型の砥石が出土しているが、それよりも更に大きいものである。石質は、10が安山岩、11が凝灰岩である。10、11は、ともに覆土からの出土である。時期 覆土と、住居跡周辺からⅢ群b-3類土器が出土していることから、縄文時代中期末葉と考えられる。

(立川トマス・末光正卓)



図IV-3-21 WH-12とその出土遺物分布

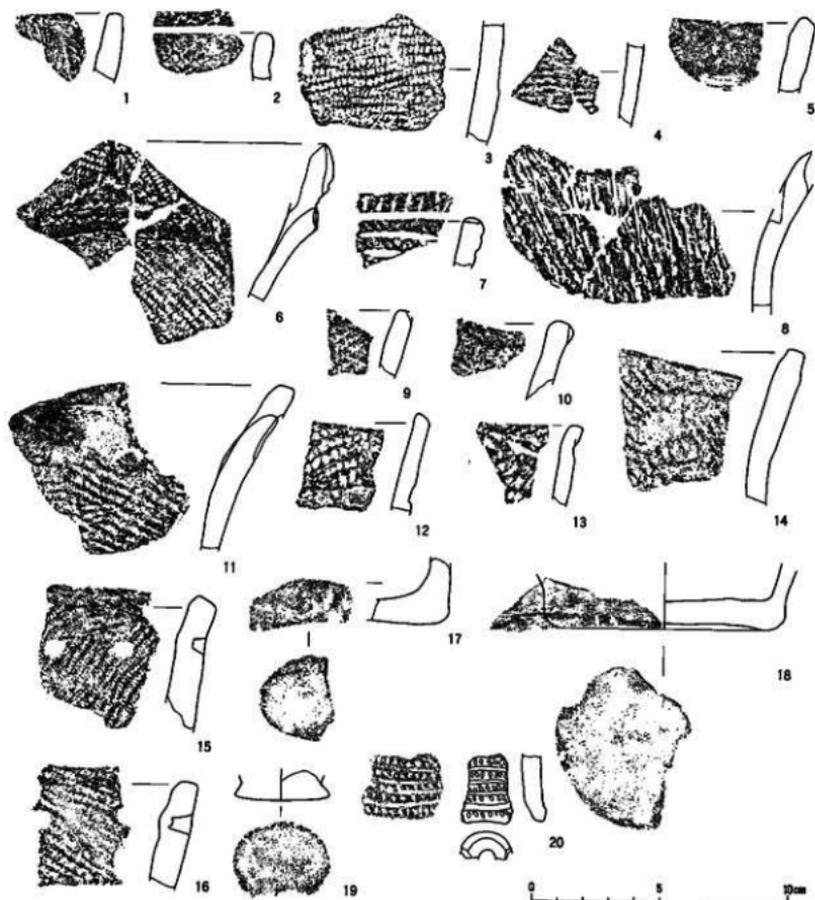
壁の立ち上りが北側へ続いていく状況がみられた。52.8ラインの土層観察用のベルトにも壁の立ち上りらしきものがみられ、これらの壁を確認しながら掘りすすめていったところ、平坦な面の広がり焼土(焼成をうけた面)が確認されたので、住居跡と認定した。遺物は、原則として、住居跡と判断した時点から位置・高さを記録して取り上げた。それ以前のもの層ごとにとりあげた。遺物分布図で、東側の部分に遺物の分布が密集しているのは、そこに土層用のベルトを設定していたことによるものである。

壁・床 南東部分は耕作による削平と傾斜地であるために、壁・床ともに消滅している。しかし、北西部分において、なだらかではあるが壁の立ち上りを確認することができた。確認できた床面はⅧb層である。

覆土 Ⅷ層の二次堆積の下位に、暗褐色～黒褐色土が堆積していた。WF-7・8が覆土中から確認されたが、WF-7については平面上は炉跡と考えられる焼土と重なり、高さの差は10cm程度であることなどから、同じものであるかもしれない。掘り込み面は削平をうけたⅥ層中であつたと推測される。

炉 赤褐色を呈する焼成をうけた面を確認した。この住居跡に属する炉跡と考えられる。ほぼ中央部分に位置するものと推測される。

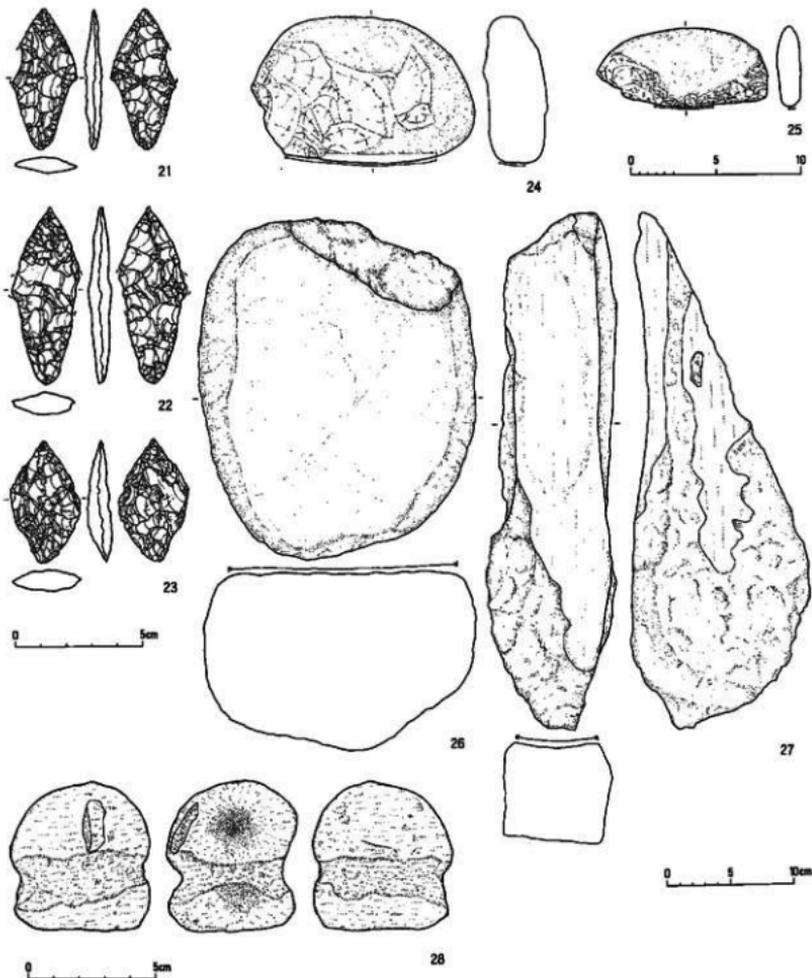
土 墳 HP-1があるが、確認された状況からはこの住居跡に属するものであるかは判断できない。



図IV-3-22 WH-12 出土の遺物(土器)

表IV-3-14 WH-12 HP一覽

HP	埋藏層からの深さ (cm)	備 考	HP	埋藏層からの深さ (cm)	備 考
HP-1	20		HP-8	8	柱穴
HP-2	23	柱穴	HP-9	28	#
HP-3	18	#	HP-10	20	# 土器 4
HP-4	4	#	HP-11	23	#
HP-5	8	#	HP-12	20	#
HP-6	10	#	HP-13	14	#
HP-7	21	#			



図IV-3-23 WH-12 出土の遺物(石器)

溝 住居跡の西側部分で、壁に対応するような状況で確認された。深さは10cm程度で、やや暗色の弱いVIb層が堆積していた。

柱 穴 柱穴と考えられる掘り込みは12か所確認できた。〔表IV-3-3〕

重 複 南西部分ではWH-7と隣接しているが、この住居跡との新旧関係を明確に示す状況は確認できなかった。

遺 物 床面出土の遺物は土器12点・礫石器1点である。覆土からは土器・石器等が出土した。〔図IV-3-21〕

土器は1～3が床面出土で、4はHP-10、5は溝、6～19は覆土の出土である。

1・2・5はⅢ群b類に、3・4はⅢ群b-2類に相当するものとおもわれる。

1は摩耗の著しい口縁部の破片である。2は口唇直下の器面が隆起帯状に肥厚している。摩耗しているが、器面には右上がりの縄文がみられる。口唇は丸形で、判然としなが節の痕跡のようなものが観察される。3は胴部の破片である。LR原体による横走気味の縄文が施されている。内面は丹念に調整されている。4は摩耗が著しい。横走気味の縄文が観察される。5は口唇断面が丸形を呈するものである。

6・7はⅢ群a-2類・b-1類のサイベ沢Ⅶ式・見晴町式に相当すると考えられるものである。

6は突起部の破片である。縦・横方向に粘土をなであげてつくりだしたような隆起帯状のものがみられる。3本のRLの縄線文が施されており、地文も同じ原体を用いて施されているようである。口唇は切り出しナイフ形を呈し、縄文が施されている。7は地文がRL斜行縄文で、2本の沈線文がみられる。口唇は丸形で、細目の棒状工具による刻み目が施されている。

8～14はⅢ群b-2類の大安在B式に分類されるものである。

8は外反する口縁部が頸部ですぼまる部分の破片である。器面には縦方向に、複数の沈線文と、Lの原体を用いた撚糸文が施されている。施文の順序はよみとれない。内面は丹念に調整がされている。9は波状口縁のもので、器面には右上がりの縄文が観察される。10・11は同一個体である。波状口縁のもので、器面には左上がりの縄文が観察される。口唇断面は丸みを帯びた角形で、10の口唇直下の器面には隆起帯状になっている部分がみられる。12は地文がLRの縄文で、横方向になでられている部分がみられる。13は口唇直下の器面にLR原体による縄線文が施され、地文は右上がりの縄文が観察される。14は口唇断面が角形を呈する波状口縁のもので、地文は左上がりの縄文がみられる。

15・16はⅢ群b-3類の北筒式に相当するものである。

15は器面に右上がりの縄文がみられる。口唇にも縄文が施されている。内面は緩やかな突瘤文を形成している。16は地文が左上がりの縄文で、口唇にも縄文がみられる。内面は突瘤文がみられる。

17～19は底部の破片である。

17は胴部が摩耗している。18は底部が張出し、上げ底のものである。底部付近の胴部はなでられている。19は底部が強く張り出す小さめの底部である。18・19はⅢ群b-2類に分類されると考えられる。

20は覆土から出土した土製品である。筒形を呈すると推測される。端は外側へ開いている。沈線文と刺突文が施されている。

21～23は、石槍もしくはナイフに分類されるものである。いずれも明瞭な茎のみられないもの(ⅠB2)である。21・22は、わずかながら側縁部にかえし状の張出しをもつ。21は左側縁部を、22は両側縁部を欠損する。23は側縁部に使用によると思われる刃部のつぶれがみられることから、ナイフの可能性はある。石質は、黒曜石である。24・25は、扁平礫を素材としたすり石(VIA2)である。24は、腹面に調整のためと思われる打ち欠きがみられる。25は、扁平礫を半円状に打ち欠き弦をすったもの(VIA3)である。24・25ともに、長軸方向の一端を欠損している。石質は、いずれも安山岩である。26は、台石もしくは石皿

(VII A)に分類されるものである。長軸方向の一端を欠損する。石質は、安山岩である。27は、砥石(VII b)である。自然礫を整形することなく使用している。石質は、流紋岩である。29は、石製品である。全面を研磨により整形し、胴部中央からやや下位にはちまき状の溝が廻る。形状は、北海道式石冠に酷似するが、すり石として使用された形跡がみられないことから、石製品とした。石質は、砂岩である。21～26・28は覆土、27は床面からの出土である。

時 期 床面からⅢ群b-2類土器が出土していることから、縄文時代中期後半と考えられる。

(末光正卓・立川トマス)

(7)WH-13 [図IV-3-24・25 表IV-3-4・18 図版-11]

位 置 K-52-a・b・d

規 模 (2.22)×(1.92)/(2.16)×(1.88)/(0.14)

平 面 形 円形?

確認・調査 WH-7の調査完了後、床面にみられた黒褐色土の堆積を掘り下げていったところ、炭化物のまじるVIc層のまとまりと、その近くに4個の礫が確認された。これらを炉跡であると考え、住居跡と認定した。遺物は、原則として、住居跡と判断した時点から位置・高さを記録して取り上げた。それ以前のは層ごとにとりあげた。単独の遺構として調査を行ったが、WH-7の住居構造の一部であるという可能性もある。

壁・床 南東部分は耕作による削平と傾斜地であるために、壁・床ともに消滅している。しかし、北西部分においては、壁の立ち上がりを確認することができた。確認できた床面はⅧb層であるが、中央の部分に黒褐色土の広がりがみられた。しかし、この炉跡はこの黒褐色土を掘り込んで構築されているので、この面を床面と判断した。

覆 土 黒褐色土のみである。

炉 礫が4個しか残存していなかったが、石組み炉であったとおもわれる。炉内の土は土壌サンプルとして採取し、微細な骨片が多く見られたので、動物遺存体の分析を依頼した(VII章-2参照)。

柱 穴 柱穴と考えられる掘り込みは12カ所確認できた。[表IV-3-4]

重 複 WH-7の下位、WH-16の上位に構築されている。

遺 物 床面出土の遺物は土器10点・礫数点で、覆土からは土器・石器等が出土した。

[図IV-3-25]

1～3は覆土の出土である。

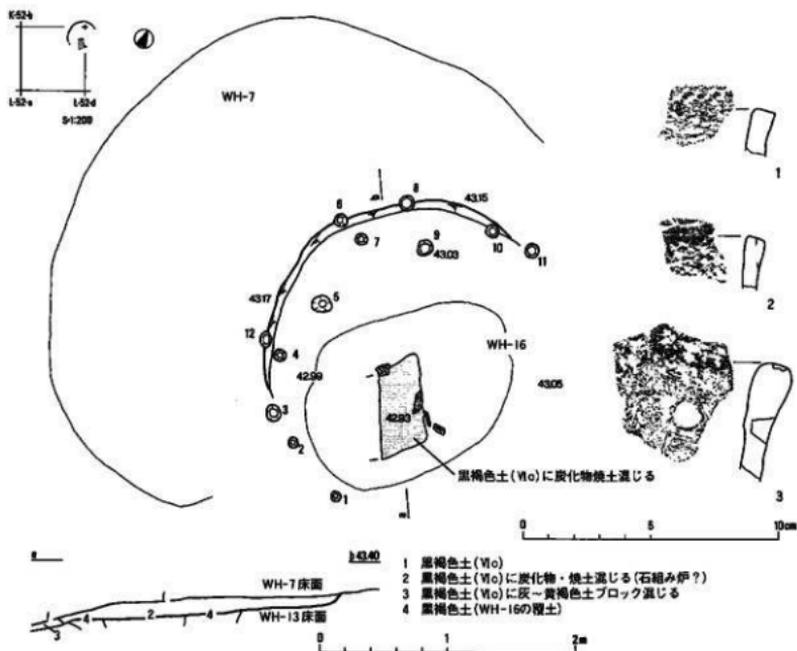
1はⅢ群b-1類に相当すると考えられるものである。摩耗しており、口唇は角形で、縄文が施されている。

2はⅢ群b-3類に相当するものとおもわれるものである。摩耗しているものである。口唇部直下の器面に貼付帯がみられ、器面と同時施文している。

3はⅢ群b-3類の北筒式に相当するものである。口唇は肥厚し、先端部が二又の工具による刺突文がみられる。器面の地文は、摩耗のため不明である。内面には突瘤文が形成されている。

時 期 床面出土の土器は摩耗が著しく時期は判断できないが、覆土からⅢ群b類土器が出土していることから、縄文時代中期後半と推測される。また、WH-16の上位に構築されており、さらにその上に、WH-7がつくられていることから、WH-16より新しく、WH-7より古いといえる。

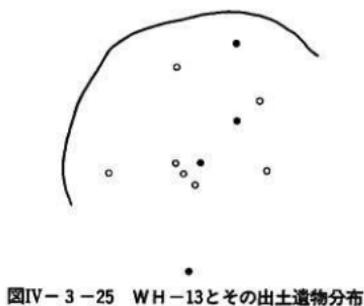
(末光正卓)



図IV-3-24 WH-13とその出土遺物

表IV-3-17 WH-13 HP一覽

HP	基礎面からの深さ (cm)	備	考
HP-1	11	柱穴	
HP-2	15	#	
HP-3	26	#	
HP-4	10	#	
HP-5	23	#	
HP-6	13	#	
HP-7	15	#	
HP-8	2	#	
HP-9	17	#	
HP-10	11	# 土器 I	
HP-11	5	#	
HP-12	5	#	



(8)WH-14 [図IV-3-26~28 表IV-3-19・20 図版-5・11・17]

位 置 K-53-a

規 模 2.93×(2.70)/2.63×(2.35)/0.15

平 面 形 円形

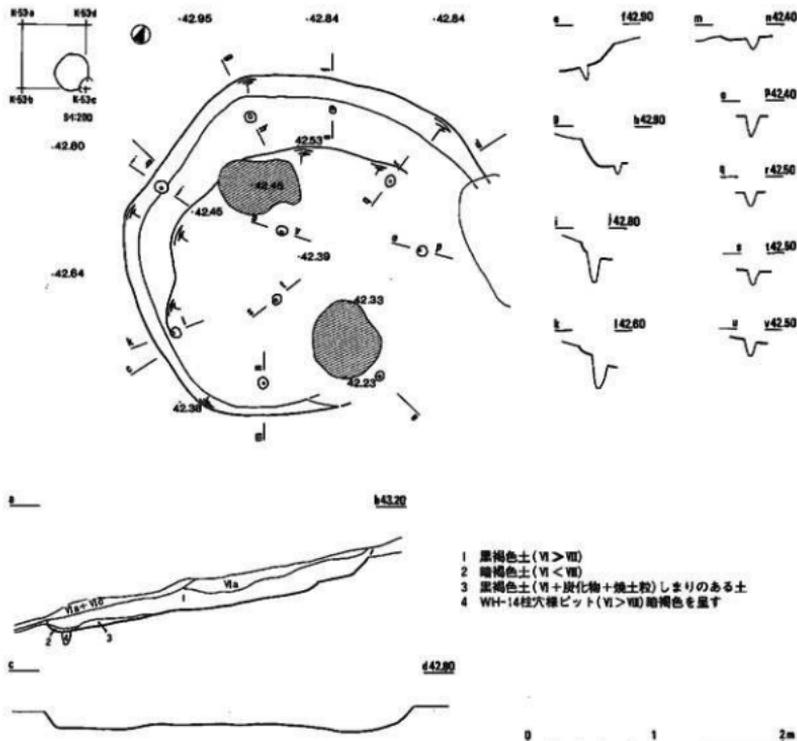
確認・調査 VI層の包含層調査中、VII層上面において暗色の強い広がりを発見する。遺構であることが想定されたため土層観察用のベルトを設定し調査を行ったところ、壁の立ち上りを確認し、遺構と認定した。

壁 壁は緩やかに立ち上がる。南側の一部は傾斜地形による崩落によって無くなっている。南西の壁が二段になるが、これは増改築によって作り出されたことが考えられる。住居の重複は確認されていない。

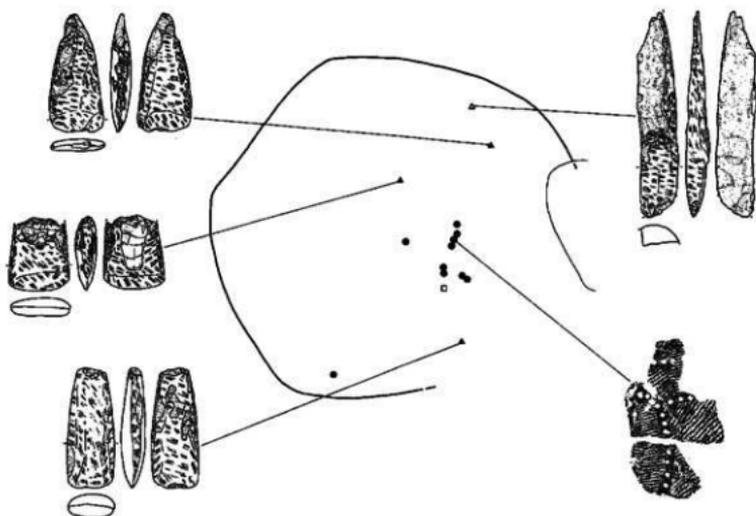
床 VIII層を掘り込んで構築している。ほぼ平坦であるが、南から北へ緩やかに傾斜している。

覆 土 VI層が主体である。自然堆積の様相を呈している。

焼 土 床面に焼土を多く含む黒色土の広がりを2カ所確認した。



図IV-3-26 WH-14



図IV-3-27 WH-14とその出土遺物分布

柱穴様ビット 直径8~10cm、深さ10~20cmほどの柱穴様ビットを10カ所確認した。

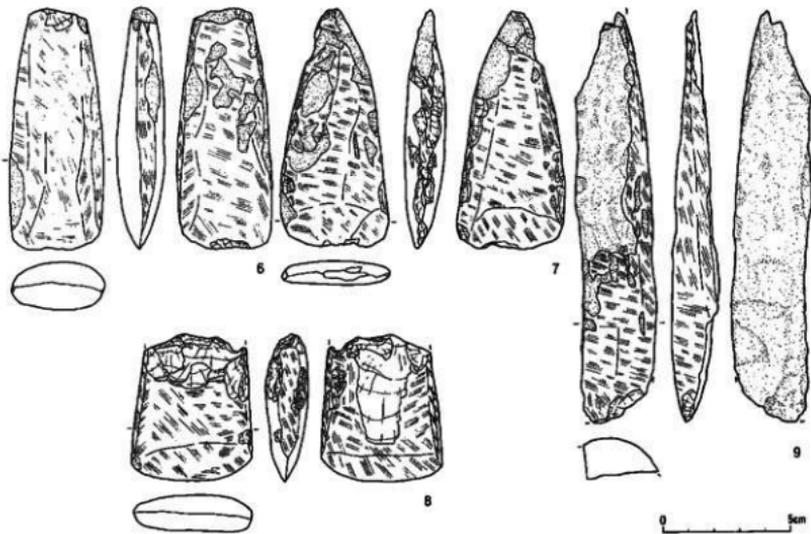
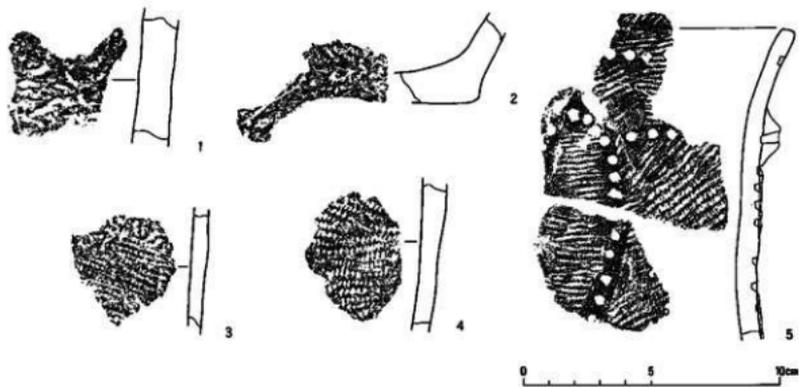
重 複 WP-5の南側一部を切って構築している。

遺 物 土器51点、石斧4点、フレイク点、礫1点、出土している。うち床面からの出土は土器10点、石斧3点、礫1点である。

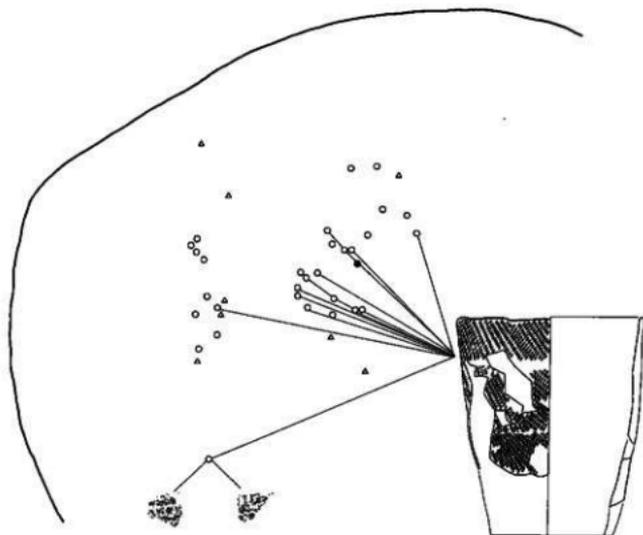
1~4まではⅢ群b-1類土器、5はⅢ群b-2類土器である。5は床面からの出土である。1は胴部破片、2は底部の破片で、いずれも綾絡文が施されている。3・4は同一個体とおもわれる破片。地文はRLの斜行縄文である。5は口縁部が外反し、胴部が若干張り出すものである。口唇部が角形で地文の縄文が施文される。外反した口縁から粘土塊の貼り付けと、薄い貼付帯が下方向にUの字状、横方向に弧を描くように施文されていると推測される。その貼付帯を円形の棒状工具により垂直に刺突文を施している。貼付帯は地文施文前に厚みのないものを貼付しており、弱く隆起している。内面調整は、口縁がやや外反する部分は横方向へ、その下から胴部にかけては横方向へ丁寧になでられている。胎土には海面骨針が含まれる。焼成は良く、硬い。

6~9は、いずれも全面磨製の石斧である。(VIA3)である。7は側縁部に整形のためとおもわれる打ち欠きが残る。8・9は石斧の破片である。8は胴部から基部を欠損する。9は胴部破片で、残存部位からみてかなり大型の石斧とおもわれる。石質は、6・9が片岩、7・8が緑色泥岩である。6~8は床面、9は覆土からの出土である。

時 期 床面からⅢ群b-2類土器が出土していることから、縄文時代中期末葉の遺構である。
(袖岡淳子・立川トマス)



図IV-3-28 WH-14 出土の遺物(土器・石器)



図IV-3-30 WH-15とその出土遺物分布

沿いにトレンチを設けて掘り下げてみた。当初、土層の堆積の状況から風倒木痕であろうと考えていたが、平坦な面が確認され、その面を掘り下げていったところ、石組み炉を確認したので、住居跡と認定した。遺物は、原則として、住居跡と判断した時点から位置・高さを記録して取り上げた。それ以前のは層ごとに取り上げた。

壁・床 南東部分は耕作による削平と傾斜地であるために、壁・床ともに消滅している。しかし、北西部分において、なだらかではあるが壁の立上りを確認することができた。確認できた床面はⅧb層であるが、中央の部分に暗褐色土の広がりが見られた。しかし、石組み炉は、この暗褐色土を掘り込んで構築されているので、この面を床面と判断した。

覆土 Ⅶ層・Ⅷb層の二次堆積が見られ、その下位にⅥc層が堆積していた。掘り込み面は削平をうけたⅥ層中であつたと推測される。

炉 長方形の石組み炉であるが、一部は炉石が残存していない。この他に床面から焼土のまとまりが確認されたが、半載して断面を観察したところ焼成をうけた面はみられなかった。

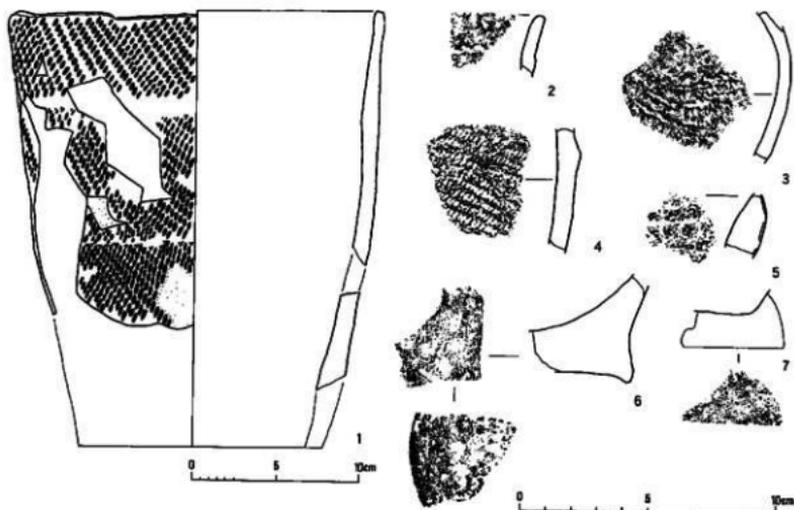
柱穴 柱穴と考えられる掘り込みは6か所確認できた。〔表IV-3-5〕

重複 WH-17の上位に構築されている。

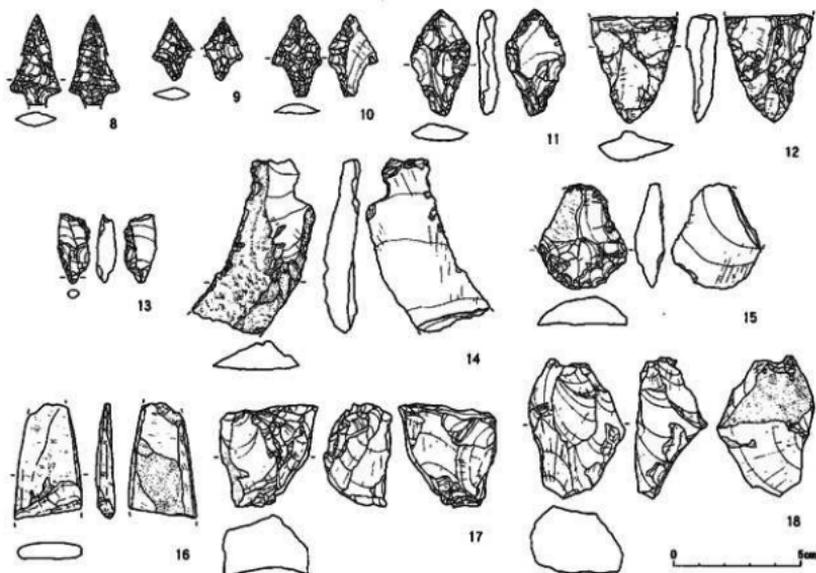
遺物 床面出土の遺物は土器1点である。覆土から土器・石器等が出土した。〔図IV-3-30〕

土器は1～7で、すべて覆土からの出土である。

1は器形を知りうる程度復元できた個体である。口縁部から緩やかに底部へとすぼまる器形である。口唇部断面は角形を呈する。地文はLRの原体を横方向に回転施文している。



図IV-3-31 WH-15 出土の遺物(土器)



図IV-3-32 WH-15 出土の遺物(石器)

内面の調整は、口縁部付近では横方向、胴部は縦方向である。胎土は砂を含んでいる。Ⅲ群b-3類の煉瓦台式に分類されよう。

2は摩耗した口縁部の破片である。頸部の付近にL R原体による縄線文が施されている。そこから上の口縁部は無文である。3は胴部が強く張り出すものである。地文は判然としない。2・3はⅢ群b類に相当するとおもわれる。

4・5はⅢ群b-3類の煉瓦台式・北筒式にそれぞれ相当すると考えられるものである。4は隆起帯状に高くなった部分があり、その上と器面とをR L原体により同時施文している。5は断面が三角形に肥厚する口縁部である。摩耗が著しいが、3本の押引文が観察される。

6・7はⅢ群b類に相当すると考えられる底部の破片である。

6は口縁部が強く張り出し、明瞭な上げ底のものである。7は全体的に摩耗、剝落している。

8~10は、有茎族(ⅠA7)である。8は側縁部と基部を、9は側縁部と尖頭部を欠損する。10は裏面に一次剝離面を残す。さらに、裏右側縁に刃部加工がみられないことから、未成品の可能性がある。石質は、いずれも黒曜石である。11・12は石槍またはナイフに分類されるもので、茎が明瞭にみられないもの(ⅠB2)である。表裏面とも加工が粗く粗雑な作りである。11は、裏面に一次剝離面を残す。12は、下半部の破片である。石質は、ともに黒曜石である。13は石錐で、刺突部を作りだしたもの(ⅡA1)である。刺突部には、使用によるおもわれる刃部のつぶれがみられる。石質は、頁岩である。14は、不明瞭ではあるがつまみ部作出のための加工がみられることから、つまみ付きナイフの未成品(ⅢA8)とおもわれる。表面には、礫表皮面が残る。石質は、黒曜石である。15はスクレイパーで、素材の形状を大きく変えていないもの(ⅢB6)である。表面に、礫表皮面を残す。石質は、黒曜石である。16は全面磨製の石斧(ⅣA3)である。基部と胴部から刃部を欠損する。石質は、片岩である。17・18は石核(ⅤA1)である。石質は、いずれも黒曜石である。ともに礫表皮面を残す。残存する礫表皮面からみて、黒曜石の角礫が使用されている。すべて覆土からの出土である。

時期 床面出土の土器は摩耗が著しく時期は判断できないが、覆土からⅢ群b類土器が出土していることから、縄文時代中期後半と推測される。また、WH-17の上位に構築されているので、それより新しいといえる。(末光正卓・立川トマス)

00WH-16 [図IV-3-33 表IV-3-25 図版-13・17]

位置 K-52-b・c

規模 (1.70)×(1.24)/(1.54)×(0.92)/(0.14)

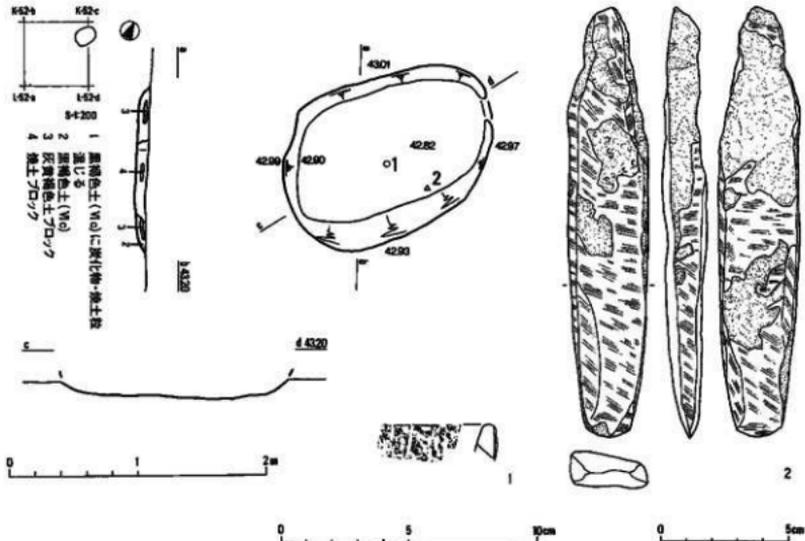
平面形 楕円形

確認・調査 WH-13調査完了後、床面の黒褐色土の堆積を掘り下げたところ、平面が楕円形の掘り込みが確認された。WH-16として調査したが、住居跡であることを示す状況はみられなかった。遺物は土器の口縁部破片と細身の磨製石斧が出土している。位置・高さを記録して取り上げ、それ以外は層ごとに取り上げた。

壁・床 VIIb層の明瞭な壁・床を確認した。

覆土 黒褐色土のみである。

重複 WH-7・13の下位に構築されている。



図IV-3-33 WH-16とその出土遺物分布・出土遺物

表IV-3-34 WH-16 掲載石器

図	番号	名称	分類	調査区・遺物番号	層位	大きさ(長さ×幅×厚さcm・重さg)	石質	備考
IV-3-33	2	石 斧	IV A 3	WH-16	1	覆土 16.8 × 3.1 × 1.5 · 121.0	凝灰岩	

遺物 覆土より土器・石器等が出土した。床面出土の遺物はない。(図IV-3-33)

1は口縁部の破片である。縦方向の沈線文が4本観察される。地文は判然としない。口唇部から内面にかけては磨かれている。Ⅲ群b-2類に分類されると考えられる。

2は全面磨製の石斧(IVA 3)である。基部に礫表皮面が残る。石質は、凝灰岩である。遺構、包含層併せて303点の石斧、石斧片が検出されているが、岩製はこの1点だけである覆土からの出土遺物である。

時 期 覆土からⅢ群b-2類土器が出土していることから、縄文時代中期後半と推測される。また、上位にWH-7・13が構築されているので、それより古いといえる。

(末光正卓・立川トマス)

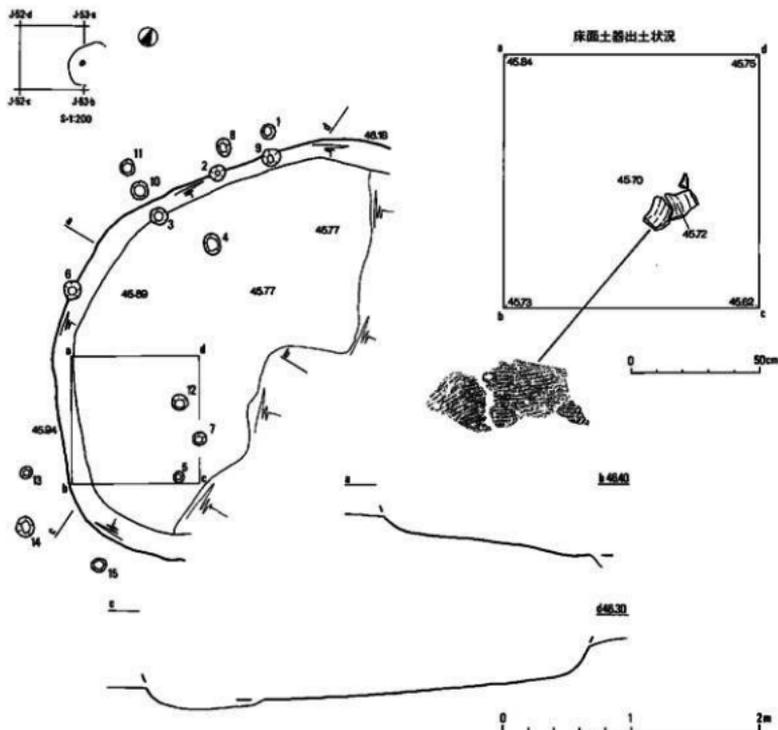
(1)WH-17 [図IV-3-34・35 表IV-3-26~28 図版-13]

位 置 J-52-d・J-53-a

規 模 (3.66)×(1.60)/(3.22)×(1.40)/(0.44)

平 面 形 円形?

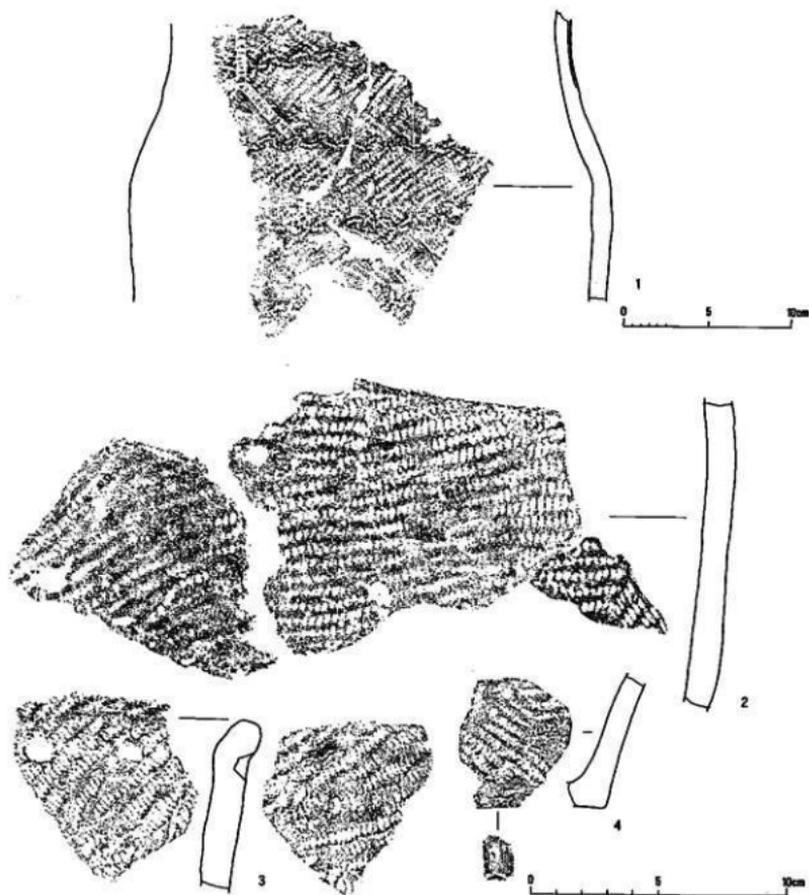
確認・調査 WH-15の調査完了後、暗褐色土の堆積を掘り下げたところ、平坦な面の広



図IV-3-34 WH-17と床面遺物出土状況

表IV-3-26 WH-17 HP一覧

HP	確認面からの深さ (cm)	備 考	HP	確認面からの深さ (cm)	備 考
HP-1	9	柱穴 フレイク1	HP-9	16	柱穴
HP-2	6	#	HP-10	16	#
HP-3	7	#	HP-11	3	#
HP-4	11	#	HP-12	14	#
HP-5	10	#	HP-13	12	#
HP-6	7	フレイク2	HP-14	20	#
HP-7	4	#	HP-15	20	# フレイク1
HP-8	21	#			



図IV-3-35 WH-17 出土の遺物(土器)

がりと、なだらかではあるが壁の立ち上りらしきものが確認されたので、住居跡と認定した。遺物は床面出土のものは位置・高さを記録して取り上げ、覆土のものはまとめて取り上げた。

壁・床 南東部分は耕作による削平と傾斜地であるために、壁・床ともに消滅している。しかし、北西部分においては、なだらかな壁の立ち上りを確認することができた。確認できた床面はⅧb層である。

覆土 暗褐色土の堆積がみられた。掘り込み面は削平をうけたⅥ層中であつたと推測される。

炉 炉らしきものは確認されなかった。

柱 穴 柱穴と考えられる掘り込みは15カ所確認できた。〔表IV-3-6〕

重 複 WH-15の下位に構築されている。

遺 物 床面からは胴部の破片、覆土から土器・石器等が出土した。〔図IV-3-34〕
2は床面出土、1・3・4は覆土出土のものである。

2は胴部の破片である。LR原体を用いた斜行〜横走する縄文がみられる。Ⅲ群b類に相当するものとおもわれる。

1・3はⅢ群b-3類の北筒式に相当するものである。

1は各水平部において径を求めて実測図上で復元したもので、縮尺は1/3である。胴部が張り出す器形である。地文は結束第二種の斜行縄文・羽状縄文で、器面には、板状工具による押引文が縦方向に施され、途中で二又になる。外面にはベンガラの付着がみられる。この破片はWH-15の覆土の破片と接合した。位置・高さを記録せずに取り上げたものであるので、再検討することができなかった。

3は地文がLR斜行縄文で、口唇部と内面にも縄文がみられる。内面は突瘤文を形成している。

4は底部の破片である。胴部には左上がりの縄文がみられる。胎土には海綿骨針を含んでいる。Ⅲ群b-3類に分類されるとおもわれる。

時 期 床面出土の土器がⅢ群b類であることから、縄文時代中期後半と考えられる。また、WH-15が上位に構築されているので、それより古いといえる。(末光正卓)
②WH-18 〔図IV-3-36・37 表IV-3-29・30 図版-6・13・17〕

位 置 K-50-c・d

規 模 不明

確認・調査 包含層調査中に、風倒木によって攪乱を受けた部分を掘り下げたところ石組み炉を確認し、遺構と認定した。調査によりこの遺構は、風倒木痕による著しい攪乱を受けており、遺構の原形をほとんどとどめていなかった。

壁 北側の壁は風倒木痕によって著しい攪乱を受け、ごく一部しか確認されていない。南側の壁は傾斜地形による崩落と、耕作によって消失している。残存している壁から見ると、壁の立上りは急で明瞭である。

床 Ⅷ層を掘り込んで構築されている。平坦である。

覆 土 風倒木による攪乱を受けている。

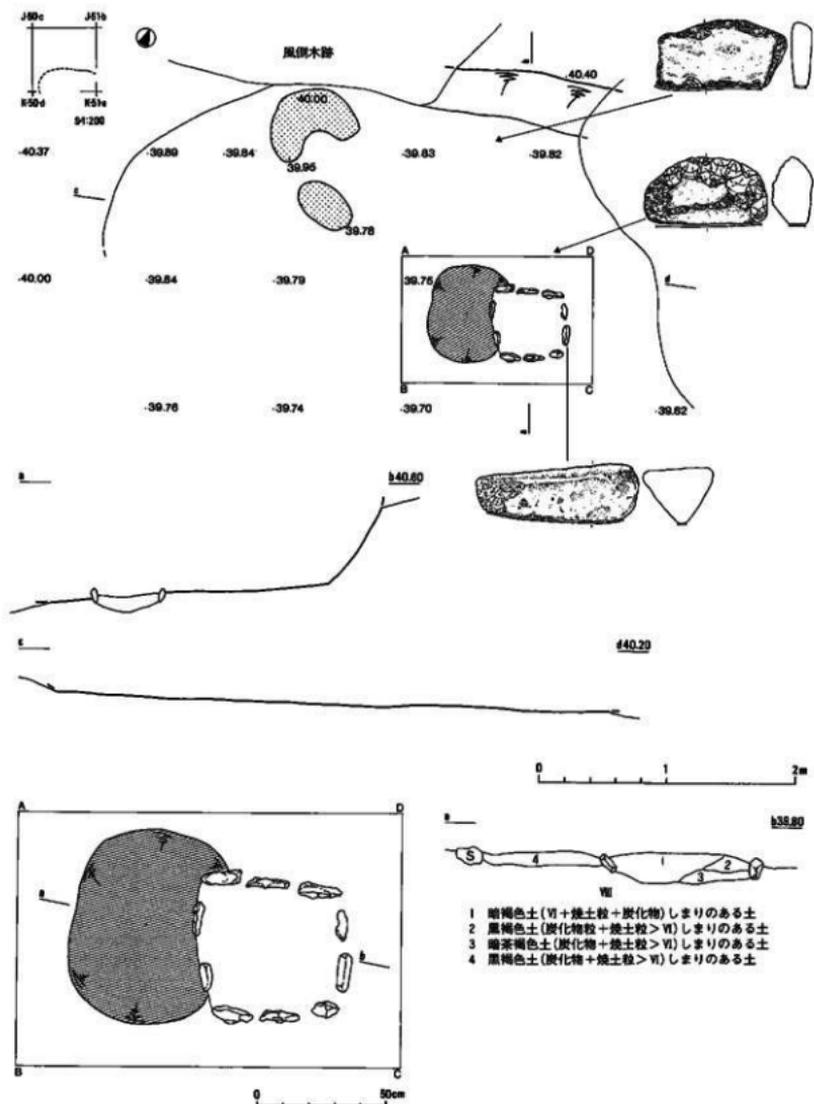
炉 石組み炉は正方形である。炉内の土はわずかに焼土粒を含む暗褐色の土である。石組みを構成している石の中ですり石を転用しているものがある。石組み炉の西側に浅い掘り込みが検出された。焼土粒を多く含んでいる。これは石組み炉によって切られており炉の作り替えか、焼土を掻きだした跡であることが考えられる。礫の抜き取り痕は検出されなかった。

柱 穴 確認されなかった。

遺 物 覆土から土器57点、石槍3点、フレイク87点、礫2点、すり石3点が出土している。このうち、床面からの出土はすり石2点、石組み炉からはすり石1点が出土している。

掲載した土器はすべてⅢ群b-3類で、1が北筒式、2、3が煉瓦台式である。

1は口縁部が肥厚するものである。口唇部に押引文が施されるが、摩耗が著しい。口唇

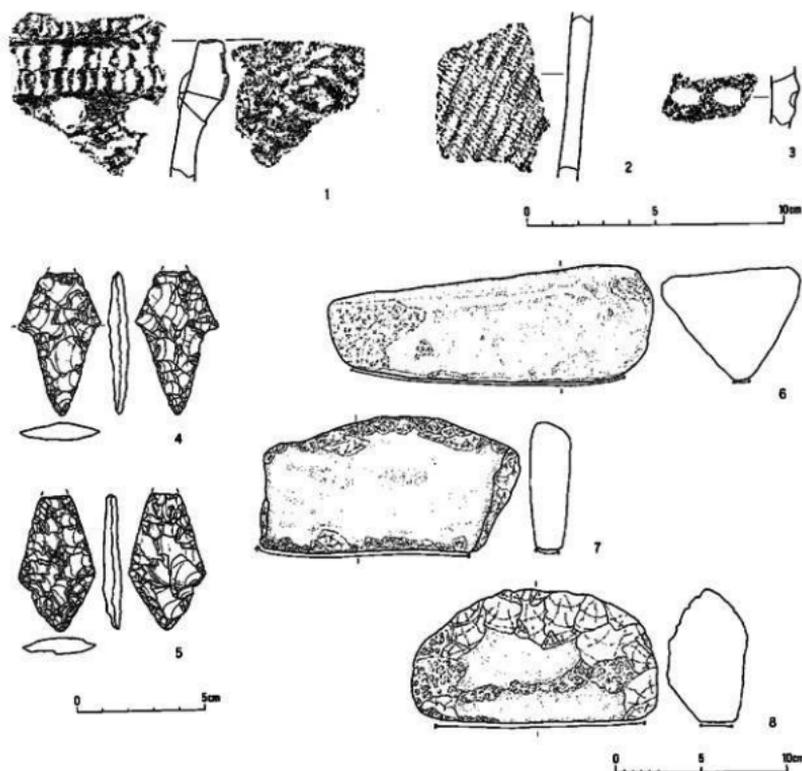


図IV-3-36 WH-18と石組み炉・その出土遺物分布

部には2条の押引文が施され、円形刺突文をもつ。内外面に綾絡文が施される。2は短刻線文が施されている。胎土には海面骨針が含まれる。3は地文がLRの胴部破片である。

4・5は石槍である。4は茎を持つもの（IB1）、5は明瞭な茎がみられないものである。（IB2）である。4・5とも先端部を欠損する。石質は黒曜石である。6～8はすり石で、石組み炉の炉石として利用されていたものである。6は断面が三角形の礫の稜をすったもの（VIA1）である。長軸方向の一端に顕著なたたき痕が見られる。このすり石は、縄文時代早期に特徴的なものであることから、他所から持ち込まれたたき石に利用されたものとみられる。7・8は、ともに扁平礫を半円状に打ち欠きその弦をすったもの（VIA3）である。石質はいずれも安山岩である。6～8は、いずれも石組み炉の炉石として使用されていたものである。4・5は覆土、6～8は床面からの出土である。

時 期 覆土からⅢ群b-3類土器が出土していることから、縄文時代中期末葉であることが推測される。（袖岡淳子・立川トマス）



図IV-3-37 WH-18 出土の遺物(土器・石器)

4. 土 壌

(1)WP-4 [図IV-4-1~4 表4-1・2 図版-6・14・18]

位 置 K-50-c・L-50-d

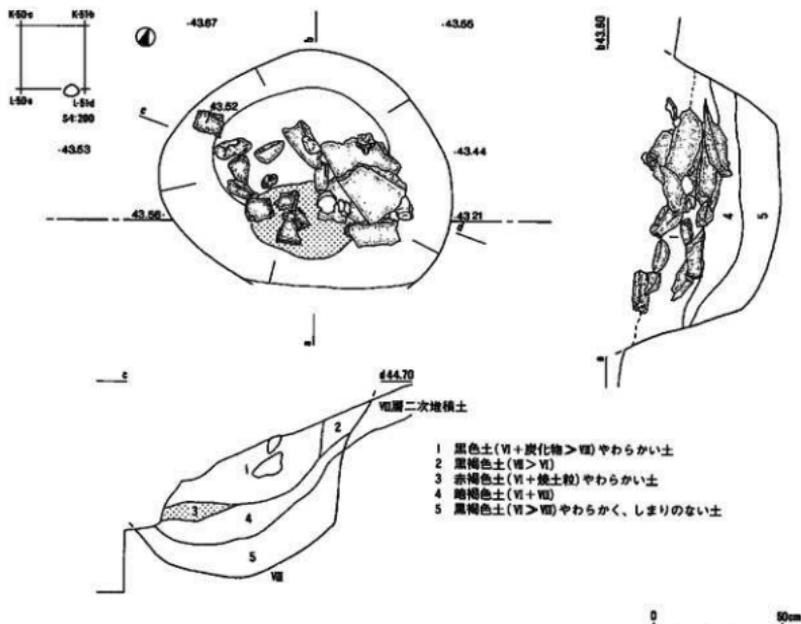
規 模 2.33×1.94/1.44×1.12/1.0

平 面 型 円形

確認・調査 包含層調査中、VIII層上面においてKラインから昨年度調査区にかかる50cmほど南に下がったところで、角礫の集中と黒色土の広がりが見出された。遺構が存在することが想定されたので、角礫と黒色土の広がりを中心を通るトレンチを入れたところ、掘り込みが確認され、土壌と認定した。

覆 土 覆土は5層に分層した。1層は炭化物を含む土であるが、これはK-50グリットに多くみられる散漫な炭化物の広がり二次的な堆積である。2層は土壌の壁の崩落によるものである。3層は焼土粒を多く含む土である。層厚6cm前後の薄い層である。1~3層までは自然に土壌内に堆積した土である。4層はVI層土とVIII層土の混合土である。拳大から小礫までの安山岩が多く混じる土である。5層はVIc層土を主体とする黒褐色土である。これら覆土の堆積状況から見て、4、5層は人為的な埋め戻しによる土であることが考えられる。

角礫の集中は主に4層上面からの出土である。4層まで埋め戻した後、人為的に礫を投入したものと思われる。



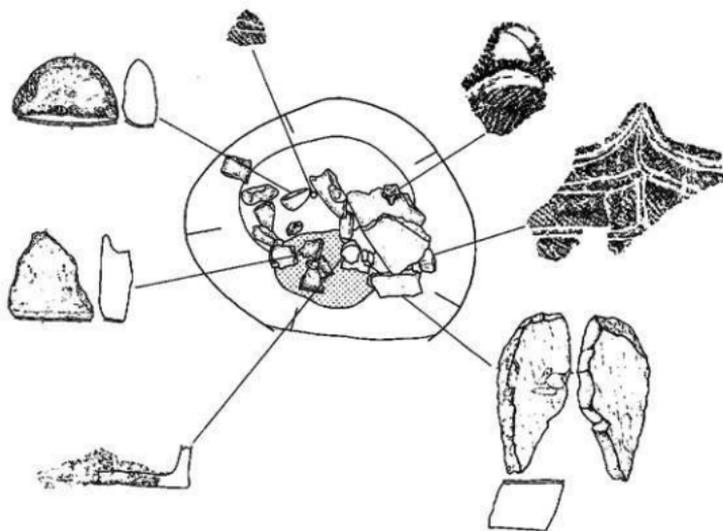
図IV-4-1 WP-4

耕作による攪乱で、掘込面が判然としないが、埋土はVI層を主体とする土であり、このことからVI層中に掘込面があったものと考えられる。

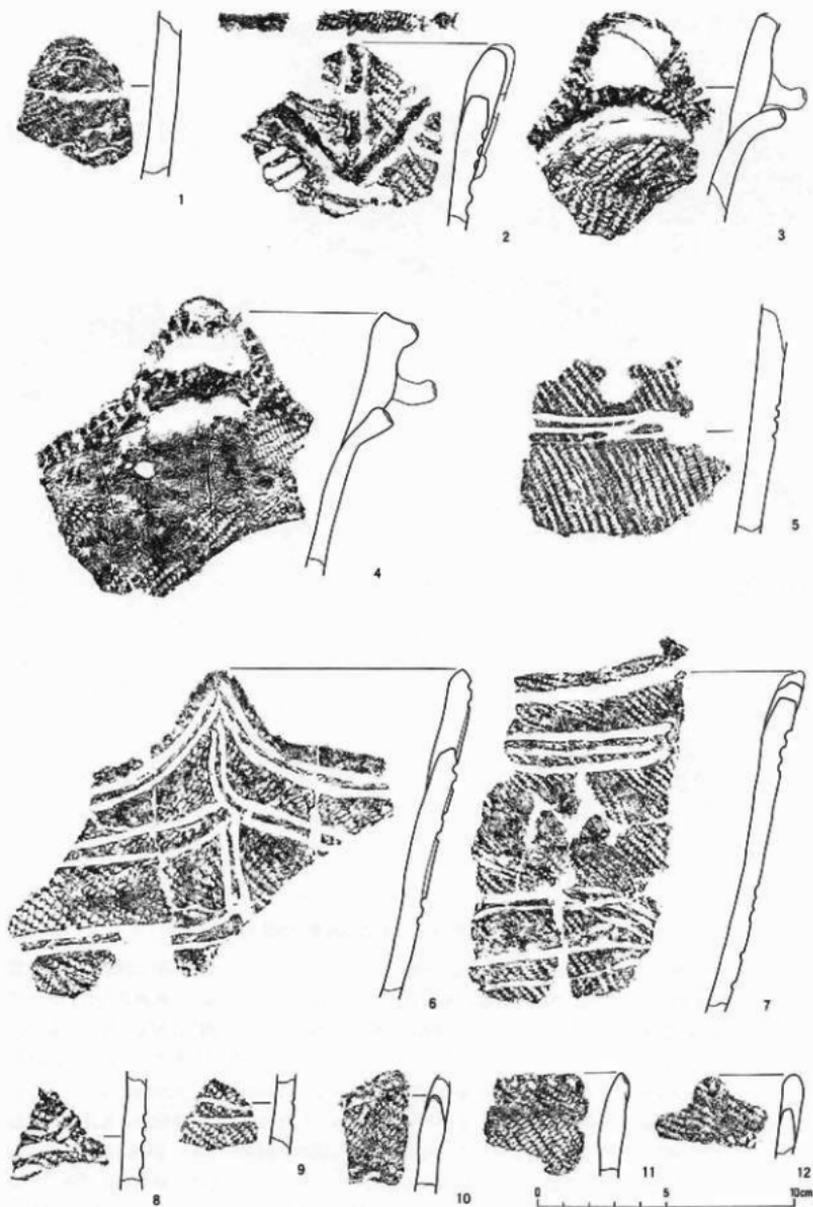
遺物 土器61点、台石の破片2点、すり石3点、礫17点が出土している。出土した土器は全てがⅢ群a-2類・Ⅲ群b-1類である。

土器、石器はすべて土壌の覆土1層中からの出土である。特に土器は、K-50区包含層出土の土器と接合するものや、K-50区包含層出土の土器と同一個体と考えられるものが出土している。石器は、19以外のすり石が土壌の覆土1層中から出土している。この土壌が位置する北側のグリット(K-50)はⅢ群a-2、b-1類土器とすり石が多く出土している。昨年度調査区のL-50、51グリットもⅢ群a-1、b-2類土器とすり石が他のグリットに比べ出土量が多い。このことから土壌出土の土器、石器は土壌に伴うものではなく、1層下面から出土した多量の礫とは性格が異なり、土壌の北からの流入であると考えられる。

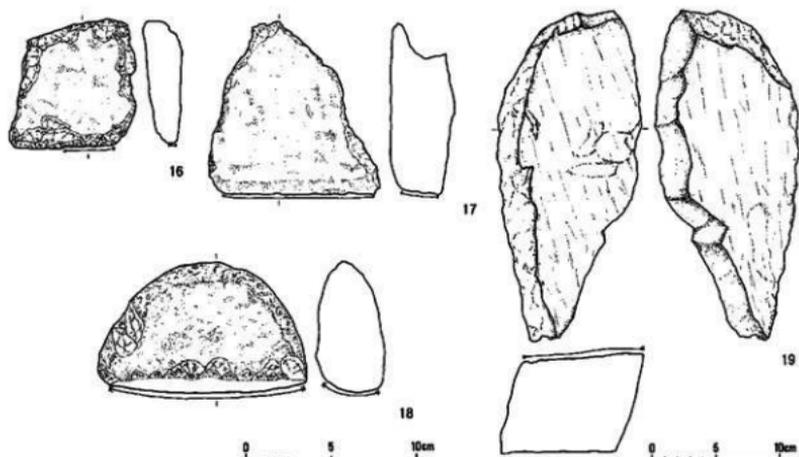
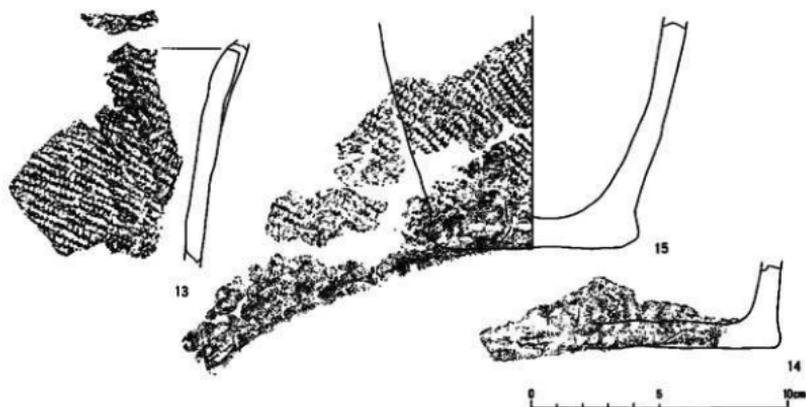
1～3、8～14は土壌の覆土1層からの出土、4、6、7は包含層出土、15は包含層とピット出土の接合資料である。1は綾絡文の施文されている胴部破片である。内面は磨かれている。焼成は良く硬い。2は山形突起部に粘土紐を貼付け、3本組による沈線文が施される。3・4は同一個体とおもわれる土器である。突起部直下は粘土が貼付され、外反する口唇のラインと連続させて隆起させた部分を作り出している。口唇部と突起、貼付帯上には燃糸が押捺される。地文はLRの斜行縄文である。4は内面は磨かれているが、やや粗雑である。焼成は良く、硬い。5は2本組による沈線によって文様が描かれている。口唇部には地文と同じ縄文が弱く施文されている。内面の磨かれているが粗雑である。6は5と同一個体と考えられる胴部破片である。7は山形突起部の上端に粘土塊を貼り付け



図IV-4-2 WP-4とその出土遺物分布



図IV-4-3 WP-4 出土の遺物(土器)



図IV-4-4 WP-4 出土の遺物(土器・石器)

た土器。口唇部には地文と同じ縄文が施文されている。胴部には3本組の沈線によって文様が描かれている。内面は丁寧に磨かれている。8は7と同一個体と推測される。9は2本の沈線が施文されている土器。内面は丁寧に磨かれている。焼成は良く、硬い。10は山形突起部である。口唇の断面は切り出しナイフ方で、撚糸の押捺が施される。11は口唇の断面が切り出しナイフ形で、撚糸の押捺が施される。口唇直下は7mm幅のなでが施される。12は口径7cmほどの小型の土器と推測される。14はやや張り出す底部。底部から胴部へ2cm幅のなでによる調整が加えられる。内面の調整は粗雑である。焼成は良く、硬い。15は底部の張り出しを粘土の貼付によって作り出している。その粘土の貼付により張り出した部分と胴部へ間を2cm幅のなでによって織ぎ目を消そうとしていたことがうかがえる

が、なでは粗く、張出し部と胴部の境がはっきりとしている。内面は縦方向に丁寧に磨かれている。焼成は良く、硬い。

16~18はすり石である。いずれも偏平礫を半円状に打ち欠きその弦をすったものである。16・17は打ち欠きにより18は打ち欠きと敲打により整形されている。石質はいずれも安山岩である。19は、台石もしくは石皿に分類されるもの(VIIA)の破片である。表・裏面の2面に使用痕がみられる。石質は、凝灰岩である。ともに覆土からの出土である。

時期 覆土からⅢ群a-2類、Ⅲ群b-1土器が出土していることから縄文時代中期中葉と考えられる。(袖岡淳子・立川トマス)

(2)WP-5 [図IV-4-5~7 表IV-4-3・4 図版-6・9・18]

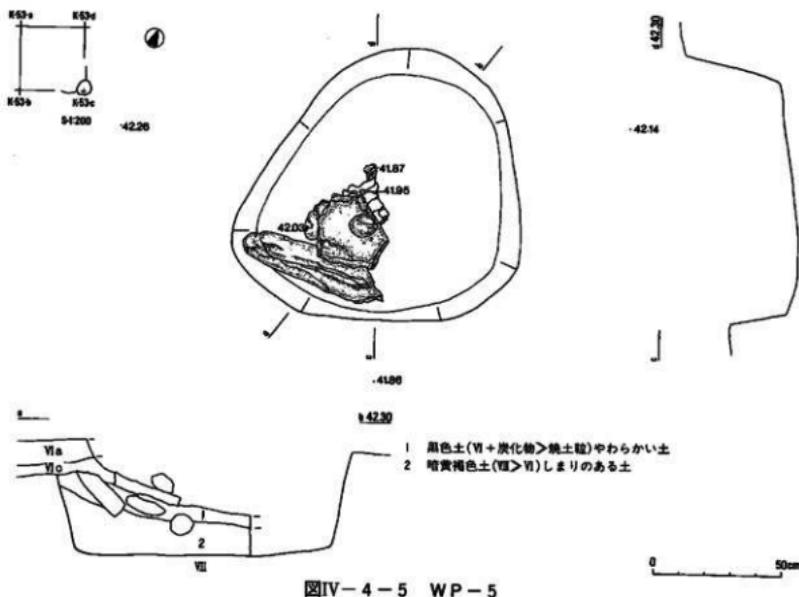
位置 K-53

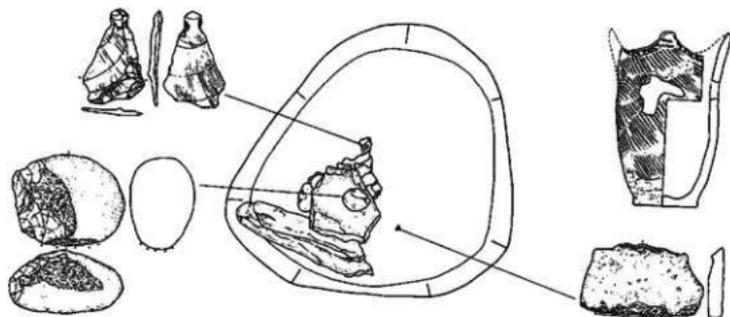
規模 2.30×2.10/2.0×1.83/0.77

平面型 円形

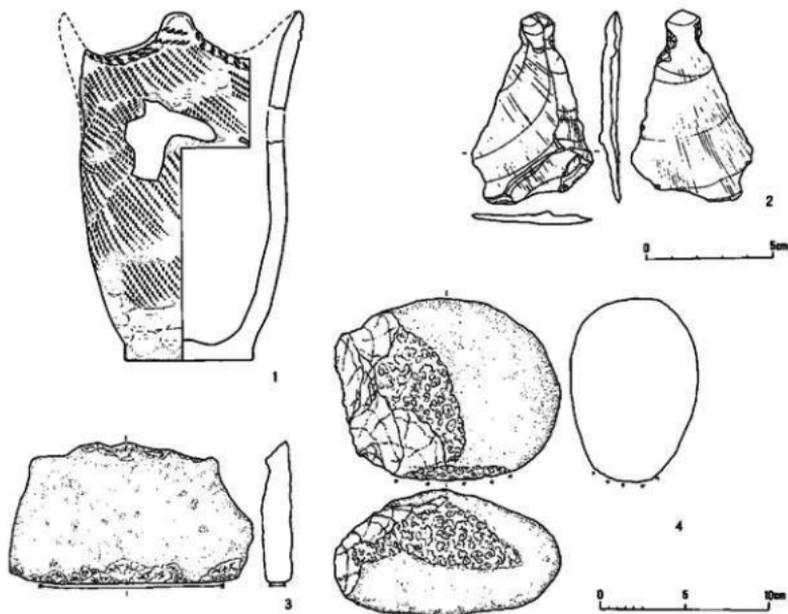
確認・調査 WH-14のトレンチによる調査中、盤状の礫や数個の礫と黒色土の落ち込みを確認する。遺構であることが想定されたため半載してみたところ、ほぼ垂直に近い掘込みが確認され、遺構と認定した。

覆土 覆土は2層に分層される。1・2層は人為的に埋め戻された土と考えられる。1層は焼土粒が含まれる。盤状の礫は1層中からの出土で、ピットの中心部へ向かって落ち込んでいる。1層土はVI層を主体とした土である。拳大から小さなものまで、安山岩が多く含まれる土である。炭化物を含んでいる。2層土は、Ⅷ層土を主体とした土である。安山岩の細片が多量に含まれる。掘込面はVI層中である。





図IV-4-6 WP-5とその出土遺物分布



図IV-4-7 WP-5 出土の遺物(土器・石器)

遺物 出土遺物は掲載した復元土器1点とたたき石2点、すり石2点、礫7点、Uフレイク1点である。

1はⅢ群b-1類土器である。口縁部の外反は弱く、底部はやや張出す。胴部は余り張り出さない。底部と胴部の境には2cm幅の磨きが施される。突起は対角に4個持つものであるが、3つまで破損している。口唇の断面は切り出しナイフ形である。突起部と口唇部にはRLの縄線文が施される。地文はRLの斜行縄文である。粘土の織ぎ目が上手く緊が

れなかったため、輪積みの状態に則して割れや表面の剝落が顕著である。内面は磨かれている。

2は剥片の上端部の表・裏につまみ部作出のための加工がみられることから、つまみ付きナイフの(ⅢA 8)未成品とした。石質は黒曜石である。3は偏平礫を素材としたたたき石(VA 2)である。腹面と側縁部にたたき跡がみられる。石質は安山岩である。4は、偏平礫を素材としたすり石(VIA 2)である。長軸方向の一側縁をV字状に打ち欠き、その稜をすったタイプである。もう一方の側縁には、整形のためと思われる打ち欠きもみられる。石質は、流紋岩である。いずれも覆土からの出土である。

時 期 3層中からⅢ群b-1類土器が完形で出土していることから縄文時代中期中葉の遺構と考えられる。(袖岡淳子・立川トマス)

(3)WP-6 [図IV-4-8 表IV-1-3]

位 置 K-50-d, K-50-c

規 模 1.74×1.67/1.05×1.04/0.24

平 面 型 円形

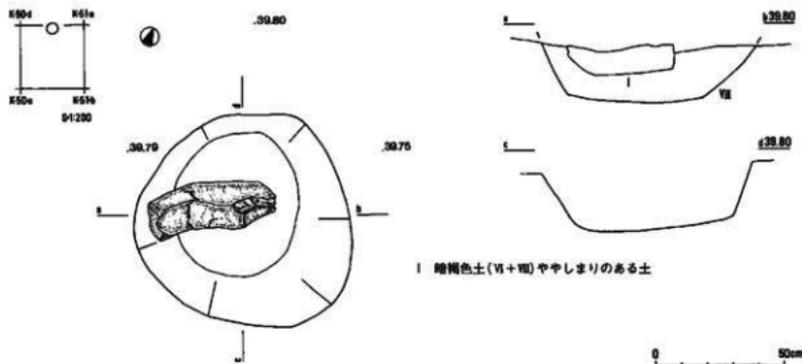
確認・調査 WH-18の調査中、Ⅶ層において、円形の黒色土の広がり長さ50cm程の礫を検出する。遺構であることが想定されたため、半載してみたところ、土壌であることが判明した。

覆 土 覆土は1層である。Ⅳ層とⅦ層が混合している覆土である。掘込み面はⅥ層中であったことが考えられる。

遺 物 礫が1点出土している。

時 期 縄文時代中期と考えられる。

(袖岡淳子)



図IV-4-8 WP-6

5. 焼土

WF-1

確認・調査 包含層を調査中、赤褐色土の広がりを確認する。遺構であることを推測し、半載してみたところ、風倒木跡によって攪乱を受けた新しい焼土であることが判明した。このことからWF-1は報告の対象から外している。 (袖岡淳子)

(1)WF-2 [図IV-5-1]

位置 K-51-d・K-52-a

規模 1.0×0.72/0.08

平面形 不整形

確認・調査 包含層調査中、赤褐色のまとまりを検出する。遺構であることが想定されたため、調査を行った。焼土の周囲が比較的平坦であったため、竪穴住居が構築されていた可能性を考慮し精査を行ったがそのような痕跡はみられなかった。焼土を半載してみたところ、被熱し褐色化した土を6cm前後確認した。調査の結果、掘込みを持たない地床炉であることが確認された。

時期 焼土中から遺物は検出されていないが、遺構が確認された層位からみて縄文時代中期の遺構と考えられる。 (袖岡淳子)

(2)WF-3、4、5、6 [図IV-5-1]

位置 J-52-a

規模 WF-3 0.67×0.59/0.17 WF-4 0.58×0.22/0.19 WF-5 0.55×0.28/0.04 WF-6 0.38×0.21/0.08

平面形 円形～不整形

確認・調査 包含層を調査中、VI層で4カ所の焼土粒のまとまりを検出する。半載してみたところ、ブロック状に移動した焼土であることが確認された。この焼土の南側にはWH-15とWH-17がある。隣接するこれらの住居から、人為的な焼土の投棄ということが推測される。

時期 焼土からの出土遺物はないが確認された層位からみて縄文時代中期と考えられる。 (袖岡淳子)

(3)WF-7 [図IV-5-1 表IV-5-1 図版-18]

位置 K-52-d

規模 (1.30)×(0.86)/(0.26)

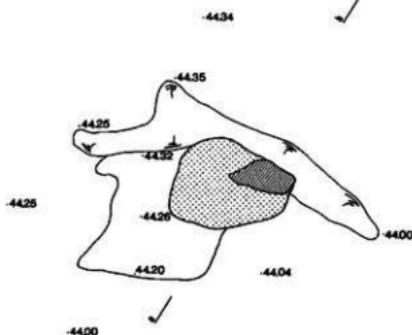
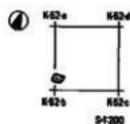
平面形 不整形

確認・調査 WH-12遺構調査中、覆土中で焼土まじりの暗褐色土と炭化物のまとまりが確認された。この住居跡の炉跡であることも考えられたが、焼土の確認面が覆土中であったことなどから、流れ込んだものであると判断し、二次堆積の焼土として調査した。しかし、WH-12の地床炉と平面上は重なること、高さの差は10cm程度であることなどから、WH-12に属するものであるかもしれない。

遺物 III群Ⅱ類土器、石鏃、石槍、フレイクが、焼土と暗褐色土がまざった土から、出土した。

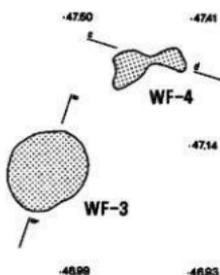
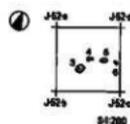
1は、石槍である。明瞭な茎がみられないもの(1B2)で、茎下端部を欠損する。焼土中からの出土であるが、焼成は受けていない。石質は黒曜石である。

WF-2



十の字の形をした(2)の遺構の中心部を埋めた(1)の遺構が
 十の字の形をした(3)の遺構の中心部を埋めた(4)の遺構が
 1-2

WF-3・4・5・6



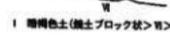
1 暗褐色土(焼土粒>VI)



1 暗褐色土(焼土ブロック状>VI>炭化物)

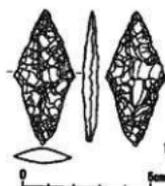
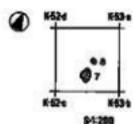


1 暗褐色土(焼土粒>VI)



1 暗褐色土(焼土ブロック状>VI>炭化物)

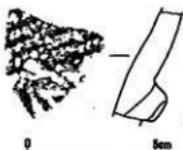
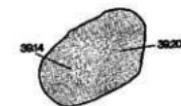
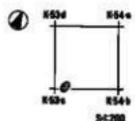
WF-7・8



WF-8

- 1 焼土(暗褐色土混じる)
- 2 暗褐色土に焼土・炭化物混じる
- 3 暗褐色土に炭化物混じる
- 4 炭化物の集中

WF-9



0 1 2m

図IV-5-1 WF-2・3・4・5・6・7・8・9 WF-7・9 出土の遺物

時 期 出土した土器がⅢ群b類であることから、縄文時代中期後半と考えられる。
(末光正卓・立川トマス)

(4)WF-8 [図IV-5-1]

位 置 K-52-d
規 模 0.52×0.48/0.02
平 面 形 不整形

確認・調査 WH-12遺構調査中、覆土中で焼土まじりの暗褐色土のまとまりが確認された。半截して断面を観察したところ焼成を受けた面は確認されず、覆土中に流れ込んだものであると判断した。

遺 物 遺物の出土はなかった。

時 期 WH-12よりも新しいのでⅢ群b-2類以降の時期で縄文時代中期後半であると考えられる。
(末光正卓)

(5)WF-9 [図IV-5-1 表IV-5-2 図版-14]

位 置 K-53-c・d
規 模 0.96×0.58/0.11
平 面 形 楕円形

確認・調査 包含層調査中、VI層中で焼土まじりの暗褐色土のまとまりが確認された。半截して断面を観察したところ焼成を受けた面はみられず、二次堆積のものであると判断した。WP-5の上位に位置している。

遺 物 焼土と暗褐色土がまざった土から土器が1点出土した。

1はⅢ群b-2類に相当すると思われるものである。外反する口縁部からすばまる頸部の破片で、断面が「U」字形を呈する刻み目が施された貼付帯がある。地文は右上がりの斜行縄文がみられ、貼付帯直上の器面には最終段がLの縄線文がみられるが、同一原体によるものかは判別できない。内面は丹念に磨かれている。

時 期 出土した土器がⅢ群b-2類であることなどから、縄文時代中期後半と考えられる。
(末光正卓)

(6)WF-10 [図IV-5-2 表IV-5-3 図版-14]

位 置 J-52-c
規 模 (0.42)×(0.40)/(0.28)
平 面 形 楕円形

確認・調査 WH-8の遺構調査中、壁際の覆土中で焼土・炭化物まじりの暗褐色土、灰褐色土のまとまりが確認された。覆土の上位に位置していることから、流れ込んだものであると判断した。

遺 物 土器、フレイクが焼土と暗褐色土がまざった土から出土した。

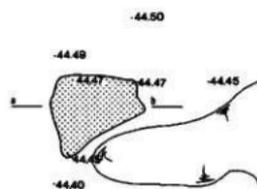
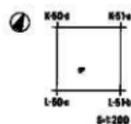
1はⅢ群b-3類に相当すると思われるものである。口唇断面は角形を呈する。口唇より少し下の器面に貼付帯がある。貼付帯上には短刻線文が施されている。地文は左上がりの条がみられ、貼付帯上と器面を同時に施文している。胎土には海綿骨針を含んでいる。

時 期 出土した土器がⅢ群b-3類であることなどから、縄文時代中期末葉と考えられる。
(末光正卓)

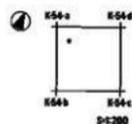
WF-10



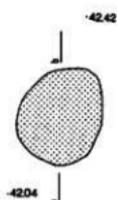
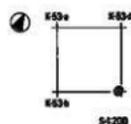
WF-11



WF-12



WF-13



図IV-5-2 WF-10・11・12・13 WF-10 出土の遺物

(7)WF-11 [図IV-5-2]

位 置 K-50-d
規 模 0.8×0.55/0.09
平 面 形 不整形

確認・調査 包含層調査中、焼土粒の広がりを検出する。半載してみたところ、焼土の投棄か二次堆積による移動した焼土であることが確認された。

時 期 焼土からの出土遺物はないが確認された層位から見て縄文時代中期と考えられる。
(袖岡淳子)

(8)WF-12 [図IV-5-2]

位 置 K-54-a
規 模 (0.18)/(0.32)/(0.03)
平 面 形 楕円形

確認・調査 VI層を調査中、WH-9の北側で焼土粒の広がりを検出した。半載したところ、Ⅷ層上面が赤褐色に焼けた状況がみられた。地床炉の焼土部分が耕作により削平され、下部の焼成を受けたⅧ層部分が検出されたものと考えられる。焼土中からは、何も検出されていない。

時 期 確認された層位から、縄文時代中期後半から同後期初頭と考えられる。

(立川トマス)

(9)WF-13 [図IV-5-2]

位 置 K-53-a・b・c・d
規 模 0.78×0.65/0.07
平 面 形 円形

確認・調査 包含層を調査中、焼土粒の広がりを検出する。半載してみたところ、不整な焼土粒の堆積した状況がみられた。二次的に堆積した焼土と考えられる。

時 期 焼土からの出土遺物はないが、確認された層位からみて縄文時代中期と考えられる。
(袖岡淳子)

表IV-1-1 住居跡一覧

遺構一覧

遺構	図	発掘区	平面形	規模(建築面の長さ×短径/生土の長さ×短径/厚さm)	遺物
WH-7	IV-3-2	K-52-a・b・c・d	長方形?	(6.28)×(3.90)/(5.32)×(2.90)/(1.00)	土器:713 石鏝:12 石楯・ナイフ:20 石鏝:4 スクレイバー:3 石弁:20 たたく石:2 すり石:7 石楯:4 Rフレイク:3 Uフレイク:3 フレイク:176
WH-8	IV-3-9	J-52-c	円形?	(2.62)×(2.24)/(2.20)×(1.84)/(0.72)	土器:128 石鏝:1 石楯・ナイフ:2 つまみ付きナイフ:1 石弁:1 すり石:1 Rフレイク:1 フレイク:116
WH-9	IV-3-12	K-54-a	楕円形	(2.53)×(2.60)/(2.44)×(2.56)/(0.18)	土器:3 石鏝:2 フレイク:612
WH-10	IV-3-13	J-54-c・d	楕円形	(1.88)×2.20/(1.76)×2.10/(0.26)	土器:116 石楯・ナイフ:1 フレイク:14
WH-11	IV-3-16	J-54-c、K-54-c	楕円形	(2.15)×2.70/(2.65)×2.66/(0.42)	土器:139 石楯・ナイフ:8 たたく石:1 台石・石皿:1 フレイク:19
WH-12	IV-3-20	K-52-d	方形?	(3.92)×(2.60)/(3.46)×(2.20)/(0.74)	土器:327 石楯・ナイフ:7 石弁:1 すり石:2 台石・石皿:1 砥石:1 原石:1 Rフレイク:1 フレイク:152
WH-13	IV-3-24	K-52-a・b・d	円形?	(2.22)×(1.92)/(2.16)×(1.88)/(0.14)	土器:34 石弁:1 Rフレイク:1 フレイク:2016
WH-14	IV-3-26	K-53-a	円形	2.93×(27.0)/26.3×(23.5)/0.15	土器:41 石弁:4 フレイク:54
WH-15	IV-3-29	J-52-d・J-53-a	円形?跡?	(4.30)×(4.20)/(3.76)×(3.90)/(0.26)	土器:178 石鏝:4 石楯・ナイフ:3 石鏝:1 つまみ付きナイフ:1 スクレイバー:1 石弁:4 石楯:3 Rフレイク:1 Uフレイク:1 フレイク:837
WH-16	IV-3-33	K-52-b・c	楕円形	(1.70)×(1.24)/(1.54)×(0.92)/(0.14)	土器:7 石弁:1 フレイク:26
WH-17	IV-3-34	K-52-d・J-53-a	円形?	(3.66)×(1.60)/(3.22)×(1.40)/(0.44)	土器:23 石弁:3 Rフレイク:1 Uフレイク:1 フレイク:119
WH-18	IV-3-36	K-50-c、L-50-d	不明		土器:5 石楯:3 フレイク:すり石:3

表IV-1-2 土塊一覧

遺構一覧

遺構	図	発掘区	平面形	規模(建築面の長さ×短径/生土の長さ×短径/厚さm)	遺物
WP-4	IV-4-1	K-50-c、L-50-d	円形	2.33×1.94/1.44×1.12/1.0	
WP-5	IV-4-5	K-53-a・b・c・d	円形	2.30×2.10/2.0×1.83/0.77	
WP-6	IV-4-8	K-50-d、K-50-c	円形	1.74×1.67/1.05×1.04/0.24	

表IV-1-3 焼土一覧

遺構一覧

遺構	図	発掘区	平面形	規模(建築面の長さ×短径/生土の長さ×短径/厚さm)	遺物
WF-2	IV-5-1	K-51-d、K-52-a	不整形	(1.0)/(0.72)/(0.08)	
WF-3	IV-5-1	J-52-a	円形	0.67/0.58/0.17	
WF-4	IV-5-1	J-52-a	不整形	0.58/0.22/0.19	
WF-5	IV-5-1	J-52-a	楕円形	0.55/0.28/0.04	
WF-6	IV-5-1	J-52-a	不整形	0.38/0.21/0.08	
WF-7	IV-5-1	K-52-d	不整形	(1.30)/(0.86)/(0.26)	土器:4 石鏝:1 石楯:1 フレイク:23
WF-8	IV-5-1	K-52-d	不整形	0.52/0.48/(0.02)	
WF-9	IV-5-1	K-53-c、d	楕円形	0.96/0.58/(0.11)	土器:1
WF-10	IV-5-2	J-52-c	楕円形	(0.42)/(0.40)/(0.28)	土器:13 フレイク:2
WF-11	IV-5-2	K-50-d	不整形	0.80/0.55/0.09	
WF-12	IV-5-2	K-54-a	(楕円形?)	(0.18)/(0.32)/(0.03)	
WF-13	IV-5-2	K-53-a・b・c・d	円形	0.78/0.63/0.07	

表IV-3-2 WH-7 復元土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	口徑			分類	接合・同一個体
					口徑	底徑	器高		
IV-3-5	1	WH-7	79	覆土	21.4	(4.27)	24.9	III-a-2	WH-7-94(覆土)・97(覆土)・124(覆土)・WH-12-3(覆土)・K-52-d-54(VI風)・64(VI風)・L-52-a-149(VI風)と接合 破片数20 WH-7-99(覆土)・166(覆土)・WH-12-3(覆土)・K-52-c-32(VI)・K-52-d-54(VI風側)と同一個体 破片数15
#	2	WH-7	56	覆土	(5.2)		2.2	III-b	WH-7-44(覆土)・205(覆土)と接合 破片数7
#	3	WH-7	127	覆土	不明	不明	(25.9)	III-b-3	WH-7-28(覆土)・34(覆土)・99(覆土)・126(覆土)・130(覆土)・未注記(4破片)と接合 破片数22

表IV-3-3 WH-7 掲載土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-3-5	4	WH-7	178	床面	III b	
#	5	#	193	#	III-b-2	破片数3
#	6	#	53	覆土	III-a-2	
#	7	#	55	#	#	
#	8	#	73	#	III-b-1	
#	9	#	201	#	#	
#	10	#	160	#	#	
#	11	#	58	#	#	
#	12	#	91	#	#	
#	13	#	99	#	III-a-2-b-1	
#	14	#	123	#	III-b-2	図IV-6-13-8と同一個体 破片数2
#	15	#	141	#	#	破片数4
#	16	#	125	#	#	
#	17	#	140	#	#	
IV-3-6	18	#	138	#	#	
#	19	#	69	#	III-b-3	
#	20	#	11	#	#	
#	21	#	206	#	#	
#	22	#	211	#	#	破片数2
#	23	#	127	#	#	
#	24	#	73	#	#	
#	25	#	144	#	#	K-52-a-11(I)と接合
#	26	#	183	#	#	
#	27	#	137	#	#	
#	28	#	64	#	III-a-2-b-1	
#	29	#	62	#	III-b-3	

表IV-3-4 WH-7 掲載石器

図	番号	名称	分類	調査区・遺物番号	層位	大きさ(長さ×幅×厚さcm・重さg)	材質	備考
図IV-3-7	30	石 鏃	I A 5	WH-7	覆土	(4.5) × 1.6 × 0.4 - 2.5	黒曜石	
	31	#	I A 7	#	#	2.6 × 1.5 × 0.5 - 1.1	頁岩	
	32	#	#	#	#	3.0 × (1.4) × 0.4 - 1.3	黒曜石	
	33	#	#	#	#	(3.1) × 1.7 × 0.3 - 1.3	#	
	34	#	#	#	#	4.3 × 1.7 × 0.6 - 2.2	#	
	35	石輪・ナイフ	I B 1	#	#	4.5 × (2.7) × 0.8 - 5.6	#	
	36	#	I B 2	#	#	5.7 × 2.8 × 0.7 - 8.0	#	
	37	#	#	#	#	5.9 × 2.9 × 0.6 - 6.9	#	
	38	#	#	#	#	(6.3) × 2.8 × 0.8 - 8.4	#	
	39	#	#	#	#	(6.2) × 2.6 × 0.7 - 9.8	#	
	40	#	#	#	#	6.0 × 2.3 × 0.7 - 6.3	#	
	41	#	#	#	#	(5.3) × 2.3 × 0.7 - 7.3	#	
	42	#	#	#	#	12.5 × 2.4 × 0.9 - 28.8	頁岩	
	43	石 鏃	II A 1	#	#	1.8 × 0.8 × 0.2 - 0.5	スノウ	
	44	#	#	#	#	1.7 × 0.9 × 0.3 - 0.9	頁岩	
	45	#	#	#	#	2.3 × 1.3 × 0.3 - 2.1	#	
	46	#	#	#	#	(2.2) × 1.2 × 0.4 - 1.7	#	
	47	スクレイパー	III B 1	#	#	6.0 × 4.2 × 1.0 - 32.1	#	
	48	#	III B 6	#	#	6.3 × 3.4 × 0.7 - 15.6	#	
	49	石 押	IV A 3	#	#	(5.1) × 3.1 × 0.5 - 15.8	片岩	
	50	#	#	#	#	(6.9) × (4.1) × (0.7) - 42.4	緑色泥岩	
	51	#	#	#	#	(13.7) × (3.5) × (0.9) - 64.4	片岩	
	52	#	IV A 8	#	#	(13.3) × 5.2 × 2.4 - 304.8	緑色泥岩	
	53	たまり石	V A 2	WH-7 石船伊 2-4	床面	14.4 × 6.8 × 3.9 - 491.0	安山岩	
	54	#	#	WH-7	覆土	13.6 × 7.6 × 5.2 - 652.0	#	
	55	すり石	VI A 2	WH-7 石船伊 2-5	床面	9.3 × 15.9 × 3.2 - 770.0	#	
	56	#	VI A 3	#	#	(11.0) × 9.1 × 4.2 - 452.2	#	
	57	#	#	#	#	7.9 × (9.2) × 2.0 - 189.2	#	
	58	#	VI A 5	#	#	7.9 × (12.7) × 6.8 - 760.0	#	

表IV-3-6 WH-8 掲載土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-3-11	1	WH-8	8	覆土	III-b-2	
	2	#	37	#	III-b-22	
	3	#	58	#	III-b-2	
	4	#	7	#	III-b-3	破片数6
	5	#	55	#	#	
	6	#	68	#	#	
	7	#	27	#	#	図IV-6-31-63と同一個体
	8	#	55	#	III-a-2-b-1	
	9	#	2	#	III-b-22	

表IV-3-7 WH-8 掲載石器

図	番号	名称	分類	調査区・遺物番号	層位	大きさ(長さ×幅×厚さcm・重さg)	材質	備考
図IV-3-11	10	石 鏃	I A 7	WH-8	覆土	3.8 × 1.2 × 0.3 - 1.1	黒曜石	

表IV-3-8 WH-9 掲載土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-3-12	1	WH-9	2	覆土	III-b	

表IV-3-9 WH-10 復元土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類			接合・同一個体
					口径	底径	高さ	
IV-3-15	1	WH-10	32	床面	32.7	不明	(20.9)	III-b-3 WH-10-32(床面)と接合 破片数6

表IV-3-10 WH-10 掲載土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-3-15	2	WH-10	51	床面	III-b-3	
	3	#	29	#	#	破片数2
	4	#	22	#	#	
	5	#	40	覆土	#	破片数2
	6	#	33	#	#	破片数5

表IV-3-11 WH-10 掲載石器

図	番号	名称	分類	調査区・遺物番号	層位	大きさ(長さ×幅×厚さcm・重さg)	材質	備考
図IV-3-15	7	石 鏃	I B 1	WH-10	覆土	(3.3) × (2.0) × 0.6 - 2.6	黒曜石	

表IV-3-12 WH-11 掲載土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-3-18	1	WH-11	14	覆土	III-b-3	
#	2	#	31	#	#	
#	3	#	1	#	#	
#	4	#	74	#	#	
#	5	#	3	#	#	図IV-6-24-6と同一個体
#	6	#	92	#	#	
#	7	#	23	#	III-b	
#	8	#	33	#	III-b-3	
#	9	#	8	#	#	

表IV-3-13 WH-11 掲載石器

図	番号	名称	分類	調査区・遺物番号	層位	大きさ(長さ×幅×厚さ・重さg)	材質	備考
IV-3-19	10	台石・石皿	VI A	#	47	覆土 (29.3) × 23.3 × 13.3・12940.0	安山岩	
#	11	砥石	VI B 3	WH-11	48	#	75.8 × 21.4 × 9.5・12990.0	凝灰岩

表IV-3-15 WH-12 掲載土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-3-22	1	WH-12	103	床面	III-b	
#	2	#	105	#	#	
#	3	#	77	#	III-b-2	
#	4	#	110	HP-1覆土	#	破片数2
#	5	#	111	溝覆土	III-b	
#	6	#	44	覆土	III-b-1	K-52-c16(1)と接合 破片数2
#	7	#	3	#	III-a-2	
#	8	#	60	#	III-b-2	WH-12-3(覆土)・9(覆土)・W H-7-94(覆土)・K-52-d-76(VI)と接合 破片数5
#	9	#	59	#	#	
#	10	#	56	#	#	
#	11	#	47	#	III-b-2	
#	12	#	73	#	#	
#	13	#	3	#	#	
#	14	#	21	#	#	
#	15	#	10	#	III-b-3	
#	16	#	12	#	#	
#	17	#	88	#	III-b	
#	18	#	31	#	III-b-2	
#	19	#	43	#	III-b-2	
#	20	#	3	#	土製品	

表IV-3-16 WH-12 掲載石器

図	番号	名称	分類	調査区・遺物番号	層位	大きさ(長さ×幅×厚さ・重さg)	材質	備考
IV-3-23	21	石	I B 1	WH-12	29	覆土 5.5 × (2.6) × 0.6・6.3	黒曜石	
#	22	#	#	#	65	#	7.0 × (2.6) × 0.9・10.6	#
#	23	#	I B 2	#	51	#	4.8 × 2.8 × 0.8・8.5	#
#	24	すり石	VI A 2	#	93	#	8.7 × (13.1) × 3.8・528.8	安山岩
#	25	#	#	#	18	#	4.7 × (10.0) × 1.4・99.6	#
#	26	台石・石皿	VI A	#	50	#	26.8 × (21.8) × 13.9・9850.0	#
#	27	砥石	VI B	#	104	床面 40.4 × 10.2 × 7.9・4860.0	凝灰岩	
#	28	石製品	#	#	52	覆土 5.9 × 5.5 × 5.1・83.0	凝石	

表IV-3-18 WH-13 掲載土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-3-24	1	WH-13	15	覆土	III-b-1?	
#	2	#	12	#	III-b-3	
#	3	#	14	#	III-b-3	

表IV-3-19 WH-14 掲載土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-3-28	1	WH-14	2	床	III-a-2	
#	2	#	9	#	III-a-2	
#	3	#	13	#	III-b-1	
#	4	#	18	#	III-b-1	
#	5	#	4	#	III-b-3	WH-14.5とK-53-132VI風接合 破片数3

表IV-3-20 WH-14 掲載石器

図	番号	名称	分類	発掘区・遺物番号	層位	大きさ(長さ×幅×厚さcm・重量g)	材質	備考
IV-3-28	6	石 矛	IV A 3	WH-14	10	床面 (9.4)×3.7×1.9 - 108.6	片 岩	
#	7	#	#	#	11	# (9.3)×4.2×1.0 - 76.2	緑色硬岩	
#	8	#	#	#	1	# (5.8)×4.7×1.5 - 71.3	#	
#	9	#	#	#	14	# (16.1)×(3.1)×(1.6) - 111.6	片 岩	

表IV-3-22 WH-15 復元土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	口径			底径	器高	分類	接合・同一個体
					口径	底径	器高				
IV-3-31	1	WH-15	23	覆土	22.1	不明	(18.7)	III-b-3	WH-15-3、4、6、7、8、9、10、11、13、14、16、23、25、26、38(覆土) J-52-d-36、43、57、61(VI)、104(VI) 風、48、53(VI)風と接合 破片数46		

表IV-3-23 WH-15 掲載土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-3-31	2	WH-15	26	覆土	III-b	
#	3	#	97	#	#	
#	4	#	44	#	III-b-3	
#	5	#	26	#	#	破片数2
#	6	#	26	#	III-b	
#	7	#	26	#	#	

表IV-3-24 WH-15 掲載石器

図	番号	名称	分類	発掘区・遺物番号	層位	大きさ(長さ×幅×厚さcm・重量g)	材質	備考
IV-3-32	8	石 鏃	I A 7	WH-15	45	覆土 (3.5)×2.0×0.5 - 3.2	黒曜石	
#	9	#	#	#	21	# (2.3)×1.5×0.4 - 0.9	#	
#	10	#	#	#	22	# 3.2×1.9×0.4 - 1.9	#	
#	11	石 槍	I B 2	#	52	# 4.1×2.3×0.7 - 5.7	#	
#	12	#	#	#	1	# (4.2)×3.5×1.2 - 12.4	#	
#	13	石 鏃	II A 1	#	27	# 2.7×1.2×0.4 - 2.2	頁 岩	
#	14	つまみ付きナイフ	III A 8	#	53	# (6.7)×2.9×1.1 - 19.4	黒曜石	
#	15	スクレイパー	III B 6	#	30	# 4.1×(3.5)×1.1 - 12.0	#	
#	16	石 矛	IV A 3	#	54	# (4.6)×2.7×0.6 - 13.0	片 岩	
#	17	石 鏃	II A 1	#	32-1	# 4.0×3.9×2.5 - 34.1	黒曜石	
#	18	#	#	#	32-2	# 5.6×3.8×2.7 - 43.1	#	

表IV-3-25 WH-16 掲載土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-3-33	1	WH-16	2	覆土	III-b-2	破片数2

表IV-3-27 WH-17 復元土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	口径			底径	器高	分類	接合・同一個体
					口径	底径	器高				
IV-3-35	1	WH-17	9	覆土	不明	不明	16.4	III-b-3	WH-15-26(覆土)と接合 破片数5		

表IV-3-28 WH-17 掲載土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-3-35	2	WH-17	11	床面	III-b	破片数3
#	3	#	7	覆土	III-b-3	
#	4	#	6	#	#	

表IV-3-29 WH-18 掲載土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-3-37	1	WH-18	1	覆土	III-b-3	
#	2	#	4	#	III-b-3	
#	3	#	4	#	III-b-3	

表IV-3-30 WH-18 掲載石器

図	番号	名称	分類	調査区・遺物番号	層位	大きさ(長さ×幅×厚さcm・重量g)	石質	備考
IV-3-37	4	石ノ破	I B 1	WH-18	・	6	(5.6)×3.2×0.7・7.4	黒曜石
#	5	#	I B 2	#	・	5	(5.3)×3.0×0.6・7.7	#
#	6	ナリ石	VI B 1	WH-18	石籠伊 19	床面	6.8×19.0×8.1・1198.0	安山岩
#	7	#	VI A 3	WH-18	石籠伊 20	#	8.0×(15.2)×2.4・510.4	#
#	8	#	#	WH-18	石籠伊 21	#	7.9×14.4×4.7・730.0	#

表IV-4-1 WP-4 掲載土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-4-3	1	WP-4	1	覆土	III-a-2	破片数2
#	2	#	1	#	III-a-2	破片数2
#	3	#	4	#	III-a-2	
#	4	K-50-c	55	VI	III-a-2	WP-4.4と同一個体
#	5	WP-4	2	#	III-a-2	破片数9
#	6	K-50-d	37	風倒	III-a-2	WP-4.2と同一個体
#	7	K-50-c	69	VI	III-a-2	K-50-c-64、74と接合
#	8	WP-4	1	覆土	III-a-2	K-50-c-69と接合
#	9	#	9	#	III-a-2	
#	10	#	1	#	III	
#	11	#	1	#	III	
#	12	#	1	#	III-b-1	破片数2
#	13	#	1	#	III-b-1	
#	14	#	6	#	III-b-1(?)	
#	15	#	1	#	III-b-1(?)	K-50-c-90VIと接合

表IV-4-2 WP-4 掲載石器

図	番号	名称	分類	調査区・遺物番号	層位	大きさ(長さ×幅×厚さcm・重量g)	石質	備考
IV-4-4	16	ナリ石	VI A 3	WP-4	・	20	7.5×(7.6)×2.2・187.2	
#	17	#	#	#	・	17	10.2×(10.0)×3.8・411.6	
#	18	#	#	#	・	12	7.7×12.2×4.1・396.0	
#	19	台石・石皿	VII A	#	・	3	26.0×11.3×7.8・2890.0	

表IV-4-3 WP-5 復元土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-4-7	1	WP-5	20	覆土	III-b-1	破片数101

表IV-4-4 WP-5 掲載石器

図	番号	名称	分類	調査区・遺物番号	層位	大きさ(長さ×幅×厚さcm・重量g)	石質	備考
IV-4-7	2	ツバ付ナイフ	III A 3	WP-5	・	19	7.5×4.7×0.5・13.6	黒曜石
#	3	たつき石	V A 2	#	・	12	10.7×13.1×7.5・1245.0	安山岩
#	4	ナリ石	VI A 2	#	・	5	8.3×14.2×1.4・316.8	凝灰岩

表IV-5-1 WF-7 掲載石器

図	番号	名称	分類	調査区・遺物番号	層位	大きさ(長さ×幅×厚さcm・重量g)	石質	備考
IV-3-	1	石棒・ナイフ	I B 2	WF-7	・	3	(5.2)×2.4×0.6・4.3	黒曜石

表IV-5-2 WF-9 掲載土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-5-1	1	WF-9	1	VI+覆土	III-b-2	

表IV-5-3 WF-10 掲載土器

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-5-2	1	WF-10	1	VI+覆土	III-b-3	破片数6

6. 包含層出土の土器

(1)概要

本年度、包含層から出土した土器破片は30,856点で、昨年度までの包含層出土のものが62,553点、合計93,409点である。

本年度包含層から出土したものについては、口縁部の破片を全点抽出し、文様、胎土、色調、焼成等の違いから個体識別をおこなった。識別できた個体は1,012個体(昨年度までのものは1,871個体)で、昨年度までに出土したのものと対比していない。

本遺跡は、傾斜地に立地していたことと耕作や風倒木痕による攪乱のため、土、遺物の移動が著しく、遺物の層位的な出土状況については、捉えることができなかった。

出土した土器を既存の資料と対比したところ、すべてⅢ群に分類される縄文時代中期のものである。器形などの特徴が把握できない破片の掲載土器については、各型式の属性のうちで、以下の特徴を主として分類を行った。

Ⅲ群 a-2 類

サイベ沢Ⅶ式 口縁部から胴部上半にかけて、2～3本組の沈線文が施されるもの。

Ⅲ群 b-1 類

見晴町式 山形突起部に文様が施されるもの。縄文のみのもの。

榎林式 口唇に沈線文が施されるもの。

天神山式 山形突起部下に粘土塊の貼り付け。半截竹管状工具による施文のもの。

Ⅲ群 b-2 類

大安在B式 頸部から肩部・胴部上半にかけて、貼付帯があるもの。

縄線文による施文を特徴とするもの。他、沈線文・刺突文など。

柏木川式 前後関係からⅢ群 b-2 類に分類され、道南系のものとは異なる感じをうけるもの。貼付帯・縄線文・刺突文・押引文など。

Ⅲ群 b-3 類

ノグツⅡ式 口唇が無文で、丹念に磨かれるもの。

煉瓦台式 口唇が角形を呈するもの。

北筒式(トコロ6類) 円形刺突文が施されるもの。

(2)分布 [図Ⅳ-6-36~43]

総破片数の分布図と、復元個体と口縁部の破片から個体数を求め、分類ごとの分布図を作成した。昨年度報告したものについてもそのまま記載した。

総破片数の分布図では、土器の出土は調査区のほぼ全域に認められるが、特にJ~N・51~55ラインの、遺構が確認された範囲に多くみられる。また、これより東、北、南方向(西側部分は削平されている)へ分布が薄くなっていくことから、この範囲が遺跡の中心であると考えられる。総個体数の分布も、ほぼ同様である。[図Ⅳ-6-36~37]

Ⅲ群 a-2 ~ b-1 類土器の分布は、調査区の西側に集中している。また、北東側に少数量みられる。[図Ⅳ-6-38~40]

Ⅲ群 b-2 ~ b-3 類の土器の分布は、遺跡の中心と考えられる範囲に集中している。[図Ⅳ-6-41~43]

(3)復元個体土器 [図IV-6-41~43 表IV-6-1]

本遺跡から出土した土器は、摩耗が著しいので、このことを踏まえた上で個体識別を行い、その結果、個体数の多さと同一個体の残存破片数の少なさが認識された。この時点で識別された各個体について検討し、器形を判断しうる程度、破片が集まったものについて復元することとした。

復元掲載土器のうち、破片の少ないものは拓本と器形の復元実測図で示し、比較的多いものについては、実測図を作成した。実測図は、残存している部分と推定復元した部分についても、明確に表現することを意図している。縮尺はすべて1/3とし、昨年度までの報告と同じにした。

胎土の観察については、東北北部～道南地方に関連が求められる海綿骨針の有無に注意した。観察は基本的には肉眼で行ったが、必要に応じてルーペ(×10)を用いた。破片のものについても同様である。以下、復元土器について説明する。

1はⅢ群a-2類のサイベ沢Ⅶ式、2はⅢ群b-1類の見晴町式、3はⅢ群b-1類の覆林式、5はⅢ群b-2類の大安在B式、7はⅢ群b-2類の柏木川式、4・6はⅢ群b-2類、8~11はⅢ群b-3類の煉瓦台式、15~19はⅢ群b-3類の北筒式に、それぞれ相当するものである。20はⅢ群b-3類あるいはⅣ群a類に相当するものである。

1は比較的近くまとまった状態で出土したものである。K-50-c区の包含層調査中、Ⅵ層中から一個体分がつぶれた状態で確認された。周辺を精査したところ、遺構などの、この土器に関する状況はみられなかったため、この時点で実測をし、取り上げた。

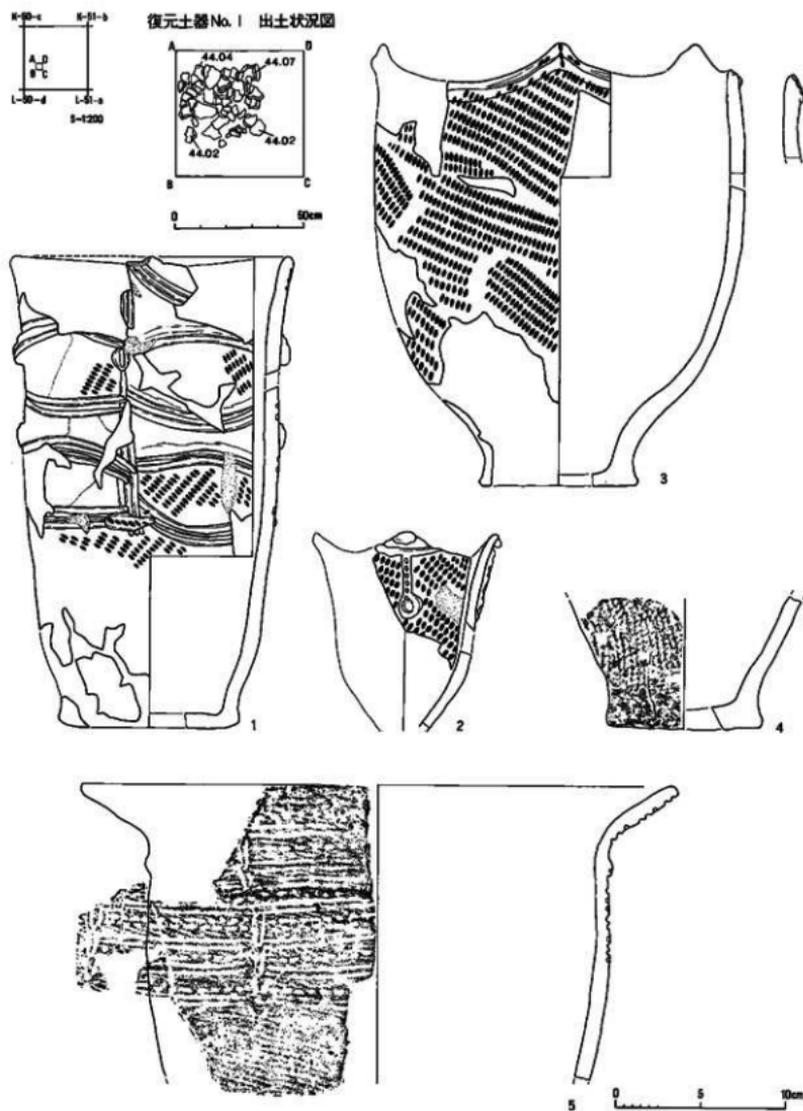
土器は、ほぼ直線的に底部へつながる器形で、口縁部の大半を欠損する。地文はLR斜行縄文である。口縁部から胴部下半にかけては、縦方向と弧状を組み合わせた沈線文が施されている。縦方向の沈線文がみられるところには、部分的に貼り付けがみられ、この貼付帯上は縄線文が施されている部分もある。胴部下半は摩耗している。底部近くの胴部の底部から約5cm幅の部分は、なでられており無文である。

2は小形のもので、底部を欠損する。波状を呈する口縁部から胴部の中位ほどまでは直線的に、そこから底部へは急角度ですぼまる器形を呈する。口唇と器面にはRL斜行縄文がみられる。山形突起部には、横方向と垂下する貼り付けが地文施文前に施されている。垂下する貼付文上には、刺突文あるいは刻み目のような施文がみられる。胴部下半の外面に炭化物の付着が認められる。

3は、3単位の波状口縁のものである。大きく開く口縁部から胴部へとつながり、胴部下半から底部へと急角度ですぼまる器形で、全体的には曲線的である。口縁部に沿って粘土紐が貼付られ、口唇を肥厚させている。その口唇には、山形突起部にはRL原体が押捺され、それ以外は、部分に途切れる沈線文が施されている。地文はRLの原体を用いて、貼り付け部分も同時施文している。左上がりの縄文が観察されるが、曲線的な器形のためからか、横走気味の部分もみられる。

4は図IV-6-15-55と同一個体のものである。胴部には縦走気味の地文がみられる。拓影図では表せなかったが、複節のようである。底部付近の胴部はなでられ、底部は張出している。

5は口唇から外面にかけて、摩耗が著しいものである。大きく外反する口縁部から頸部でくびれ、胴部が若干張り出す器形である。頸部下の器面には刺突文が施された貼付帯が



図IV-6-1 包含層出土の復元土器とその出土状況(1)

ある。地文の原体は判別できないが、胴部には横走気味の縄文が観察される。口縁部から胴部上半にかけて、2本組の沈線文と1～2列の連続刺突文が交互にみられ、縦方向にも沈線文が施されている。内面の調整は丹念である。

6は口唇直下の器面に貼付帯を施して肥厚させ、そこに刺突文が施されているものである。外反する口縁部から頸部ですばまり、緩やかに張り出す胴部へとつながる器形である。胴部上半に横環する貼付帯が施されていたようで、剝落痕がみられる。この剝落痕には地文は観察されない。地文はLRの原体による、斜行～横走気味の縄文である。内面の調整は丹念である。

7は口縁部を肥厚させ、そこに2列の押引文が施されているものである。口縁部から頸部へと緩やかにくびれ、胴部がわずかに張り出す器形である。地文の原体はRLのようで、肥厚させている部分と器面とを同時施文している。胴部では、羽状縄文を形成している部分もみられる。

8は、比較的まとまった状態で出土したものである。包含層調査中、K-57-b区で、内面が上になった破片の上に、反対側の部分が外面を上にした状態で、折り重なった状況で確認された。ほぼⅧb層の上面に近いⅥ層中からの出土である。確認された時点で記録をとり、土器を取り上げた。その後、周辺を精査したところ、土器が出土した場所に、暗～黒褐色の土のまとまりがみられた。半載したところ、明瞭な壁・床などが確認されなかったため、自然地形による落ち込み、あるいは木根と考え、そこに土器が流れ込んだものと判断した。

土器は口縁部から緩やかにすばまり胴部が口縁部よりもわずかに張り出す器形を呈する。胴部には、RL原体による縄線文が施された隆起帯がみられ、地文を器面と同時施文している。地文の原体もRL原体を用いており縦走気味の部分もみられる。口唇は角形でなでられており、胎土には海綿骨針を含んでいる。

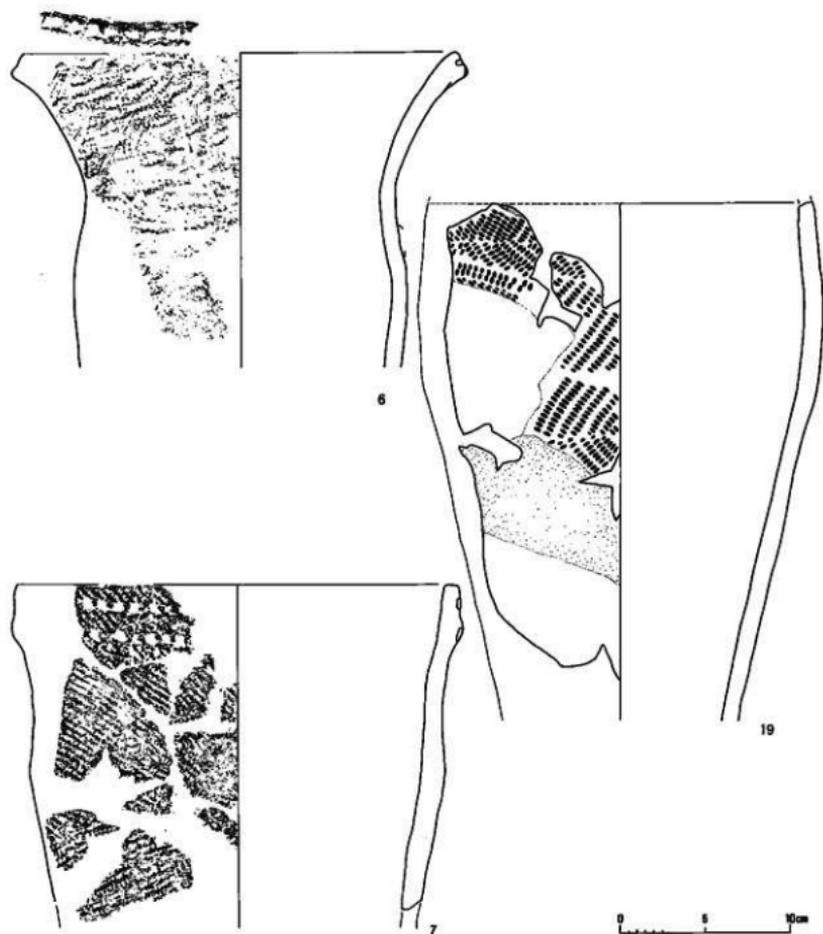
9は器壁が薄く、比較的小形のものである。口縁部から緩やかにすばまり、胴部が張り出す器形である。口唇直下の器面と頸部から胴部上半にLR原体による縄線文が施されている。地文はLR原体を用いた斜行縄文である。口唇断面は角形を呈する。

10は、比較的まとまった状態で出土したものである。包含層調査中、J-53-c区で風倒木痕の半載時に、口縁部近くの破片の下に胴部破片が内面を上に向けた状態で確認された。この時点で記録し、土器を取り上げた。その後、周辺の精査と南北方向に設定したベルトを観察したところ、この土器は風倒木痕中ではなく、ほぼⅧb層の上面に近いⅥ層中からの出土であることが判断できた。

土器は、口縁部から緩やかにすばまり、胴部がふくらむ器形である。地文はLR原体により、横走気味の縄文が施されている。口縁部から頸部には2本組の縄線文が縦横方向にみられる。頸部で横環するものは施文がずれているのがみられる。口唇部断面は丸形を呈し、口唇部から内面にかけて磨かれている。

11は、包含層調査中、J-52-c区で比較的まとまった状態で出土したものである。内面を上にした状態で確認された。平面的にはWH-8と重なるが、この時点では構構は確認されていなかったため、包含層からの出土と判断し、記録した後取り上げた。

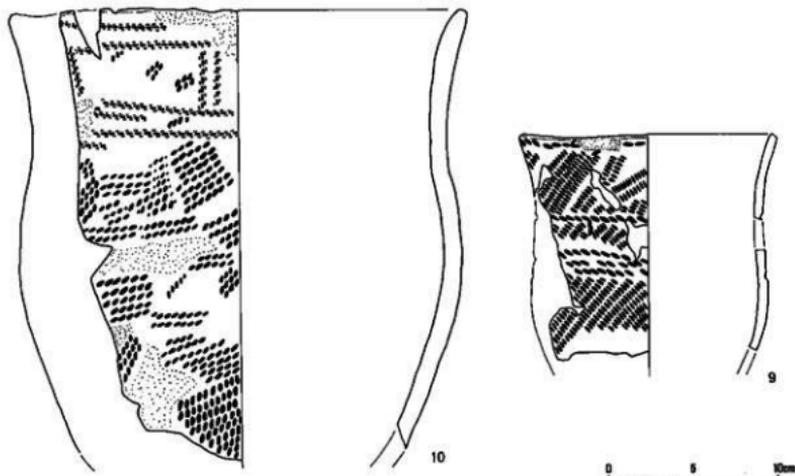
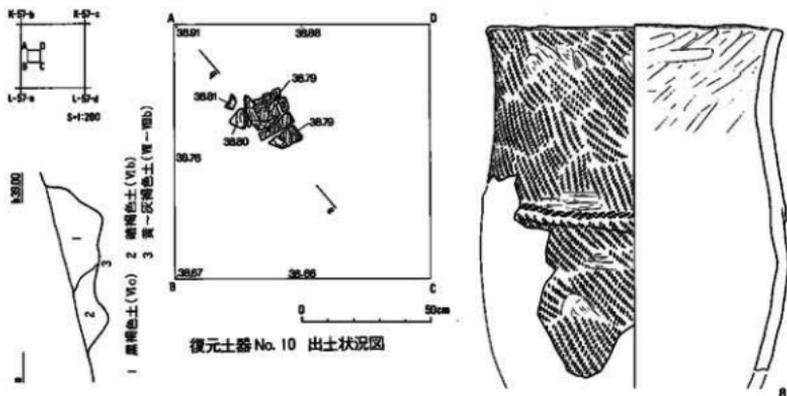
土器は、口縁部から緩やかにすばまり、胴部がふくらむ器形を呈する。地文は斜行～横走気味の縄文で、無節のようである。口唇部は丸形で、丹念に磨かれている。



図IV-6-2 包含層出土の復元土器(2)

12はJ-56-c区の風倒木痕中から比較的まとまった状態で出土した。包含層調査中、VIII b層上面で風倒木痕の落ち込みを確認した。遺物を採集するため、起き上がり部分にかからない落ち込みを掘り下げていったところ、底から20cm程上の高さから、煉瓦台式の一個体分のまとまりと大木系土器と考えられる破片1点が確認された。この時点で記録をとり、土器を取り上げた。さらに掘り下げてみたところ、遺物の出土はみられなかった。

土器は、口縁部から胴部へとわずかにくびれる器形である。口唇部直下の器面と胴部の貼付帯上に短刻線文が施されている。地文はLRの原体による斜行縄文で、胴部の貼付帯は器面と同時に施文されている。口唇部は角形を呈し、なでられている。胎土には海綿骨針



図IV-6-3 包含層出土の復元土器とその出土状況(3)

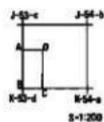
を含んでいる。

13は口縁部から比較的直線的にすぼまる器形のものである。地文はLR斜行縄文である。口縁部と胴部には貼付帯がある。それらの上には地文は観察されず、短刻線文が施されている。口唇部は角形を呈し、なでられている。

14は包含層調査中、K-55-a区において、外面を上にした状態で、ほぼVIIb層の上面に近いVI層中でまとまって出土した。

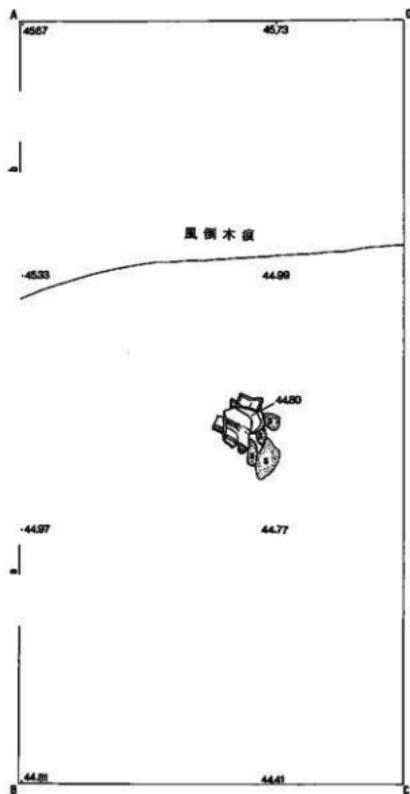
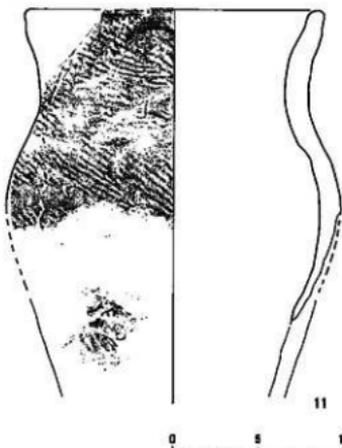
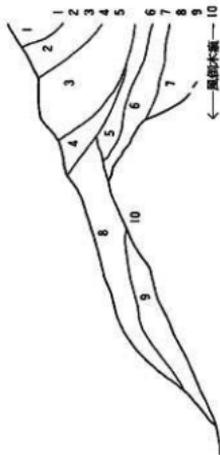
土器は、全体的に剝離、摩耗が著しい。口縁部から胴部へとわずかにすぼまり、そこから底部へとすぼまる直線的な器形である。口唇直下の器面と胴部に貼付帯があり、LRの原体を用いて器面とを同時施文している。

復元土器 No. 10 出土状況図

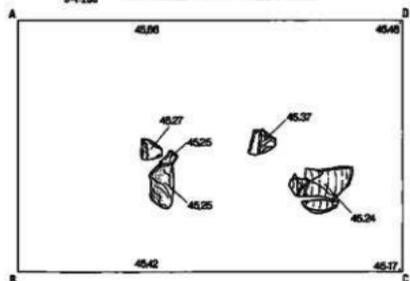


- 1 黄褐色土 (VII)
 2 灰褐色土 (VIIb)
 3 灰褐色土 (VIIb-二次堆積)
 4 黄-灰褐色土 (VII-IIIb-二次堆積)
 5 黄褐色土 (VII) に黄褐色土のフロック
 6 黄褐色土 (VII)
 7 黄褐色土 (VII) 堆積層
 8 灰褐色土 (VIIb-二次堆積)
 9 黄褐色土 (VIIb)
 10 灰褐色土 (VIIb-堆積山)

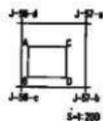
上層図



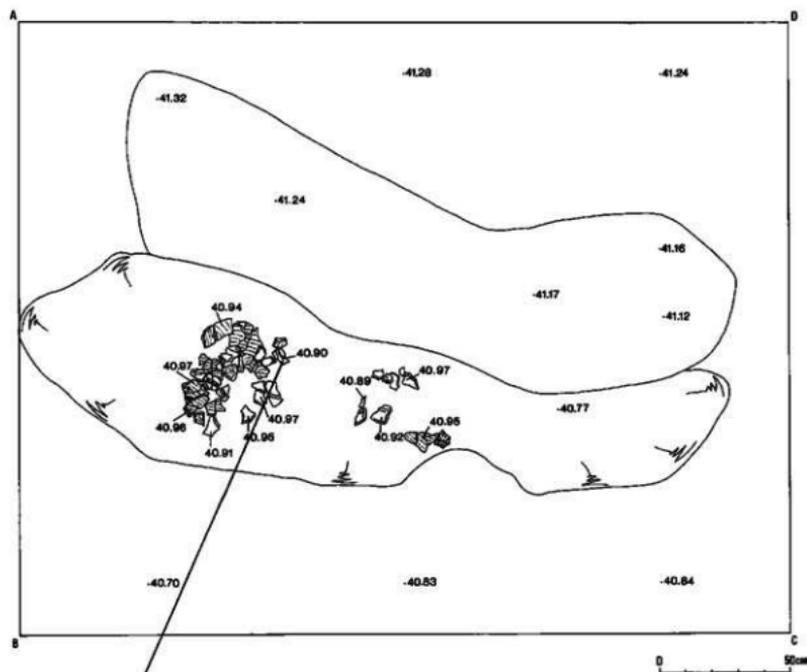
復元土器 No. 11 出土状況図



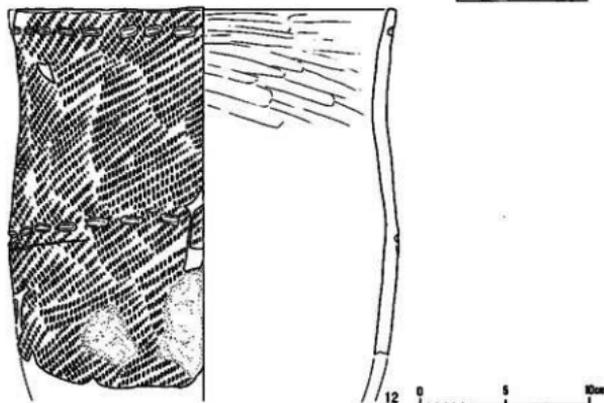
図IV-6-4 包含層出土の復元土器とその出土状況(4)



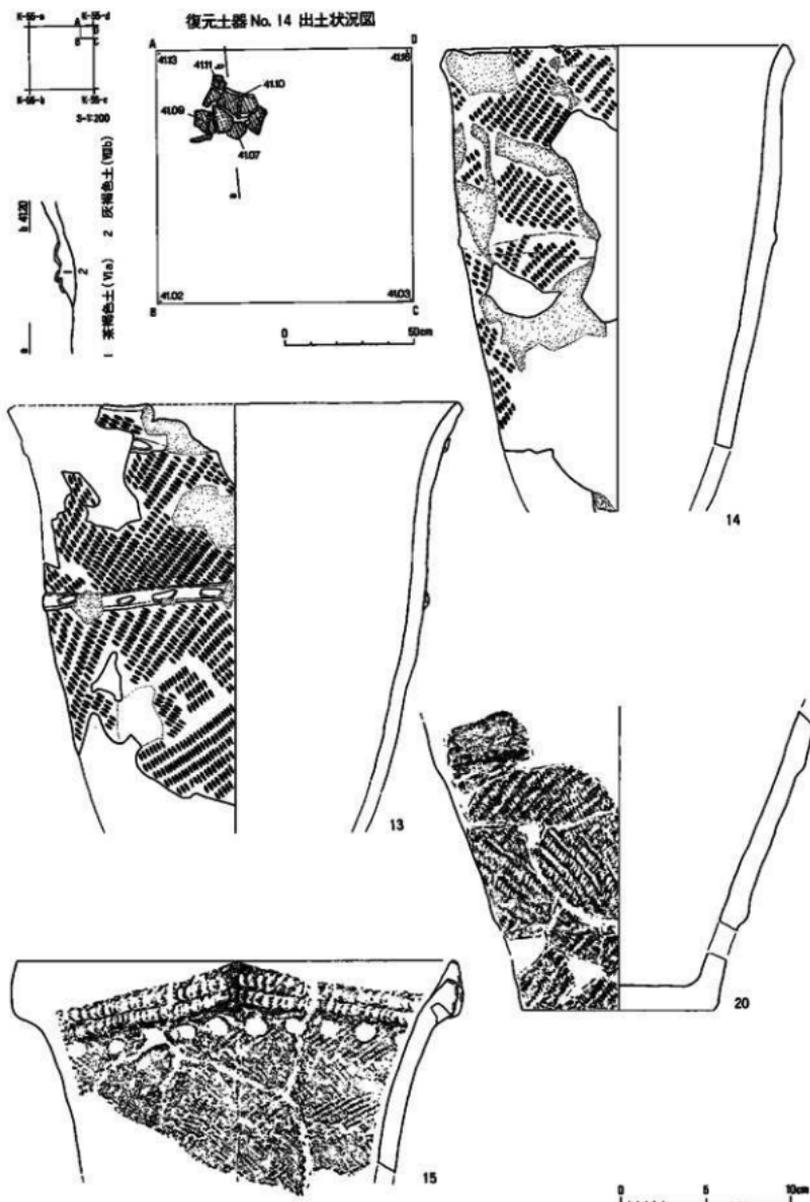
復元土器 No.12・大木式土器出土状況



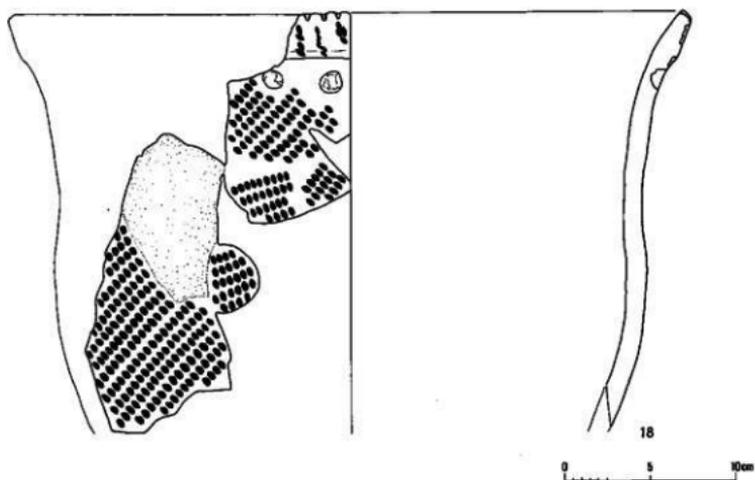
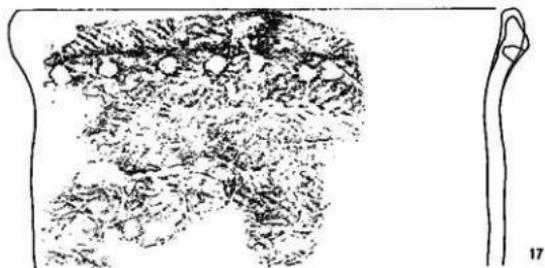
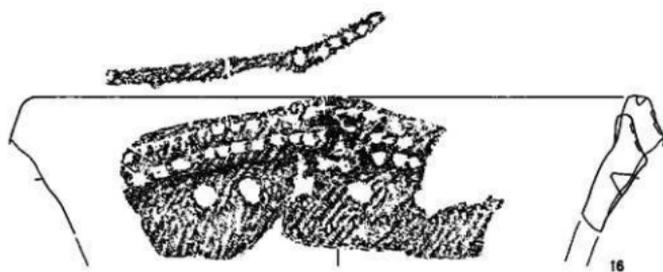
図IV-6-32-7
大木式土器



図IV-6-5 包含層出土の復元土器とその出土状況(5)



図IV-6-6 包含層出土の復元土器とその出土状況(6)



図IV-6-7 包含層出土の復元土器(7)

15は口縁部が外反し、肥厚する口縁部と口唇上に押引文が施されている。地文は結束第二種の羽状縄文で、円形刺突文が比較的せまい間隔で施されている。

16も口縁部が外反し、肥厚する口縁部に刺突文風の押引文が施されている。口唇の施文は、山形隆起部は棒状工具による突き刺し、そこから右部分は刺突文風の押引文が、左は縄文が施されている。器面にはLR原体による結束第一種の斜行縄文が施されている。山形隆起部下の器面には、貼り付けの剝落痕がみられる。

17は割れ口の摩耗が著しいものである。口唇にはあまり高低さのない山形隆起部があり、その部分と肥厚する口縁部は縄文が施されている。地文は判然としないが、結束第二種の回転瓦痕がみられる。

18は口縁部から胴部上半まで器形を把握できたものである。外反する口縁部から頸部で緩やかにすばまり、胴部が張り出す器形である。口唇は刻みが施され、肥厚する口縁部は、板状工具による刺突文がみられる。地文はLR斜行縄文である。円形刺突文は浅く施されており、粘土の動きから半截竹管状工具を回転させて施文したものと観察される。

19は摩耗が著しいものである。図IV-6-29-36と同一個体である。器形は胴部が若干張り出し、底部へと直線的にすばまるものである。地文は結束第一種の羽状縄文で、胎土は砂を含んでいる。

20は底部の破片で、図IV-6-22-74と同一個体のものである。胴部下半から底部へと直線的にすばまる器形で、底部は張り出さない。地文はLRとRLの原体を横方向に回転施文して、羽状縄文を形成している。貼付帯がなされ、その上にも地文が施されているが、なで調整により消されている部分もみられる。

(4)破片掲載土器 [図IV-6-8~35 表IV-6-2]

拓影図と断面の実測図(左側=外面・右側=内面)を組み合わせて示している。縮尺は1/2とし、昨年度までの報告と同じにした。

拓影図は以下の原則に基づいている。

1. 口縁部、胴部破片は、外面が無文のものも採拓した。
2. 口唇・内面は、施文がみられたものについて採拓した。
3. 底部破片は底面はすべて、胴部は器面が残存している部分について採拓した。

実測図は以下の原則に基づいている。

1. 断面図は、口唇の残存状態が良好な部分について実測した。
2. 貼付帯・隆起帯などの粘土の繋ぎ目は、器面で確認できたものを図示してある。
3. 割れ口はその形状を図示した。
4. 断面図に示してある文様は、横方向のものを主としている。
5. 平縁でないものについては、Ⅲ群a-2・b-1・2類の山形突起部(高い部分)は太い線で、Ⅲ群b-3類の北筒式の山形隆起部(高い部分)は細い線で表現している。
残存している破片において、高低差の少ないものは高い部分を図示した。
6. 底部破片は、残存している部分から径を求められるものは復元実測をした。

Ⅲ群a-2類 [図IV-6-8~9-1~24]

サイベ沢Ⅶ式に相当するもの

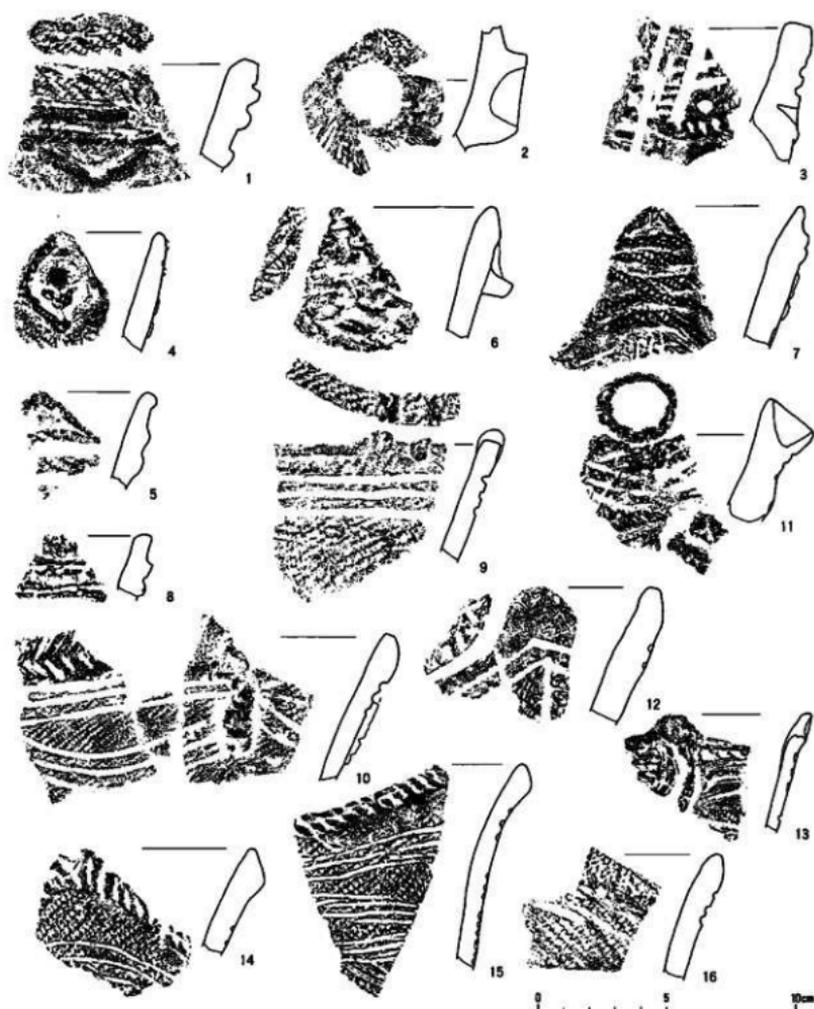
残存する破片における沈線文の有無で、見晴町式と区別した。

a類：貼付文が施されるもの(1~10)

1・3～8は突起部の破片である。1は横方向に2本、「V」の字形に1本粘土紐を貼り付けている。2はドーナツ状の貼付文が施される部分で、口縁部に位置すると考えられる。3は右部分を欠損する。口唇に沿ってと横方向に貼付文がみられ、その上と口唇に刻み目が施されている。器面にみられる2本の沈線文は貼付文を切って描かれている。4は貼付文が部分的に剝落している。5は逆「V」字形と横方向に2本の貼り付けがなされている。6は横方向に厚く粘土が貼付られている。7は突起部が貼付文で構成されている。破片の下位には沈線文が施されている。8は摩耗している。貼付文上は沈線文、あるいは縄線文らしき痕跡が観察される。9は口唇に縄文を施した後、内面にかけて粘土を貼り付けている。器面には3本組の沈線文がみられる。10は突起部を欠損する。沈線文が施されている器面に貼り付けがなされ、その上に刻み目が施されている。口唇には「く」の字状の刻みがみられる。

b類：沈線文が施されるもの(11～24)

11～14は突起部の破片である。11は突起頂部に指頭による圧痕がみられ、器面には沈線文がみられる。12は口唇に沿ってと、縦方向に沈線文がみられ、口唇は刻みが施されている。13は小形の土器とおもわれる。突起部は指頭による圧痕がみられ、器面には沈線文が施されている。14・15は同一個体である。口唇は切り出しナイフ形で、RLの擦糸が押捺されている。地文は粗く細かい部分まで観察できないが、右上がりの縄文がみられる。3本組の弧状の沈線文が施されており、Ⅲ群b-1類の覆林式に共通の特徴である。16・17は口唇が丸形で、縄文が施されている。18は器壁が薄いものである。口唇に擦糸の押捺がみられる。19は口唇が丸形で、擦糸が押捺されている。20は小形のものとおもわれる。口唇には文様の痕跡らしきものが観察されたが、拓影図に表現できなかった。器面の無文地上に沈線文が施されている。21は口唇が丸形で、刻み目が施されている。22は口唇が無文で、2本組の沈線文がみられる。23は不揃いの複数の沈線文が施されている。24は突起部を欠損する。口唇は丸形で、無文である。3本組の沈線文が口縁部から胴部上半にかけて施されている。断面図には示していないが、外面からあけられた補修孔がみられる。



図IV-6-8 包含層出土の土器(1)



図IV-6-9 包含層出土の土器(2)

III群 b-1類 [図IV-6-9~12-25~72]

見晴町式に相当するもの(25~52)

残存する破片において、沈線文が認められないものをこれに分類した。

a類：山形突起部に施されるもの(25~27・39)

25・26は貼付文が施されているものである。25は縦方向に3本粘土紐がみられる。口唇には縄文が施されている。26は横方向に貼り付けがなされ、沈線文もみられる。口唇と器面はRL斜行縄文が施されている。27はRLの縄線文が3列みられる。突起部は指頭により窪みがつけられている。破片の右側の口唇には縄文原体の押捺がみられる。39は山形突起部に、RLの縄線文が3本縦方向に施されている。口唇と器面の施文も同じ原体を用いている。

b類：地文の縄文のみのもの(28~38・40~46)

28・29はともに突起部が肥厚し、口唇と器面に縄文が施されている。30は突起部に指頭による窪みが見られる。

31~33は口唇の施文が縄文のものである。口唇の断面は、31が切り出しナイフ形、32が角形、33は尖り気味である。

34~38・40・41は口唇の施文が捺糸押捺のものである。34・35は口唇が切り出しナイフ形、36~38は角形、40・41は丸形のものである。34・35はともに、RL原体を用いて口唇と器面を施文している。36は口唇がなでられた後、施文している。37は器面に綾絡文がみられる。口唇は摩耗している。38は口唇と器面の施文にRL原体を用いている。40は器面に補修孔がみられる。41は口唇がなでられた後、LR原体により施文されている。

42は口唇の施文が刻み目のものである。地文はLR斜行縄文である。

43~46は口唇が無文のものである。口唇断面が、43・44は角形、45・46は丸形である。

c類：その他のもの(47~52)

47は器壁が薄めのものである。縄文を施した後、なで調整されている部分もみられる。

48~52は口唇が肥厚するもので、他の見晴町式とは異なる感じを受けるものである。48は粘土の継ぎ目が観察され、その部分がなでられている。49・50は地文を施した後、肥厚した部分の下位の器面をなでている。51・52は肥厚した部分が器面と明瞭な段差をもち、なでられている部分が見られる。

榎林式に相当するもの(53~65)

a類：器面に沈線文が施されるもの(53~56)

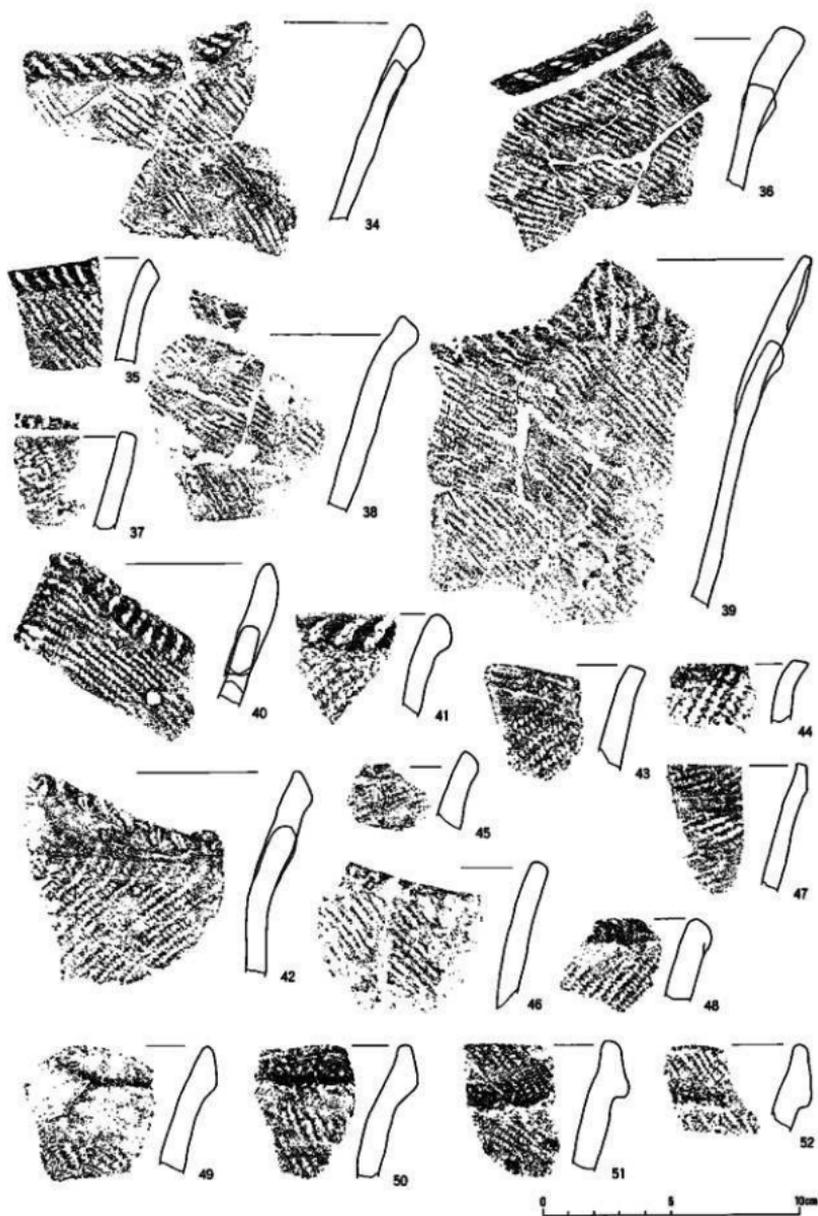
53は山形隆起部の口縁部が肥厚し、口唇に煎手状の沈線文がある。器面には2本組の沈線文がみられる。54は山形隆起部が欠損している。器面には綾絡文が施され、2本組の沈線文が施されている。胎土は海綿骨針を含んでいる。55・56は器面に2本組の沈線文が施されている。

b類：縄文のみのもの(57~61)

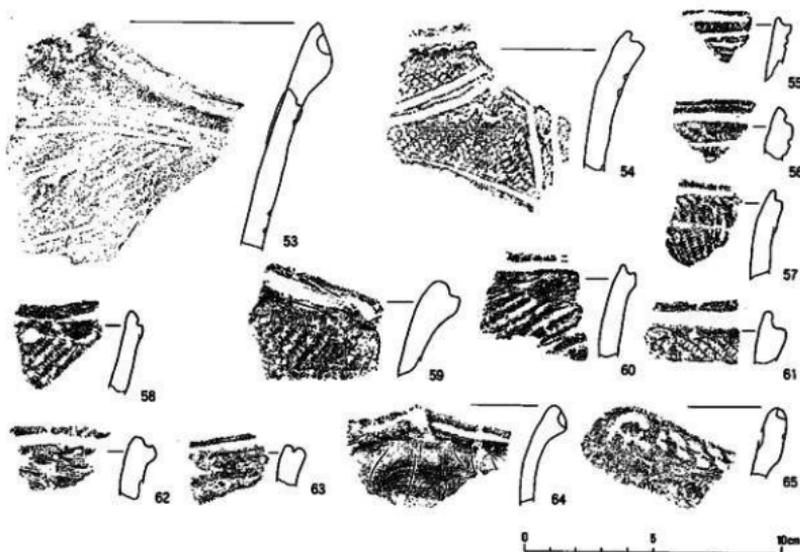
57・58は口唇直下の器面に粘土を貼付している。57は貼付帯上と器面とを同時施文している。59は摩耗している。口縁部が肥厚するものである。60は摩耗している。61は色調などから判断して、56と同一個体かもしれない。

c類：器面が無文のもの(62~65)

62は器面に横方向の調整痕がみられる。63は口唇の沈線文が細目である。64は口唇に煎



図IV-6-10 包含層出土の土器(3)



図IV-6-11 包含層出土の土器(4)

手状の沈線文が施され、器面は横方向に丹念に磨かれている。65は口唇に捺糸を押し捺した後、山形隆起部に獣手状の沈線文を施している。

天神山式に相当するもの(66~72)

天神山式は、半截竹管状工具による施文が特徴的なものであるが、刺突文などの数多く施されてるものについて、すべて断面図に記録すると煩雑になるとおもわれたので、すべて図示していない。

66~70は山形突起部下の器面に粘土塊が貼付られているものである。

66は粘土塊上に粘土紐を横方向に4本貼り付けており、刺突文がみられる。67は粘土塊の剝落痕がみられ、器面には粘土紐が2本貼り付けられている。口縁部に沿って押引文、沈線文が施されている。口唇の文様は判然としない。68は山形突起部を欠損する。器面の縄文は節が細長のものである。69は山形隆起部が肥厚し、貼り付け部分と口唇に刺突文が施されている。70は山形突起部を欠損する。器面には、縦と横方向に押引文がみられる。口唇は肥厚し、刺突文が施されている。

71は山形突起部を欠損する。器面には沈線文、口唇には刺突文が施されている。72は器面に押引文、口唇には刺突文がみられる。

Ⅲ群b-2類 [図Ⅳ-6-13~18-1~86]

大安在B式・柏木川式に相当するものなど。

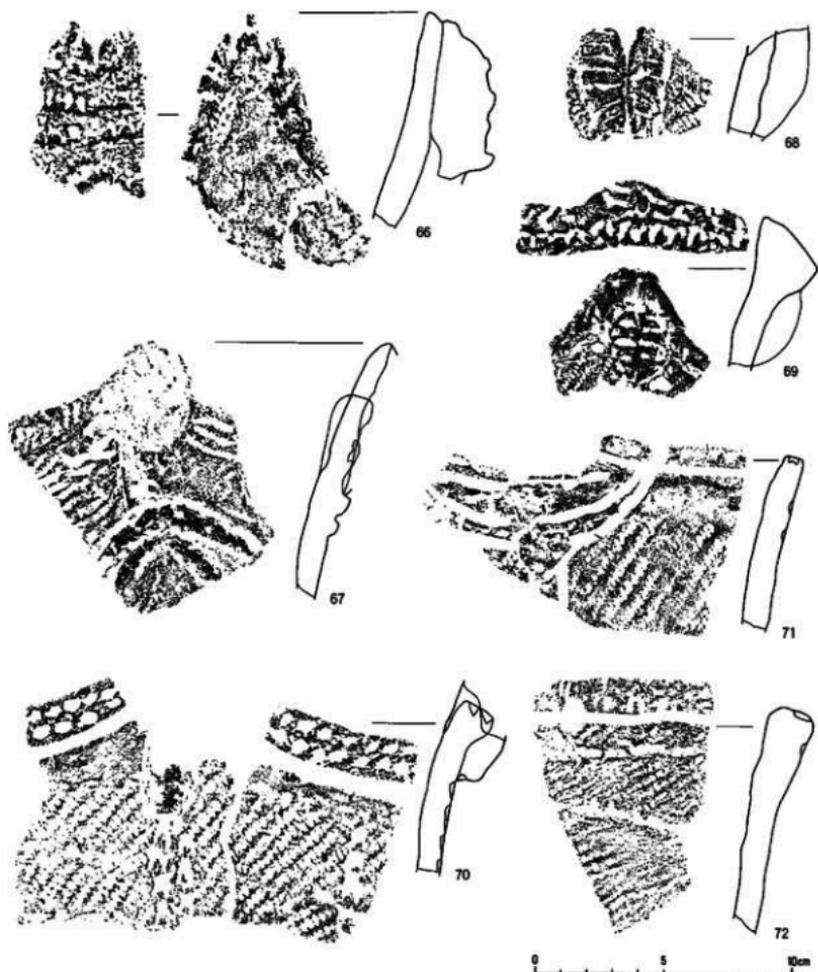
現在、この時期の土器は、前後の型式をつなぐ資料として分類されている。複数の型式を含んでいるとおもわれる。今後、層位的に裏付けられた資料の出土をもって、整理されよう。

a類：沈線文が施されるもの(7~14)

7は口縁部が外反し、頸部がくびれて胴部が張り出すものである。地文の施文にはLRの原体を用いて、口縁部では斜行、頸部以下は縦走縄文である。口縁部にはLRの縄線文が2本、そして、弧状と垂下する2本の沈線文が施されている。口唇は丸みを帯びた角形を呈する。口唇から内面にかけては、丹念な磨きがなされている。大木系土器とも考えられる。8はWH-7の覆土出土のものと同一体である(図Ⅳ-3-5-14)。口縁部が外反し頸部がくびれる器形のものである。器面には地文はみられず、縦横方向に浅め沈線文が施されている。口唇は角形で、押引文が施されている。9は外反する口縁部の破片である。地文は観察されない。くびれる頸部の部分に2本の沈線文が施されている。口唇は丸みを帯びた角形で、円形の刺突文がみられる。10は波状口縁のものである。地文は横走する縄文で、沈線文が施されている。口唇は丸形で、無文である。11は地文がLR原体による横走縄文のもので、縦横方向に2本組の沈線文がみられる。また、刺突文が頸部の沈線文をはさむように、1列ずつ施されている。口唇はやや角形を呈し、無文である。10と同一体かもしれない。12は波状口縁で、頸部がくびれるものである。口唇に沿って1列の押引文がみられる。頸部には刺突文が施され、2本の沈線文がそれをはさんでいる。13は外反する口縁部で、波状のものとおもわれる。地文はLRの縦走する縄文がみられ、縦方向に沈線文が施されている。14は摩耗が著しいものである。口縁部にLR縄線文、刺突文、沈線文の痕跡らしきものが観察される。

b類：貼付帯をもつもの(1~6)

1は昨年度報告の復元個体と同一体のものである(図Ⅶ-4-4-9)。山形隆起部の破片で、貼付帯部分は剝落しており、その剝落部分にも縄文がみられる。器面には縄線文が施されており、原体はLRである。口唇は半載竹管状工具による刺突文が施されている。2は外反する口縁部から頸部で、くびれる器形とおもわれる。頸部の少し下の器面には貼付帯があり、その上には半載竹管状工具による刺突文が施されている。口縁部は口唇に近い部分は縄文が観察されるが、それから下の頸部までの部分は無文である。口唇は丸みを帯びた角形で、無文である。大木系土器であるかもしれない。3は摩耗が著しいものである。口縁部近くの「∩」状を呈する貼付帯が施されている部分であると考えられる。貼付帯を施した後、地文を施文している。4は胴部上半に位置する貼付帯であると考えられる。地文はLRの原体を用いた横走縄文で、貼付帯近くの器面はなでられて消されている。貼付帯上は半載竹管状工具による刺突文が施されている。5は胴部上半に貼付帯をもつ胴部の破片である。地文は縦走する縄文で原体は判別できない。貼付帯上はRL縄線文が施され、両方の器面との境にも同じ施文がみられる。6は胴部上半に貼付帯がなされている。地文は縦走縄文で、貼付帯が剝落している部分には地文は観察されない。破片の上部の器面に縦と横方向、貼付帯上とそれをささむ器面の両側にRL縄線文が施されている。内面の調整は丹念である。



図IV-6-12 包含層出土の土器(5)

c類：刺突文が施されるもの(31~34・41)

31は口唇直下の器面が隆起帯状に肥厚し、そこに2列の刺突文を施している。32は無文地の器面と口唇に、押引文風の刺突文が施されている。胎土には海绵骨針を含む。33は口唇直下の器面に、半截竹管状工具を回転させて施文したとおわれる円形の刺突文がみられる。胎土には海绵骨針を含む。34は口縁部の隆起帯状に高まっている部分に、円形に刺突文と押引文がみられる。断面図には刺突文を図示した。地文は羽状縄文で、口唇にも縄文

がみられる。胎土には海綿骨針を含む。41は口唇が肥厚し、器面にも刺突文が施されている。

d類：縄線文が施されるもの(15~32)

縄線文はすべてLR原体を用いている。

15は摩耗が著しいものである。口縁部と口唇に縄線文が施されている。16は地文は判然としない。器面には4本の縄線文が施されている。口唇は丸みを帯びた角形を呈し、縄文がみられる。17は口唇にも縄文がみられる。18は縦方向と横方向に縄線文が施されている。口唇にも縄文が施され、内面の調整は丹念である。19は波状口縁のものである。地文は横走気味の縄文である。口唇に沿ってと、山形突起部から垂下するように縄線文が施されている。口唇は磨きがなされている。20・21は同一個体で、器面に2本の縄線文が施されている。22・23は口唇が磨かれている。24は地文が横走気味である。25は地文が横走するもので、口縁部に円形の粘土を貼付した後、縄線文を施している。胎土には海綿骨針を含む。26は口唇断面がやや角形を呈する。27は波状口縁のもので、口唇が角形を呈する。破片の左下に縄線文がみられ、胎土には海綿骨針を含む。28は口唇部が角形で、器面と同じ縄文が施されている。29は口唇直下の器面に貼付帯が施されている。LR原体を異なる方向に回転施文することで羽状縄文を形成し、その部分に縄線文を施している。口唇は角形で、なでられている。Ⅲ群b-3類に分類されるかもしれない。30は口唇に縄線文が2本施されている。口唇断面は角形を呈する。

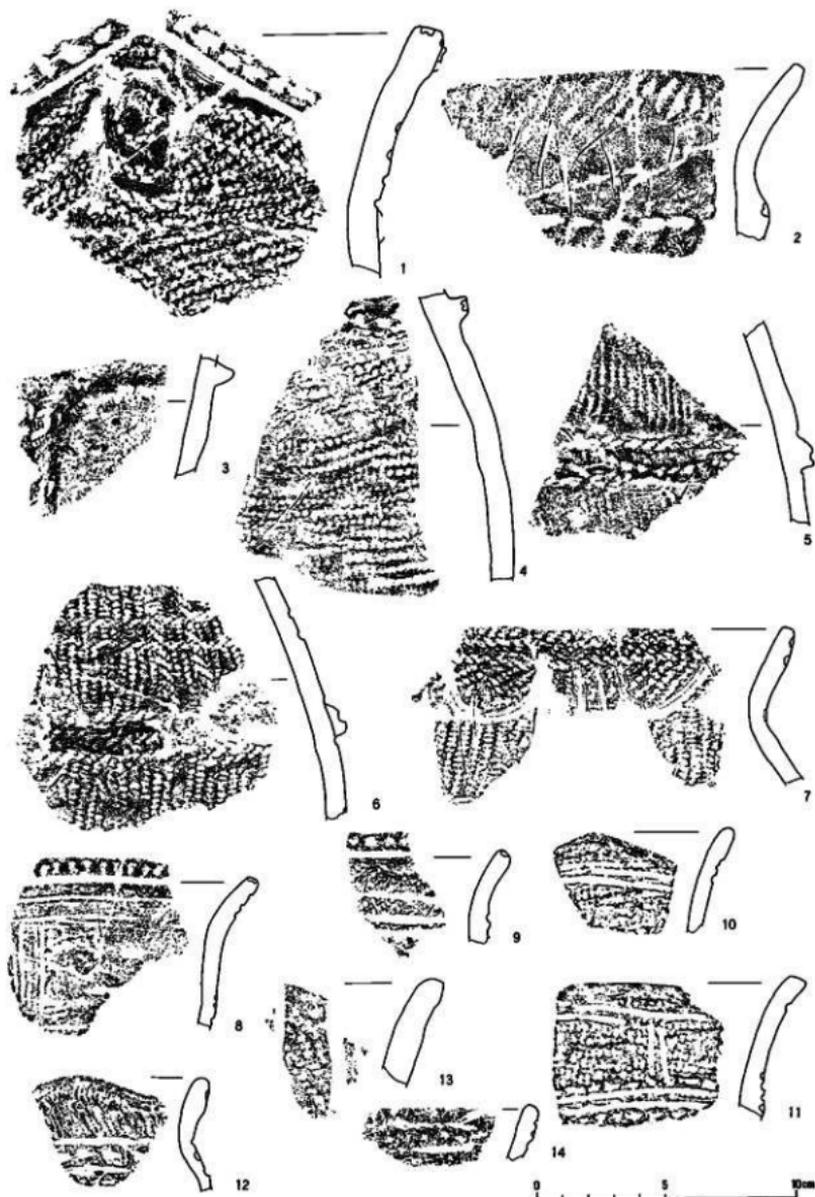
e類：地文の縄文のみのもの(35~40・42~48・50~67)

35~40・42~48は口唇に施文されているものである。47は口唇部に縄線文が施されている。35は外反する波状口縁で、半截竹管状工具を真上から突き刺して、組み合わせたとおられる円形の文様がみられる。36も波状口縁のもので、円形の刺突文がある。37~39は円形の刺突文が施されている。40は刻み目風の刺突文がみられる。42・44は棒状工具、43は先端部が二又状の工具により、刺突文が施されている。45は押引文風の刺突文が施され、48は地文が縦走縄文で、刻み目が施されている。

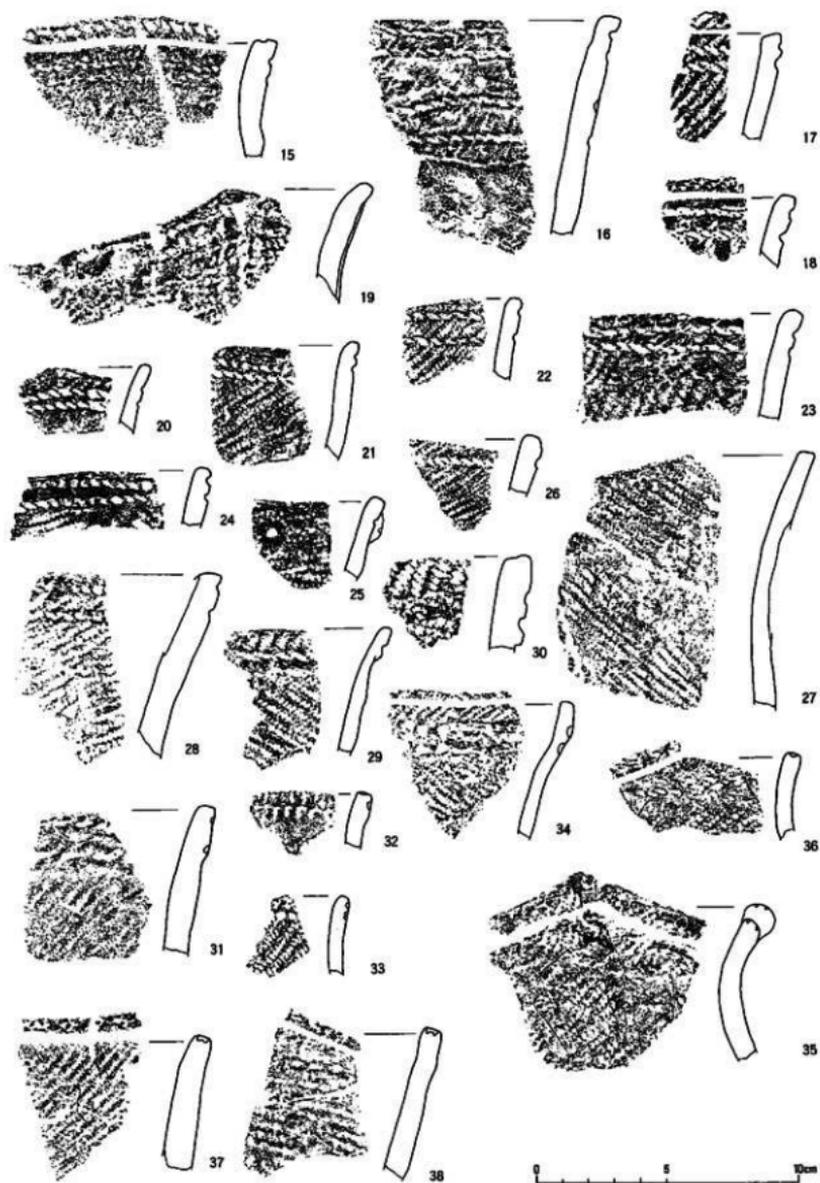
50~54は口唇に縄文が施されるものである。50は高低差の少ない突起部をもつもので、地文はLR原体による斜行~横走縄文である。51・52・53は地文が縦走気味の縄文で、52は内面にも縄文が施されている。54は地文の原体がLRで、口唇断面形は角形を呈する。55~61は口唇が無文のものである。55は図IV-6-1-4と同一個体のものである。高低差の少ない波状口縁のもので、口縁部が外反する器形である。地文は最終段がRの原体による複節である。口唇は丹念になでられている。56は高低差の少ない突起部をもつもので、縄文はやや縦走気味である。57は波状口縁のもので、地文は横走する縄文である。口唇断面形はやや角形である。58は地文がRL原体によるもので、縄の押捺が口唇直下の器面から下位へつづくようである。口唇は磨かれている。59はRL原体により地文が施されているが、観察される節などは小さめである。口唇には粘土が2本貼付られている。60は摩耗が著しい。61は地文が横走気味で、口唇断面形は角形である。

f類：柏木川式と考えられるもの(68~86)

68は口唇の貼付帯の部分であるとおわれる。口唇と器面に半截竹管状工具による刺突文が施されている。69は摩耗が著しいものである。山形突起部から器面にかけて粘土を貼り付け、その上と口唇、口縁部に半截竹管状工具による刺突文が施されている。70は地文施



図IV-6-13 包含層出土の土器(6)



図IV-6-14 包含層出土の土器(7)



図IV-6-15 包含層出土の土器(8)



図IV-6-16 包含層出土の土器(9)

文後に、粘土が貼付られ、その上と口縁部にLR縄線文が施されている。71は縦走気味の縄文を施文後、口縁部に貼り付けをし、縄文を施文している。72は比較的小形の土器の山形突起部である。器面には円形の刺突文と押し文が施されている。口唇の様は判然としない。73は口唇直下の器面を貼り付けにより肥厚させ、その上半截竹管状工具による押し文風の刺突文が施されている。74は地文はLR原体による斜行縄文で、胴部では横走気味である。口縁部と口唇に半截竹管状工具による刺突文が施されている。75は胴部上半で横環する貼付帯をもつものである。地文の原体はLRで、貼付帯上には円形の刺突文が施されている。76は外面が無文で、断面が三角形に肥厚する口縁部には円形の刺突文が施されている。77は隆起帯状に肥厚する口縁部と口唇に刺突文が施されている。78は口唇直下の器面に幅広く貼付帯がなされ、その上は刺突文が施されている。79は器面と口唇に押し文がみられる。80は地文が結束第一種の羽状縄文で、2列の押し文がある。81・82は口唇直下の器面に貼り付けがなされている。83は口唇直下の器面が高くなっている。地文は粗く判然としないが、複節のようである。84は比較的破片が集まったものである。口唇は断面が三角形に肥厚し、なでられ地文が消されている部分がある。地文はRL斜行縄文である。

8類：その他のもの(46・49・62～67)

いずれも地文が縄文以外のものである。46・49・65は口唇に施文されているものである。46は、外面が無文で、刺突文が施されている。49は摩耗のため判然としないが、地文は横走する燃糸文とおもわれる。波状口縁のもので、口唇の施文は、押し文風の刺突文であると推察される。62は口唇断面がやや角形で、内外面に条痕が観察される。63は外面に先端部が二又状の工具で引っ掻いたような痕跡が多数みられる。胎土には海綿骨針を含む。64は口唇断面が丸形で、器面には縦方向の複数の沈線文が施されている。65は、地文がLの横走する燃糸文で、途中まで穿たれた補修孔らしき痕跡がみられる。口唇部は丸形で磨きがかけられている。66は口唇が角形で、外面は条痕が観察される。胎土には海綿骨針を含む。

III群b-3類 [図IV-6-19~23・図IV-6-24~31]

ノダップII式に相当するもの [図IV-6-19~20-1~33]

全体的に、本型式と後続の煉瓦台式には、縄文の「節」が細長のものが多いという特徴があげられる。

a類：残存している破片において、口唇に磨き調整が認められるもの(1~18)

1は口縁部の外反が著しいものである。2・3・5はともに頸部がくびれ、地文の原体がLRのものである。4は口縁部の狭い幅の部分が外反する。6は地文が横走気味のものである。7は外反が著しい。8・9は口唇断面が厚めである。10は補修孔がみられる。11・12は器面が摩耗している。13・15は地文がLRである。14は破片の右下部分に横走する縄文が施されている。16は器壁が薄いもので、縦走する縄文がみられる。17は地文がRLである。18は器面に縦走・横走する縄文が施されている。

b類：その他のもの(19~32・33)

19は口縁部の外反が著しい。20は摩耗している。21は地文施文後、なでられている。22は地文がLRである。23は口縁部に窪んでいる部分が認められる。24~26は口縁部が外反する。27・28・29は口唇断面が角形に近い。30は口唇直下の器面が張り出す。32は頸部が

若干すばまり、口唇断面は角形である。煉瓦台式に分類してもよいものである。33は口唇断面が角形であるが、頸部がくびれる器形のものである。

煉瓦台式に相当するもの [図IV-6-20~23-34~84]

煉瓦台式の特徴の一つに羽状縄文があげられる。また、本遺跡出土の土器は、個体識別・接合が困難であった。それゆえ、ある破片において斜行縄文であるものも、個体としては羽状縄文が施されていた可能性もあることを断っておく。なお、胎土に海綿骨針を含むものが比較的多く、含んでいるものは、34・37~43・45・47・49~51・53~56・59・61・62・65・68~70・82・84である。

a類：短刻線文が施されるもの

a-1類 貼付帯(隆起帯)上に短刻線文が施されるもの(34~53)

34~46・49は、口唇から少しはなれた器面に貼付帯もつものである。34は地文が貼付帯上で羽状縄文を形成し、そこに短刻線文が施されている。35は、貼付帯上に半截竹管状工具による刺突文風の短刻線文が施されている。36は2本の貼付帯上に細めの短刻線文が施され、間の器面はなでられている。37~43は地文を貼付帯上と器面とを同時施文している。37は2列、38~43は1列の短刻線文が施されている。44は地文は判然としない。粘土の塊が短刻線文の間にみられる。45は貼付帯下の器面が無文である。貼付帯上には刺突文風の短刻線文が施されている。46は貼付帯上で羽状縄文を形成し、そこに短刻線文が施されている。49は長めの短刻線文が施されている。

47・48・50~53は口唇直下の器面に貼付帯をもつものである。47は比較的小形の土器で、器壁が薄いものである。地文は縦走気味の縄文で、3本の貼付帯上にそれぞれ短刻線文が施されている。48は口唇に2列の刺突文風の短刻線文がみられる。50~53は地文を貼付帯上と器面とを同時施文している。52の短刻線文は、工具を右上方方向に抜くようにして連続的に施文している。

a-2類 貼付帯(隆起帯)がなく、短刻線文があるもの(54~57)

54は縦横方向に短刻線文が施され、交点には円形の粘土がみられる。55は比較的小形の土器で、器壁が薄いものである。中空の円形粘土があり、地文が施文されている部分のみみられる。56は円形の沈線文が施されている。57は先端部が二又の工具による施文である。58は口唇直下の器面に短刻線文がみられる。59は2列の短刻線文がある。60は口唇に縄文が施されている。

b類：貼付帯(隆起帯)があり、その上に縄文が施されるもの(61~74)

貼付帯上と器面とが同時施文のものについては個別には記述していない。

61~66は口唇から少しはなれた器面に貼付帯をもつものである。61は地文はR L斜行縄文である。62は貼付帯の断面が三角形である。地文はL R斜行縄文である。63は摩耗が著しい。貼付帯の下縁で羽状縄文を形成している。64・65は地文の原体はL Rで、66はR Lである。

67~74は口唇直下の器面に貼付帯をもつものである。67は器壁が比較の厚いものである。68は別施文のもので、貼付帯上が斜行、器面が横走する縄文である。69は地文の原体はL Rである。70は摩耗、剝落が著しいもので、器面の地文が観察されない。胎土に海綿骨針を含む。71は口唇直下の器面に幅広の貼付帯がなされている。72は口唇直下の器面に隆起帯状のものが認められる。この部分と器面との間の無文部分を挟んで、羽状縄文になって



図IV-6-17 包含層出土の土器(10)

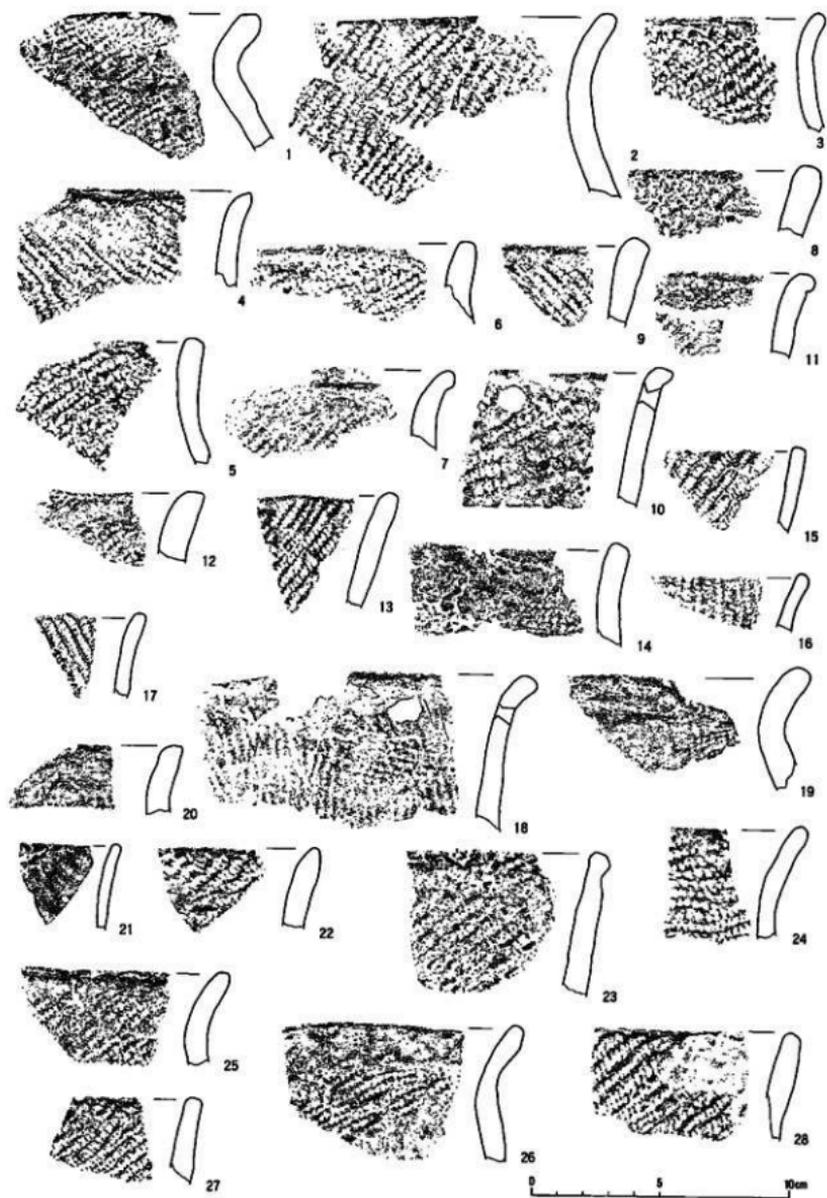


図IV-6-18 包含層出土の土器(1)

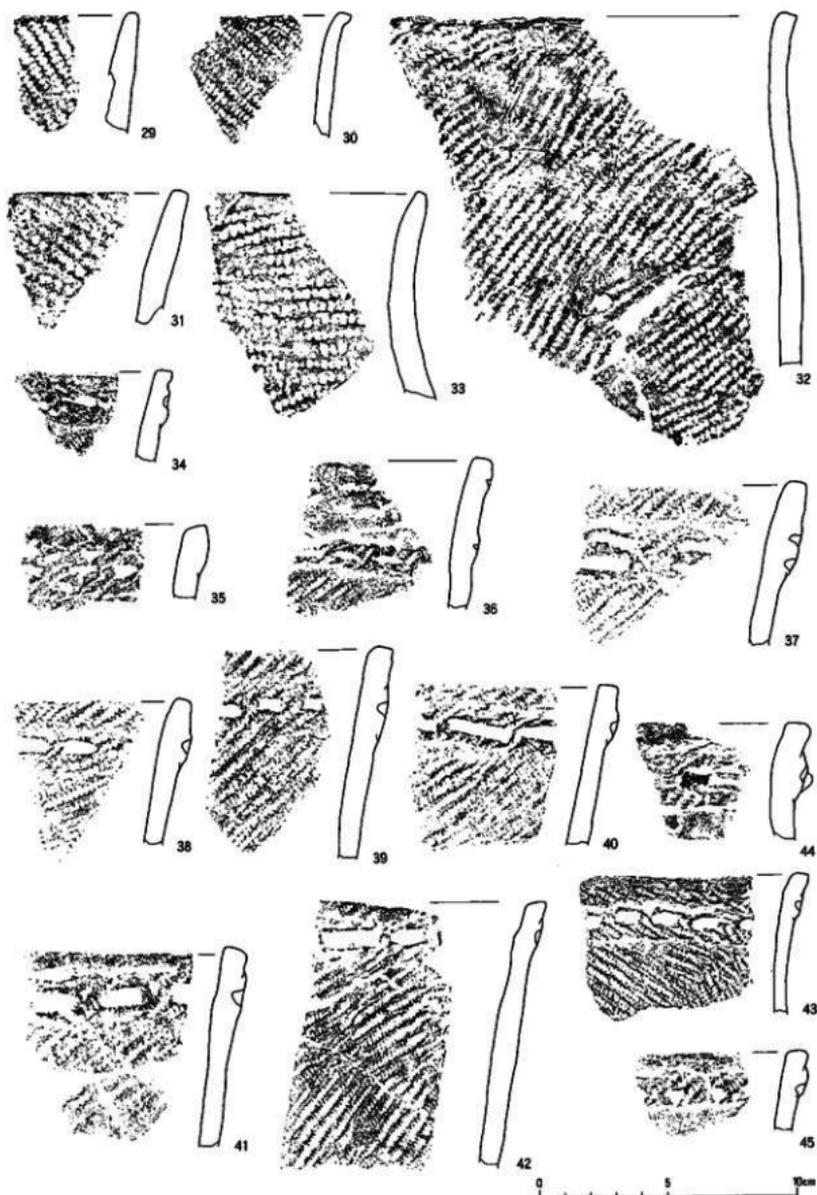
いる。73は器面の地文施文後に貼付帯なし、別施文することで羽状縄文を形成している。74は図IV-6-6-20の口縁部である。やや幅広い貼付帯があり、器面と同時施文である。貼付帯上は横方向になでられている部分もみられ、そこは無文となっている。胴部は、別原体を横方向に回転施文することで羽状縄文を形成している。

c類：地文の縄文のみのもの(75~84)

75は口唇にも縄文が施文されている。76は節が小さいもので、口唇直下の器面で羽状縄文を形成している。77は口唇はやや丸みを帯びた形で、地文はRL斜行縄文である。78は



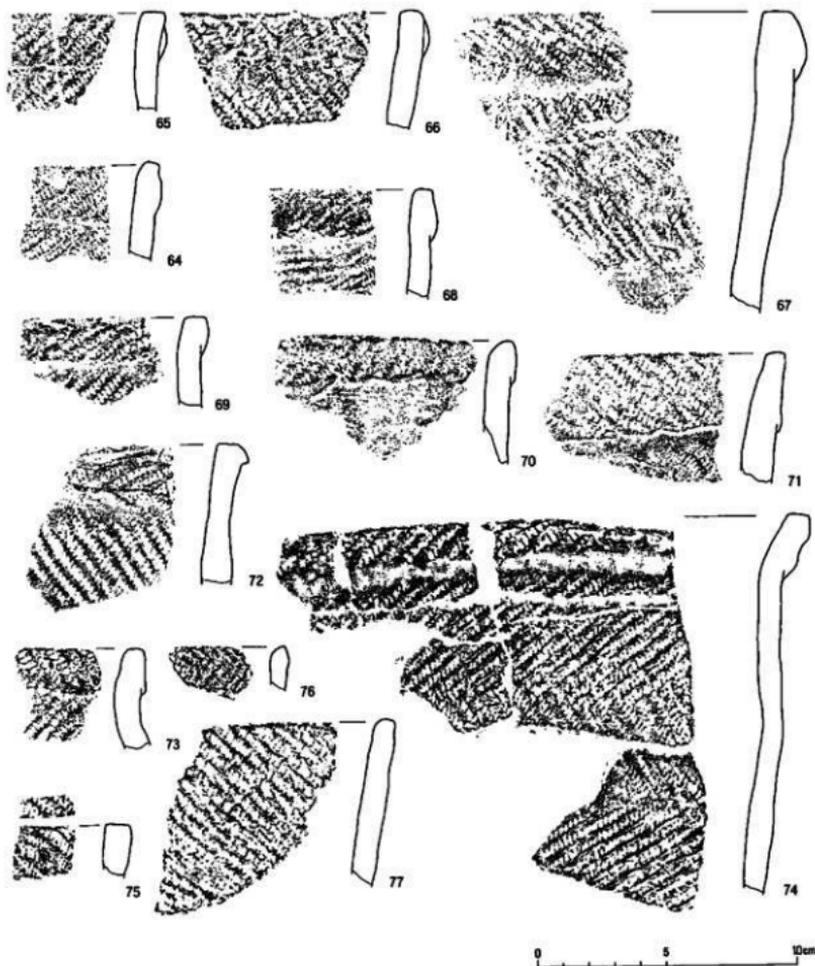
図IV-6-19 包含層出土の土線図



図IV-6-20 包含層出土の土器(3)

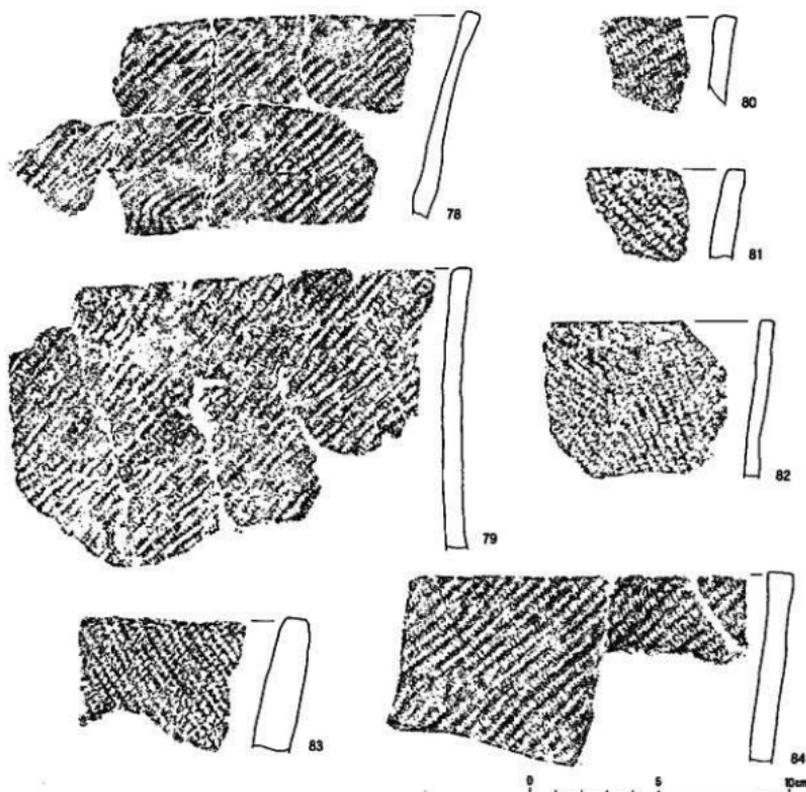


図IV-6-21 包含層出土の土器④



図IV-6-22 包含層出土の土器(19)

比較的破片の集まったもので、直線的にすばまる器形である。地文はL R斜行縄文である。79も比較的破片の集まったもので、直線的な器形である。地文はL R斜行縄文である。80の地文はL R斜行縄文である。81は摩耗している。口唇直下の器面で羽状縄文を形成している。82は地文が縦走する部分もみられる。83はやや器壁の厚いものである。地文はR L斜行縄文である。84の地文はL R斜行縄文である。



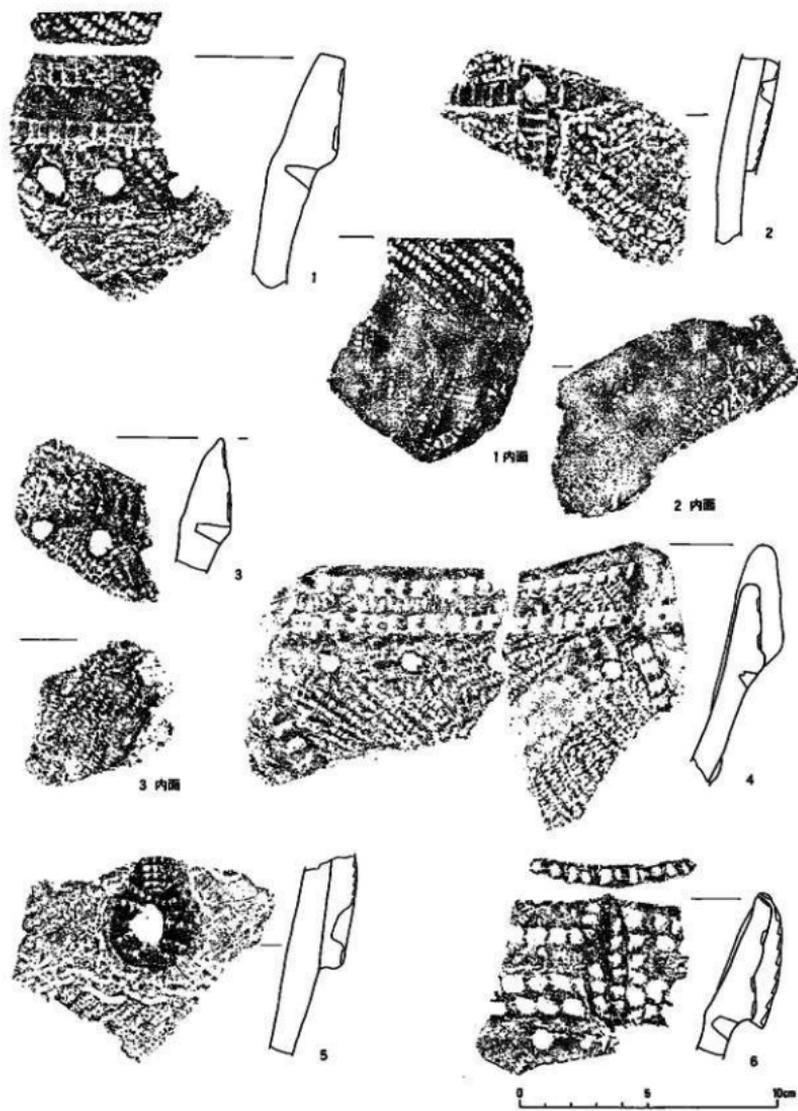
図IV-6-23 包含層出土の土器⑩

北筒式に相当するもの〔図IV-6-24~31-1~71〕

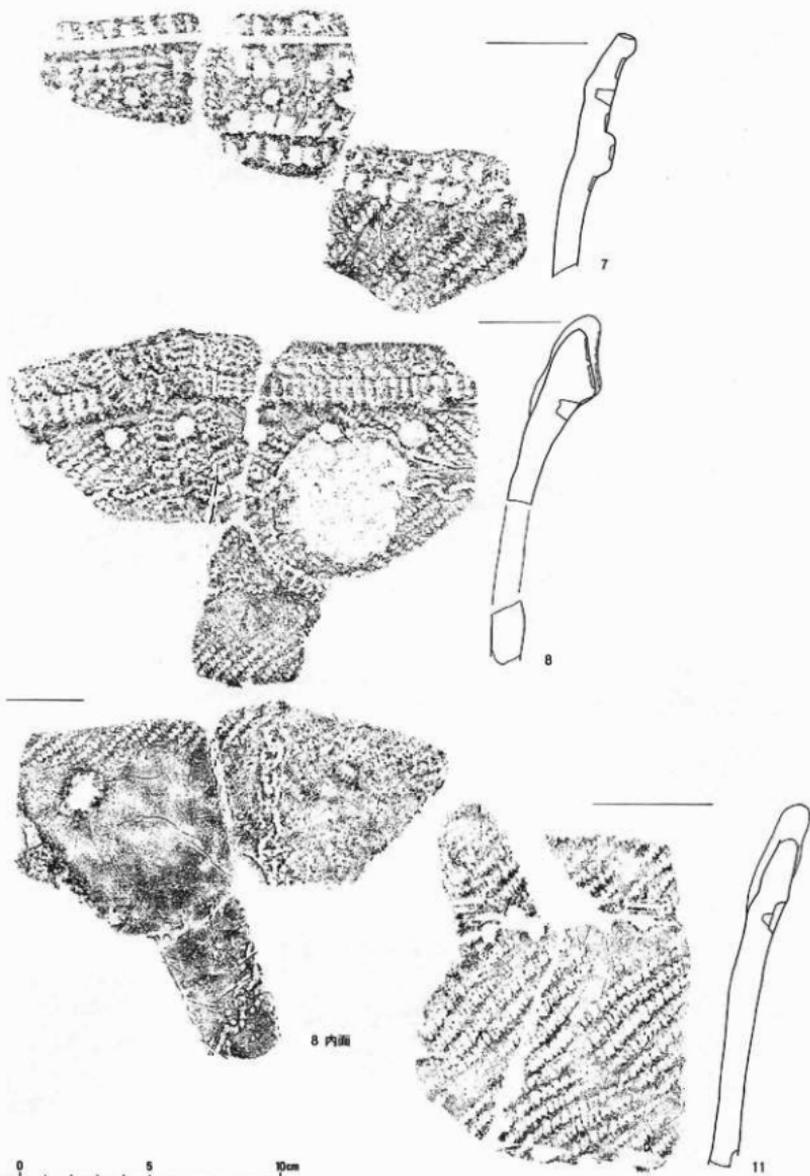
昨年度の川西地区の調査で、北筒式がまとめて出土した。本年度も数多く出土している。現在のところ、北筒式が主体的な在り方を示す遺跡としては、高岡1遺跡が最南西端となる。本遺跡から出土する北筒式の特徴としては、個体数、バリエーションの多さがあげられる。これらが時期差、地域差であるのかは本資料からは判断できない

ⅱ類：器面に貼付帯があるもの(1~7)

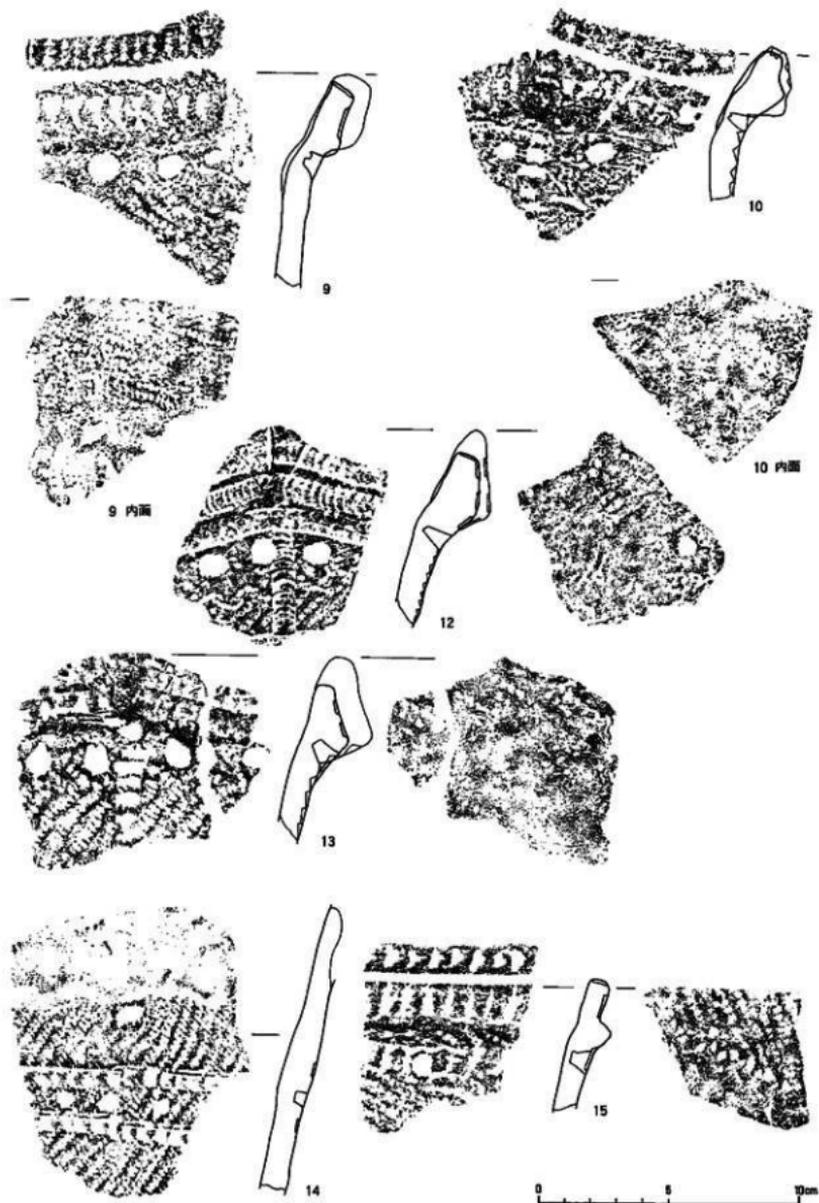
1・2は同一個体のものである。地文は結束第二種の羽状縄文で、1は口縁部と器面に、2は交差する貼付帯上に押引文が施されている。2の貼付帯は地文施文後になされている。口唇と内面に縄文がみられる。3は摩耗している。破片の右下に押引文が施された貼付帯がある。口縁部は肥厚し押引文が施されている。内面は縄文がある。4は貼付帯がなされた後、地文が施されている。原体は結束第一種羽状である。貼付帯上と口縁部には押引文が施されている。器面の一部に剥落痕がみられ、山形隆起部から二又に貼付帯を施していた



図IV-6-24 包含層出土の土器(17)



図IV-6-25 包含層出土の土器破



図IV-6-26 包含層出土の土器(9)

ようである。口唇から内面は丹念に調整がなされている。胎土には海綿骨針を含む。5は胴部の破片で、地文施文後に、貼付帯を施している。地文は綾絡文である。貼付帯上は押引文である。6はWH-11(図IV-3-18-5)と同一個体のものである。横方向の貼付帯と押引文を施した後、内面から口縁部にかけて縦方向の貼付帯がなされ、その上と両側に押引文が施されている。円形刺突文は貼付帯がなされてから施されている。7は口縁部の下位の器面に横方向の貼付帯がなされている。この上と下縁の器面、口縁部、口唇に押引文が施されている。円形刺突文は口縁部に施されている。

b類：器面に押引文(刺突文)が施されるもの(8~15)

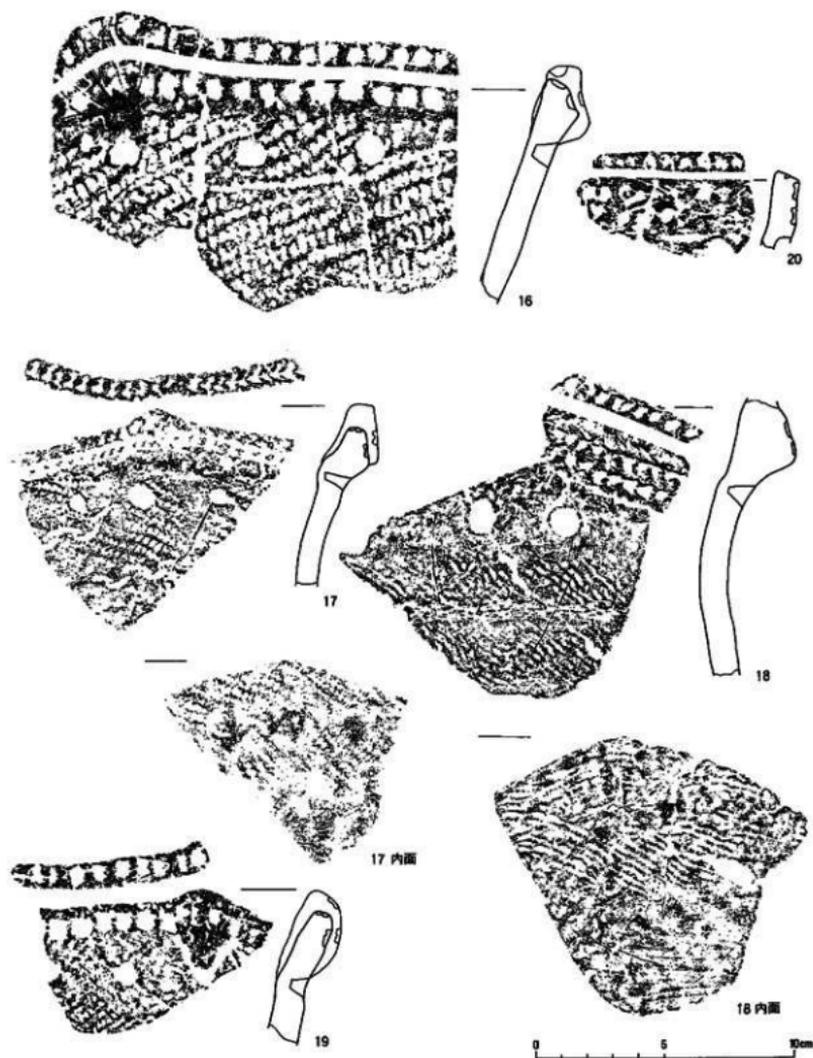
8は地文が結束第二種の羽状縄文で、山形隆起部付近の口縁部から器面には2列の押引文が、肥厚帯上の押引文を切って施されている。内面には縦方向に、結束部の回転圧痕がみられる。9は器面に半載竹管状工具による刺突文が施されている。口縁部には横方向に、縦長い単位の刺突文がみられるが、これは工具二つ分とおもわれる。円形刺突文は、中央分に粘土が寄っている状況が顕著に捉えられ、半載竹管状工具を回転させて施したものの推測される。10は内外面ともに摩耗している。山形隆起部から垂下する押引文がみられる。内面には結節部の回転圧痕がみられる。11は口唇部付近が摩耗している。地文はLRの斜行縄文で、口縁部と胴部には、1列づつ刺突文風の押引文がみられる。口縁部のものには、その後には施されたとおもわれる円形刺突文がある。12は、山形隆起部から垂下する半載竹管状工具による押引文がみられる。図示しなかったが、口唇にも同様な押引文がある。円形刺突文は押引文を切って施されている。外面にはベンガラが付着していたようである。13は山形隆起部から垂下する押引文がみられる。口唇の施文は、摩耗が著しいため不明である。14は胴部破片である。地文がLRで、横方向の押引文と小さめの円形刺突文が施されている。15は外面全体に炭化物の付着が著しいものである。口縁部の押引文を切って円形刺突文を施している。器面の押引文は円形刺突文から垂下している。

c類：口唇と口縁部に施文されるもの(16~27)

16は地文はLR斜行縄文で、半載竹管状工具による刺突文が施されている。17は摩耗している。先端部が二又状の工具により押引文が施されている。18は地文の原体が無節のもので、器面には原体端部が回転した痕跡もみられる。施文は半載竹管状工具による押引文である。19は地文が結束第一種の羽状縄文で、その後、山形隆起部から器面にかけて粘土を貼付している。施文は先端部が二又状の工具による押引文である。円形刺突文は小さめである。20は施文が半載竹管状工具による刺突文で、口縁部のものは回転施文されており、円形を呈する。21は地文がRの無節である。施文は押引文である。22は地文がLR斜行縄文で、先端部が二又になった工具により施された押引文がみられる。23は拓影図では判然としないが、結束第二種の回転圧痕がみられる。施文は板状工具による押引文であるが、円形刺突文はそれを切って施されている。24は摩耗が著しいものである。施文は半載竹管状工具のようである。25・26も半載竹管状工具を用いた押引文が施されている。27は比較的小形の土器の山形隆起部である。摩耗が著しいが、押引文が施されている。

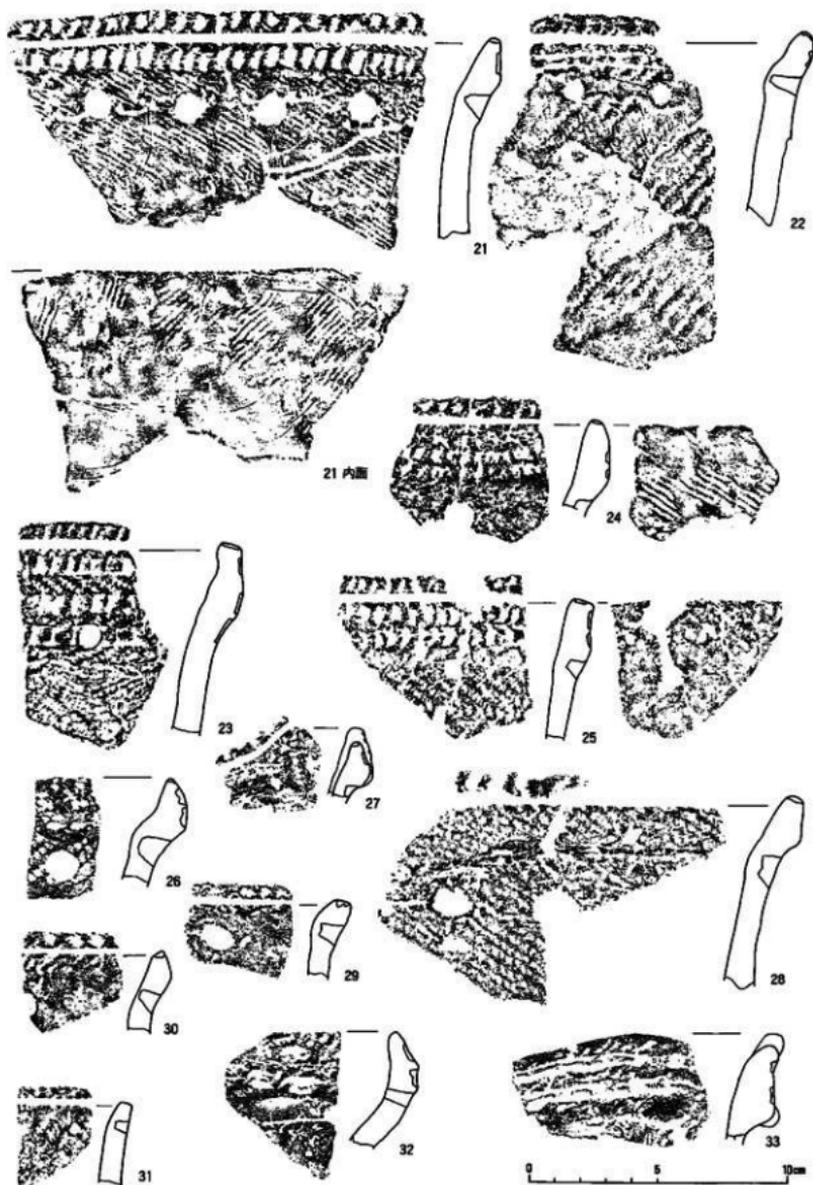
d類：口唇に施文されるもの(28~31)

28は摩耗が著しい。口唇の施文は撻紐押捺と推測される。円形刺突文は浅いものである。29は摩耗のためか、器面は無文である。施文は先端部が二又状の工具による押引文である。30も器面は無文である。施文は半載竹管状工具による押引文である。31は摩耗しているが、



図IV-6-27 包含層出土の土器(2)

地文は右上がりの縄文が観察される。円形刺突文は小さい。施文は半截竹管状工具による刺突文、あるいは押引文である。



図IV-6-28 包含層出土の土器(2)

e類：口縁部に施文されるもの(32~44)

32は著しく内湾するものである。隆起帯状の部分に半載竹管状工具による刺突文が施されている。その下の器面には横方向に調整された部分があり、そこに円形刺突文とおもわれる痕跡が認められる。Ⅲ群b-2類に分類されるものかもしれない。33は山形隆起部の破片で、半載竹管状工具による押引文が施されている。34は板状工具による押引文が3列みられる。35は地文は結束第二種の羽状縄文で、施文は板状工具による押引文である。円形刺突文が横環する部位にも押引文が施されている。36は図IV-3-2-19の口縁部と考えられるものである。地文は結束第一種の羽状縄文で、口縁部は地文施文後、板状工具による押引文を施している。また、押引文は円形刺突文が横環する部位の上にも施されている。37は山形隆起部が2単位みられる。口縁部は、縄文地に板状工具による押引文が施され、円形刺突文が横環する部位にもみられる。38は肥厚する口縁部に、半載竹管状工具による押引文が施されている。39は板状工具を用いて押引文を施している。40は地文の原体がLRで、板状工具による押引文が2列みられる。41は小形の土器のもので、半載竹管状工具による刺突文が施されている。円形刺突文は小さい。42は口縁部の縄文地に、板状工具による押引文が2列施されている。43は地文の原体がLRで、半載竹管状工具による押引文が2列施されている。これらの間は隆起帯状に肥厚している。44は摩耗が著しい。押引文の痕跡が1列、口縁部に観察される。

f類：地文の縄文のみのもの(45~62)

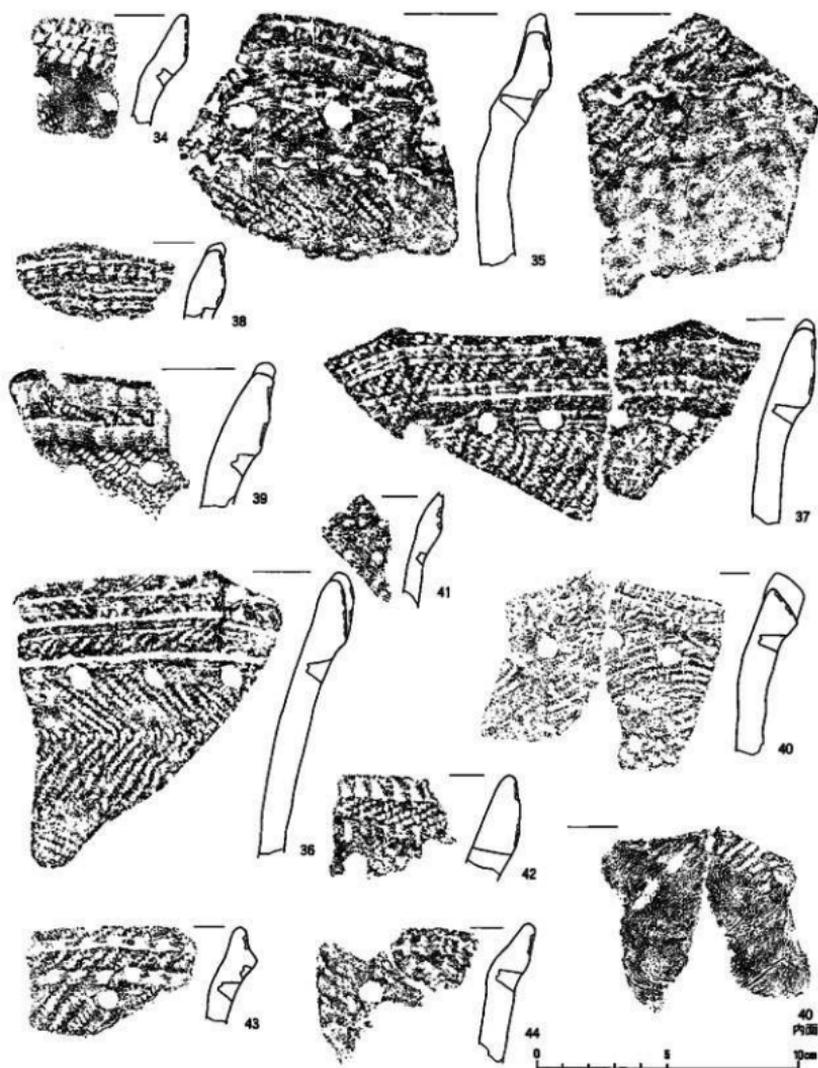
45は口縁部が肥厚し、丸形である。地文は結束第一種の羽状縄文である。46は摩耗している。地文は結束第一種の羽状縄文である。47は地文は羽状縄文で、捺經の側縁痕跡のような痕跡がみられる。48は摩耗が著しいものである。口縁部に綾格文が観察される。49は比較的小形の土器の口縁部で、円形刺突文も小さめである。50・52~55は口唇にも縄文が施されている。51は地文が判然としない。口唇にも縄文がみられる。56は地文が複節とおもわれる。57・58はともに山形隆起部の破片で、円形刺突文は浅いめで小さい。59は口唇断面が角形で、口唇の平坦面が幅広いものである。60は直線的な器形のもので、地文はLR斜行縄文である。小さめの円形刺突文が施されている。61は摩耗、剥落している。口唇断面は丸形である。62は縄文地に小さめの円形刺突文が施されている。

g類：無文のもの(63~65)

63はWH-8(図IV-3-11-7)と同一個体のものである。破片の全体に指頭痕跡がみられる。円形刺突文は小さめである。64は摩耗している。65は口唇部を欠損する。器面には調整痕がみられる。

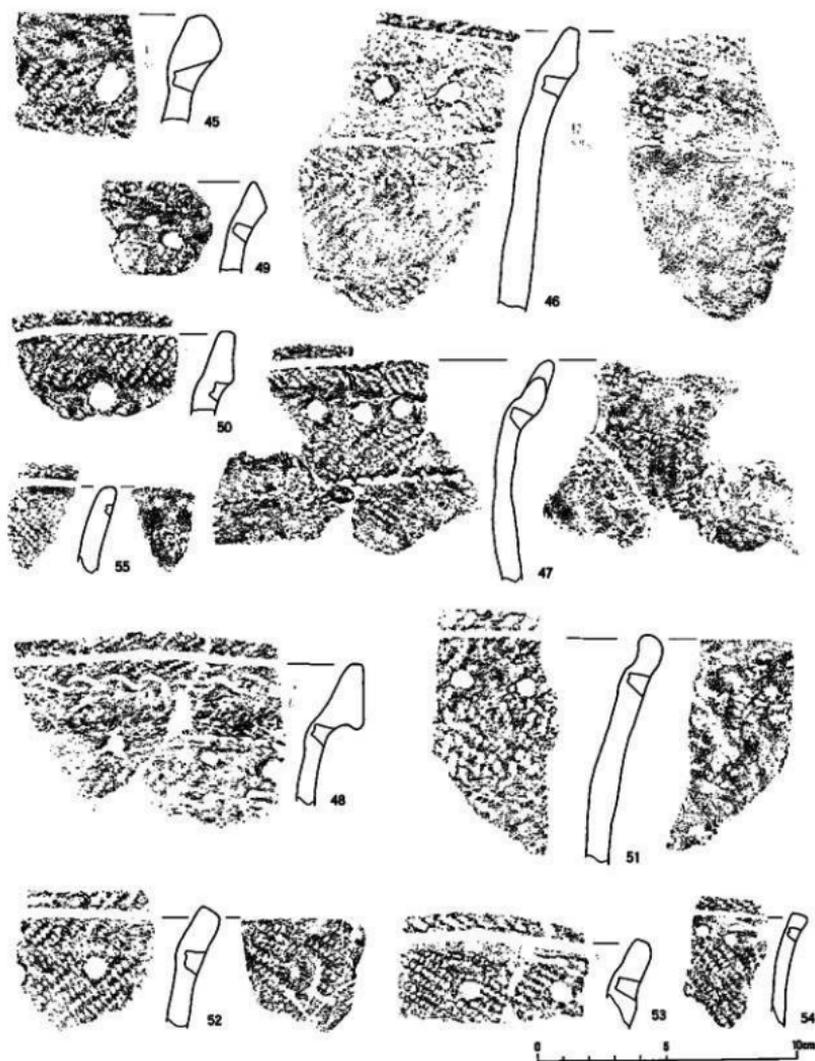
h類：道南系の土器に近縁であると考えられるもの(66~71)

66は外反する口縁部から頸部ですぼまり、胴部上半が張り出す器形である。この部位と縦方向に貼付帯がある。地文は判然としないが、左上がりの縄文がみられる。地文の施文は貼付帯がなされた後である。口縁部に2列、頸部、横環する貼付帯の上縁に、板状工具による押引文が施されている。円形刺突文は押引文を切って施されている。口唇は角形で、棒状工具による刺突文と押引文の痕跡らしきものがみられる。67は胴部上半で横環する貼付帯の部分である。貼付帯の交点には円形の刺突文が施されている。66・67は同一個体である。これらの器形、貼付帯などの特徴は、Ⅲ群b-2類に共通なもので、関連がうかがえるものである。68は円形刺突文というよりは、くぼみという感じの痕跡がみられる。69

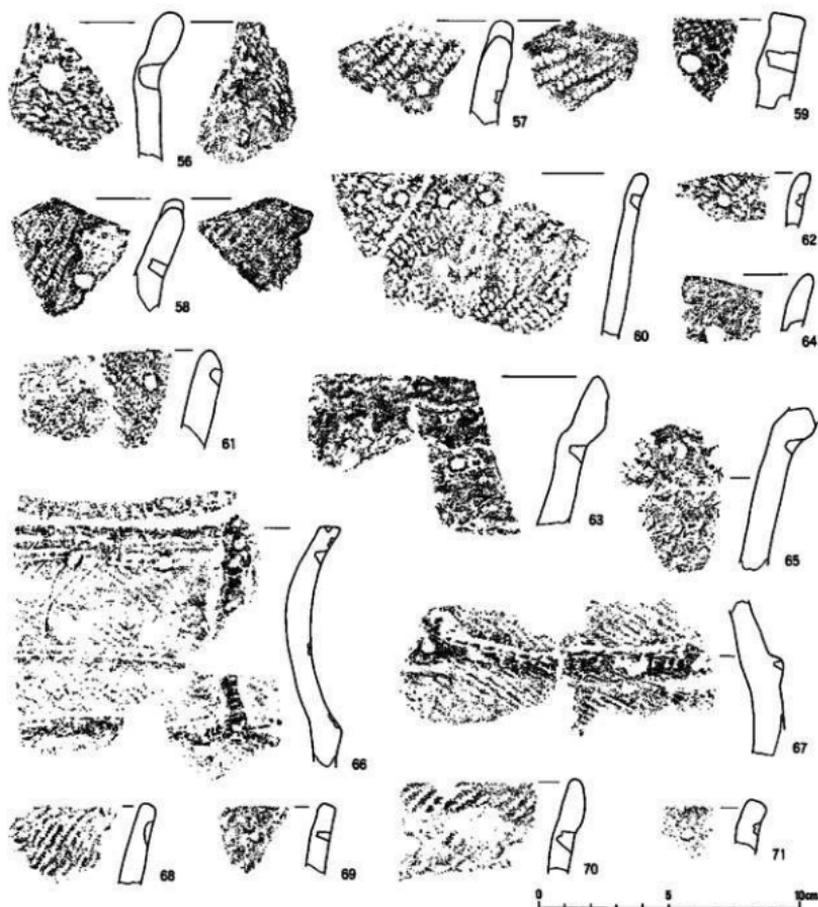


図IV-6-29 包含層出土の土器の

は摩耗している。小さい円形刺突文である。70は口唇直下の器面が隆起帯状に高くなっており、LR原体を器面と同時に施文している。円形刺突文は隆起帯の下縁に、半截竹管状工具を回転させて施している。71は器面は無文で、不正形な刺突文である。



図IV-6-30 包含層出土の土器(3)

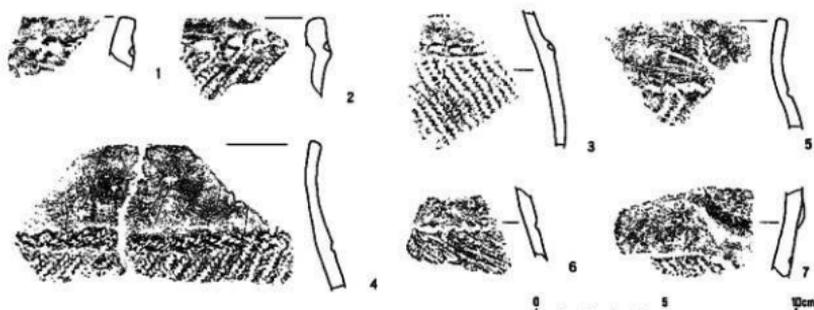


図IV-6-31 包含層出土の土器②

大木系土器 [図IV-6-32-1~7]

Ⅲ群b-2・3の時期と考えられる大木系土器である。すべて、なで調整による無文部分をもつものである。

1・2は口縁部の無文帯が幅狭いものである。ともに、地文部分との境に刺突文が施されている。1は口唇が角形で、地文は判断できない。2は1と比べて口唇は丸みがあり、刺突文が施されている部分が隆起帯状になっている。地文はRLの斜行縄文である。3は口唇を欠損するが、近い部分の破片であろう。地文との境は、隆起帯とその上に刺突文が施されている。地文はRL斜行縄文である。4~6は地文との境に縄線文が施されている



図IV-6-32 包含層出土の土器(四)

ものである。4は比較的幅広い無文帯をもつものである。縄線文はLRで、隆起帯上に施されている。この部分が水平に横環すると考えると、胴部が張り出す器形と考えられる。地文の原体もLRを用いている。口唇断面は角形で、胎土には海綿骨針を含んでいる。5は隆起帯は施されていない。縄線文、地文の原体はともにLRである。口唇は4に比べてやや丸みを帯びている。6は口唇を欠損する。隆起帯は施されていない。縄線文、地文の原体ともにRLを用いている。

7は風倒木痕からⅢ群b-3類の煉瓦台式に混ざった状態で出土した(図IV-6-5)。胎土、焼成等の特徴は本遺跡で出土するものと比較して明らかに異なる感じを受ける。曲線的な隆起線、沈線文が施されている。沈線文に区画されている部分は縄文が施されており、なで調整がされている無文部分もみられる。これらの特徴は、縄文時代中期後半、東北地方南部を中心に分布し、縦位楕円文を特徴とする大木9式に共通のものと同判断される。仙台市教育委員会の工藤信一郎氏から「胎土・焼成等の状態は東北地方南部のものに類似する。」との教示を得た。

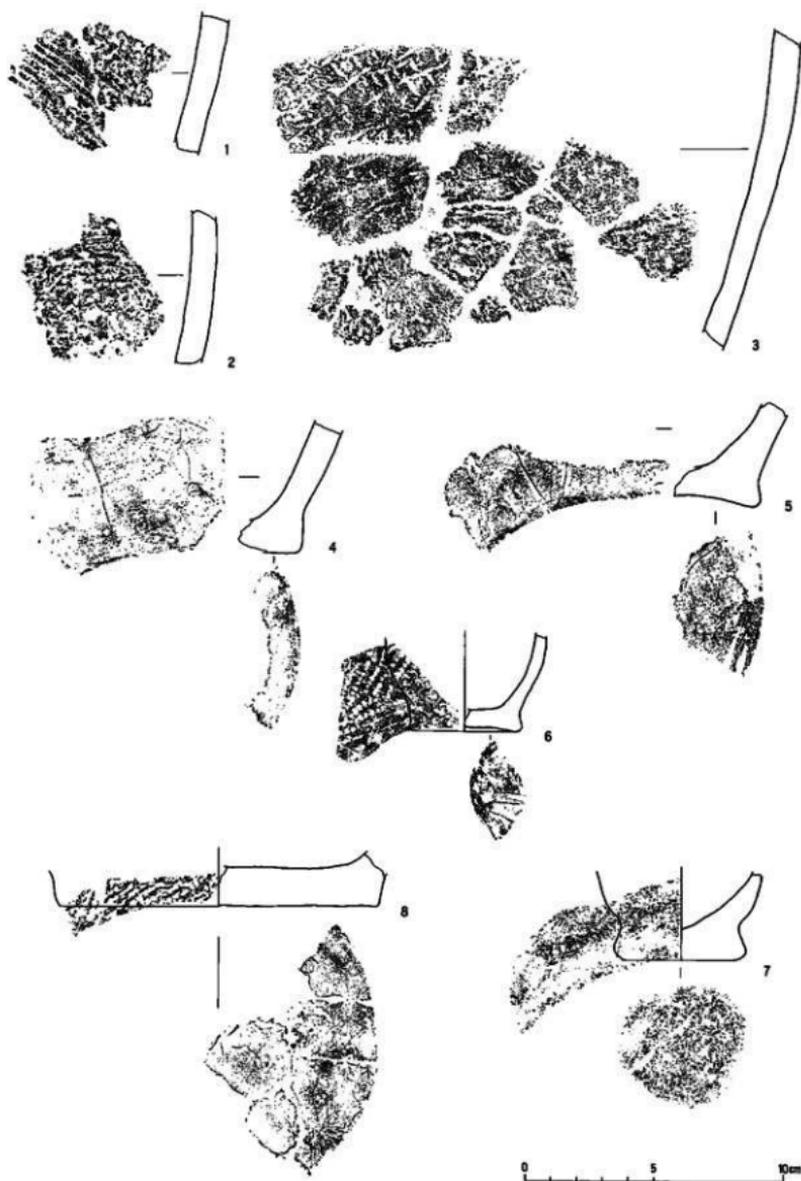
胴部・底部など [図IV-6-33~35-1~18]

特徴的な胴部破片、底部の破片をまとめて報告する。

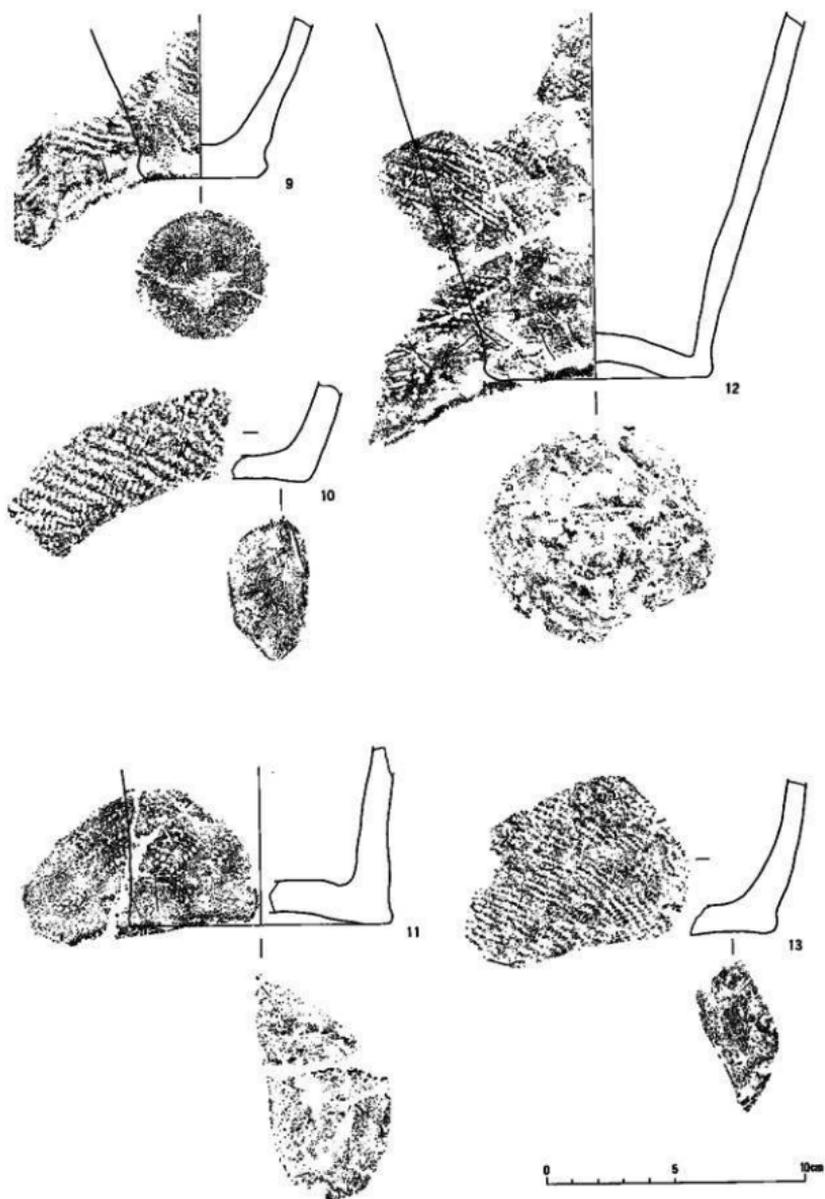
1~3は胴部、4~18は底部の破片である。

1・2は魚骨回転文と考えられる痕跡が観察されるものである。ともに摩耗しており魚の種類は判別できない。3は摩耗しているものである。底部に近い胴部の破片と考えられる。器面には網目状燃糸文が施されている。

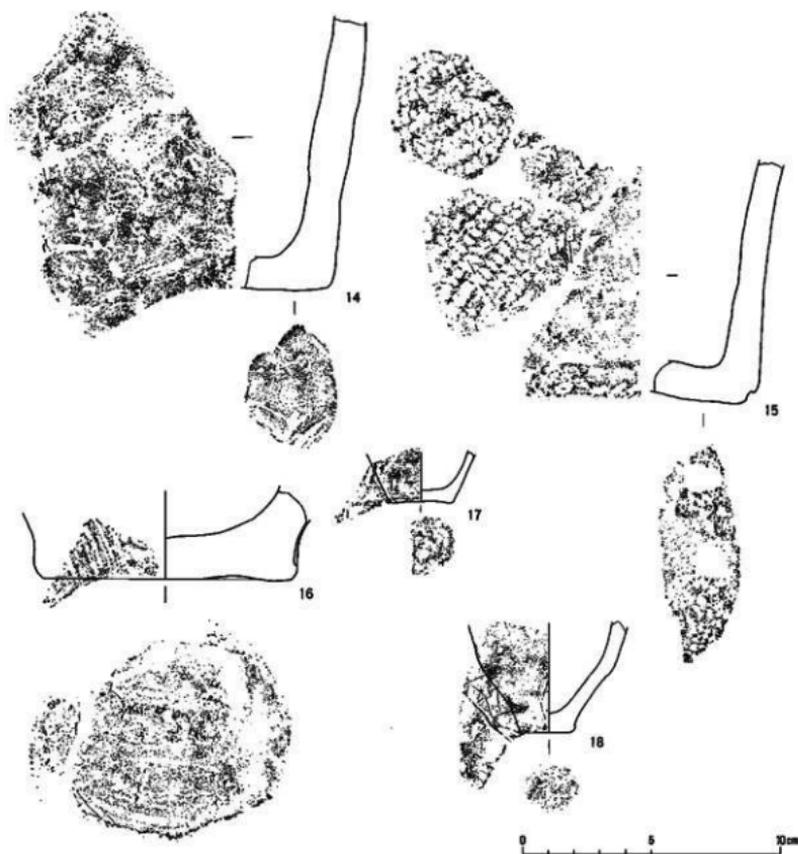
4・5は底部が若干張り出すもので、底部近くの胴部はなで調整がなされている。ともに、Ⅲ群a-2・b-1類に分類されよう。6は比較的小形の土器と考えられる。底部が張り出し、上げ底のものである。地文はLRである。胎土には海綿骨針を含む。7は摩耗が著しく、底部が張り出すものである。8は地文が底部の外面まで施されている。図IV-6-13-7と同一個体であると考えられる。9は底部へと直線的にすばまるものである。底部の外面は指頭による調整圧痕がみられる。6~9はⅢ群b-2類に分類されよう。10は胴部にRLの縄文がみられる。Ⅲ群b-3類に分類されると考えられる。11は垂直に胴部へ立ち上がるもので、上げ底である。12・13は胴部にRLの縄文が施されている。底部は上



図IV-6-33 包含層出土の土器②



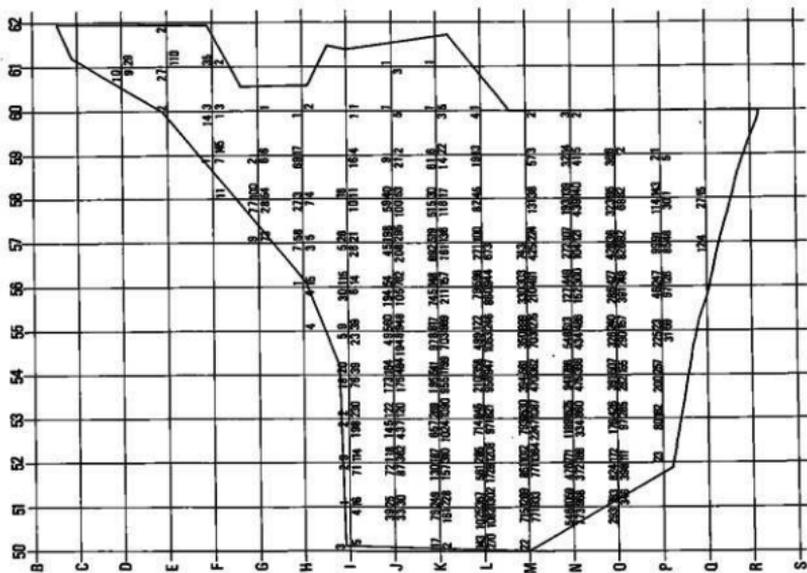
図IV-6-34 包含層出土の土器(7)



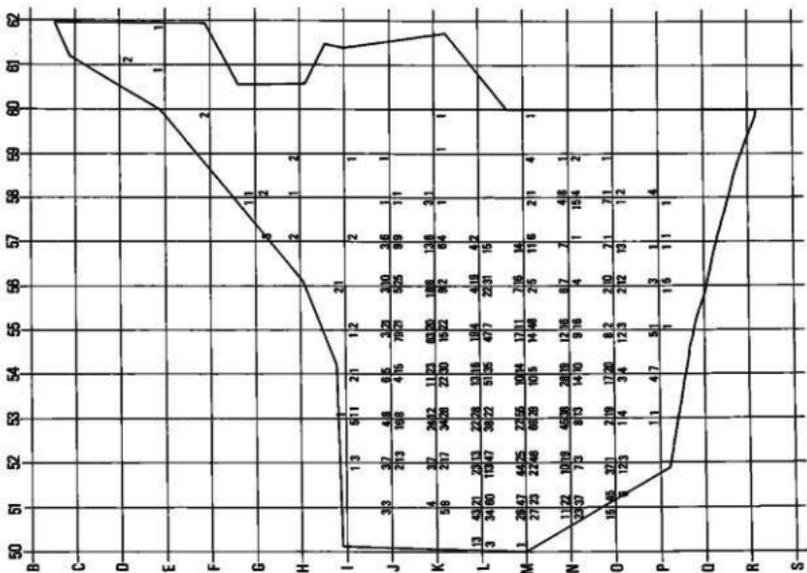
図IV-6-35 包含層出土の土器(2)

げ底である。14は摩耗が著く、垂直に胴部へ立ち上がるものである。15は垂直に胴部に立ち上がる。地文はLR斜行縄文で、底部の外面にはRLの縄線文が1本施されている。16は底部が若干張出し、底部の外面には、複数の細目の沈線文が縦方向に施されている。17・18は小形のものである。17の外表面は底部まで地文の痕跡らしきものが観察されるが、拓影図では表現できなかった。18は底径が小さいものである。胴部はなで調整がなされている。

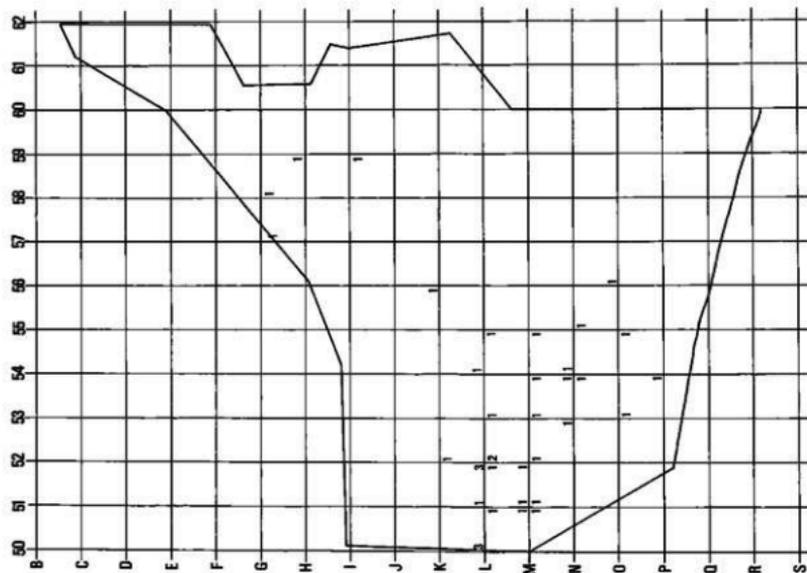
(末光正卓)



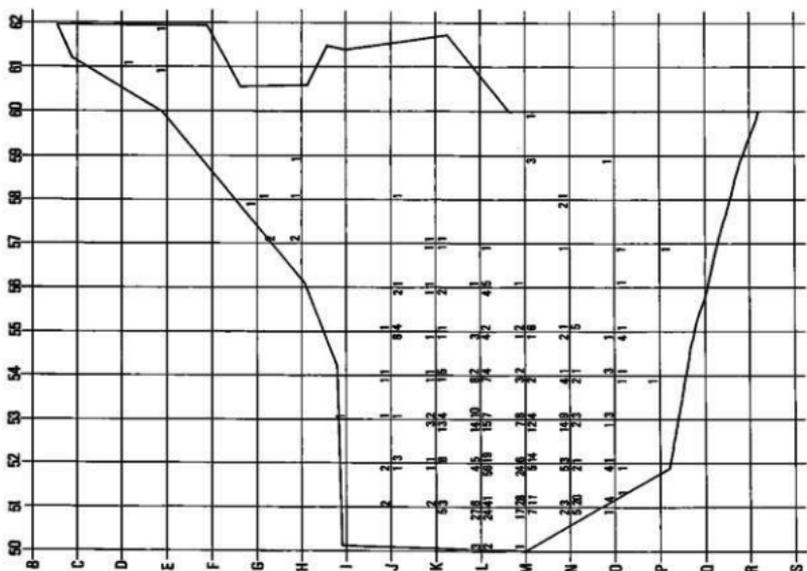
図IV-6-36 包含層出土器総破片数の分布



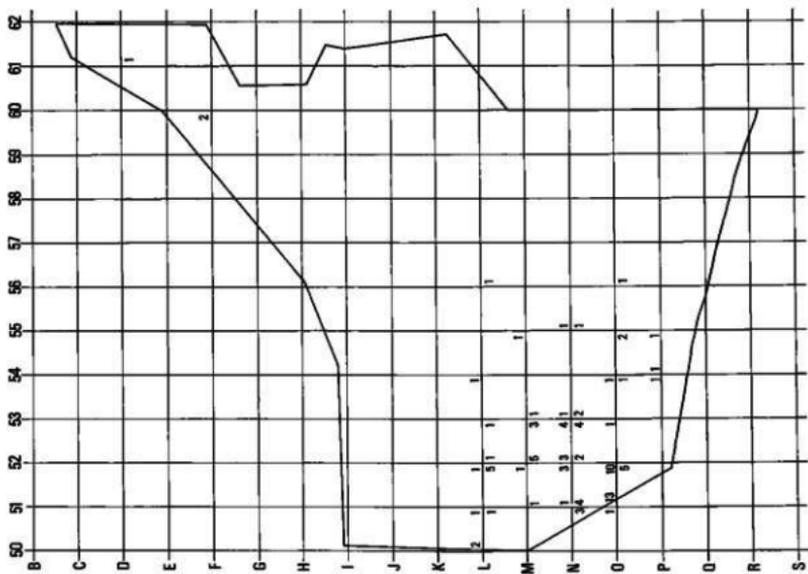
図IV-6-37 包含層出土器総個体数の分布



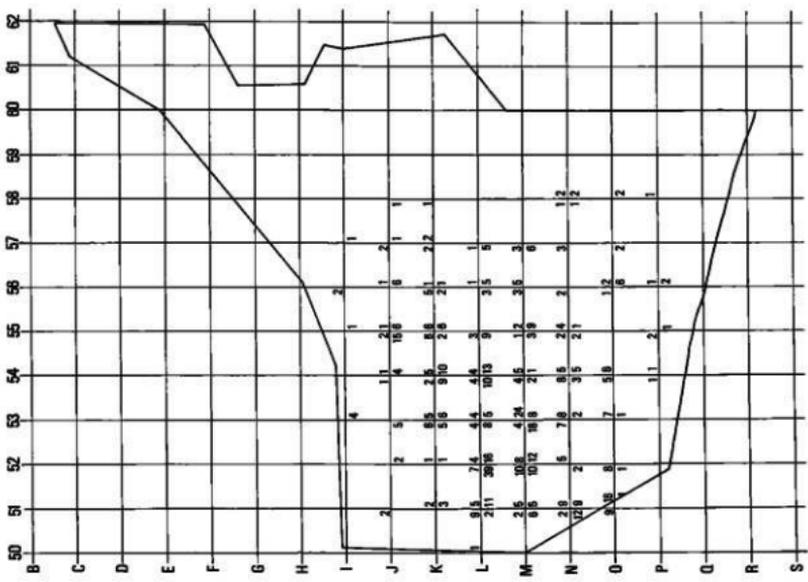
図IV-6-39 III群b-1類・櫛形式の個体数分布



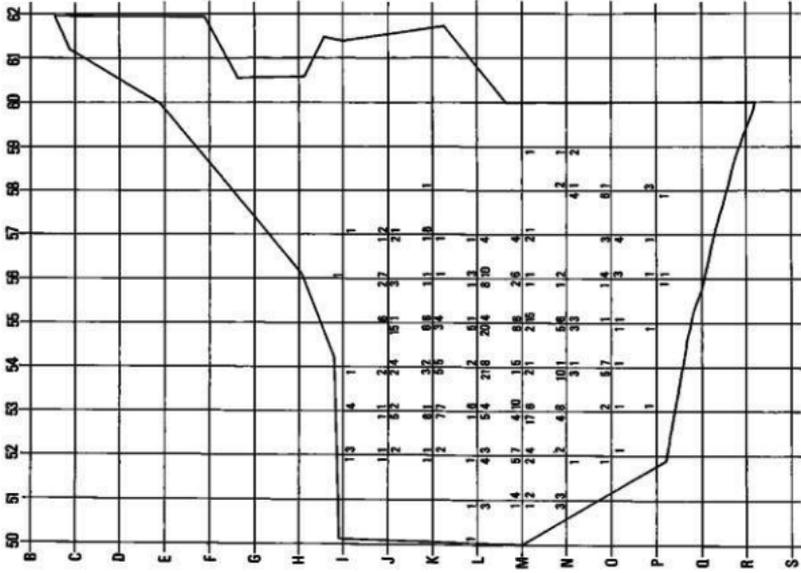
図IV-6-38 III群a-2・b-1類・サイベ沢・見晴町式の個体数分布



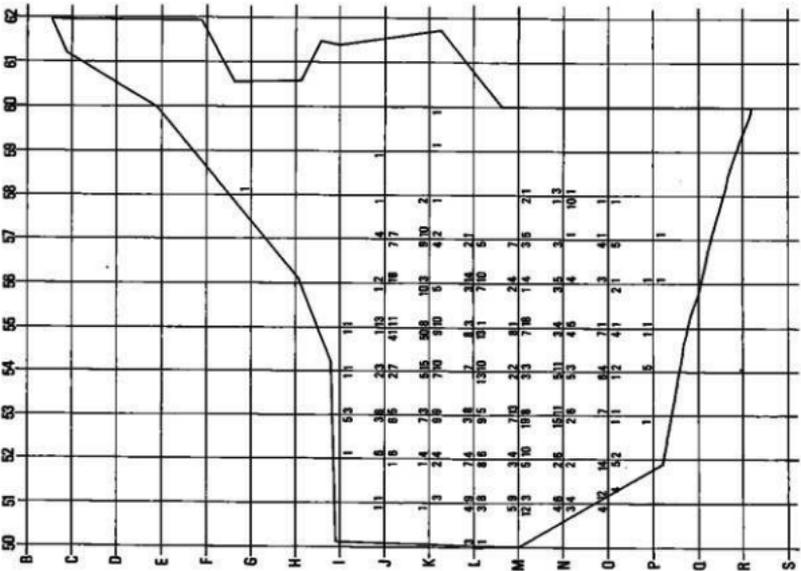
図IV-6-40 III群b-1類・天神山式の個体数分布



図IV-6-41 III群b-2類土器の個体数分布



図IV-6-43 III群b-43 Ⅲ群b-3類・北筒式の個体数分布



図IV-6-42 III群b-42 Ⅲ群b-3類(ノダツプⅡ式・煉瓦台式)の個体数分布

表IV-6-1 包含層復元土器 その1

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	寸法			分類	接合・同一個体
					口径	底径	器高		
IV-6-1	1	K-50-c	94	VI	不明	10.6	(27.6)	Ⅲ-a-2	接合破片数24 K-50-c-94(VI)と同一個体破片80
#	2	K-52-a	44	VI	(11.2)	不明	(11.6)	Ⅲ-b-1	K-52-b-5(I)・K-52-c-4(I)・5(I)・11(I)と接合 破片数6
#	3	K-50-c	53	VI	22.0	(9.0)	(25.3)	Ⅲ-b-1	K-50-c-7(I)・23(I)・28(VI)・45(VI)・47(VI)・53(VI)・58(VI)と接合 破片数49
#	4	K-52-a	4	I	不明	9.2	(7.95)	Ⅲ-b-2	J-52-d-99(VI・風)・100(VI・風)と接合 破片数7 J-52-b-66(VI・風)・J-52-a-4(I)・J-52-c-64(VI)・J-52-d-22(VI)・91(VI・風)・K-51-a-96(VI・風)・K-52-c-16(I)・K-52-d-5(I)・K-52-d-22(VI)・K-53-a-36(VI)・K-53-b-21(I) 破片数23 図IV-6-15-55と同一個体
#	5	K-52-d	48	VI	34.5	不明	(17.5)	Ⅲ-b-2	K-54-c-48(VI)・K-54-d-17(VI)・19(VI)・37(VI)・40(VI)と接合破片数9 J-52-d-58(VI)・J-54-c-28(VI)・35(VI)・K-54-d-1(I)・13(I)・17(I)・27(VI)・32(VI)・37(VI)と同一個体 破片数22

表IV-6-1 包含層復元土器 その2

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	寸法			分類	接合・同一個体
					口径	底径	器高		
IV-6-2	6	K-50-c	98	VI(風)	25.1	不明	(18.4)	Ⅲ-b-2	接合破片数5 K-50-c-7(I)・K-50-c-60(VI)・98(VI・風)・K-50-d-48(Ⅳ・二)と同一個体 破片数4
#	7	K-57-a	10	I	25.7	不明	(20.2)	Ⅲ-b-2	K-57-a-6(I)と接合 破片数16 J-54-d-18(I)・112(VI)・J-56-d-23(I)と同一個体 破片数6
IV-6-3	8	K-57-b	7	VI	17.5	不明	(21.1)	Ⅲ-b-3	K-57-b-1(I)と接合 破片数43 K-57-b-8(I)と同一個体 破片数8
#	9	K-53-d	42	VI(風)	15.0	不明	(14.2)	Ⅲ-b-3	K-53-d-16(VI・風)・58(VI・風)と接合 破片数32
#	10	J-53-c	32	VI	26.2	不明	(26.7)	Ⅲ-b-3	接合破片数13
IV-6-4	11	J-52-c	58	VI	16.7	不明	(23.0)	Ⅲ-b-3	接合破片数15 J-52-b-4(I)・J-52-c-38(VI)・J-52-d-36(VI)・K-52-d-5(I)・K-53-a-45(VI・風)と同一個体破片数11
IV-6-5	12	J-56-c	66	VI(風)	22.4	不明	(22.2)	Ⅲ-b-3	J-56-c-63(VI・風)・76(VI・風)と接合 破片数45
IV-6-6	13	J-54-d	161	VI	(26.6)	不明	(25.1)	Ⅲ-b-3	J-54-d-18(I)・74(VI)・163(VI)・223(VI)・230(VI)と接合 破片数18

表IV-6-1 包含層復元土器 その3

図	番号	発掘区	遺物番号	層位				分類	接合・同一個体
					口径	底径	器高		
IV-6-6	14	K-55-a	61	VI	20.8	不明	(27.1)	III-b-3	K-55-a-30(VI)・40(VI)・51(VI)・62(VI)・64(VI)・65(VI)・66(VI)と接合 破片数40 K-55-a-61(VI)・63(VI)と同一個体 破片数17
#	15	I-52-a	47	Ⅷ(二)	(25.2)	不明	(12.5)	III-b-3	I-52-a-33(?)・I-52-b-64(VI)・68(Ⅷ・二)・81(Ⅷ・二)と接合 破片数5
IV-6-7	16	J-54-d	17	VI	(36.7)	不明	(8.0)	III-b-3	J-54-d-18(VI)と接合 破片数2
#	17	J-54-d	5	VI	(28.9)	不明	(15.1)	III-b-3	J-54-a-29(II)・J-54-d-18(VI)・53(VI)・67(VI)・74(VI)・91(VI)・100(VI)・207(VI)・232(VI)と接合 破片数69 J-51-b-3(1)・J-52-d-6(1)・J-53-a-1(1)・J-53-d-17(II)・36(VI・風)・J-55-a-24(VI)・42(VI)・44(VI)・J-56-a-16(VI)・23(VI)・47(VI)・J-56-b-4(1)・J-56-c-3(1)・K-54-a-1(1)・76(VI)・K-54-b-39(VI・水)・K-54-c-17(1)・K-55-d-3(1)と同一個体 破片数3

表IV-6-1 包含層復元土器 その4

図	番号	発掘区	遺物番号	層位				分類	接合・同一個体
					口径	底径	器高		
IV-6-7	18	J-52-a	86	VI	(39.8)	不明	(24.7)	III-b-3	J-52-b-19(1)・J-52-c-29(1)・38(VI)・59(VI)・J-52-d-96(VI・風)と接合 破片数12 I-52-c-28(VI・風)・J-52-c-91(VI)・J-53-b-37(VI・風)と同一個体 破片数3
IV-6-2	19	J-56-d	25	VI	不明	不明	(30.3)	III-b-3	J-56-d-8(1)・14(1)・33(VI)・35(VI・風)・55(VI)と接合 J-56-a-1(1)・39(VI)・47(VI)・J-56-b-7(VI)・J-56-c-3(1)・J-56-c-52(VI)・J-56-d-2(1)・25(VI)・29(VI)・33(VI)・35(VI)・J-57-a-28(VI・風)破片数14図IV-6-29-36と同一個体
IV-6-6	20	I-53-c	4	VI(風)	不明	(11.0)	(17.5)	III-b-3? IV-a?	I-53-c-6(II・風)・J-54-a-11(VI)と接合 破片数19 I-53-c-1(1)・J-53-d-1(1)・J-54-a-19(1) 破片数19 図IV-6-22-74と同一個体

表IV-6-2 包含層出土掲載土器(1)

回	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-6-8	1	K-51-b	13	VI(木)	III-a-2	
"	2	J-53-a	17	VI	"	
"	3	K-53-b	5	I	"	
"	4	K-50-c	23	VI	"	
"	5	K-51-b	13	VI(木)	"	
"	6	K-52-d	22	VI	"	
"	7	K-51-a	21	I	"	
"	8	K-50-c	98	VI(風)	"	
"	9	K-52-c	30	VI	"	
"	10	J-56-a	23	I	"	J-56-b-17(VI)と接合
"	11	K-56-d	3	"	"	破片数4
"	12	K-51-c	8	"	"	破片数2
"	13	K-50-c	3	VI	"	K-50-c-66(VI)と接合
"	14	K-52-c	4	I	"	破片数2
"	15	K-51-b	13	VI(木)	"	同一個体
"	16	J-54-d	153	VI	"	
IV-6-9	17	K-53-b	21	I	"	破片数2
"	18	K-52-a	50	VI(風)	"	K-52-b-5(I)と接合
"	19	K-51-b	19	"	"	破片数2
"	20	K-50-c	55	VI	"	破片数3
"	21	K-52-c	4	I	"	
"	22	K-52-d	81	VI	"	
"	23	G-57-b	1	I	"	
"	24	J-53-b	25	VI(風)	"	破片数2
"	25	K-50-c	23	VI	"	J-53-b-16(I)・17(II・風)・28(VI)と接合
"	26	K-52-c	11	I	III-b-1	破片数9
"	27	K-50-c	93	"	"	
"	28	G-57-b	13	VI	"	
"	29	K-55-a	22	"	"	
"	30	K-51-c	12	I	"	
"	31	K-52-b	5	"	"	
"	32	K-52-d	5	"	"	
"	33	K-52-a	1	"	"	
IV-6-10	34	K-52-a	1	"	"	K-52-a-51(VI・風)と接合
"	35	K-53-b	65	VI	"	破片数3
"	36	G-58-a	4	"	"	
"	37	K-54-a	19	I	"	破片数4
"	38	K-50-c	54	VI	"	破片数4
"	39	K-50-c	66	"	"	破片数7
"	40	K-50-c	55	"	"	
"	41	K-53-c	27	"	"	
"	42	K-52-b	23	"	"	
"	43	J-54-d	5	I	"	
"	44	J-56-a	10	"	"	
"	45	J-55-d	8	"	"	
"	46	D-60-c	1	"	"	
"	47	K-54-b	20	"	"	
"	48	I-51-b	33	VI(風)	"	
"	49	K-54-a	13	I	"	
"	50	J-54-c	31	"	"	
"	51	K-53-b	5	"	"	
"	52	K-55-a	33	II	"	
IV-6-11	53	K-51-c	12	I	"	
"	54	J-55-c	43	VI	"	破片数2
"	55	G-57-a	5	I	"	
"	56	K-52-a	19	"	"	
"	57	K-54-b	39	VI	"	
"	58	K-51-b	13	VI(木)	"	
"	59	E-58-c	3	I	"	
"	60	K-50-b	39	VI	"	
"	61	K-51-c	8	I	"	
"	62	K-50-b	3	"	"	
"	63	K-51-c	22	VI(風)	"	
"	64	G-58-a	5	"	"	破片数2
"	65	K-50-b	30	VI	"	
VI-6-12	66	K-53-c	25	VI(風)	"	破片数3
"	67	E-59-c	1	I	"	
"	68	K-51-c	8	"	"	
"	69	K-50-b	48	VI(風)	"	
"	70	K-50-c	48	VI	"	破片数2
"	71	K-50-b	48	VI(風)	"	破片数2
"	72	E-59-c	1	I	"	破片数2
IV-6-13	1	K-54-c	24	J	III-b-2	K-54-c-17(I)と接合
"	"	"	"	"	"	昨年出土土器Ⅷ-4-5-9と同一個体
"	2	J-56-a	23	"	"	破片数5
"	3	J-53-a	57	VI	"	

表IV-6-2 包含層出土掲載土器(2)

期	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-6-13	4	J-52-d	69	VI	III-b-2	
#	5	J-52-a	52	VI(風)	#	
#	6	J-52-a	101	VI	#	J-52-a-100(VI)と接合
#	7	K-54-d	50	#	#	縦IV-6-33-8と同一個体
#	8	K-52-c	4	I	#	縦IV-3-5-14と同一個体
#	9	K-50-c	7	#	#	破片数2
#	10	J-52-a	58	VI	#	同一個体?
#	11	J-52-d	98	VI(風)	#	
#	12	K-53-c	29	#	#	破片数2
#	13	K-53-c	4	I	#	破片数2
#	14	J-57-b	26	VI	#	
IV-6-14	15	J-52-a	65	#	#	破片数2
#	16	K-51-a	113	VI(風)	#	破片数2
#	17	J-54-d	71	#	#	
#	18	K-51-a	96	#	#	破片数2
#	19	J-53-b	4	I	#	破片数2
#	20	J-55-b	16	VI	#	
#	21	I-56-a	1	I	#	
#	22	J-54-d	138	VI	#	
#	23	K-52-c	16	I	#	
#	24	J-53-b	26	II	#	
#	25	J-56-c	6	I	#	
#	26	J-55-a	不明	不明	#	
#	27	K-53-a	56	VI(風)	#	破片数2
#	28	J-54-d	172	VI	#	破片数3
#	29	J-54-a	3	I	#	破片数2
#	30	K-53-b	21	#	#	
#	31	K-54-a	37	VI	#	
#	32	J-56-c	22	VI(風)	#	
#	33	J-54-d	18	I	#	
#	34	J-54-d	53	#	#	
#	35	K-52-b	5	I	#	
#	36	K-50-c	20	VI(風)	#	
#	37	J-54-c	35	VI	#	
#	38	J-54-a	34	#	#	破片数5
IV-6-15	39	K-52-d	22	#	#	破片数2
#	40	J-52-d	91	VI(風)	#	
#	41	J-54-c	22	VI	#	
#	42	J-56-a	55	#	#	J-56-a-56(VI)と接合
#	43	K-52-d	5	I	#	
#	44	K-53-d	12	II(風)	#	
#	45	K-54-c	不明	不明	#	
#	46	J-54-d	5	I	#	
#	47	K-52-d	5	#	#	
#	48	K-52-b	35	VI	#	
#	49	K-61-b	5	I	#	破片数3
#	50	K-55-a	73	VI	#	破片数4
#	51	K-53-b	41	#	#	
#	52	K-50-b	3	I	#	
IV-6-16	53	K-54-c	17	#	#	
#	54	K-50-c	5	#	#	
IV-6-15	55	K-54-c	40	VI	#	破片数7
IV-6-16	56	K-50-c	28	#	#	K-54-d-10(I)と接合
#	57	K-51-c	34	#	#	
#	58	J-54-a	3	I	#	
#	59	J-52-c	38	VI	#	破片数2
#	60	K-53-d	16	VI(風)	#	
#	61	J-55-b	16	VI	#	
#	62	I-50-c	7	#	#	
#	63	K-51-b	19	VI(風)	#	破片数2
#	64	K-53-b	51	VI	#	破片数3
#	65	K-51-b	13	VI(木)	#	破片数3
#	66	K-61-c	33	VI	#	破片数2
#	67	K-51-b	27	#	#	
#	68	H-54-a	29	#	#	破片数2
#	69	K-50-c	43	#	#	破片数2
#	70	K-64-b	42	VI(木)	#	破片数2
#	71	K-54-b	4	I	#	破片数2
#	72	I-53-c	14	#	#	破片数2
IV-6-17	73	K-55-a	76	#	#	
#	74	I-53-c	9	VI(風)	#	破片数3
#	75	J-53-d	31	VI	#	破片数5
#	76	K-52-b	5	I	#	破片数2
#	77	K-55	1	I	#	
#	78	I-55-b	2	#	#	
#	79	K-52-c	16	#	#	破片数2

表IV-6-2 包含層出土掲載土器(3)

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-6-17	80	J-54-b	29	VI	#	
IV-6-18	81	I-56-b	11	I	#	
#	82	K-54-a	103	VI	#	J-54-c-31(VI)と接合
IV-6-17	83	F-58-a	3	VI(風)	#	
IV-6-18	84	I-57-b	29	#	#	
IV-6-19	1	J-52-a	79	VI	#	III-b-2
#	2	J-55-b	13	#	#	J-55-b-4(1)と接合
#	3	I-52-b	66	VI(風)	#	
#	4	K-59-a	1	I	#	
#	5	K-53-a	179	VI	#	
#	6	K-53-b	41	#	#	
#	7	I-52-c	22	II(風)	#	
#	8	J-52-b	4	I	#	
#	9	K-51-c	22	VI(風)	#	
#	10	K-51-c	22	#	#	
#	11	I-52-b	51	VI(風)	#	
#	12	J-52-a	58	VI	#	
#	13	K-54-a	59	#	#	
#	14	K-52-d	38	VI(風)	#	
#	15	J-54-d	18	I	#	
#	16	J-53-a	75	VI	#	
#	17	I-54-c	19	#	#	
#	18	K-52-b	5	I	#	
#	19	J-52-a	76	VI	#	
#	20	K-51-b	13	VI(木)	#	
#	21	K-55-a	1	I	#	
#	22	J-52-d	36	VI	#	
#	23	J-54-d	71	#	#	
#	24	J-52-c	97	#	#	
#	25	J-54-d	176	#	#	
#	26	K-55-a	72	#	#	
#	27	I-53-a	6	#	#	
#	28	J-54-a	11	#	#	
IV-6-20	29	K-54-c	49	#	#	
#	30	J-56-a	1	#	#	
#	31	J-52-a	35	#	#	
#	32	K-50-b	26	#	#	
#	33	J-53-a	41	VI(風)	#	
#	34	J-59-c	6	I	#	
#	35	J-54-d	174	VI	#	
#	36	J-54-c	22	#	#	
#	37	J-54-c	42	#	#	
#	38	K-52-b	5	#	#	
#	39	J-54-b	49	#	#	
#	40	I-52-d	38	#	#	
#	41	J-52-c	5	I	#	
#	42	I-53-c	8	VI(風)	#	I-53-c-1(1)+4(VI-風)と接合
#	43	J-54-d	18	I	#	
#	44	K-56-b	23	VI	#	
#	45	J-54-b	34	#	#	
IV-6-21	46	I-53-b	19	VI(風)	#	
#	47	J-54-d	97	VI	#	J-54-d-194(VI)と接合
#	48	J-54-a	43	#	#	
#	49	K-54-c	29	I	#	
#	50	J-52-b	44	VI	#	
#	51	J-54-b	54	#	#	
#	52	J-56-a	7	I	#	J-56-b-14(VI)と接合
#	53	J-53-c	3	#	#	
#	54	J-54-d	226	VI	#	
#	55	I-55-b	21	#	#	I-55-b-26(VI)と接合
#	56	J-52-c	5	I	#	
#	57	J-56-b	10	VI	#	
#	58	J-57-a	4	I	#	
#	59	J-55-c	22	VI	#	J-55-c-6(1)と接合
#	60	J-55-c	31	#	#	
#	61	I-56-b	14	I	#	I-56-c-10(1)と接合
#	62	J-55-c	49	VI	#	
#	63	J-54-c	28	#	#	
IV-6-22	64	J-53-d	29	#	#	
#	65	J-54-c	31	#	#	
#	66	J-55-b	45	#	#	
#	67	I-55-b	42	#	#	
#	68	I-55-b	34	#	#	
#	69	J-54-c	31	#	#	
#	70	K-54-a	34	I	#	
#	71	J-54-b	6	#	#	

表IV-6-2 包含層出土掲載土器(4)

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一個体
IV-6-22	72	K-54-a	56	VI	III-b-3	
#	73	J-52-b	26	#	#	
#	74	I-53-c	6	II(風)	III-b-3? IVa?	図IV-6-6-20と同一個体
#	75	J-56-a	23	I	III-b-3	破片数6
#	76	J-56-a	10	#	#	
#	77	I-55-b	44	VI	#	
VI-6-23	78	J-55-a	44	#	#	J-55-a-24(I)-55(VI)と接合
#	79	I-57-b	29	VI(風)	#	I-57-a-26(VI-風)と接合
#	80	K-56-c	20	VI	#	破片数6
#	81	J-56-d	24	I	#	破片数11
#	82	J-53-c	14	#	#	
#	83	J-55-b	16	VI	#	
#	84	J-54-d	114	#	#	J-54-d-111(VI)と接合
IV-6-24	1	K-53-b	37	II(風)	#	破片数3
#	2	K-53-b	37	#	#	} 同一個体
#	3	I-53-c	1	I	#	
#	4	K-53-b	51	VI	#	
#	5	K-53-b	21	I	#	
#	6	J-56-c	45	VI	#	
#	7	I-55-c	32	#	#	図IV-3-18-5と同一個体
IV-6-25	8	J-52-c	64	#	#	I-55-c-6(II)・I-56-c-6(VI)と接合
#	9	J-54-c	104	#	#	破片数3
#	10	K-52-d	5	I	#	
IV-6-25	11	K-54-a	5	#	#	破片数4
IV-6-26	12	K-53-d	41	VI(風)	#	
#	13	I-53-a	6	I	#	I-53-c-1(I)と接合
#	14	I-53-a	13	#	#	破片数2
#	15	K-53-b	23	VI	#	
IV-6-27	16	J-56-a	34	I	#	破片数5
#	17	J-52-a	95	VI	#	
#	18	J-55-c	6	I	#	
#	19	J-54-d	183	VI	#	
#	20	K-53-d	50	VI(風)	#	
IV-6-28	21	I-53-c	3	I	#	破片数3
#	22	J-58-b	10	VI	#	破片数3
#	23	K-53-a	142	#	#	
#	24	H-56-b	12	VI(風)	#	破片数2
#	25	J-55-b	28	VI	#	破片数4
#	26	K-50-c	98	VI(風)	#	
#	27	K-54-d	19	VI	#	
#	28	J-51-d	25	VI(風)	#	破片数3
#	29	K-53-a	172	VI	#	
#	30	I-51-d	56	VI(風)	#	
#	31	K-54-b	39	VI(木)	#	
#	32	K-56-b	5	I	#	
#	33	J-55-d	23	VI	#	破片数2
IV-6-29	34	K-52-c	16	I	#	
#	35	J-52-c	5	#	#	
#	36	J-56-d	35	VI(風)	#	図IV-3-2-19と同一個体
#	37	K-56-d	8	I	#	J-57-d-12(I)と接合
#	38	K-52-d	22	VI	#	破片数2
#	39	K-54-a	32	I	#	
#	40	J-54-d	5	#	#	J-54-c-1と接合
#	41	K-54-d	9	I	#	破片数3
#	42	K-56-a	1	#	#	
#	43	J-56-a	50	VI	#	
#	44	J-56-c	3	I	#	破片数2
IV-6-30	45	J-54-d	18	#	#	
#	46	J-56-b	11	VI	#	破片数2
#	47	F-57-c	6	#	#	破片数3
#	48	J-53-c	22	VI(風)	#	破片数2
#	49	K-55-a	1	I	#	K-53-a-70(VI)と接合
#	50	J-57-a	8	#	#	破片数2
#	51	I-57-b	29	VI(風)	#	
#	52	K-54-d	33	VI	#	
#	53	J-54-d	171	#	#	
#	54	K-54-d	19	I	#	
#	55	I-54-c	28	#	#	
IV-6-31	56	K-55-a	56	VI	#	
#	57	J-54-d	71	#	#	
#	58	J-54-d	71	#	#	
#	59	J-54-d	18	I	#	
#	60	I-55-b	13	VI	#	I-55-b-26(VI)と接合
#	61	J-51-c	7	I	#	破片数3
#	62	H-56-b	13	VI	#	破片数2
#	63	I-53-b	17	VI(風)	#	J-52-b-43(VI)と接合 図IV-3-11-7と同一個体

表IV-6-2 包含層出土掲載土器(5)

器	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	接合・同一断体
IV-6-31	64	J-52-c	38	VI	III-b-3	
#	65	K-53-a	40	VI(風)	#	破片数2
#	66	K-53-a	31	#	#	破片数2
#	67	I-53-c	9	#	#	K-54-a-19(1)と接合 I-53-c-1(I)と接合 } 同一断体
#	68	I-55-b	26	VI	#	
#	69	K-54-c	40	#	#	
#	70	J-56-a	1	I	#	
#	71	I-55-b	17	VI	#	
IV-6-32	1	J-57-a	20	VI(風)	IIIb	
#	2	J-55-a	32	VI	#	
#	3	K-52-c	22	#	#	
#	4	J-55-b	2	I	#	K-56-a-21と接合
#	5	J-54-d	52	VI	#	J-54-d-93(VI)と接合
#	6	J-56-a	10	I	#	
#	7	J-56-c	67	VI(風)	#	大木9式
IV-6-33	1	K-51-b	19	#	#	
#	2	K-55-d	15	II	#	
#	3	K-50-c	34	VI	IVa?	K-50-c-60(VI)と接合
#	4	K-51-d	60	#	III-a-2-b-1	破片数14
#	5	K-51-c	36	#	#	
#	6	K-53-a	74	#	III-b-2?	破片数2
#	7	J-57-b	23	I	#	
#	8	K-54-d	50	VI	#	K-54-d-41(VI)と接合部VI-6-13-7と同一断体
IV-6-34	9	J-54-b	60	#	#	破片数3
#	10	K-53-d	32	VI(風)	III-b-3	
#	11	K-54-a	75	I	IIIb	破片数2
#	12	K-52-c	4	#	#	破片数9
#	13	K-50-c	76	VI	#	
IV-6-35	14	J-54-d	18	I	#	破片数2
#	15	K-50-b	3	#	#	破片数5
#	16	J-52-c	5	#	#	破片数2
#	17	K-53-b	38	VI	#	破片数2
#	18	I-55-b	46	#	#	I-55-b-43(VI)と接合

7 包含層の石器等 [図IV-7-1~14 表IV-7-1~3 図版-42~48]

本調査において検出した石器は、1,462点である。このうち、石核・石製品を含めた222点を図示した。

石器は、調査区のほぼ全域から出土しているが、とくに、調査区中央部55ラインから西側境界50ライン間の東西50m南北30mの範囲、北から南へ傾斜する急な斜面のうち比較的緩やかな斜面部に出土遺物の90%が集中している。耕作により、深いところではⅧ層上部まで削平を受けており、このため表土からの遺物の出土が圧倒的に多い。[図IV-7-1]

石器は、石鏃、石槍またはナイフ、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、たき石、すり石、台石もしくは石皿、砥石などが出土している。石器等の総点数は153,103点で、このうち剥片・碎片が約98.7%を占めている。出土した剥片石器は、1,022点で、石槍またはナイフが62.0%と最も出土割合が高く、石鏃が20.8%、ついでスクレイパーが10.3%と多い。礫石器は、440点出土した。石斧が60.9%と出土割合が高く、ついですり石が27.7%と多い。

剥片石器の石材は、黒曜石・頁岩・メノウ質頁岩・メノウがみられる。石鏃・石槍は黒曜石、つまみ付きナイフ・ナイフ・スクレイパーは頁岩・メノウ質頁岩の使用割合が多い。黒曜石は、肉眼観察から十勝三服、白滝、余市赤井川、豊浦町豊泉などの原産地を推定させるものがみられる。とくに、産地が近い理由からか、豊浦町豊泉産の黒曜石の使用割合が全体の60%ほどを占めているが、石質が悪く石器製作に適さないためか、石鏃のような比較的小型の石器の出土はきわめて少ない。本文中で頁岩と記載しているものは、灰白色・緑色・褐色・黒褐色などの色調を呈するが、すべて珪質頁岩に属するものである。

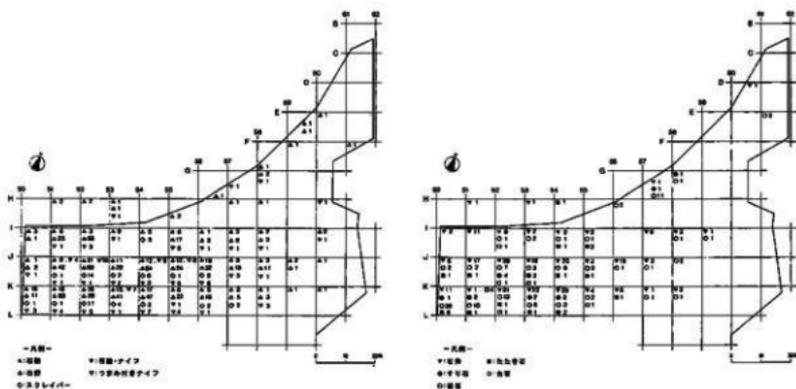
礫石器の石材は、安山岩、緑色泥岩、片岩、流紋岩がみられる。安山岩の使用割合が圧倒的に多い。

石鏃 (I群A類) [図IV-7-2-1~43 図版-42]

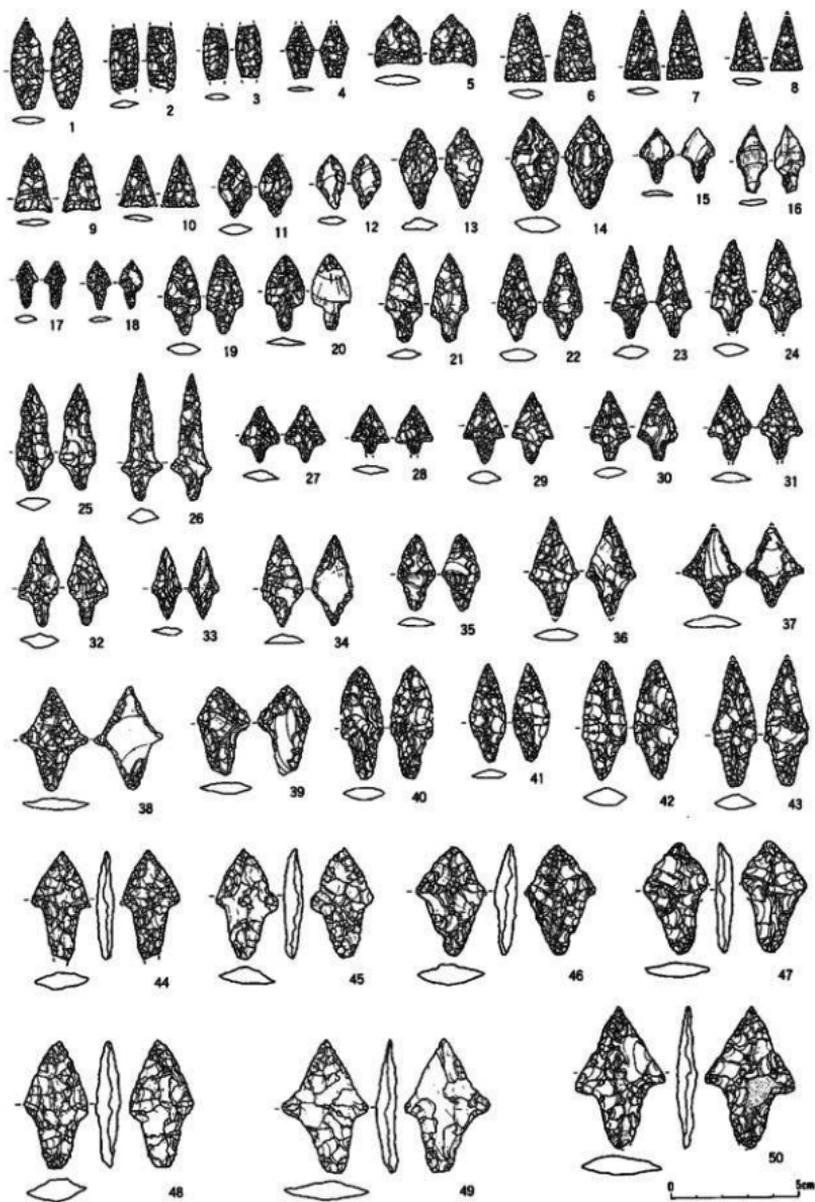
213点が出土している。このうち、56点を図示した。剥片石器の中で、石槍またはナイフについて出現率が高く約20.8%を占める。1~14は一般的な無茎鏃である。1~3は薄身で柳葉形のもの (IA3a)、4は五角形のもの (IA3b) である。2・3は尖頭部と基部を、4は尖頭部を欠損する。5は三角形で凹基のもの (IA4a)、6~10は平基のもの (IA4b) である。11・13は表面に、12は裏面に一次剥離面を残す。6~9は尖頭部を欠損する。11・12は木の葉形 (IA5) を、13・14は菱形 (IA6) を呈するものである。基部を欠損する。4~13は一般的な有茎鏃 (IA7) である。7は表面に、8・10・13は裏面に一次剥離面を残す。9・13は尖頭部を、5・8・12は基部を欠損する。石質は、2・5・13が頁岩、1・3・4・6~11が黒曜石である。12は、石質不明である。

石槍またはナイフ (I群B類) [図IV-7-2~4-44~86 図版-42]

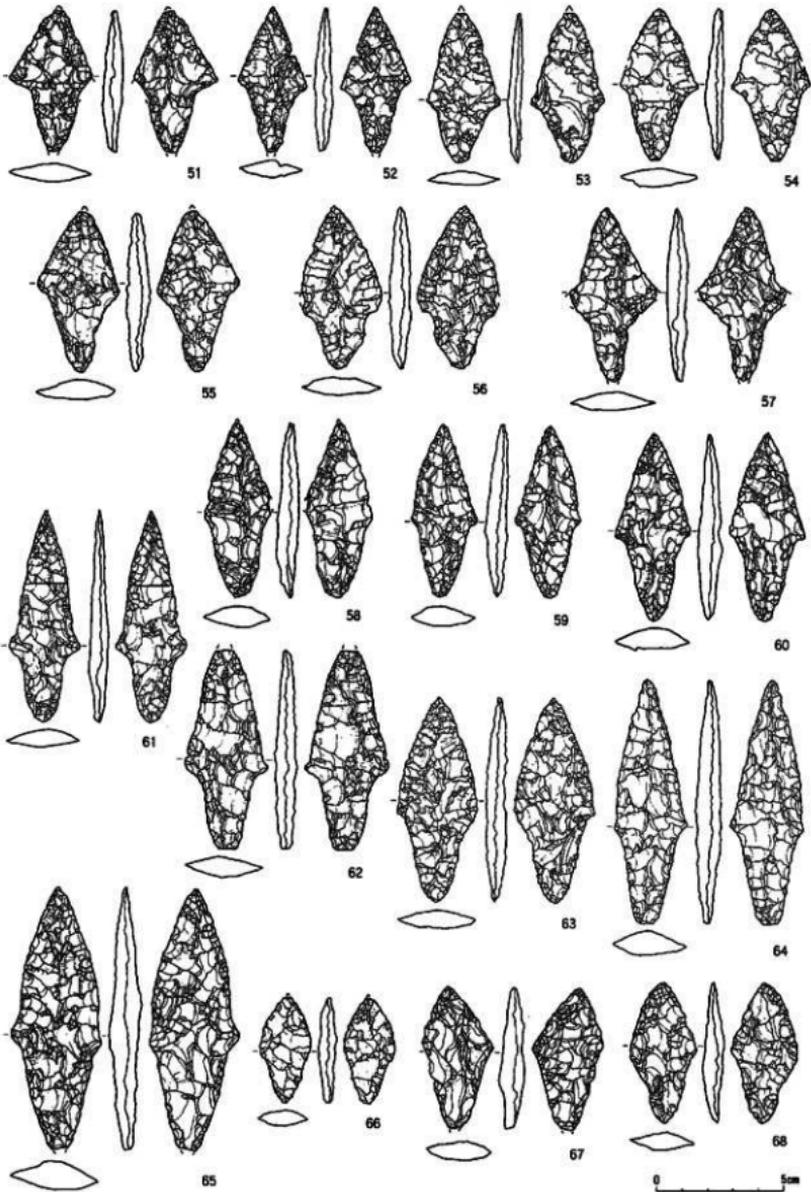
634点が出土している。このうち、43点を図示した。剥片石器のなかで、最も出現率が高く約62.0%を占める。44~66は茎をもつもの (IB1) である。53・55・62は尖頭部を、50・52・65は基部を、46・56・58は側縁部を、51・57は側縁部と基部を欠損する。50は、礫表皮面を残す。石質は、49・59・64が頁岩、44・45・47~58・60~63・65・66は黒曜石である。66~98は基部が明瞭にみられないもの (IB2) である。66・75は尖頭部を、67・77は基部を、76・79は側縁部を欠損する。66・69・70のように一側縁に、75・76・79・80のように両側縁に、わずかながらかえし状の張出しを持つものが見られるが、これらについてはIB2の範疇に分類した。89~98は側縁部に刃部のつぶれが見られることから、ナイフの可能性がある。91は下部を、95・96は上部を欠損する。45・92は表面に、49・53・60・70・80・82・87は裏面に一次剥離面を残す。74・78・81・83・87は、礫表皮面を残す。81~83は、粗雑な加工からみて、未成品の可能性ある。石質は、71・73・74・79・80・82・84・90~98が頁岩、66~70・72・75~78・81~83・85~89は黒曜石である。



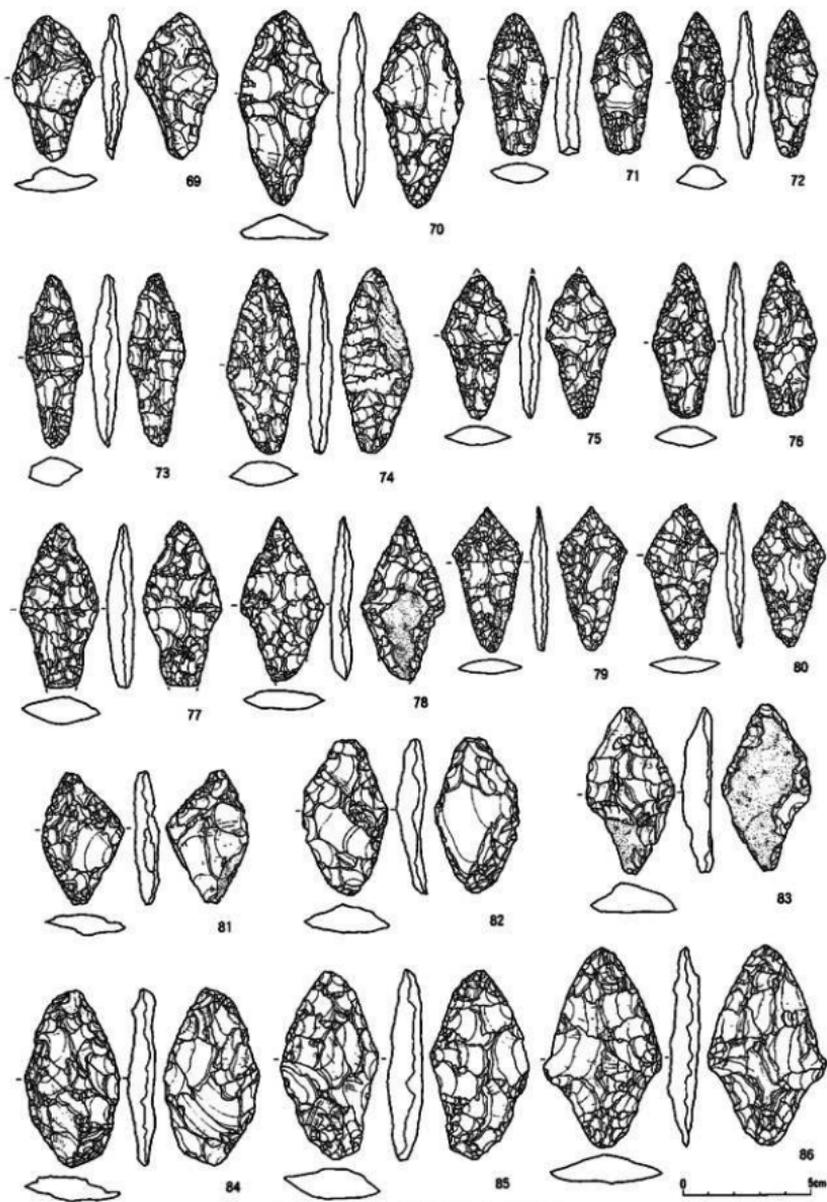
図IV-7-1 包含層出土石器の分布



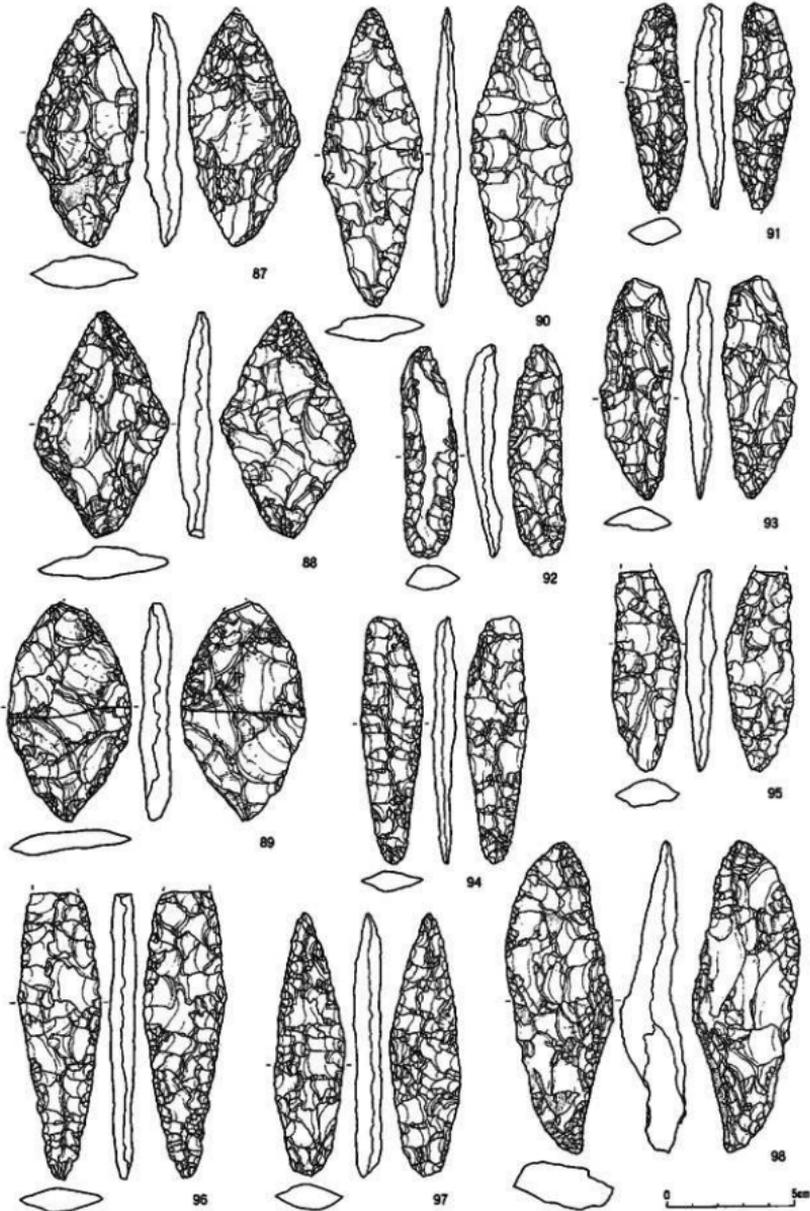
図IV-7-2 包含層出土の石器(1)



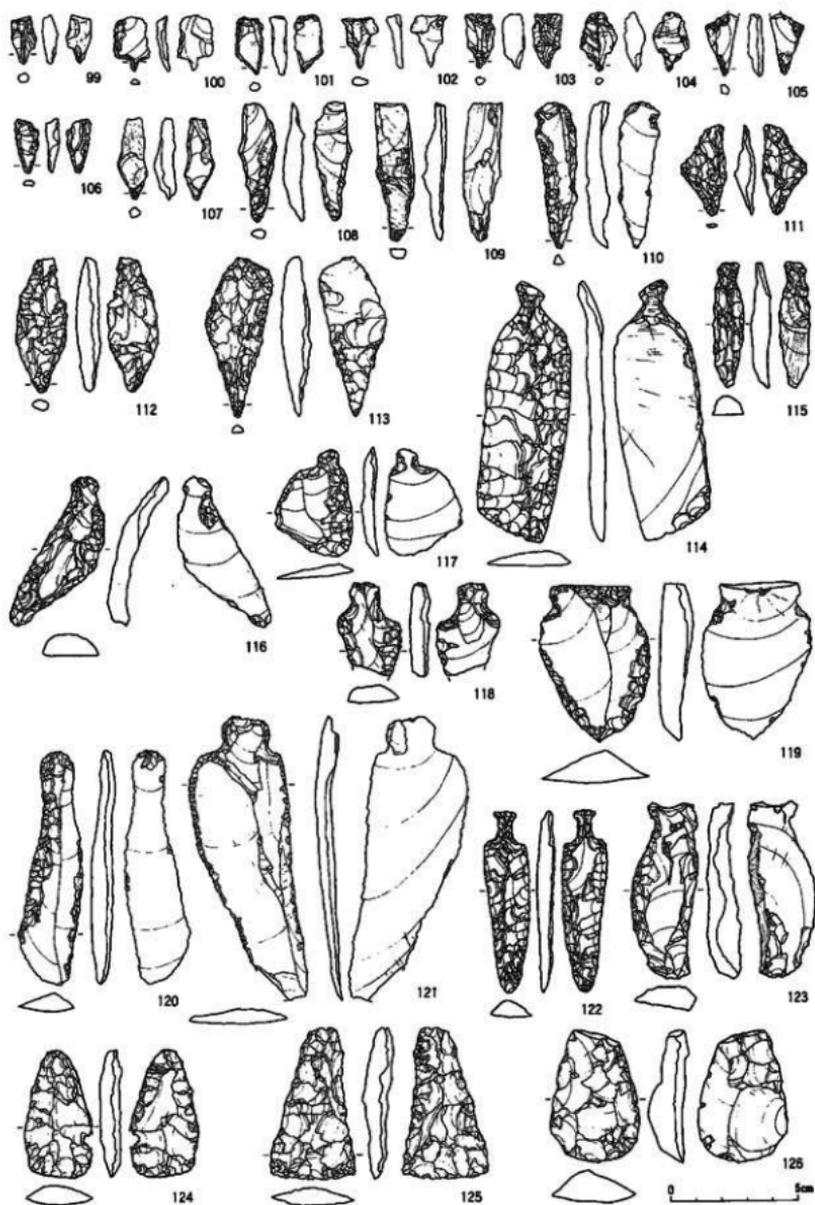
図IV-7-3 包含層出土の石器(2)



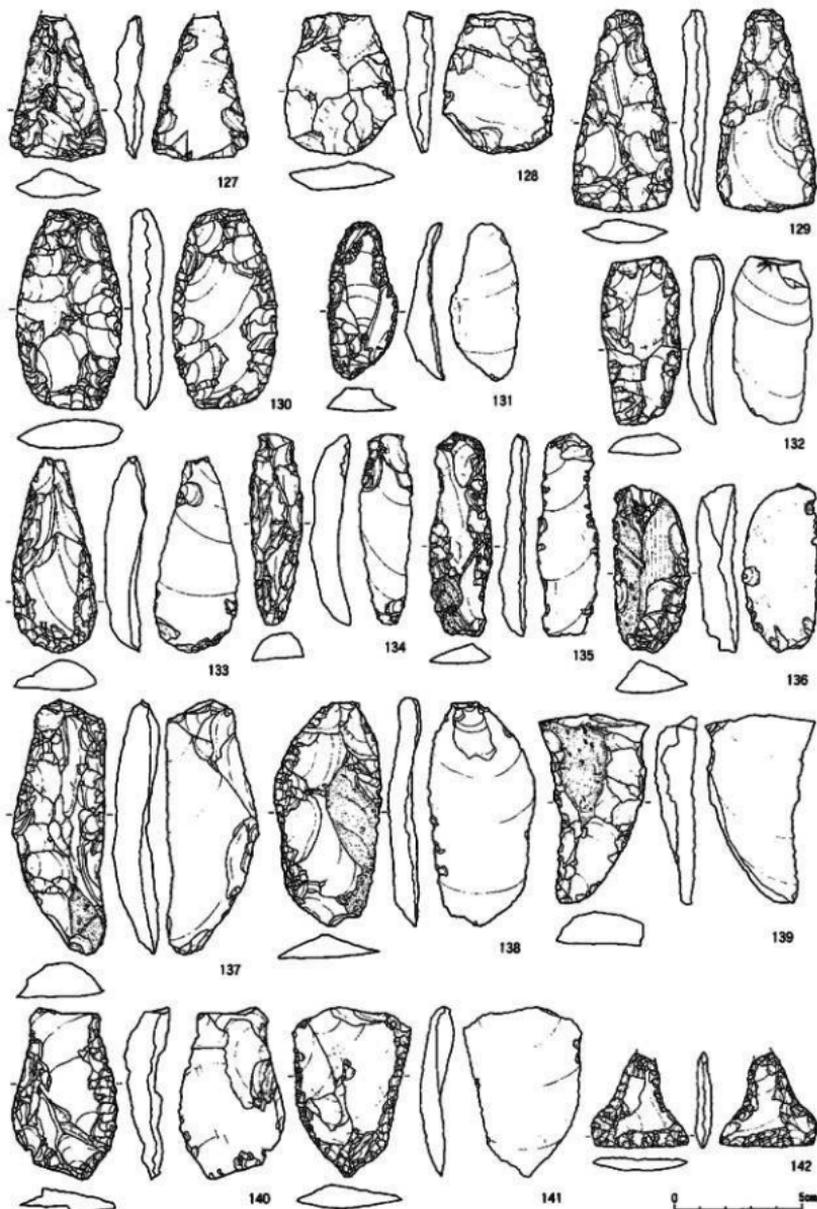
図IV-7-4 包含層出土の石器(3)



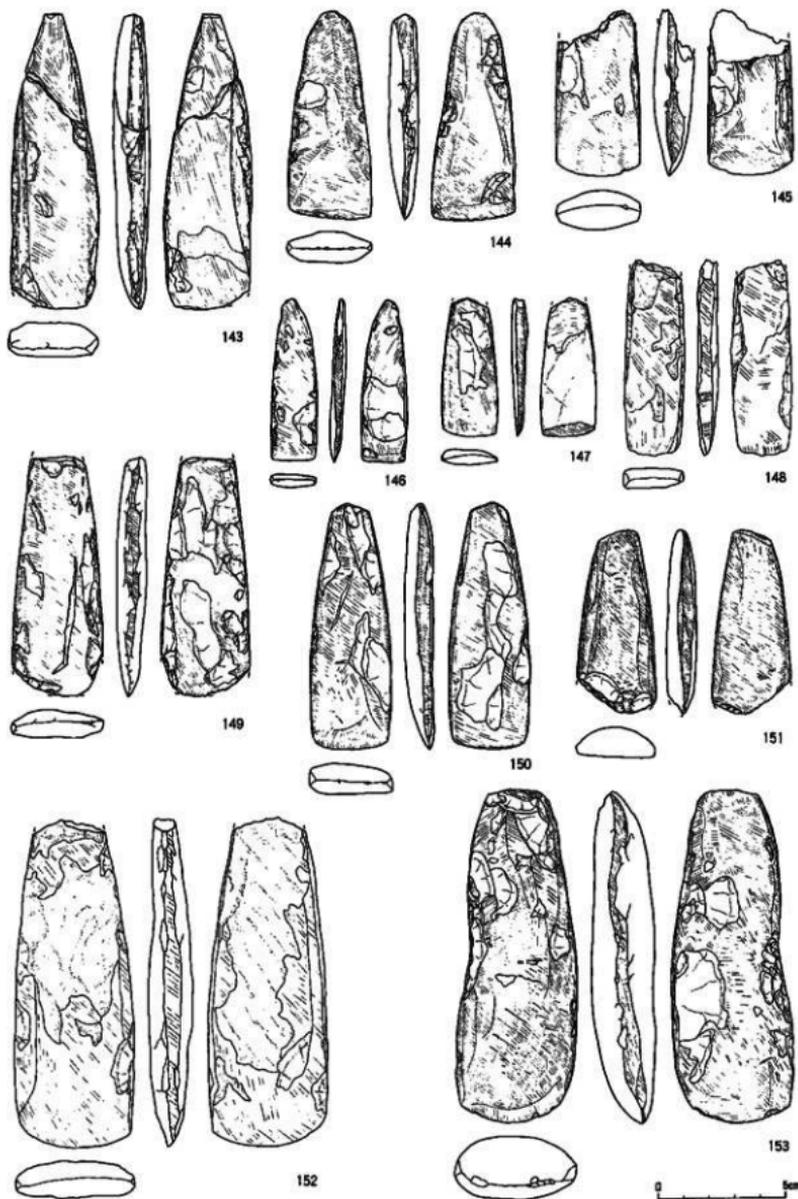
図IV-7-5 包含層出土の石器(4)



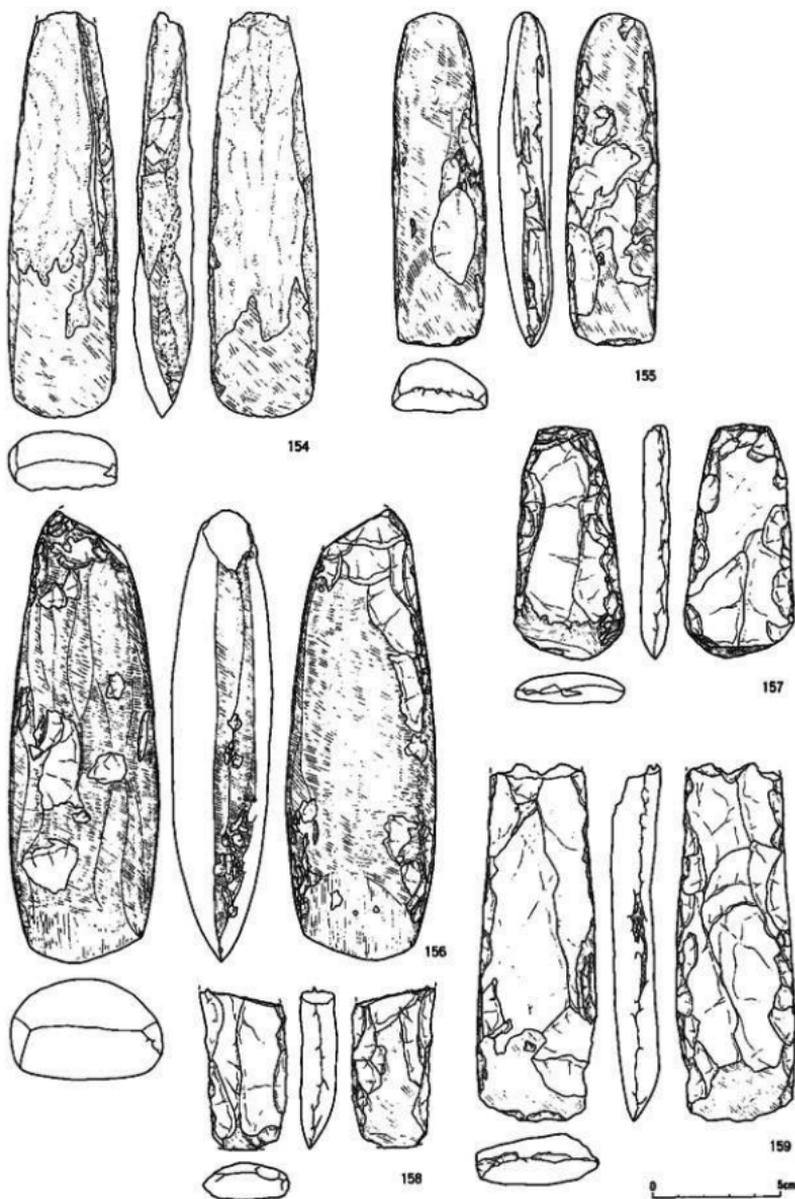
図IV-7-6 包含層出土の石器(5)



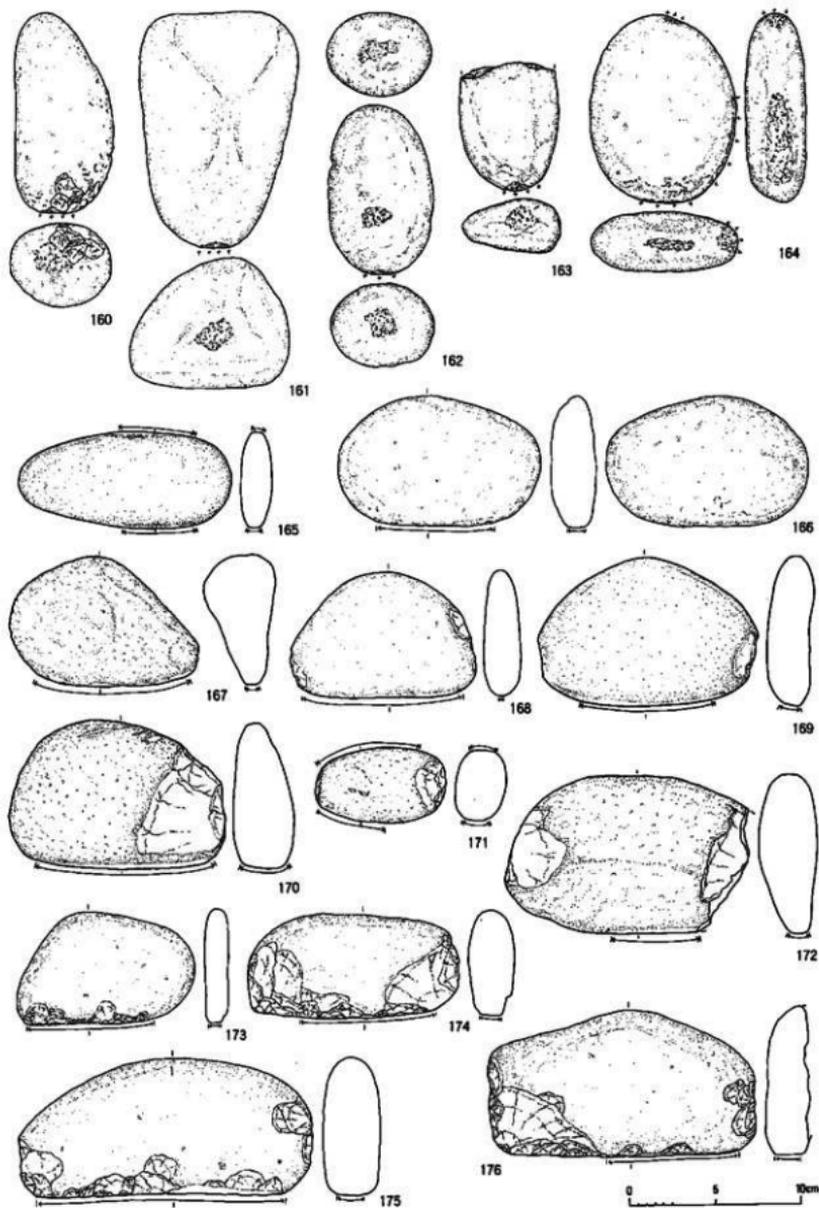
図IV-7-7 包含層出土の石器(6)



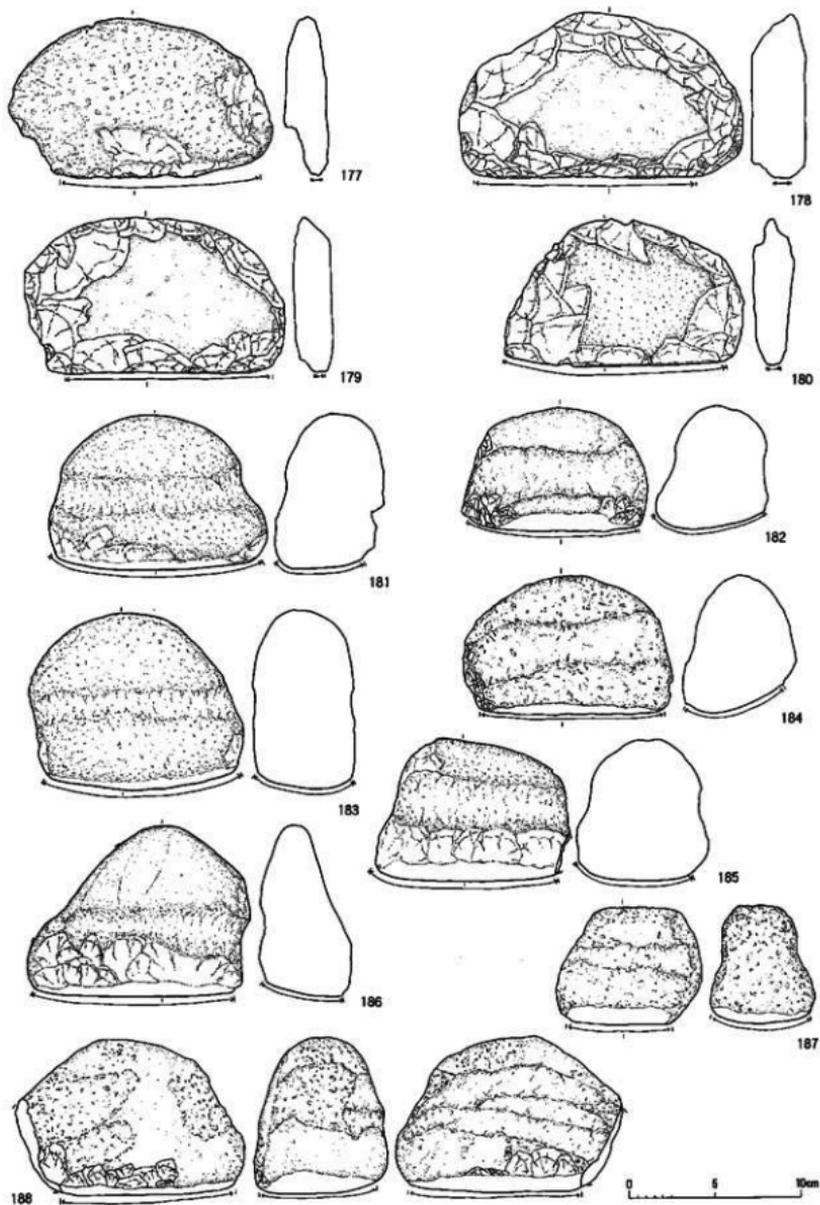
図IV-7-8 包含層出土の石器(7)



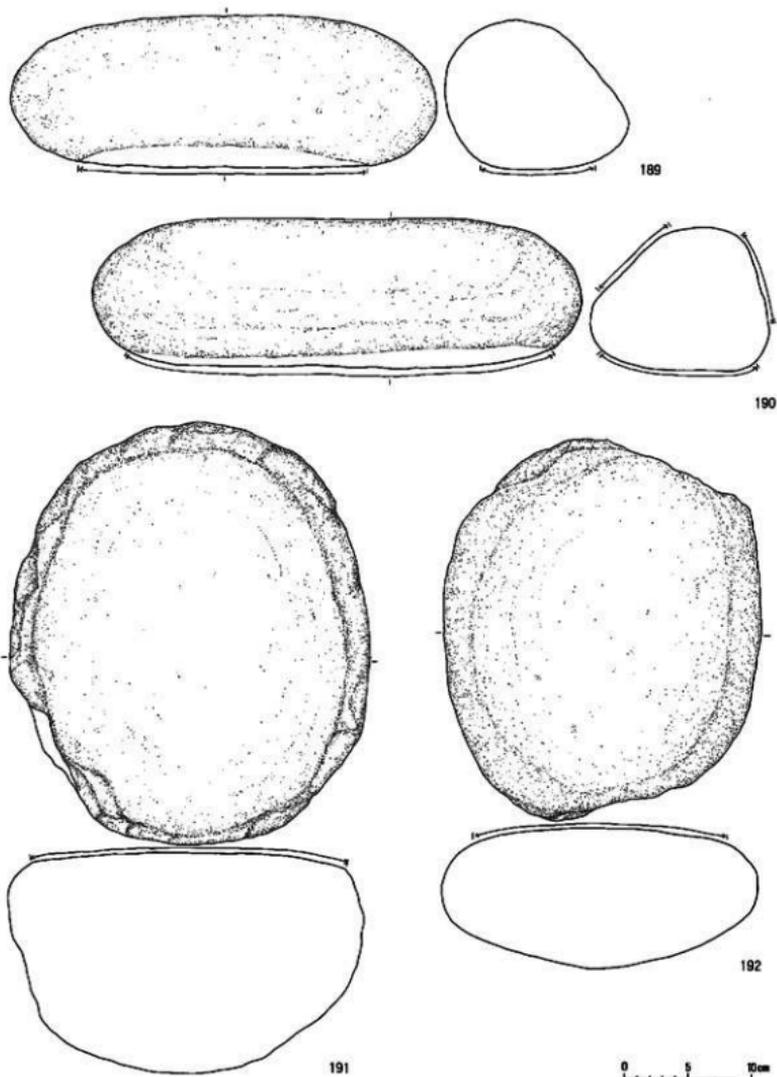
図IV-7-9 包含層出土の石器(8)



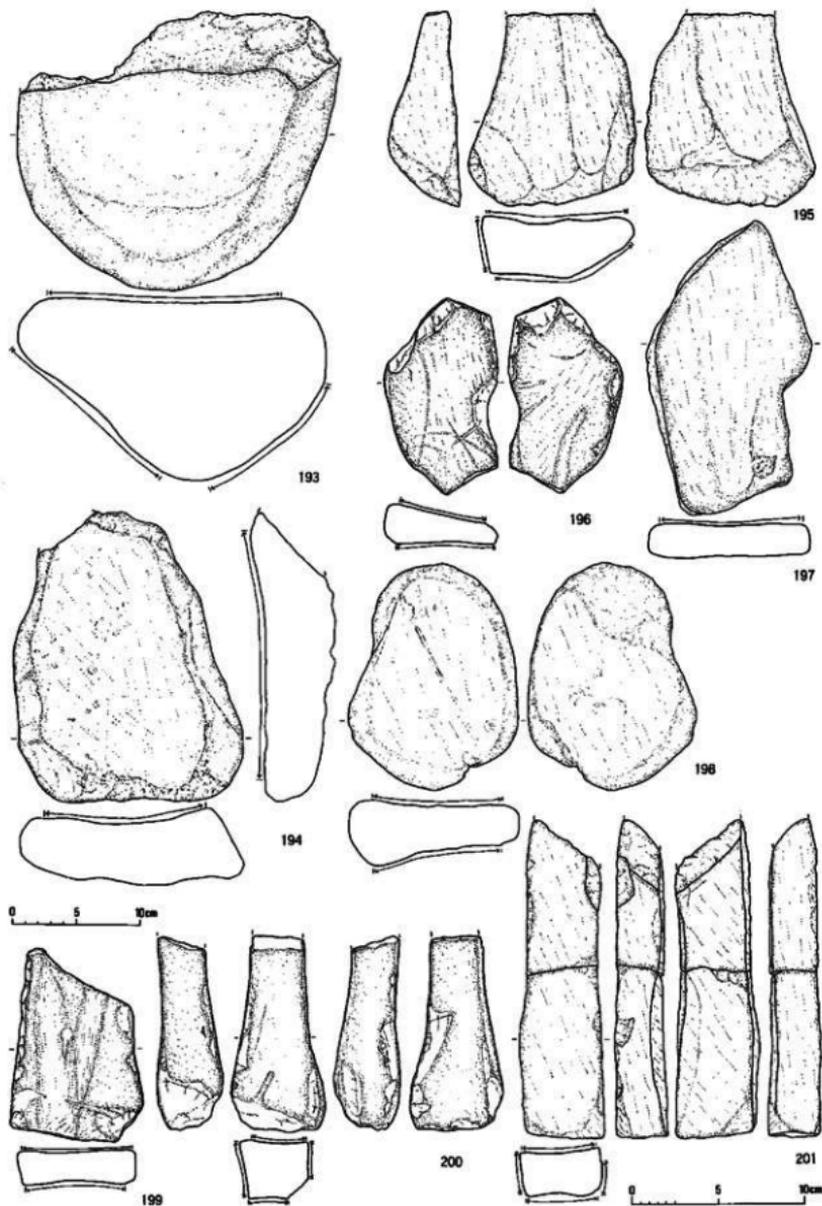
図IV-7-10 包含層出土の石器(9)



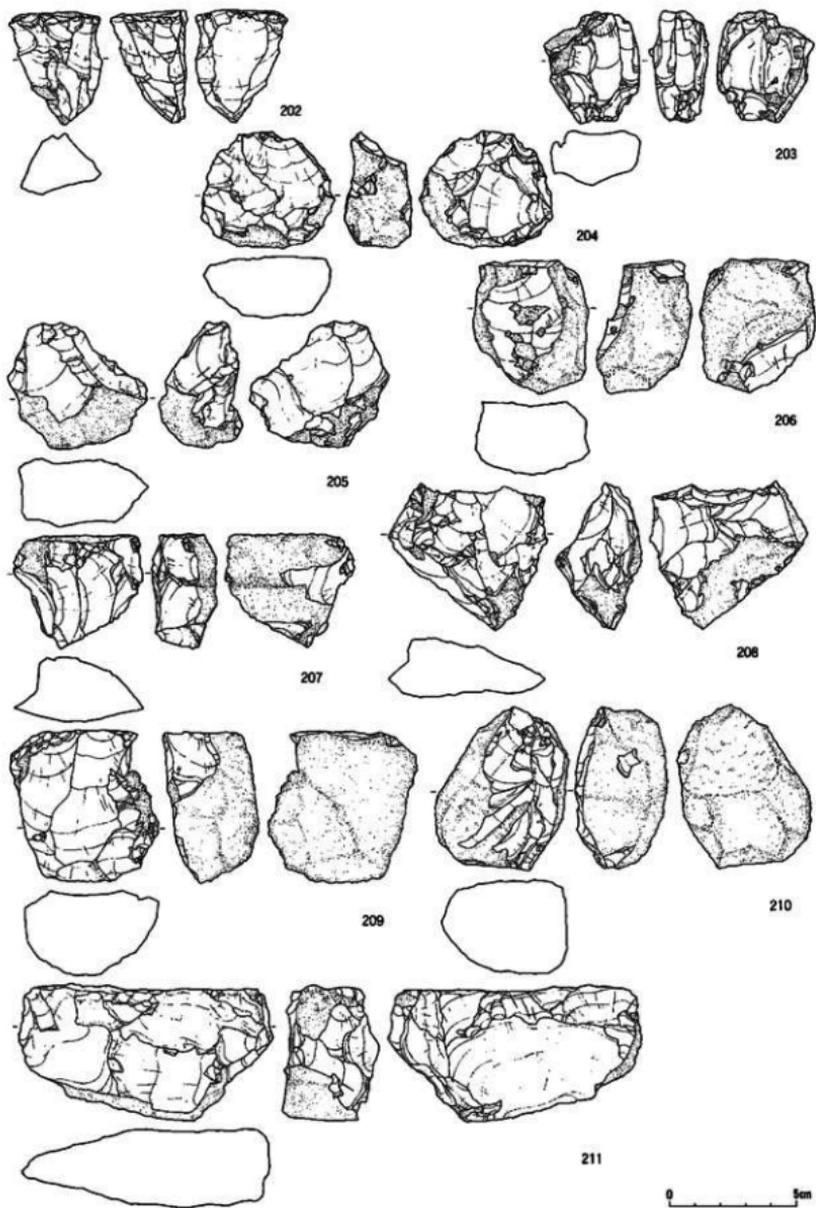
図IV-7-11 包含層出土の石器⑩



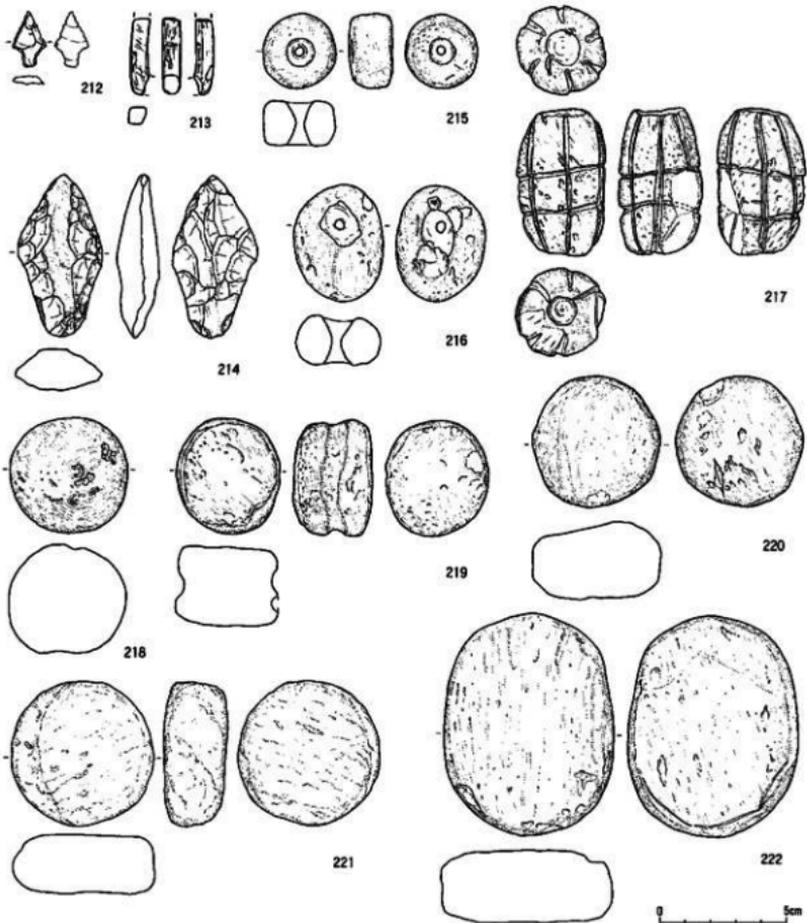
图IV-7-12 包含層出土の石器(1)



図IV-7-13 包含層出土の石器(12)



図IV-7-14 包含層出土の石器(13)



図IV-7-15 包含層出土の石器14

石錐 (II群A類) [図IV-7-6-99~113 図版-43]

55点が出土している。このうち15点を図示した。99~110は刺突部が作り出されたもの(II A1)である。109には礫表皮面が残る。111~113は両面加工のものである。103・105~112には使用によると思われる刺突部のつぶれがみられる。石質は、99・100・102がメノウ、112・113が黒曜石、このほかはすべて頁岩である。

つまみ付きナイフ (III群A類) [図IV-7-6-114~123 図版-43]

15点が出土している。このうち10点を図示した。114は片面全面加工で裏面の一侧縁に刃部をもつもの(III A1)である。115・116は片面全面加工のものであるが、III A1のように

裏面に刃部をもたないもの(ⅢA2)である。117~121は片面周縁加工のもの(ⅢA3)である。118は下部を欠損する。120は明瞭なつまみ部をもたないものの、わずかながら表面の左側縁につまみ部を作出したと思われる加工がみられることから、この範疇に分類した。122は両面加工のもの(ⅢA4)である。123は未成品と思われる。礫表皮面を残す。石質は、115・116が黒曜石、このほかはすべて頁岩である。

スクレイパー(Ⅲ群B類) [図Ⅳ-7-6~7-124~142 図版-43]

105点が出土している。このうち19点を図示した。剥片石器の中では、石鏃、石槍またはナイフについて出現率が高く、10.3%を占める。123~130は、一般に石べらと称されるもの(ⅢB1)である。124・125・127・129・130は刃部が直線的になるもの、126・128は刃部が曲線的になるものである。127は基部を、124は側縁部を欠損する。124・126~130は裏面に一次剥離面がみられる。127は礫表皮面を残す。石質は、すべて頁岩である。131~138は、縦長で側縁に刃部が設けられたもの(ⅢB5)である。133・135は、側縁部のほかに下端部にも刃部が作出されている。135~139には礫表皮面が残る。石質は、135・136が黒曜石、このほかはすべて頁岩である。139~141は素材の形状を大きく変えていないもの(ⅢB6)である。141は下端部に刺突部と思われる突起部がみられることから、石鏃としての機能を併せもつ可能性がある。石質は、139は蛇紋岩、140・141は頁岩である。142は両面加工のものである。三角形の形状を呈し、このうちの二辺が内湾する。上部を欠損する。表裏面に一次剥離面を残す。形状からみて、石べらの範疇に分類される可能性がある。石質は不明である。

石斧(Ⅳ群A類) [図Ⅳ-7-8~9-143~159 図版-44]

268点が出土している。このうち16点を図示した。礫石器の中では、最も出現率が高く60.9%を占めるが、このうちの70%ほどが器表面の剥落した小破片などである。143~145は擦り切り手法によって製作されたもの(ⅣA1)である。143は左側縁に明瞭な擦り切り痕がみられる。また、144は右側縁に、145は左側縁に不明瞭ながらそれぞれ擦り切り痕が確認できる。145は基部を欠損する。石質は、143が蛇紋岩、144が緑色泥岩、145が片岩である。146~156は全面磨製のもの(ⅣA3)である。149は基部と刃部の一部を、147・148・152・154・156は基部を、151は刃部を欠損する。石質は、151・153~156が緑色泥岩、145・150・152・154・155が片岩である。157~159は全面に粗い打ち欠きが施されている。また部分的に研磨がみられることから、未成品(ⅣA8a)と考えられる。158・159は基部を欠損する。石質は、すべて片岩である。

たたき石(Ⅴ群A類) [図Ⅳ-7-10-160~164 図版-44]

11点が出土している。このうち5点を図示した。160~162は棒状礫を素材としたもの(ⅤA1)である。160・161は礫の長軸方向の一端に、162は礫の両端と腹面にたたき痕がみられる。162は腹面より端部の使用痕が顕著であるため、くぼみ石(ⅤA4)ではなくⅤA1に分類した。163・164は扁平礫を素材としたもの(ⅤA2)である。163は礫の長軸方向の一端に、164は礫の両端と周縁部の一部にたたき痕がみられる。石質は、すべて安山岩である。

すり石(Ⅵ群A類) [図Ⅴ-4-10-12-165~190 図版-45・46・48]

122点が出土している。このうち26点を図示した。礫石器の中で、石斧について出現率が高く27.7%を占める。165~176は扁平礫を素材としたもの(ⅥA2)である。165は礫の両側縁に、166・167は礫の側縁にすり面がみられる。168~172は礫の長軸方向の両端ある

いは一端に打ち欠きがみられる。171は礫の両側縁に、このほかは一侧縁にすり面がみられる。173~177は、礫の一侧縁を打ち欠きその稜をすったものであるが、いずれもVIA3のように素材の形状を変えることはしていない。174~177は礫の長軸方向の両端に打ち欠きがみられる。石質は、171が珪岩、このほかはすべて安山岩である。178~180は扁平礫を半円状に打ち欠き弦をすったもの（VIA3）である。石質は、すべて安山岩である。181~188は北海道式石冠と称されるもの（VIA5）である。181~186は、胴部に敲打によるはちまき状の溝が廻る。187は両側縁にのみ敲打による溝がみられる。188は幅の広い溝と狭い溝2列が施される部分がみられる。いずれの溝も廻っておらず、整形途中のものと思われる。石質は、すべて安山岩である。189・190は棒状礫を使用したものである。いずれも胴部中央部がわずかに膨らむ円柱状を呈する。189は1面、190は3面のすり面がみられる。平成5年度川東地区のI-73-c区、平成6年度川西地区のN-51-a区から出土したものに類似している。石質は、いずれも安山岩である。

台石もしくは石皿（VII群A類）〔図V-7-12・13-191~194 図版-47〕

29点が出土している。このうち3点を図示した。191・194は礫の周縁を打ち欠きと敲打により整形を行っている。194は今調査で検出された台石・石皿のうち比較的小型のものである。193は断面が三角形を呈し、3面の使用面がみられる。石質は、194が凝灰岩、このほかはいずれも安山岩である。台石と分類した29点のなかには、使用痕はみられないものの、形態や出土状況からみて台石と推定されるものもこの範囲に含めた。

砥石（VII群B類）〔図V-7-13-195~201 図版-46〕

9点が出土している。このうち7点を図示した。195~199はいずれも板状の砥石（VII B 2）である。197は表面に、196・198・199は表裏面の2面に、195は裏裏面と側面の3面に研磨面がみられる。195には石斧製作にかかわるとされる幅3~5cmほどの浅い溝状の研磨面が確認される。200・201は角柱状のもので、「四面砥石」と呼ばれるものである。研磨面全体が、使用により溝状の曲面を呈する。石質は、198が軽石、このほかはいずれも砂岩である。

石核（XI群A類）〔図V-7-14-202~211 図版-48〕

206点が出土している。石質は、黒曜石、頁岩、メノウがみられる。黒曜石の使用が圧倒的に多く、さらに豊浦町豊泉原産のものが大半を占める。石核、大部分が剥片剝離を行った後の残核である。このうち10点を図示した。202を除くすべてが礫表皮面を残す。残存する礫表皮面から、207・208・209・211は径10~20cmほどの黒曜石の角礫が、204・206・210径7~10cmほどの黒曜石の円礫が利用されている。石質は、203がメノウ、このほかはすべて黒曜石である。

石製品〔図V-7-15-212~222 図版-48〕

14点が出土した。このうち11点を図示した。212は石鏃様の形状を呈するものである。片面の周縁に整形のためとおもわれる加工がみられる。1.1×0.7×0.1cm・0.1g規模で、本遺跡出土の比較的小型の石鏃のほぼ1/2の大きさである。このため石鏃本来の使用には耐えられないものと考え、石製品に分類した。213は蛇紋岩製の石製品の破片である。両端が欠損しており、形状を推定することはできなかった。残存部位から、断面は角柱状を呈し、全面が研磨されている。214は石槍様の形状を呈するものである。打ち欠きにより石槍様に整形が施されているが、刃部加工はみられない。212同様に、実用性に欠けることから、

石製品に分類した。215は平玉、216は垂飾とおもわれる。ともに軽石製である。腹背面の両側から孔が穿かれており、器面は研磨により整形している。217は胴部がやや膨らむ円柱状の石製品である。長軸方向に6本の沈線様の溝が刻まれている。さらに、これに胴部中央部で2本の沈線様の溝が交差する。長軸方向の両端に棒状のもので孔がうがわれているが、貫通はしていない。石質は、軽石である。218は球形、219～222は円形あるいは楕円形を呈する板状の石製品である。器面全面を研磨により整形している。219は研磨による溝が側面に廻る。石質は、いずれも軽石である。(立川トマス)

表Ⅳ-7-1 包含層出土掲載石器属性一覧(1)

番号	名称	分類	調査区・遺物番号	形位	大きさ(長さ×幅×厚さcm・重さg)	石質	備考
1	石 鏃	I A 3 a	I-51-c-34	VI・風筒	(3.4)×1.2×0.3・1.2	黒曜石	
2	#	#	J-55-a-2	I	(2.5)×1.1×0.3・0.9	#	
3	#	#	I-50-d-2	#	(2.1)×1.0×0.2・0.6	#	
4	#	I A 3 b	I-55-c-2	#	(2.0)×1.1×0.2・0.3	#	
5	#	I A 4 a	K-50-c-10	VI・風筒	2.0×1.8×0.4・1.3	#	
6	#	I A 4 b	F-59-b-1	I	(2.6)×1.6×0.3・1.2	#	
7	#	#	J-55-a-16	II	(2.4)×1.4×0.3・0.7	#	
8	#	#	I-58-c-3	I	(2.1)×1.3×0.2・0.5	#	
9	#	#	I-50-c-8	VI	(2.1)×1.5×0.3・0.6	頁 岩	
10	#	#	I-50-a-7	#	2.0×1.4×0.2・0.4	黒曜石	
11	#	I A 5	K-51-a-2	I	2.4×1.3×0.4・1.0	#	
12	#	#	K-53-a-2	#	2.1×1.1×0.3・0.8	不 明	
13	#	I A 6	I-51-a-5	#	3.2×1.4×0.5・2.2	黒曜石	
14	#	#	J-55-c-9	#	4.6×1.8×0.6・3.0	#	
15	#	#	I-51-d-18	VII	2.2×1.3×0.2・0.4	#	
16	#	I A 7	J-57-b-6	I	2.6×1.2×0.2・0.7	#	
17	#	#	J-56-a-24	#	1.8×0.8×0.3・0.3	#	
18	#	#	K-53-a-27	VI	1.9×0.9×0.2・0.3	#	
19	#	#	J-52-a-5	I	2.1×1.4×0.4・1.4	#	
20	#	#	K-51-a-11	#	2.9×1.5×0.3・0.9	#	
21	#	#	K-54-c-2	#	3.5×1.4×0.4・1.5	頁 岩	
22	#	#	I-58-d-6	VI	3.4×1.5×0.5・1.5	黒曜石	
23	#	#	K-52-d-6	I	3.6×1.4×0.5・1.4	頁 岩	
24	#	#	J-59-b-2	#	3.6×1.6×0.5・1.6	黒曜石	
25	#	#	J-55-b-12	VI	4.1×1.4×0.5・1.8	#	
26	#	#	I-51-c-8	I	5.0×1.6×0.6・2.2	頁 岩	
27	#	#	I-58-d-9	VI・風筒	2.2×1.5×0.4・0.8	黒曜石	
28	#	#	I-50-a-2	I	(1.9)×1.4×0.3・0.6	#	
29	#	#	J-56-c-34	VI	2.7×1.5×0.4・1.2	頁 岩	
30	#	#	J-56-c-38	VI・風筒	2.8×1.6×0.5・1.2	#	
31	#	#	K-55-d-4	I	(2.9)×1.7×0.4・1.0	黒曜石	
32	#	#	I-50-c-3	#	3.5×1.6×0.5・1.5	#	
33	#	#	K-56-c-2	#	2.8×1.1×0.3・0.8	#	
34	#	#	J-54-b-3	#	3.6×1.6×0.4・1.4	#	
35	#	#	J-55-a-15	II	3.0×1.4×0.3・1.0	#	
36	#	#	J-54-d-6	I	(3.9)×1.9×0.4・1.8	#	
37	#	#	K-56-b-6	#	(3.1)×2.2×0.5・1.8	頁 岩	
38	#	#	J-55-a-17	#	4.0×2.6×0.5・2.5	黒曜石	
39	#	#	J-55-c-7	#	3.5×2.0×0.5・2.4	#	
40	#	#	K-56-a-2	#	4.4×1.6×0.5・2.8	#	
41	#	#	K-55-a-22	II	3.8×1.4×0.3・1.4	#	
42	#	#	K-58-b-5	I	4.6×1.7×0.7・3.7	頁 岩	
43	#	#	J-57-a-2	#	(4.9)×1.7×0.6・3.2	黒曜石	
44	石鏃・ナイフ	I B 1	K-52-c-5	#	4.3×2.2×0.6・3.7	#	
45	#	#	K-58-d-2	#	4.3×2.4×0.7・4.4	#	
46	#	#	I-57-b-3	#	4.3×2.7×0.8・5.5	#	
47	#	#	K-55-a-46	II	4.3×2.5×0.7・4.8	#	
48	#	#	J-55-d-9	I	5.0×2.5×0.9・6.6	#	
49	#	#	K-54-a-65	VI	5.3×3.3×0.8・7.2	頁 岩	
50	#	#	J-55-b-26	#	5.6×3.5×0.7・9.1	黒曜石	
51	#	#	I-52-c-11	I	5.5×(3.2)×0.7・8.2	#	
52	#	#	I-55-c-23	VI	5.7×2.7×0.7・8.2	#	
53	#	#	J-55-a-3	I	(5.9)×2.9×0.5・7.2	#	
54	#	#	K-55-b-2	#	5.9×3.0×0.7・7.5	#	
55	#	#	I-52-c-10	#	6.3×3.2×0.8・10.7	#	
56	#	#	J-52-c-8	#	6.4×3.1×0.7・11.4	#	
57	#	#	K-55-a-80	VI	6.7×(3.4)×0.7・10.6	#	
58	#	#	K-55-b-11	I	6.9×2.6×0.8・10.1	#	
59	#	#	K-53-d-48	VI・風筒	6.8×2.6×0.8・10.6	頁 岩	
60	#	#	J-54-d-8	I	7.4×2.9×0.9・11.6	黒曜石	
61	#	#	K-54-a-73	VI	8.3×2.7×0.7・9.1	#	
62	#	#	J-58-a-17	VI・風筒	(7.8)×3.2×0.8・14.0	#	
63	#	#	J-54-d-149	VI	9.1×3.2×0.7・14.9	#	
64	#	#	K-53-c-34	VI・風筒	9.6×2.9×1.0・11.4	頁 岩	

表IV-7-1 包含層出土掘載石器具属性一覧(2)

番号	名称	分類	調査区・遺物番号	層位	大きさ(長さ×幅×厚さcm・重量g)	材質	備考	
65	石軸・ナイフ	I B 1	J-56-a-42	VI	(10.3)×3.5×1.1	29.4	黒曜石	
66	#	I B 2	I-58-b-4	I	4.1×2.0×0.6	3.7	#	
67	#	#	J-54-d-21	#	3.6×2.7×0.8	9.2	#	
68	#	#	J-55-b-5	#	5.6×2.6×0.7	6.6	#	
69	#	#	K-55-d-6	#	5.7×3.2×0.9	11.4	#	
70	#	#	K-52-a-5	#	7.7×3.5×1.0	21.5	#	
71	#	#	I-57-b-4	#	5.6×2.3×0.8	9.9	頁岩	
72	#	#	I-55-a-69	VI	5.7×2.0×0.9	7.8	黒曜石	
73	#	#	K-56-d-2	I	6.8×2.2×1.1	11.7	頁岩	
74	#	#	J-56-d-7	#	7.2×2.8×0.9	14.7	#	
75	#	#	K-56-b-2	#	(5.6)×2.7×0.7	7.7	黒曜石	
76	#	#	K-54-c-3	#	6.1×2.4×0.8	8.8	#	
77	#	#	K-54-a-14	#	6.4×3.0×1.1	14.9	#	
78	#	#	K-57-b-2	#	6.4×3.2×0.7	11.8	#	
79	#	#	K-54-a-60	VI	5.7×2.7×0.6	8.1	頁岩	
80	#	#	K-52-d-97	VI・風蝕	5.8×2.9×0.7	8.5	#	
81	#	#	J-54-a-7	I	5.2×3.2×0.8	10.9	黒曜石	
82	#	#	J-54-a-8	#	6.1×3.3×1.1	18.7	頁岩	
83	#	#	J-55-d-4	#	6.6×3.5×1.2	18.7	黒曜石	
84	#	#	K-55-a-5	#	7.0×3.7×1.0	22.4	頁岩	
85	#	#	I-52-a-6	#	7.5×3.8×1.2	31.5	黒曜石	
86	#	#	J-58-a-14	VI・風蝕	7.9×4.6×1.1	30.1	#	
87	#	#	J-58-a-15	#	9.2×4.3×1.3	39.4	#	
88	#	#	J-58-a-16	#	8.9×5.2×1.3	40.3	#	
89	#	#	I-53-b-9	I	8.6×4.8×1.0	39.4	#	
90	#	#	K-56-d-12	II・風蝕	11.8×3.9×1.0	31.7	頁岩	
91	#	#	I-57-a-18	VI	8.1×2.4×1.1	16.2	#	
92	#	#	J-54-d-27	I	8.3×2.2×0.9	20.2	#	
93	#	#	J-56-a-57	VI	8.7×2.9×0.9	23.4	#	
94	#	#	J-54-d-26	I	9.7×2.4×0.8	16.3	#	
95	#	#	J-56-c-12	#	(7.9)×2.6×1.1	15.8	#	
96	#	#	K-58-c-2	I	(11.3)×3.2×1.0	34.2	#	
97	#	#	I-58-b-12	VI・風蝕	10.4×2.7×1.0	28.6	#	
98	#	#	J-54-a-9	I	12.3×4.2×1.9	85.6	#	
99	石	鏡	II A 1	K-56-a-4	#	1.9×0.9×0.6	0.7	メノウ
100	#	#	#	J-52-b-11	#	2.2×1.4×0.3	1.0	#
101	#	#	#	K-52-a-6	#	2.3×1.1×0.6	1.7	頁岩
102	#	#	#	K-57-a-4	#	2.0×1.4×0.6	0.9	メノウ
103	#	#	#	J-52-c-32	VI	2.1×1.1×0.8	2.2	頁岩
104	#	#	#	J-55-a-25	#	2.3×1.4×0.8	1.9	#
105	#	#	#	J-52-c-31	#	(2.4)×1.3×0.5	1.4	#
106	#	#	#	K-54-a-20	I	2.1×0.9×0.5	0.9	#
107	#	#	#	J-56-c-41	VI・風蝕	2.2×1.2×0.7	2.3	#
108	#	#	#	J-56-c-11	I	4.6×1.4×0.7	4.0	#
109	#	#	#	J-56-d-39	VI	5.4×1.5×0.8	5.6	#
110	#	#	#	I-54-b-16	VI・風蝕	5.7×1.6×0.8	6.9	#
111	#	#	#	J-52-c-42	VI	3.5×1.7×0.7	3.6	#
112	#	#	#	J-54-a-6	I	5.3×1.9×0.9	9.0	黒曜石
113	#	#	#	J-52-c-70	VI	6.3×2.6×1.2	13.4	#
114	つば付ナイフ	III A 1	J-54-c-28	覆土	10.2×3.8×0.6	22.3	頁岩	
115	#	III A 2	J-55-b-14	VI	4.9×1.2×0.6	3.8	黒曜石	
116	#	#	K-55-a-85	#	5.9×2.6×0.9	11.1	#	
117	#	III A 3	K-55-a-8	I	4.2×3.5×0.8	5.2	頁岩	
118	#	#	J-55-a-9	#	(3.6)×2.5×0.7	6.1	#	
119	#	#	K-50-d-21	II	6.2×4.3×1.3	35.3	#	
120	#	#	J-52-d-68	VI	9.2×2.3×0.6	13.3	#	
121	#	#	J-54-d-121	#	11.2×3.8×0.7	24.0	#	
122	#	III A 4	J-55-d-24	#	7.1×1.8×0.7	7.1	#	
123	#	III A 8	J-56-c-50	VI・風蝕	6.9×2.7×1.3	19.7	#	
124	スクレイパー	III B 1	I-57-b-13	I	5.0×2.7×0.8	10.5	#	
125	#	#	J-54-d-145	VI	6.0×3.3×1.0	17.8	#	
126	#	#	K-58-a-3	I	5.2×3.5×1.3	26.1	#	
127	#	#	J-55-a-45	VI	(5.7)×3.8×1.4	19.1	#	
128	#	#	K-55-a-9	I	5.5×4.3×1.1	30.0	#	
129	#	#	J-54-b-16	#	7.9×3.9×0.9	31.3	#	
130	#	#	J-54-d-28	#	7.8×4.1×1.2	44.9	#	
131	#	III B 5	J-54-d-32	#	6.2×2.7×1.0	10.6	#	
132	#	#	I-54-b-6	#	6.6×3.1×0.9	24.9	#	
133	#	#	K-55-d-8	#	7.7×3.2×1.4	39.9	#	
134	#	#	J-56-a-5	#	7.5×2.1×1.1	20.7	頁岩	
135	#	#	I-53-a-7	#	7.9×2.4×0.8	16.7	黒曜石	
136	#	#	J-54-d-34	I	8.6×3.0×1.3	26.5	#	
137	#	#	J-56-a-19	VI・風蝕	10.0×3.6×1.4	62.4	頁岩	
138	#	#	J-56-a-29	I	8.8×4.1×0.9	35.6	#	
139	#	III B 6	K-55-a-5	#	7.4×4.3×1.4	46.2	板状岩	
140	#	#	K-57-d-4	#	6.8×4.1×1.0	33.6	頁岩	
141	#	#	J-52-d-67	VI	6.7×4.7×1.1	32.3	#	
142	#	III B	K-54-d-36	#	(3.8)×3.8×0.6	8.5	不明	
143	石	押	IV A 1	I-57-b-5	I	11.6×3.4×1.4	82.9	板状岩

表IV-7-1 包含層出土掲載石器属性一覧(3)

番号	名称	分類	調査区・遺物番号	層位	大きさ(長さ×幅×厚さcm・重量g)	石質	備考
144	石 斧	Ⅳ A 1	J-54-d-36	I	8.1×3.2×1.2	45.6	緑色泥岩
145	#	#	J-56-a-6	#	(6.5)×3.3×1.5	50.6	片 岩
146	#	Ⅳ A 3	K-56-b-13	#	6.3×1.8×0.5	10.0	#
147	#	#	K-56-c-3	#	(5.4)×2.2×0.6	11.0	#
148	#	#	J-54-c-8	Ⅵ	(7.7)×1.3×0.8	29.6	#
149	#	#	J-56-b-1	I	(9.4)×3.6×1.1	56.8	#
150	#	#	J-52-b-18	#	(9.7)×3.2×1.2	57.6	#
151	#	#	J-52-a-23	#	(7.2)×3.1×1.2	39.6	緑色泥岩
152	#	#	J-54-d-56	#	(12.9)×4.7×1.7	167.6	片 岩
153	#	#	J-56-c-35	Ⅵ	13.2×4.7×2.5	238.9	緑色泥岩
154	#	#	J-52-c-72	#	(15.9)×4.3×2.3	247.0	片 岩
155	#	#	J-57-b-6	I	13.1×3.6×2.1	161.5	#
156	#	#	J-55-c-31	Ⅵ	(17.7)×5.9×4.2	660.0	緑色泥岩
157	#	#	J-53-b-10	I	(9.2)×4.2×1.1	61.6	片 岩
158	#	#	I-50-a-2	#	(6.4)×3.2×1.5	46.8	#
159	#	#	I-52-d-2	#	(14.1)×4.7×2.0	199.0	#
160	たたま石	Ⅴ A 1	G-57-b-4	#	11.8×5.8×5.0	395.2	安山岩
161	#	#	K-53-c-45	Ⅵ	13.9×9.2×7.6	1374.0	#
162	#	#	H-53-c-1	#	10.0×6.0×4.8	447.8	#
163	#	Ⅴ A 2	K-51-a-5	I	(7.6)×5.8×3.2	182.6	#
164	#	#	G-58-a-6	Ⅵ・風割	10.1×8.5×3.5	523.2	#
165	すり石	Ⅵ A 2	J-55-a-27	Ⅵ	5.7×12.3×1.8	195.4	#
166	#	#	K-50-c-30	Ⅵ・風割	7.7×11.8×2.7	313.4	#
167	#	#	I-57-b-15	I	7.6×10.7×4.2	330.0	#
168	#	#	K-54-d-7	#	7.4×10.8×2.2	248.0	#
169	#	#	I-53-a-17	#	8.7×12.8×3.5	459.4	#
170	#	#	J-52-b-17	#	8.7×12.6×2.5	554.6	#
171	#	#	I-52-d-9	#	4.4×7.5×3.0	151.8	#
172	#	#	K-52-b-10	#	9.2×(14.1)×3.4	640.0	堆安山岩
173	#	#	K-52-b-33	Ⅵ	6.6×10.3×1.4	168.6	#
174	#	#	K-53-a-165	#	6.2×12.2×2.7	284.4	#
175	#	#	K-53-d-53	Ⅵ・風割	8.2×17.0×3.4	725.0	#
176	#	#	K-52-d-61	Ⅵ	8.8×15.5×2.6	579.2	#
177	#	Ⅵ A 3	K-51-a-6	I	9.2×15.4×2.5	392.0	#
178	#	#	K-54-a-82	Ⅵ	9.7×16.4×3.1	753.0	#
179	#	#	E-61-a-4	I	9.2×15.0×2.2	527.0	#
180	#	#	K-50-c-3	#	8.7×13.8×2.4	377.0	#
181	#	Ⅳ A 5	I-55-b-43	Ⅵ	9.0×12.7×5.7	1050.0	安山岩
182	#	#	K-50-c-88	#	7.2×10.7×6.8	689.0	#
183	#	#	I-58-a-22	I	10.4×12.3×5.8	1132.0	#
184	#	#	K-54-a-46	Ⅵ	8.1×19.3×6.7	890.0	#
185	#	#	J-53-d-15	Ⅱ・風割	8.3×(11.2)×7.6	940.0	#
186	#	#	K-52-a-11	I	10.0×12.9×5.4	943.0	#
187	#	#	J-54-d-132	#	7.0×8.5×6.1	413.8	#
188	#	#	J-50-d-21	Ⅵ・風割	9.2×(13.1)×7.7	1115.0	#
189	#	Ⅵ A G	G-57-c-1	I	12.5×33.1×14.5	8495.0	#
190	#	#	K-52-a-30	Ⅵ	11.7×38.2×14.0	9660.0	#
191	石臼・石皿	Ⅵ A	K-51-c-42	#	33.2×28.2×17.4	20160.0	#
192	#	#	I-55-b-40	#	(30.0)×24.8×11.1	11290.0	#
193	#	#	K-50-d-41	Ⅵ・風割	(22.0)×25.0×14.0	9010.0	#
194	#	#	K-50-c-24	Ⅵ	(23.0)×17.5×5.4	2590.0	凝灰岩
195	砥石	Ⅵ B 2	K-51-b-33	#	(10.4)×9.6×3.5	337.4	砂 岩
196	#	#	K-51-c-5	I	11.4×6.7×2.3	167.6	#
197	#	#	J-52-d-70	Ⅵ	17.2×9.6×2.0	382.0	#
198	#	#	J-53-a-43	Ⅵ・風割	13.4×9.7×3.8	217.8	緑 石
199	#	#	K-55-a-10	I	11.4×7.7×2.0	231.8	砂 岩
200	#	Ⅵ B 3	I-52-b-36	#	11.6×5.5×3.8	253.0	#
201	#	#	K-51-a-39	Ⅱ・風割	(18.8)×4.7×2.9	360.8	砂 岩
202	石 槌	Ⅱ A	J-53-a-82	Ⅵ・風割	4.5×3.6×2.4	38.1	黒曜石
203	#	#	K-56-b-16	I	4.3×3.7×2.2	36.5	ノコ
204	#	#	J-52-c-56	Ⅵ	4.6×5.3×2.4	62.0	黒曜石
205	#	#	J-52-d-83	#	4.9×5.4×2.7	65.5	#
206	#	#	J-52-b-1	#	5.2×4.3×2.8	92.5	#
207	#	#	J-54-c-69	Ⅵ	4.4×5.0×2.5	57.0	#
208	#	#	J-58-b-6	I	5.6×6.2×2.3	71.2	#
209	#	#	K-51-d-61	Ⅵ	6.0×5.7×3.3	118.8	#
210	#	#	J-55-b-9	I	6.4×5.1×3.7	136.6	#
211	#	#	K-53-c-20	#	5.4×9.9×3.1	198.1	#
212	石製品	I A 7	J-51-b-34	Ⅵ・風割	1.1×0.7×0.1	0.1	#
213	#	#	K-52-a-14	I	(3.0)×0.8×0.7	2.7	総紋 岩
214	#	I B 2	J-54-d-25	#	6.4×3.3×1.6	20.0	砥 石
215	#	#	J-52-c-16	#	3.0×2.8×1.7	5.6	#
216	#	#	J-52-a-41	Ⅵ	4.6×3.5×2.0	9.0	#
217	#	#	J-54-c-16	#	5.7×3.5×2.5	29.9	#
218	#	#	J-54-d-48	I・風割	4.5×4.8×4.3	25.8	#
219	#	#	K-52-a-25	Ⅵ	4.5×4.0×3.1	24.7	#
220	#	#	J-54-d-17	I	5.2×5.0×3.1	26.0	#
221	#	#	J-52-a-35	Ⅵ	5.7×5.5×2.3	27.4	#
222	#	#	J-55-a-40	Ⅵ	8.8×6.5×2.9	71.6	#

V. 高岡2遺跡

1. 概要 (図V-1-1)

調査範囲は高岡1遺跡の川東地区の東側、町道高岡一新山梨線に接する。貫別川と古別川に挟まれ、内浦湾(噴火湾)に向かって落ちこむ尾根状の崖堆積物の西側斜面上に立地する。標高は約47~54mで、大きくは北東から南西に傾斜している。道路用地になる前は、北半部が畑地、南半部は植林によるカラマツ林であった。調査区のうち、畑地部分はほぼ全域に耕作による土層の攪乱がみられるが、わずかに調査区北西境界付近で高岡1遺跡のII層に相当する黒色土が確認された。しかし、この黒色土中からは、遺物は検出されなかった。また、植林地部分は表土が10~20cmほど堆積するだけで、高岡1遺跡で確認された遺物包含層のIII層・IV層・VI層に相当する土層はみられない。

当初、調査区中央部に当たるI・J-79・80付近の傾斜がいくぶん緩やかになる傾斜変換部東側の平坦部に遺構が予想されたが、調査の結果遺構は確認されなかった。

遺物は、土器片2,218点、石器等956点の合計3,174点である。遺物の分布は、大きくは調査区の中央部から北西方向に偏っている。Hライン以南では極端に出土量が少なくなる。土器は縄文時代中期中葉から末葉にかけてのサイベ沢VII式、見晴町式、榎林式、天神山式、大安在B式、柏木川式、ノグツブII式、煉瓦台式、北筒式が多く出土し、このほか少量ではあるが早期の特徴をもつものも出土している。

石器は石鏃、石槍、石錐、つまみ付ナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、台石、すり石、石皿、砥石等が出土した。また、黒曜石の鏃、残核、剥片・砕片が出土しているが、高岡1遺跡と同様に、原産地豊泉群(豊浦町)の黒曜石の使用率が高い。

(立川トマス)

2. 土層の区分 [図V-2-1-2] 平成5、6年度に調査した川東地区の分類[図III-3]に準じて以下のように区分した。

I層: 暗褐色耕作表土、客土。

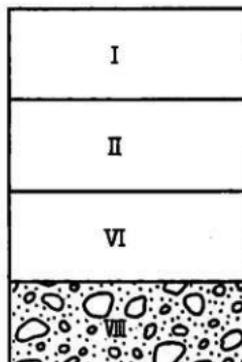
II層: 黒褐色火山灰性腐植土(黒ボク土)。この中に灰白色火山灰(U s - b以降の火山灰に対比される)がある。

VI層: 茶褐色土。

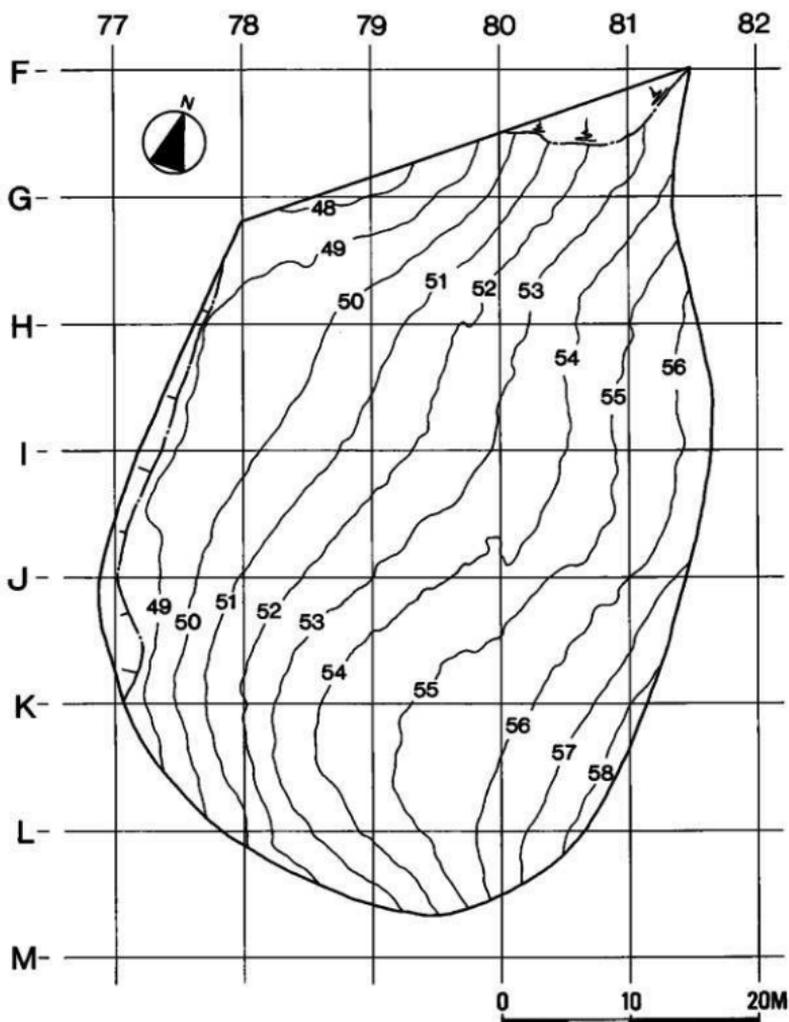
VII層: 黄褐色土~褐色土。岩礫混じりで、しまり強い。

遺物の包含層はVI層であると考えられるが、傾斜地であるため、ほとんど残存しておらず、遺物はおもに表土であるI層から出土した。I層は客土がみられたG-78.5~G-80の部分以外は、20cm前後と堆積はうすかった。

(末光正卓)



図V-2-1 高岡2遺跡土層柱状模式図



図V-1 高岡2遺跡の地形

3. 包含層の土器

土器破片は2218点(表探資料1点を含む)出土した。時期は縄文時代早期、中期、後期のものである。早期、後期のものは少量で、中期後半のものが大半をしめる。器形を知りうる程度復元できたものは1個体である。遺跡の立地の性格上遺物の移動がはげしく、高岡1遺跡のもより摩耗しているものが多い。土器の分類作業等については、Ⅲ-6、「高岡1遺跡 包含層出土の土器」と同様である。

分布 [図V-3-8・9]

総破片数の分布と、口縁部から識別したⅢ群土器の個体数の分布を大グリッド単位で図示した。

総破片数の分布図をみると、調査区の全域から土器の出土が認められるが、H・I-77~79区に多い。この区域は傾斜が比較的ゆるやかなところである。

個体数の分布については昨年度に調査が完了した高岡1遺跡川東地区についても記載した。川東地区はI-73区、高岡2遺跡はH-77・78区に多く分布している。全体的にみると、H・I-71~79区に多く認められる。H・I-74~77ラインにかけては、町道高岡新山梨線(旧国道)の工事で削平をうけたため、分布がみられないものと考えられる。また、調査区において認められる分布の濃淡は、遺構集中範囲との関連はみられず、包含層の残存状況に影響をうけているものと考えられる。

縄文時代早期の土器

I群b-4類土器 [図V-3-1-2・3 表V-3-2]

中茶路式に相当するもの

2は3本の微隆起線がみられる。この微隆起線と器面とに同時に施文した短縄文がみられる。3は微隆起線上に撚紐の圧痕がみられ、器面にはLの絡条体圧痕文がある。

縄文時代中期の土器

Ⅲ群a-2類土器 [図V-3-1-4~17 表V-3-2]

サイベ沢Ⅶ式に相当するもの

a類：貼付文が施されるもの(4・5)

4・5ともに山形突起部である。4は地文施文後に粘土紐を2本貼り付けて、その上に縄線文を施している。また、粘土紐を縁のように沈線文がえがかれている。5は地文施文後に6本の横走る沈線文を施し、円形の粘土塊を貼り付けている。

b類：沈線文が施されるもの(6~17)

6~11・13~15は2本組、16・17は3本組の沈線文がみられる。6~8は同一個体である。口唇には縄文が施されている。9は浅い沈線文がみられる。口唇には撚紐が押捺されている。10・11は同一個体である。細い沈線文が施されている。口唇には半截竹管状工具による刻みがみられる。12は山形突起部の部分で、6本の横走る沈線文がみられる。17は色調が暗褐色を呈し、焼成は良好である。

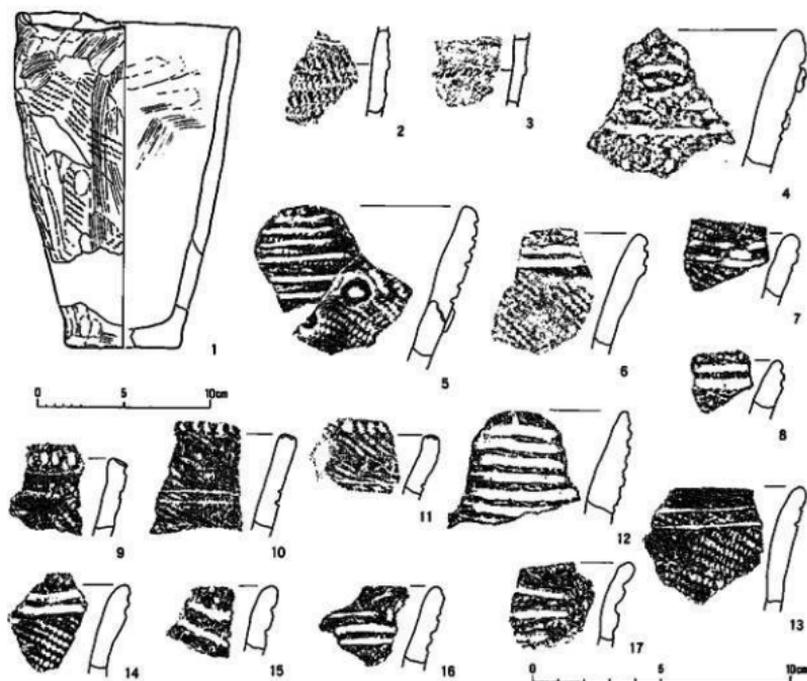
Ⅲ群b-1類土器 [図V-3-2-18~31 表V-3-2]

見晴町式、榎林式、天神山式に相当するものがある。

見晴町式に相当するもの(18~28)

a類：山形突起部に文様が施されるもの(18・19)

18・19は口唇が切り出しナイフ形で、地文と同じ縄文が施されている。18は3本の粘土



図V-3-1 包含層出土の土器(1)

紐が縦方向に貼り付けられている。19は横方向にRLの縄線文が3本みられる。

b類：地文の縄文のみのもの(20~28)

口唇は、20・25が切り出しナイフ形、21・22は角形、26は丸形、23・24はやや尖り気味である。20は山形突起部を欠損する。21は平坦な口唇に縄文がみられる。22は摩耗が著しい。23・24には綾絡文が施されている。25は内面が丹念に磨かれている。26は地文がRL原体による横走縄文である。補修孔が1箇所みられる。27は摩耗が著しい。28は山形突起部で、口唇に板状工具を突き刺した痕がみられる。

覆林式に相当するもの(29・30)

29・30ともに摩耗が著しく、地文は観察されない。30の口縁部には2本の横走る沈線文がみられる。

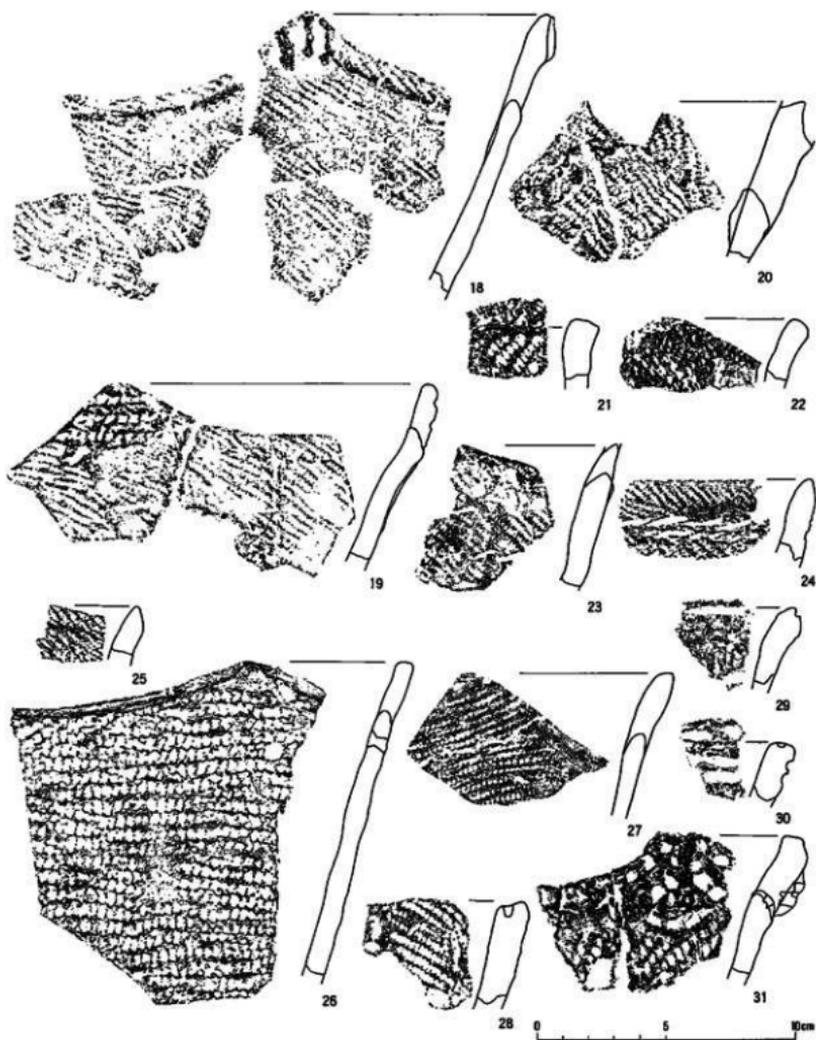
天神山式に相当するもの(31)

山形突起部に粘土塊を貼り付け、その上と突起部の口唇に半截竹管状工具による刺突文を施している。

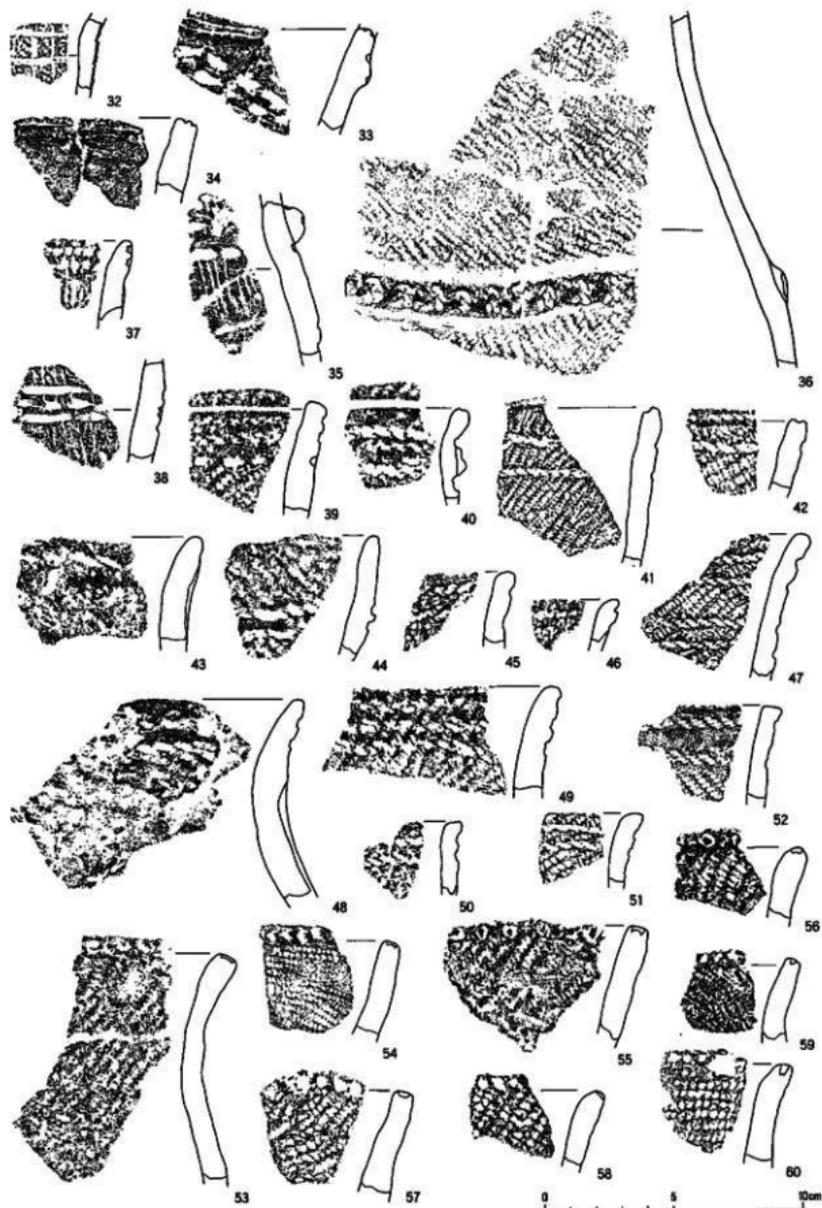
Ⅲ群b-2類土器 [図V-3-3-32~4-70 表V-3-2]

大安在B式に相当するものなどである(32~70)。

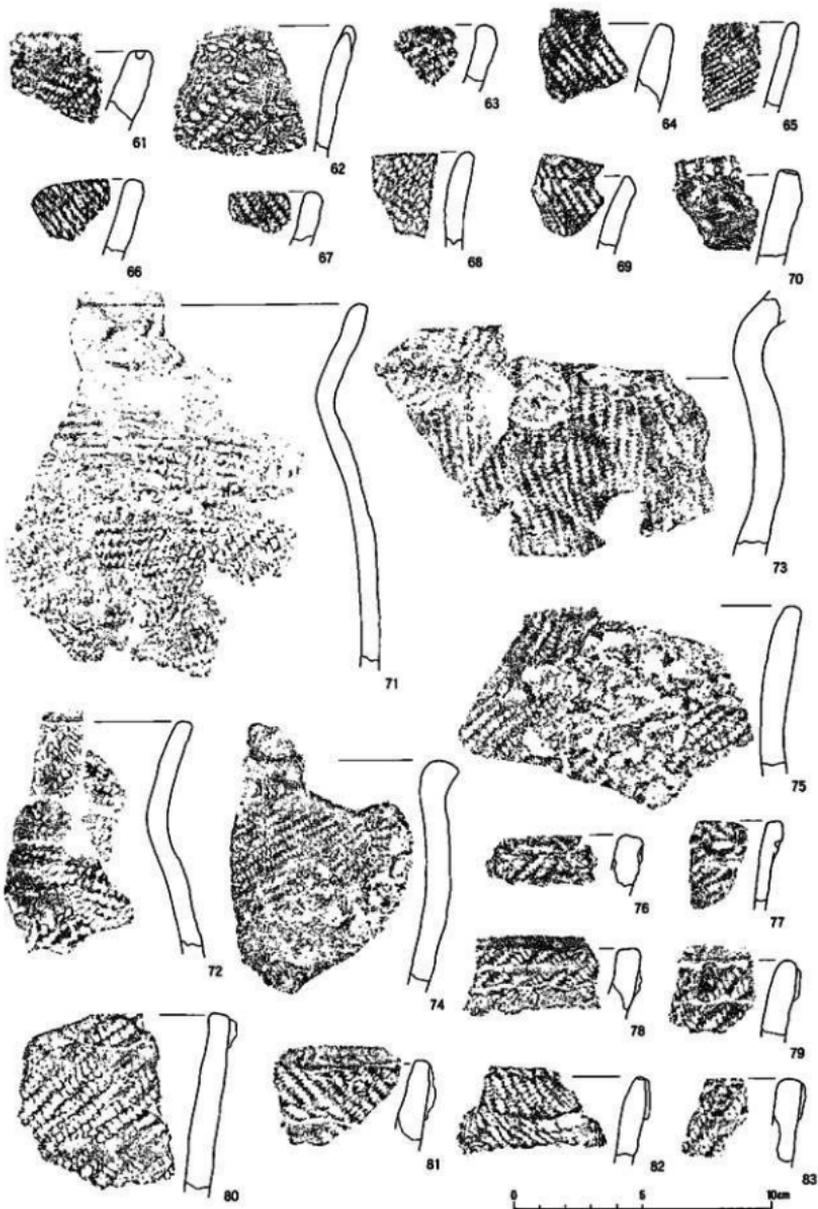
a類：沈線文が施されるもの(32)



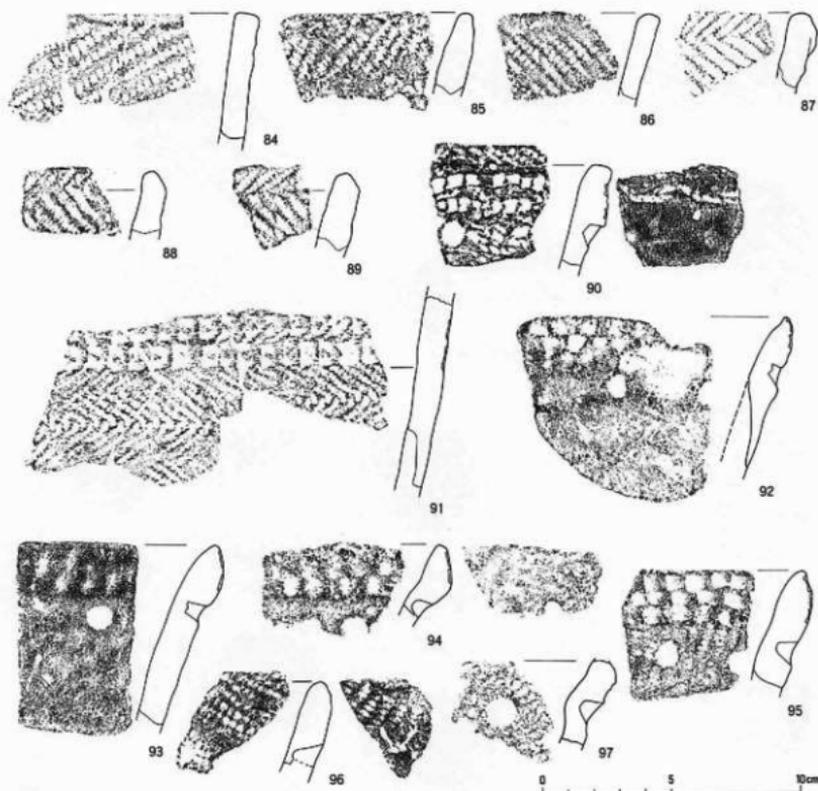
図V-3-2 包層出土の土器(2)



図V-3-3 包含層出土の土器(3)



図V-3-4 包含層出土の土器(4)



図V-3-5 包含層出土の土器(5)

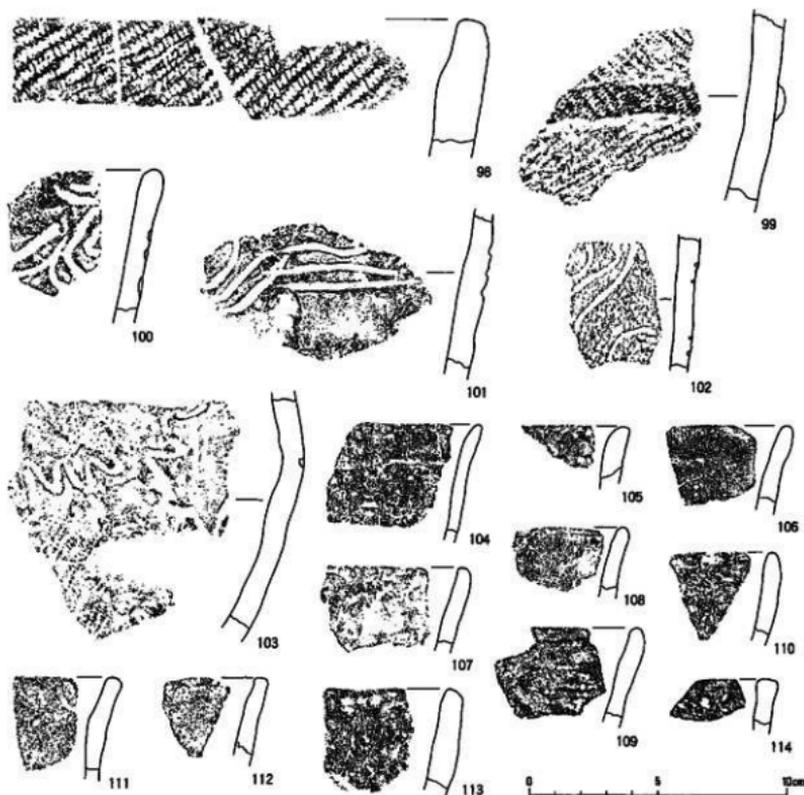
32は地文の細文を施文後、縦方向の沈線文をえがき、横方向のものを施している。

b類：貼付帯をもつもの(33・35・36)

33～35は同一個体であると考えられる。33は波状口縁で、突起部に対応するような形で貼付帯がみられるものである。貼付帯上とその上縁の器面に連続刺突文を施している。口唇にはRの燃糸文がみられる。34は口縁部は無文であるが、口唇にはRの燃糸文がみられる。35は頸部～肩部で横環する隆起帯の部分である。隆起帯上に2列、その下縁の器面に1列の連続刺突文が施されている。地文は縦方向に施文されたRの燃糸文である。破片の下部に2本の沈線文がみられる。36には燃紐による刻みが施された貼付帯がある。これが水平に横環すると考えると、この破片の傾きは実測図のようになり貼付帯の位置は肩部～体部上半部であるとおもわれる。

c類：刺突文が施されるもの(37～39)

37は口縁部に2列の円形刺突文があり、その下には縦位の燃糸文みられる。38は連続刺

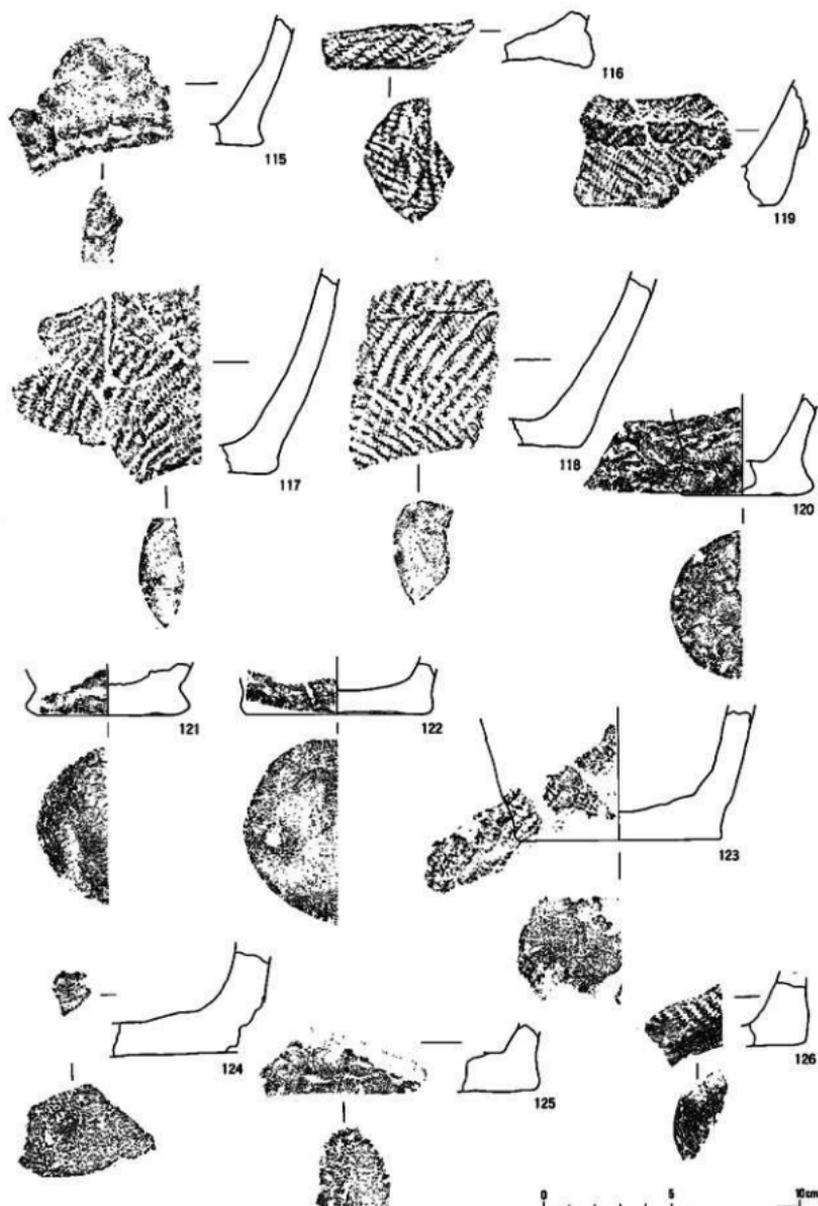


図V-3-6 包含層出土の土器(6)

突文を挟むようにして2本の横走る沈線文がある。地文はRの撚糸文の縦位施文である。33~35と同一個体であるかもしれない。39は横方向に連続刺突文と2本の縄線文(LR)がみられる。摩耗のため明瞭ではないが、口唇には縄文が施されている。

d類：縄線文が施されるもの(40~52)

縄線文はいずれの破片もLRの原体を使用している。40は外反する口縁部で、貼付帯らしきものがある。その上とそれを挟むように、縄線文が3本施されている。摩耗のため明瞭ではないが、口唇には縄文あるいは縄線文の「節」がみられる。41・42は口唇と口縁部に縄線文がみられる。43は摩耗が著しい。口縁部に縄線文がみられる。44~46は2本の縄線文がみられる。47はやや外反する口縁部で4本の縄線文がみられる。口唇は無文で丹念に磨きかけられている。48は外面の大半が剥落しているものである。口縁部が外反し、2本の縄線文が施されている。49は縄線文が3本、50・51は2本みられ、いずれも口唇は丹念に磨きかけられている。50・51は同一個体であるかもしれない。52は2本の縄線文が施



図V-3-7 包含層出土の土器(7)

されている。口唇は角形を呈し、縄線文の間はなで調整により無文となっている。胎土には砂を含んでおり、Ⅲ群b-3類~Ⅳ群a類に分類されるものかもしれない。

e類：地文の縄文のみのもの(53~69)

53~61は口唇に施文されているものである。61はLR縄線文、53・54は半載竹管状工具による刺突文がみられる。53は口縁部が外反するものである。55・56は同一個体で、中空の円形棒状工具による刺突文がある。57・58は半載竹管状工具による刺突文とおもわれる。59は板状工具による刺突文、60は深めの円形の刺突文がそれぞれ施されている。

62~69は口唇が無文のものである。62はわずかに起伏のある口縁部である。地文の縄文は大きめの節をもつ条と、小さめの節をもつ条の2本があり、これらの条は離れている。異節斜縄文であろう。63は口唇の内面がやや張り出している。64~67は口唇から内面にかけてなで調整がされている。68は口唇が丹念に磨かれている。69は口唇が切り出しナイフ形で、Ⅲ群b-1類に分類されるものかもしれない。

g類：その他のもの(70)

70は無文のもので、口唇には半載竹管状工具による刻み目がつけられている。

Ⅲ群b-3類土器 [図V-3-4-71~5-97 表V-3-2]

ノダップⅡ式に相当するもの(71~75)

71・72は同一個体である。外反する口縁部が頸部ですぼまり、ゆるやかに胴部へと張り出す器形である。地文は横走する縄文で、口唇から内面にかけて丹念に磨きがかけられている。焼成は良好である。73はくびれる頸部の部分で、胴部上半が張り出すものである。地文は縦走する縄文である。74は口縁部の外反する部分の幅が短いもので、胴部のあたりはゆるやかにふくらむ。地文は斜行縄文で、口唇はやや肥厚しなでられている。75は頸部で若干すぼまりゆるやかに胴部へとつながるものである。器面の大半が剥落しているが、斜行縄文がみられる。

煉瓦台式に相当するもの(76~89)

a類：短刻線文が施されているもの(76・77)

76・77は貼付帯上に短刻線文が施されているものである。77は短刻線文が横環する部分で羽状縄文を形成している。

b類：貼付帯があり、その上に縄文が施されているもの(78~83)

78は貼付帯のほぼ中央部分で羽状縄文を形成している。この部分には横方向のLの捻紐の痕跡がみられる。これは羽状縄文を施すために、2本の原体をLの捻紐でむすんで施文したものと推察される。79は口唇直下の器面に貼付帯がある。地文は斜行縄文である。80・81・83は口縁部の直下の器面に貼付帯がある。いずれも斜行縄文がみられる。82は口唇に縄文が施されており、Ⅲ群b-1類に分類されるものかもしれない。

c類：地文の縄文のみのもの(84~89)

84~86は斜行縄文のものである。84は縦位施文のようである。85は図示していないが、破片の右下の部分に外面と内面の両方からの補修孔がみられるが、位置が少しずれており互いに貫通はしていない。87~89は羽状縄文のものである。87はLR原体を口縁部は横方向に、その下位は縦方向に回転施文している。88・89は同一個体である。

北筒式(トコロ6類)に相当するもの(91~97)

b類：器面に押引文が施されるもの(91)

91は胴部の破片である。地文は結束第一種の羽状縄文で、横環する2本の押引文が施されている。

c類：口唇と口縁部に施文されるもの(90)

90は口縁部が肥厚し、その上には竹管状の工具による押引文が2本みられる。口唇には縄文が施されており、断面は角形を呈する。綾絡文が内外面に施されている。

e類：口縁部に施文されるもの(92~95)

92・93は同一個体である。ともに摩耗が著しいが、断面が三角形に肥厚する口縁部には3本の押引文がみられる。94も摩耗している。口縁部には2本の押引文がみられる。内面には、ゆるやかな突瘤文がみられる。拓影図では不明瞭であるが、内面の破片の右下にも縄文がみられる。95は口縁部に3本の押引文がみられる。器面の縄文はやや縦走気味である。内面はゆるやかな突瘤文がみられる。

f類：地文の縄文のみのもの(96・97)

96は肥厚する口縁部で、口唇と内外面に縄文が施されている。97は口唇を欠いている。内面の突瘤文は顕著である。

IV群 a類土器 [図V-3-1・6-98~103 表V-3-1・2]

復元土器(1)

1は器形を判断し得る程度破片がまとまったもので、底部については実測図上で器形のラインを考えながら推定復元した。口縁部から底部へとほぼ直線的にすばまる器形である。底部は平底で、わずかに張り出すようである。口唇断面は尖った形〜丸みを帯びた角形を呈する。全体的に指頭による調整がなされている。口縁部は右斜め上になであげて調整が行われている。胴部の上半から下半にかけては右傾斜の方向に撚糸文が施され、その後、おもに縦方向の調整がなされている。撚糸文は、この調整により節がつぶされているが、比較的残っている部分を観察してみると、Lの原体によるものと推測される。内面の調整は口縁部近くは横方向に、それより下位の部分は縦方向である。器形からは後期初頭に分類されよう。

a類：余市式に相当すると考えられるもの(98・99)

98は厚みのある口唇のものである。口縁部の内面のくぼみは、横方向のなで調整の痕跡であると考えられる。99は器面と明瞭な段差をもつ貼付帯がなされている。貼付帯の下縁の器面で羽状縄文を形成している。

b類：無文地に曲線的な沈線文が施されているもの(100・101)

100は口縁部の破片で、おもに2本組の沈線文がえがかれている。101は3本組の沈線文である。トリサキ式に相当するものとおもわれる。ともに文様構成は不明である。

c類：縄文地に曲線的な沈線文が施されているもの(102・103)

102は細めの沈線文がみられる。103は鋸歯状〜波状の沈線文が描かれている。沈線文が施されている部分は櫛状の工具による調整がなされ地文がみられない。ともに文様構成は不明である。

無文土器 [図V-3-6-104~114 表V-3-2]

口唇、口縁部ともに無文のものである。III群に分類されると考えられる。

口唇は104が尖り気味のもの、105~110は丸形、111~114は角形のものである。

104は器壁が薄いもので、口唇は磨かれ、外面は横方向、内面は縦方向に調整がなされて

いる。105~109・112は口唇がなでられている。110・113は摩耗している。111は胎土に砂を含んでいる。114は口唇がなでられており、破片の左下に縄文の節のようなものがみられる。

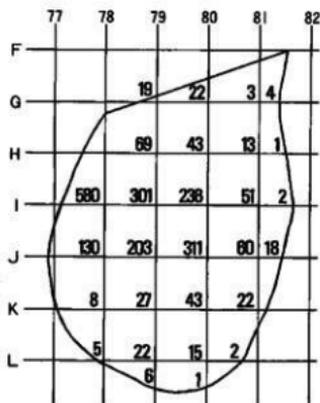
底部 [図V-3-7-115~126 表V-3-2]

底部の破片をまとめて報告する。

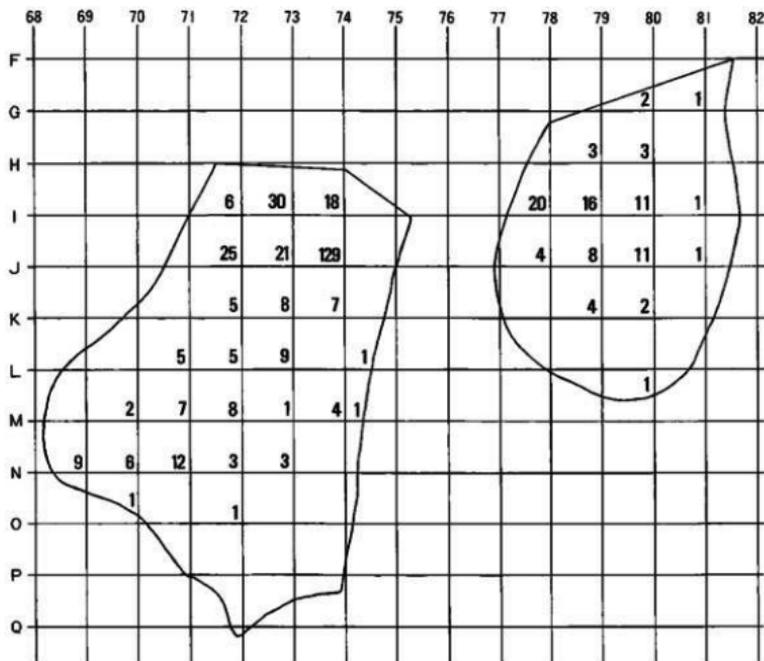
115はの胴部がなでられており、底部が張り出すものである。126は斜行縄文が施され、底部近くの胴部は横方向のなで調整がされている。ともにⅢ群a-2類・Ⅲ群b-1類に分類される。

116は胴部と底部の外面に縄文が施されている。底部は上げ底である。120・121はともに胴部はなでられており、張り出しが著しいものである。これらのものはⅢ群b-2類に分類されるものと考えられる。

117は胴部に斜行縄文が施されているが破片の左上の部分では横走している部分もみられる。Ⅲ群b-2あるいは3類に分類されると考えられる。



図V-3-8 高岡2遺跡 包含層出土土器総破片数の分布



図V-3-9 高岡1遺跡川東地区・高岡2遺跡 Ⅲ群土器個体数の分布

表V-3-1 包含層出土復元土器一覽

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分 類			分 類	組合・同一個体
					口 径	底 径	器 高		
V-3-1	1	I-78	4	I	13.1	6.7	19.7	IVa	I-78-c-1(I)・I-77-3(I)、4(I)、9(I)と接合 破片数14

表V-3-2 包含層出土掲載土器一覽(1)

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分 類	組合・同一個体
V-3-1	2	H-77	1	VI	I-b-4	
#	3	I-77	3	I	#	
#	4	H-79	18	II(風)	III-a-2	
#	5	I-77	3	I	#	破片数2
#	6	H-79	19	VI(風)	#	} 同一個体・図V-3-1-14と同一個体?
#	7	H-78	25	#	#	
#	8	H-79	19	#	#	
#	9	H-78	9	I	#	
#	10	I-77	3	#	#	} 同一個体
#	11	I-77	3	#	#	
#	12	G-79	2	#	#	
#	13	J-78	5	#	#	
#	14	H-79	19	VI(風)	#	図V-3-1-6~8と同一個体?
#	15	H-78-b	4	I	#	
#	16	H-79	5	#	#	
#	17	J-79	1	#	#	
V-3-2	18	H-77	10	#	III-b-1	破片数2
#	19	G-78	1	#	#	破片数4
#	20	I-78	7	#	#	破片数2
#	21	I-78	18	#	#	
#	22	F-79	2	#	#	
#	23	I-80	4	#	#	
#	24	I-77	3	#	#	
#	25	F-80-b	1	#	#	
#	26	H-77	1	VI	III-b-1?	破片数2
#	27	H-77	1	#	III-b-1	破片数2
#	28	H-77	18	VI(風)	#	
#	29	I-77	9	I	#	} 同一個体?
#	30	I-77	3	#	#	
#	31	H-77	1	VI	III-b-1	H-77-10(I)と接合 破片数2
V-3-3	32	F-79	2	I	III-b-2?	
#	33	H-77	18	VI(風)	III-b-2	} 同一個体・図V-3-3-38と同一個体?
#	34	H-77	18	#	#	
#	35	H-77	18	#	#	破片数2
#	36	K-79	1	I	#	破片数2
#	37	H-77	10	#	#	破片数3
#	38	H-77	18	VI(風)	#	図V-3-3-33~35と同一個体
#	39	H-79-c	1	I	#	
#	40	H-79-c	1	#	#	
#	41	H-77	1	VI	#	
#	42	H-78	18	I	#	破片数3
#	43	I-79	19	VI(風)	#	
#	44	F-79-b	2	I	#	
#	45	H-79	15	#	#	
#	46	G-79-b	3	#	#	
#	47	H-78	23	II(風)	#	
#	48	I-79	19	VI(風)	#	
#	49	H-77	10	I	#	
#	50	H-78	9	#	#	} 同一個体
#	51	H-78	3	II(風)	#	
#	52	G-78	5	I	III-b-2?	
#	53	H-79	2	#	III-b-2	破片数2
#	54	H-77	1	VI	#	
#	55	H-79	5	I	#	} 同一個体
#	56	I-78	26	#	#	
#	57	H-77	19	VI(風)	#	
#	58	G-78	5	I	#	
#	59	H-77	18	VI(風)	#	
#	60	H-77	1	VI	#	
V-3-4	61	L-79	1	I	#	
#	62	H-78	9	#	#	
#	63	H-79	5	#	#	
#	64	G-79-a	1	#	#	
#	65	H-77	10	#	#	
#	66	I-79	19	VI(風)	#	
#	67	I-79	6	I	#	
#	68	H-78	9	#	#	

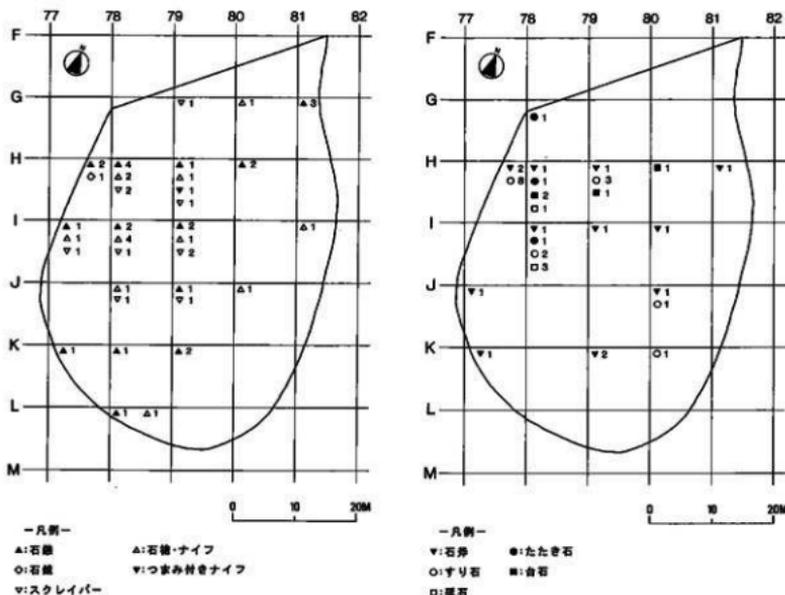
表V-3-2 包含層出土掘載土器一覽(2)

図	番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	整合・同一體性			
V-3-4	69	H-77	10	VI(Ⅲ)	Ⅲ-b-2?	} H-77-1(Ⅳ)4とH-77-18(ⅣⅢ)5と整合 同一體性			
	#	70	H-77	1	VI		Ⅲ-b-2		
	#	71	H-77	1	#		Ⅲ-b-3		
	#	72	H-77	18	VI(Ⅲ)		#		
	#	73	H-77	1	VI		#		
	#	74	H-78	23	II(Ⅲ)		#		
	#	75	I-79	3	I		#		
	#	76	I-78	7	#		#		
	#	77	H-78	9	#		#		
	#	78	I-78-b	1	#		#		
	#	79	J-79-c	1	#		#		
	#	80	I-79	19	VI(Ⅲ)		#		
	#	81	I-79	7	I		#		
	#	82	I-79	15	VI(Ⅲ)		#		
	#	83	J-78	5	I		#		
	V-3-5	84	H-77	1	VI		#	} 同一體性	
		#	85	H-78	18		I		#
#		86	I-80	8	II(Ⅲ)	#			
#		87	I-78	18	I	#			
#		88	H-79	19	VI(Ⅲ)	#			
#		89	G-78	1	I	#			
#		90	H-78	9	#	#			
#		91	J-79	1	#	#			
#		92	H-78	18	#	#			
#		93	H-78-b	4	#	#			
#		94	H-80	5	#	#			
#		95	H-77	1	VI	#			
#		96	H-79	12	I	#			
#		97	H-77	1	VI	#			
V-3-6		98	I-79	11	I	Ⅳa	} H-79-5(Ⅰ)、J-78-1(Ⅰ)と整合		
		#	99	H-78	9	#			Ⅳa
		#	100	I-80	4	#			Ⅳa
	#	101	J-79-c	1	#	Ⅳa			
	#	102	I-78	18	#	#			
	#	103	H-77	1	VI	#			
	#	104	J-79	8	I	Ⅲb			
	#	105	I-79	15	VI(Ⅲ)	#			
	#	106	J-78	1	I	#			
	#	107	H-77	18	VI(Ⅲ)	#			
	#	108	I-78	1	I	#			
	#	109	H-77	1	VI	#			
	#	110	#	1	#	#			
	#	111	I-79	6	I	#			
	#	112	I-78	7	#	#			
	#	113	H-78	18	#	#			
	#	114	H-77	18	VI(Ⅲ)	#			
V-3-7	115	J-79	1	I	Ⅲ-a-2-b-1	} 破片数5			
	#	116	H-77	10	I		Ⅲ-b-2		
	#	117	I-79	23	VI		Ⅲ-b-2-3		
	#	118	H-77	18	VI(Ⅲ)		Ⅲ-b-3		
	#	119	#	18	#		#		
	#	120	H-78	5	I		Ⅲ-b-2		
	#	121	H-77	1	VI		#		
	#	122	H-78	23	II(Ⅲ)		Ⅲb		
	#	123	J-79	15	VI(Ⅲ)		#		
	#	124	J-79	15	#		#		
#	125	H-77	1	VI	#				
#	126	I-79	1	I	Ⅲ-a-2-b-1				

№126まで

118は地文は羽状縄文で、条間は粘土が盛り上がっている。胴部を縦位方向に施文した後、底部付近では横方向に施文している。その際、縦方向に施された縄文の条間の盛り上がった部分が横方向の回転施文によって押しつぶされているのが観察される。119は底部近くの胴部に貼付帯がみられ、その下縁で羽状縄文を形成している。両方ともⅢ群b-3類の煉瓦台式に分類されよう。

122は底部がやや張り出し、上げ底のものである。123は摩耗が著しく、124は大部分が剥落している。125は底部がやや張り出すものである。(末光正卓)



図V-4-1 包含層出土石器の分布

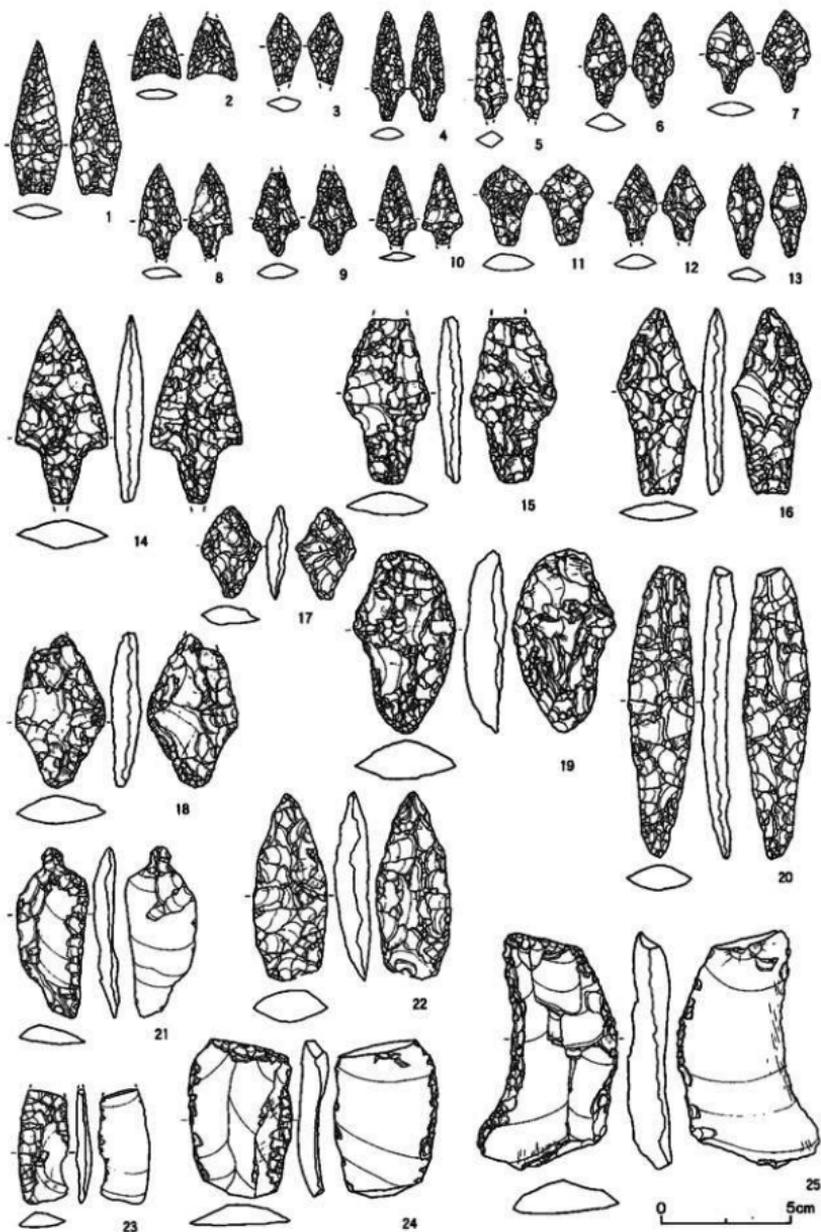
4. 包含層の石器等 [図V-4-1～6 表V-4-1 図版-57～59]

本調査において検出した石器は、91点である。このうち、石核を含めた55点を図示した。

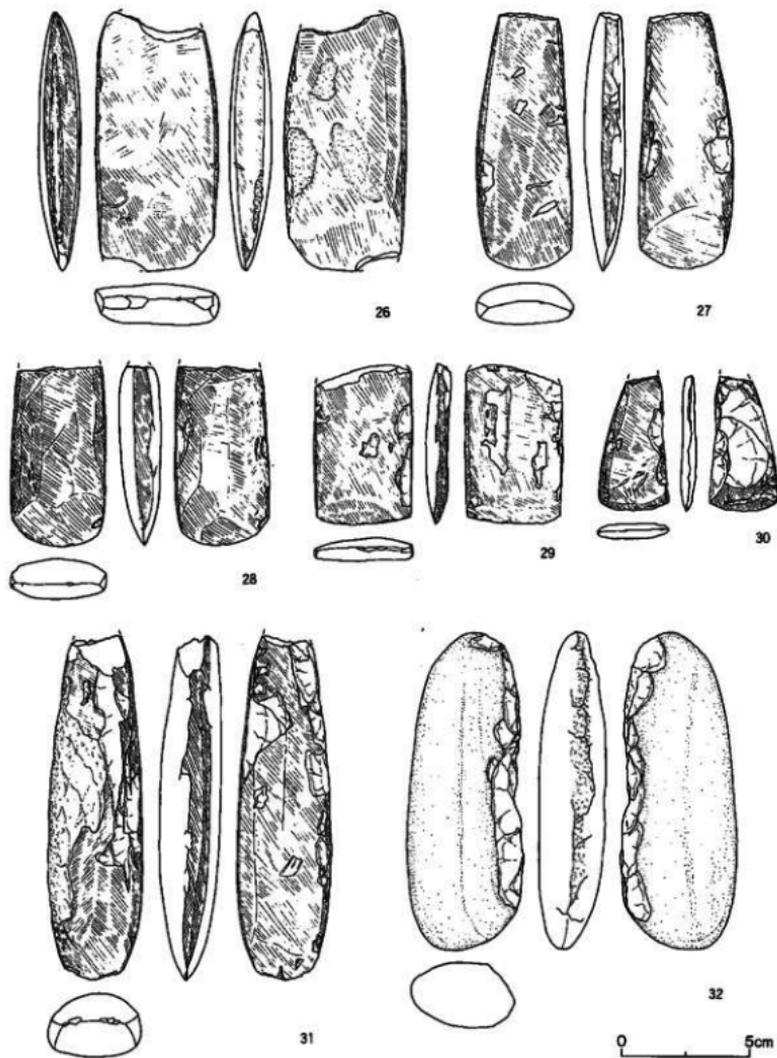
石器は、調査区のほぼ全域から出土しているが、とくに、調査区中央部から西側の西へ傾斜する緩やかな斜面部に多くみられる。耕作により、深いところではⅧ層上部まで削平を受けており、このため表土からの遺物の出土が圧倒的に多い。[図V-4-1]

石器は、石鏃、石槍またはナイフ、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、すり石、台石もしくは石皿、砥石などが出土している。石器等の総点数は909点で、このうち剥片・碎片が約86.5%を占めている。出土した剥片石器は、52点で、石鏃が48.1%出土割合が高く、石槍またはナイフが28.8%、ついでスクレイパーが21.2%と多い。礫石器は、39点出土した。すり石が41.0%、石斧が30.8%、ついで台石もしくは石皿と砥石が10.3%を占めている。

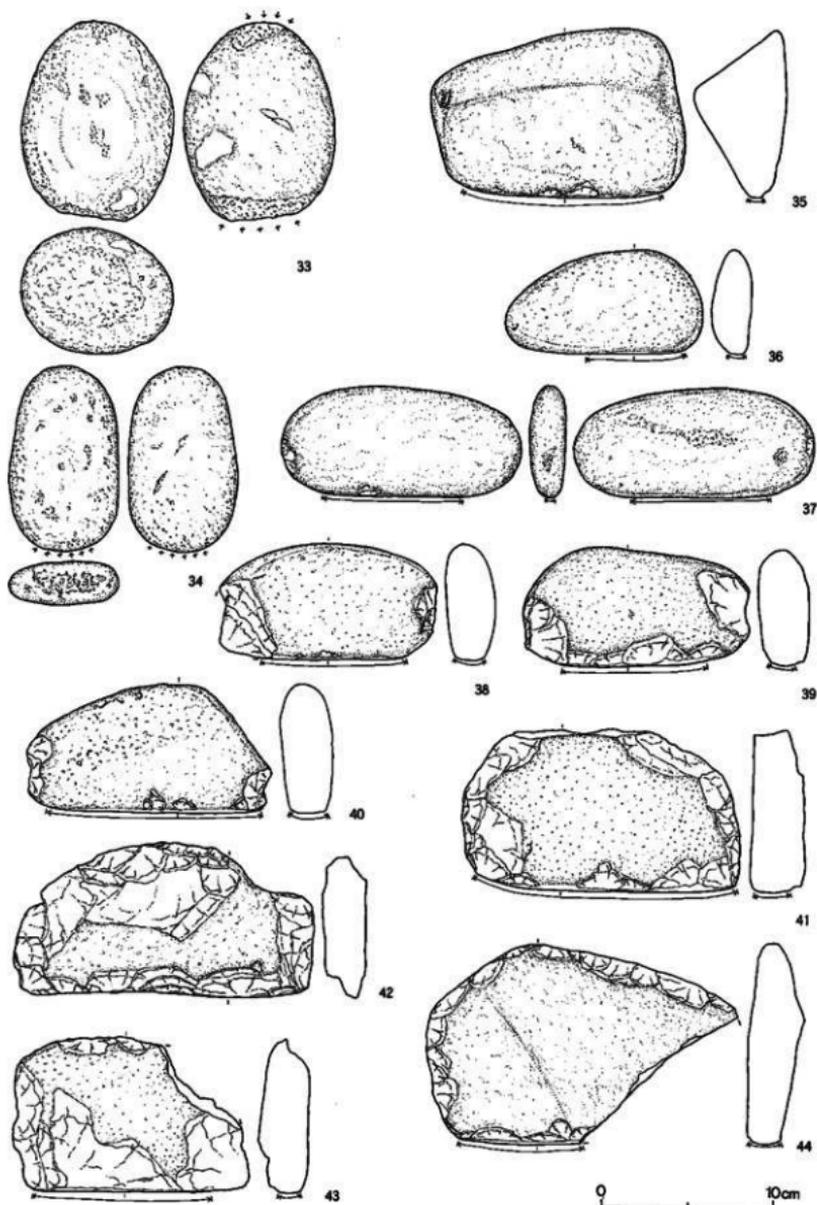
剥片石器の石材は、黒曜石と頁岩が占める。石鏃・石槍は黒曜石、つまみ付きナイフ・ナイフ・スクレイパーは頁岩の使用割合が多い。黒曜石は、肉眼観察から十勝三叉、白滝、余市赤井川、豊浦町豊泉などの原産地を推定させるものがみられる。とくに、産地が近い理由からか、豊浦町豊泉産の黒曜石の使用割合が全体の60%ほどを占めているが、石質が悪く石器製作に適さないためか、石鏃のような比較的小型の石器の出土はきわめて少ない。本文中で頁岩と記載しているものは、灰白色・緑色泥岩・褐色・黒褐色などの色調を呈す



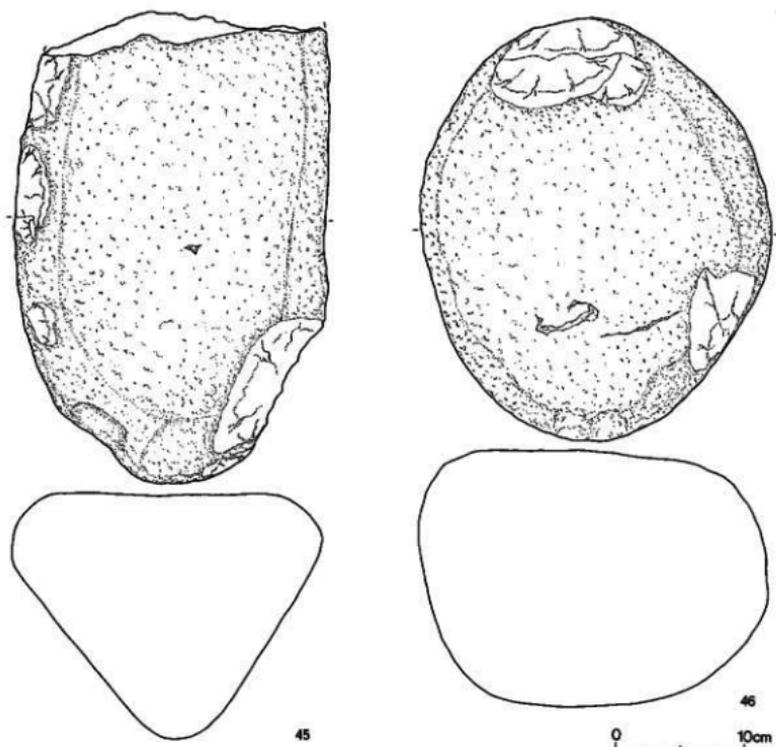
図V-4-2 包含層出土の石器(1)



図V-4-3 包含層出土の石器(2)



図V-4-4 包含層出土の石器(3)



図V-4-5 包含層出土の石器(4)

るが、すべて珪質頁岩に属するものである。

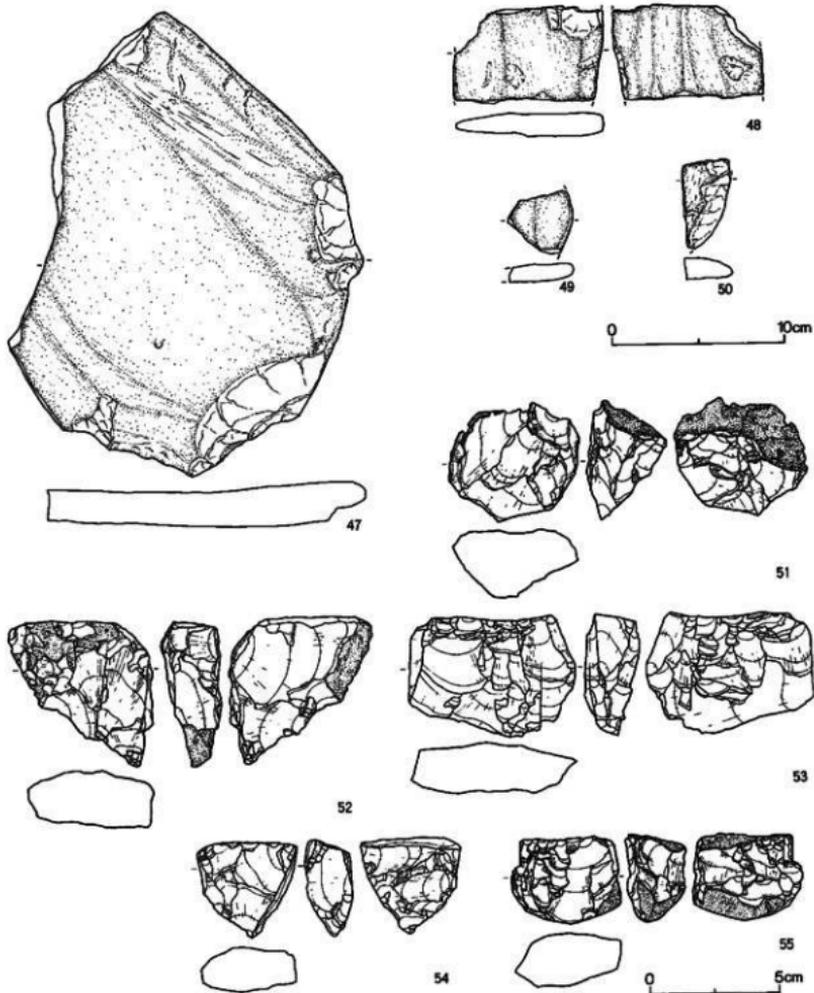
礫石器の石材は、安山岩、緑色泥岩、片岩、流紋岩がみられるが、安山岩の使用割合が圧倒的に多い。

石鏃（I群A類）[図V-4-2-1~13 図版-57]

25点が出土している。このうち、13点を図示した。剥片石器の約48.1%を占め、最も出現率が高い。1・2は、一般的な無茎鏃である。1は、薄身で五角形のもの（I A3b）である。2は、三角形で凹基のもの（I A4a）である。尖頭部を欠損する。3は菱形を呈するもの（I A6）である。基部を欠損する。4~13は一般的な有茎鏃（I A7）である。7は表面に、8・10・13は裏面に一次剝離面を残す。9・13は尖頭部を、5・8・12は基部を欠損する。石質は、2・5・13が頁岩、1・3・4・6~12が黒曜石である。

石槍またはナイフ（I群B類）[図V-4-2-14~20 図版-57]

15点が出土している。このうち、7点を図示した。剥片石器の約28.8%を占める。14・15は茎をもつもの（I B1）である。14は尖頭部と基部を、15は尖頭部を欠損する。16~20は基部が明瞭にみられないもの（I B2）である。このうち19は、側縁部に刃部のつおれが見



図V-4-6 包含層出土の石器(5)

られることから、ナイフの可能性はある。16・18・19は裏面に一次剥離面を残す。石質は、20が頁岩、このほかはすべて黒曜石である。

つまみ付きナイフ (Ⅲ群A類) [図V-4-2-21 図版-57]

1点のみの出土である。これを図示した。片面周縁加工のもの(ⅢA3)である。つまみ部と右側縁部には加工が施されているが、左側縁部は整形のための剥離はみられるだけである。未成品と思われる。石質は、頁岩である。

スクレイパー (Ⅲ群C類) [図V-4-2-22~25 図版-57]

11点が出土している。このうち4点を図示した。剥片石器の中では、石鏃、石槍またはナイフについて出現率が高く、21.2%を占める。22は一般に石べらと称されるもの(ⅢC1)である。刃部は、一部を欠損するが曲線的になるものである。石質は、流紋岩である。23~25は縦長で側縁に刃部が設けられたもの(ⅢC5)である。23は上部が、24は下部が欠損している。石質は、すべて頁岩である。

石斧 (Ⅳ群A類) [図V-4-3-26~32 図版-58]

12点が出土している。このうち7点を図示した。礫石器の中では、すり石について出現率が高く30.8%を占める。26~31は全面磨製のもの(ⅣA3)である。26は基部と刃部の一部を、27~31は基部を欠損する。32は礫の右側縁に整形のためと思われる打ち欠きと敲打痕がみられる。このことから、未成品とみられる。(ⅣA8a)である。石質は、27・29・32が緑色泥岩、26が蛇紋岩、28・30・31が片岩である。

たたき石 (Ⅴ群A類) [図V-4-4-33・34 図版-58]

3点が出土している。このうち2点を図示した。33は棒状礫を素材としたもの(ⅤA1)である。礫の両端にたたき痕がみられる。34は扁平礫を素材としたもの(ⅤA2)である。礫の長軸方向の一端にたたき痕がみられる。石質は、ともに安山岩である。

すり石 (Ⅵ群A類) [図V-4-4-35~44 図版-59]

16点が出土している。このうち10点を図示した。礫石器の中で、最も出現率が高く48.1%を占める。35は断面が三角形の礫の稜をすったもの(ⅥA1)である。36~40は扁平礫を素材としたもの(ⅥA2)である。36~38は扁平礫の側縁部にすり面がみられる。38~40は、いずれも礫の長軸方向の側縁に打ち欠きがみられる。また、39・40は、一側縁を打ち欠きその稜をすったものであるが、ⅥA3のように素材の形状を変えることはしていない。41~44は扁平礫を半円状に打ち欠き弦をすったもの(ⅥA3)である。43・44は破片である。石質は、40が凝灰岩で、このほかはすべて安山岩である。

台石もしくは石皿 (Ⅶ群A類) [図V-4-5-45・46 図版-58]

4が出土している。このうち2点を図示した。45は断面が三角形を呈し、3面の使用面がみられる。45は礫の両端を、46は一端を欠損する。石質は、ともに安山岩である。台石と分類した4点のうち図示しなかった2点は、使用痕はみられないものの、形態や出土状況からみて台石と推定されることからこの範囲に含めた。

礫石 (Ⅷ群B類) [図V-4-6-47~50 図版-59]

4点が出土しており、すべてを図示した。いずれも板状の礫石(ⅧB2)で、47・50、48・49はそれぞれ同一個体の破片である。48~49は裏裏の2面に、50は表面に使用面がみられる。48・49の使用面には石斧製作にかかわるとと思われる幅2~5cmほどの浅い溝が確認される。石質は、いずれも砂岩である。

石核 (Ⅱ群A類) [図V-4-6-51~55 図版-57]

21点が出土している。このうち5点を図示した。51~53・55は礫表皮面を残す。残存する礫表皮面から、51~53は径10~20cm、55は径10cmほどの黒曜石の角礫が利用されている。

表V-4-1 包含層出土掲載石器属性一覧

番号	名称	分類	調査区・遺物番号	層位	大きさ(長さ×幅×厚さ・重さg)	石質	備考
1	石 鏃	IA3b	I-79・1	I	6.0×2.0×0.5・4.7	黒曜石	
2	〃	IA4a	K-79・8	〃	(2.4)×1.9×0.4・1.5	〃	
3	〃	IA6	H-79・20	VI・黒陶	2.8×1.3×0.5・1.6	〃	
4	〃	IA7	H-78-b・5	I	4.2×1.3×0.5・1.8	〃	
5	〃	〃	K-77・8	〃	(4.1)×1.2×0.6・2.5	頁岩	
6	〃	〃	H-80・2	〃	(3.5)×1.6×0.7・2.5	黒曜石	
7	〃	〃	H-79・13	〃	3.1×1.8×0.5・1.9	〃	
8	〃	〃	I-79-b・1	〃	3.7×1.7×0.5・2.0	〃	
9	〃	〃	I-78-c・2	〃	(3.3)×1.8×0.6・2.3	〃	
10	〃	〃	H-77・2	VI	(3.1)×1.5×0.3・1.2	〃	
11	〃	〃	H-80・3	I	3.1×2.1×0.7・3.0	〃	
12	〃	〃	G-81・3	〃	(3.0)×1.6×0.6・1.8	〃	
13	〃	〃	H-77-c・2	〃	(3.6)×1.4×0.6・2.0	頁岩	
14	石鏃・ナイフ	IB1	I-79・2	〃	(7.2)×3.6×1.1・18.3	黒曜石	
15	〃	〃	H-79-b・2	〃	(6.3)×3.3×1.0・14.6	〃	
16	〃	IB2	J-80・6	〃	7.2×3.0×0.9・13.4	〃	
17	〃	〃	I-78・8	〃	3.5×2.3×0.8・4.0	〃	
18	〃	〃	H-78・12	〃	(5.9)×3.4×1.1・17.0	〃	
19	〃	〃	表掘・2	〃	7.0×3.9×1.7・34.3	頁岩	
20	〃	〃	I-78・21	I	11.2×2.5×1.3・27.1	〃	
21	つまみ付きナイフ	III A 3	H-79・6	〃	6.6×2.7×1.0・11.6	〃	
22	スクレイパー	III B 1	J-78-a・1	〃	7.3×2.9×1.3・23.4	黒軟岩	
23	〃	III B 5	H-79・7	〃	(4.5)×1.9×0.6・4.1	頁岩	
24	〃	III B 6	I-79・13	〃	6.2×4.0×1.1・30.6	〃	
25	〃	〃	I-79・7	〃	9.2×5.5×1.6・65.5	〃	
26	石 斧	IV A 3	J-80・3	〃	(10.2)×4.8×1.7・142.1	黒軟岩	
27	〃	〃	H-79-c・2	〃	(10.1)×3.8×1.6・106.3	緑色泥岩	
28	〃	〃	K-79・3	〃	(7.0)×3.8×1.6・80.1	片岩	
29	〃	〃	H-77-c・3	〃	(6.3)×3.9×0.9・45.5	緑色泥岩	
30	〃	〃	K-79・4	〃	(5.4)×2.8×0.6・12.3	片岩	
31	〃	〃	K-77・9	〃	(13.6)×3.9×2.5・201.5	〃	
32	〃	IV A 8	H-77・4	〃	12.4×4.6×2.6・233.6	緑色泥岩	
33	たたき石	VA 2	H-78・7	〃	10.8×6.5×2.6・257.3	安山岩	
34	〃	VA 3	I-78・23	〃	11.7×6.9×7.3・922.0	〃	
35	すり石	VI A 1	J-80・7	〃	9.9×14.8×5.4・1045.0	〃	
36	〃	VI A 2	H-79・8	〃	6.1×11.3×2.3・264.8	〃	
37	〃	〃	G-78-c・2	〃	6.5×14.0×2.1・312.0	〃	
38	〃	〃	H-77・6	VI	6.8×12.6×2.9・440.0	〃	
39	〃	〃	I-78・10	I	7.0×13.1×3.0・435.0	〃	
40	〃	〃	H-77・5	VI	7.6×14.3×3.1・335.0	凝灰岩	
41	〃	VI A 3	I-78-c・3	I	9.5×16.2×3.2・835.0	安山岩	
42	〃	〃	H-77・19	VI・黒陶	8.9×17.6×2.6・550.0	〃	
43	〃	〃	H-77・11	〃	9.1×(13.6)×3.1・455.0	〃	
44	〃	〃	H-77・12	I	11.8×(18.1)×3.3・860.0	〃	
45	奇石・石組	VII A	H-79-b・1	〃	27.7×18.3×10.2・19900.0	〃	
46	〃	〃	H-78・26	VI・黒陶	24.8×20.3×15.1・9800.0	安山岩	
47	砥 石	VIII B 2	I-78-c・4	I	(27.3)×(20.6)×2.5・1415.0	砂 岩	
48	〃	〃	I-78・11	〃	(5.7)×(6.7)×1.4・84.5	〃	
49	〃	〃	I-78・12	〃	(3.7)×(3.7)×1.1・14.4	〃	
50	〃	〃	H-78・14	〃	(5.2)×(2.8)×1.3・18.0	〃	
51	石 核	XI A 1	G-81-b・4	〃	4.7×5.1×3.1・51.1	黒曜石	
52	〃	〃	I-81・2	〃	5.7×5.6×2.3・63.5	〃	
53	〃	〃	I-79・9	〃	4.7×6.5×2.0・65.7	〃	
54	〃	〃	表掘・3	〃	3.8×3.9×1.7・26.8	〃	
55	〃	〃	I-79・16	VI・黒陶	3.5×4.2×2.3・36.8	〃	

VI・自然科学的手法による分析結果

高岡 1、2 遺跡出土の黒曜石製造物の原産地分析

藤科 哲男、東村 武信
(京都大学原子炉実験所)

はじめに

石器石材の産地を自然科学的手法を用いて、客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏をさぐるという目的で、蛍光X線分析法によりサヌカイトおよび黒曜石遺物の石材産地推定を行っている123。

黒曜石、サヌカイトなどの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には移動があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行い、これを産地と特定する指標とした。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと遺物のそれを対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて、各原産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

蛍光X線分析法は資料を破壊せずに分析することができて、かつ、資料調整が単純、測定の操作も簡単である。石器のような古代人の日用品で多数の資料を分析しなければ遺跡の正しい正確が分からないという場合にはことさら有利な分析法である。今回分析を行った資料は、豊浦町高岡 1 遺跡の縄文時代中期の50個、高岡 2 遺跡の縄文時代早期の1個、縄文時代中期の19個の合計70個の黒曜石製造物の産地分析の結果が得られたので報告する。

黒曜石原石の分析

黒曜石原石の風化面を打ち欠き、新鮮面をだし、塊状の資料を作り、エネルギー分散型蛍光X線分析装置によって元素分析を行う。主に分析した元素はK、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの各元素である。塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。黒曜石は、Ca/K、Ti/K、Mn/Zr、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Nb/Zrの比量をそれぞれ用いる。

黒曜石の原産地は北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州の各地に黒曜石の原産地は分布する。調査を終えた原産地を図1に示す。

黒曜石原産地のほとんどすべてがつくされている。元素組成の上から、これら原石を分類すると表1に示すように99個の原石群に分かれる。

ここでは北海道地域および一部の東北地域の産地について記述すると、白滝地域の原産地は、北海道紋別郡白滝村に位置し、鹿岩北方2kmの採石場の路頭、鹿岩東方約2kmの幌加沢地点、また、白土沢などより転蹠として黒曜石が採取できる。この路頭からの黒曜石原石は白滝第一群にまとり、白土沢の転蹠は白滝第二群にまともる。幌加沢よりの転蹠の中で、70%は幌加沢群にまともるが、この群は白滝第二群と一致し、元素組成から両群を区別できない。さらに、幌加沢産原石の30%は白滝第一群に一致する。置戸産原石は、北海道常呂郡置戸町の清水の沢林道より採取され、この原石の元素組成は置戸群にまとも

る。この原産地は、常呂川に通じる流域にあり、この常呂川流域で黒曜石の円礫が採取されるが現在まだ調査していない。十勝三股産原石は、北海道河東郡上士幌町の十勝三股の十三の沢の谷筋および沢の中より原石が採取され、この原石の元素組成は十勝三股群にままとまる。この十勝三股産原石は十三の沢から音更川さらに十勝川に流れた可能性があり、十勝川から採取される黒曜石円礫の組成は、十勝三股産の原石の組成と相互に近似している。また、上士幌町のサンケオルベ川より採取される黒曜石円礫の組成も十勝三股産原石の組成と相互に近似している。これら組成の近似した原石の原産地は区別できず、遺物石材の産地分析でたとえ、この遺物の原石産地が十勝三股群に同定されたとしても、これら十勝三股、音更川、十勝川、サンケオルベ川の複数の地点を考えなければならぬ。しかし、この複数の産地をまとめて、十勝流域としても、古代の地域間の交流を考察する場合、問題はないと考えられる。また、清水町、新得町、鹿追町にかけてひろがる美瑛大地から産出する黒曜石から2個の美瑛原石群がつけられた。この原石は産地近傍の遺跡で使用されている。名寄市の智南地域、智恵文川および忠烈布貯水池から上名寄にかけて黒曜石の円礫が採集される。これらを組成で分類すると88%は名寄第一群に、また12%は名寄第二群にそれぞれなる。旭川市の近文台、嵐山遺跡付近および雨文台北部などから採集される黒曜石の円礫は、20%が近文台第一群、69%が近文台第二群、11%近文台第三群それぞれ分類された。また滝川市江別乙で採集される親指大の黒曜石の礫は、組成で分類すると約79%が滝川群にままとまり、21%が近文台第二、三群に組成が一致する。滝川群に一致する組成の原石は、北竜市恵袋別川増本社からも採取される。秩父別町の雨竜川に開析された平野を見下ろす丘陵中腹の緩斜面から小円礫の黒曜石原石が採取される。産出状況とか礫状は滝川産黒曜石と同じで、秩父別第一群は滝川第一群に組成が一致し、第二群も滝川第二群に一致しさらに近文台第二群にも一致する。赤井川産原石は、北海道余市郡赤井川村の土木沢上流域およびこの付近の山腹より採取できる。ここの原石には、少球果の列が何層にも重なり石器の素材として良質とはいえないものが多く、希に球果の見られない、またあっても非常に少ない握り拳半分大の良質な原石が少数見られた。これら原石の元素組成は赤井川群にままとまる。豊泉産原石は豊浦町から産出し使用圏は道南地方に広がり、一部は青森県に伝播している。出来島群は青森県西津軽郡木造町七里長浜の海岸部より採取された円礫の原石で作られた群で、この出来島群と相互に似た組成の原石は、岩木山の西側を流れ鎌ヶ沢地区に流入する中村川の上流で1点され、また、青森市の鶴ヶ坂および西津軽郡深浦町の海岸とか同町の六角沢およびこの沢筋に位置する露頭より採取された原石で作られた群である。深浦群と相互に似た群は青森市戸門地区より産出する黒曜石で作られた戸門第二群である。

戸門第一群は赤井川産原石と弁別は可能であるが両産地の原石の組成は比較的似ている。

戸門産黒曜石の産出量は非常に少なく、また大きさも石鏝が作れる程度である。

結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は風化しているが、黒曜石製のものは風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。産地分析で水和層の影響は、軽い元素の分析ほど大きいと考えられるが、影響はほとんど見られない。Ca/K、Ti/Kの両軽元素比量を除いて

産地分析を行った場合同定される原産地に差はない。他の元素比量についても風化の影響を完全に否定することが出来ないで、得られた確率の数値にはやや不確実さを伴うが、異物の石材産地の判定を誤るようなことはない。

今回分析した高岡1、2遺跡の黒曜石製石器の分析結果を表2に示した。

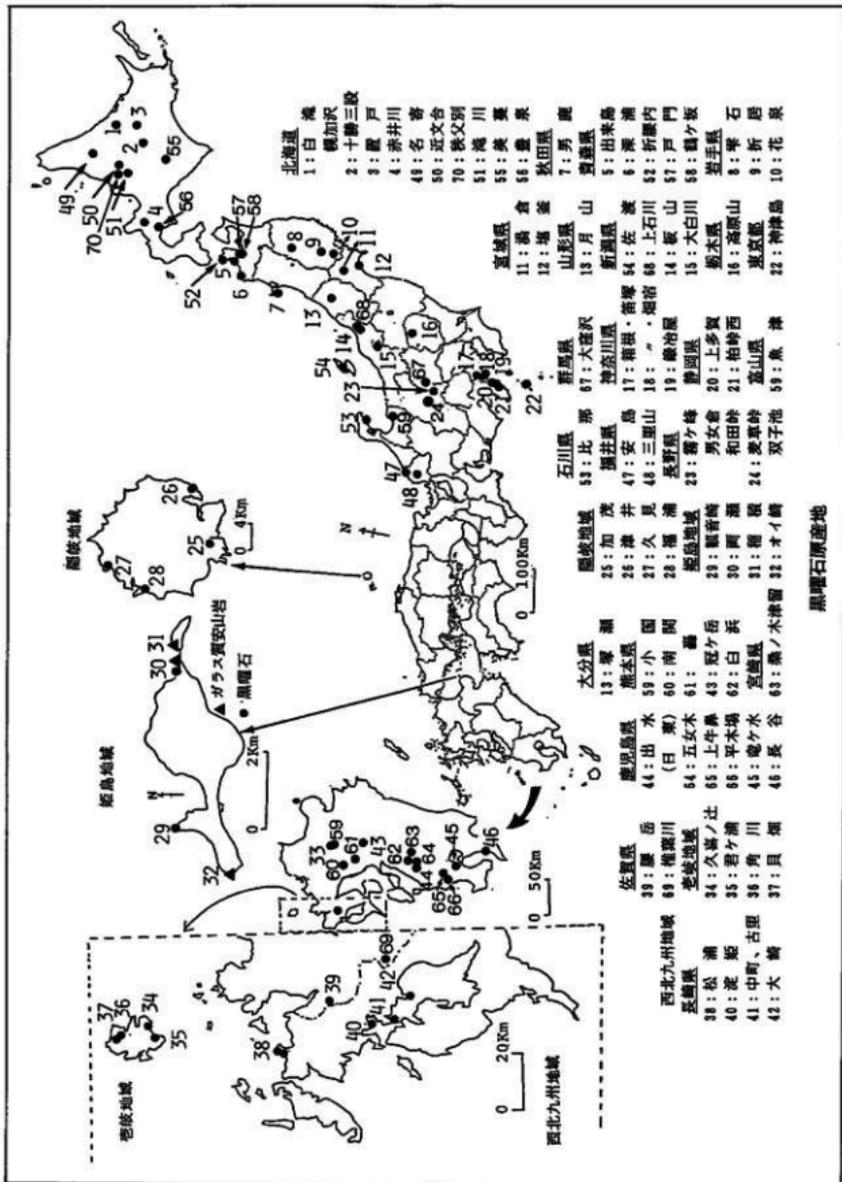
石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためRb/Zrの一変量だけを考えると、表2の試料番号45104番の遺物ではRb/Zrの値は0.484で、豊泉群の[平均値]±[標準偏差]は、 0.438 ± 0.027 である。遺物と原石群の差を標準偏差(σ)を基準にして考えると遺物は原石群から1.7 σ 離れている。ところで豊泉原産地から100ヶの原石を取ってきて分析すると、平均値から±1.7 σ のずれよりおおきいものが8個ある。すなわち、この遺物が、豊泉群の原石から作られていたと仮定しても、1.7 σ 以上離れる確率は8%であるといえる。だから、豊泉群の平均値から1.7 σ しか離れていないときには、この遺物が豊泉群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を赤井川群に比較すると、赤井川群の平均値からの隔たりは、約8 σ である。これを確率の言葉で表現すると、赤井川群の原石を取ってきて分析したとき、平均値から8 σ 以上離れている確率は、一億分の一であると言える。このように、一億個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、赤井川群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめていうと、「この遺物は豊泉群に8%、赤井川群に百万分の1%の確率でそれぞれ帰属される」。各遺跡の遺物について、この判断を表1のすべての原石群について行い、低い確率で帰属された原石群を消していくと残るのは、豊泉群だけとなり、豊泉産地の石材が使用されていると判定される。実際はRb/Zrといった唯一の変量だけでなく、前述した5ヶの変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。例えばA原産地のA群で、Ca元素とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量だけが少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した他変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行うホテリングのT2検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて産地を同定する。高岡1、2遺跡より出土した黒曜石製遺物の産地推定の結果を表3に示す。原産地は確率の高い産地のものだけを選んで記した。原石群を作った原石試料は直径3cm以上であるが、多数の試料を処理するために、小さな遺物試料の分析に多くの時間をかけられない事情があり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには、原石群の元素組成のパラッキの範囲を越えて大きくなる。したがって小さな遺物の産地推定を行ったときに、判定の信頼限界としている0、1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。この場合には、原石産地(確率)の欄の確立値に替えて、マハラノビスの距離D2の値を記した。この遺物については、記入されたD2の値が原石群のなかでもっとも小さなD2値で、この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ていると言えないため、推定確率は低いが、そこの原石産地と考えてほぼ間違いないと断定されるものである。赤井川および十勝産原石を使用した遺物の判定は複雑である。これは青森市戸門地区より産出する黒

曜石の組成は、青森県の深浦群に似る戸門第二群と北海道の赤井川および十勝三股群に似る組成の戸門第一群で構成されているために、統計処理により同定される原石群が戸門原産地と赤井川または十勝産地、またこれら3ヵ所の原産地に同じに同定される場合がしばしば見られる。戸門産地の原石が使用されたか否かは、一遺跡で多数の遺物を分析し戸門第一群と第二群に同定される頻度を求め、これを戸門産地における第一群（50%）と第二群（50%）の産出頻度と比較し戸門産地の原石である可能性を推定する。今回分析した遺物のなかに全く戸門第二群に帰属される遺物が見られないことから戸門産地からの原石は使用されなかったと推測できる。しかし、赤井川原石と十勝産原石を使用した遺物の産地分析では、帰属確率の差が十分の一〜百分の一がほとんどで、遺物のなかには、赤井川群と十勝三股群の帰属確率の差がほとんどない遺物があり原石産地の特定に苦慮する 때가あり、この場合は、客観的な産地分析法により赤井川産または十勝産と限定したうえで、肉眼観察により遺物と似た原石が赤井川産地もしくは十勝産地のいずれかに多かを考慮して原産地を判定した遺物も一部ある。

分析した高岡1遺跡の縄文時代中期の50個の黒曜石製遺物の中で各原産地別の使用頻度を見ると赤井川産が70%（35個）で最も多く、次に豊泉産で22%（11個）、白滝産は13%（4個）であった。また高岡2遺跡では、赤井川産が63%（12個）、豊泉は37%（7個）で、早期の一個は赤井川産であった。産地分析の結果で使用頻度の高い原産地とより交流、交易が強かったと考え、特に、高岡遺跡は豊泉原産地に位置する遺跡で本遺跡をとって道南地方に豊泉産原石を伝播した可能性が推測されるが、本遺跡での使用頻度は今回の分析で22%、37%で、赤井川産の使用量をしたまわる。このことは、本遺跡が赤井川産原産地地方との交流が如何に強かったかが推測される、産地分析の結果であった。また高岡1遺跡では道北の白滝産地との交流も13%であるがもたれていたと推測しても産地分析の結果と矛盾しない。

参考文献

- 1) 藁科哲男・東村武信 (1975) 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定 (II)。考古学と自然科学、8:61-69
- 2) 藁科哲男・東村武信・鎌木義昌 (1977)、(1978)、蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定 (III)。(IV)。考古学と自然科学、10:11:53-81:33-47
- 3) 藁科哲男・東村武信 (1983)、石器原材の産地分析。考古学と自然科学、16:59-89
- 4) 東村武信 (1976)、産地推定における統計的手法。考古学と自然科学、9:77-90
- 5) 東村武信 (1990)、考古学と物理科学。学生社



黒曜石原産地

表 1-2 各隕石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原産地 原石群名	分析 個数	Ca/K $\bar{X} \pm \sigma$	Ti/K $\bar{X} \pm \sigma$	Mn/Zr $\bar{X} \pm \sigma$	Fe/Zr $\bar{X} \pm \sigma$	Rb/Zr $\bar{X} \pm \sigma$	Sr/Zr $\bar{X} \pm \sigma$	Y/Zr $\bar{X} \pm \sigma$	Nb/Zr $\bar{X} \pm \sigma$	Al/K $\bar{X} \pm \sigma$	Si/K $\bar{X} \pm \sigma$
栃木県 高 原 山	40	0.738±0.067	0.200±0.010	0.644±0.007	2.016±0.110	0.371±0.025	0.420±0.028	0.197±0.017	0.023±0.014	0.026±0.003	0.516±0.012
東京都 神津島第一	56	0.381±0.014	0.138±0.005	0.162±0.011	1.729±0.079	0.481±0.027	0.689±0.037	0.246±0.021	0.098±0.026	0.038±0.003	0.504±0.012
東京都 神津島第二	23	0.317±0.016	0.120±0.006	0.114±0.014	1.833±0.069	0.615±0.039	0.666±0.050	0.303±0.034	0.107±0.026	0.033±0.002	0.471±0.009
神奈川県 網走・飯塚	30	0.765±0.254	0.219±0.057	0.228±0.019	9.282±0.622	0.048±0.017	1.757±0.061	0.025±0.019	0.140±0.008	1.528±0.046	0.140±0.008
神奈川県 網走・飯塚	41	2.056±0.064	0.699±0.019	0.976±0.010	2.912±0.104	0.060±0.007	0.680±0.029	2.302±0.011	0.011±0.010	0.080±0.005	1.286±0.031
鹿児島県 網走 池田	31	1.669±0.071	0.381±0.019	0.056±0.007	2.139±0.097	0.073±0.008	0.629±0.025	0.154±0.009	0.011±0.009	0.067±0.005	0.904±0.020
静岡県 上 多 賀 野	31	1.329±0.078	0.294±0.018	0.541±0.006	1.697±0.068	0.067±0.009	0.551±0.023	1.138±0.011	0.010±0.009	0.659±0.004	0.663±0.018
静岡県 柏 崎 池	35	1.219±0.164	0.314±0.028	0.031±0.004	1.699±0.167	0.113±0.007	0.391±0.022	0.143±0.014	0.099±0.009	0.047±0.004	0.565±0.020
富山県 黒 津 池	12	0.279±0.013	0.065±0.004	0.064±0.008	2.084±0.095	0.906±0.057	0.641±0.046	0.185±0.010	0.102±0.021	0.027±0.002	0.732±0.009
石川県 比 那	17	0.370±0.014	0.087±0.004	0.060±0.009	2.699±0.167	0.639±0.028	0.534±0.023	0.172±0.028	0.023±0.018	0.032±0.002	0.395±0.017
福井県 安 島	21	0.407±0.007	0.123±0.005	0.038±0.006	1.628±0.051	0.643±0.041	0.675±0.030	0.113±0.020	0.061±0.016	0.032±0.002	0.450±0.010
三重県 三 里 山	21	0.350±0.018	0.123±0.008	0.036±0.006	1.501±0.081	0.608±0.031	0.798±0.039	0.069±0.020	0.062±0.013	0.028±0.002	0.381±0.008
群馬県 大 塚 沢	42	1.481±0.117	0.466±0.021	0.042±0.006	2.005±0.135	0.182±0.011	0.841±0.044	0.105±0.010	0.009±0.008	0.033±0.005	0.459±0.012
長野県 野 々 峰	171	0.138±0.009	0.068±0.005	0.104±0.011	1.399±0.067	1.076±0.047	0.360±0.023	0.275±0.030	0.112±0.023	0.026±0.002	0.361±0.013
和歌山県 和 田 神 第一	143	0.167±0.028	0.049±0.006	0.117±0.011	1.346±0.065	1.863±0.124	0.112±0.056	0.409±0.048	0.139±0.026	0.025±0.002	0.355±0.016
和歌山県 和 田 神 第二	17	0.146±0.003	0.032±0.003	0.151±0.010	1.461±0.039	2.449±0.135	0.085±0.012	0.517±0.044	0.186±0.025	0.027±0.002	0.368±0.007
和歌山県 和 田 神 第三	62	0.246±0.048	0.064±0.012	0.114±0.011	1.520±0.182	1.673±0.140	0.274±0.104	0.374±0.048	0.122±0.024	0.025±0.003	0.348±0.017
和歌山県 和 田 神 第四	37	0.144±0.017	0.063±0.004	0.094±0.009	1.373±0.085	1.311±0.037	0.205±0.030	0.263±0.038	0.090±0.022	0.023±0.002	0.331±0.019
和歌山県 和 田 神 第五	57	0.176±0.019	0.075±0.010	0.073±0.011	1.282±0.086	1.053±0.186	0.275±0.058	0.184±0.042	0.066±0.023	0.021±0.002	0.305±0.013
和歌山県 和 田 神 第六	53	0.196±0.011	0.055±0.005	0.096±0.012	1.333±0.064	1.523±0.093	0.134±0.031	0.279±0.039	0.010±0.017	0.021±0.002	0.313±0.012
和歌山県 和 田 神 第七	53	0.139±0.004	0.042±0.002	0.123±0.010	1.259±0.041	1.978±0.067	0.045±0.010	0.442±0.039	0.142±0.022	0.026±0.002	0.350±0.010
和歌山県 和 田 神 第八	69	0.223±0.026	0.102±0.010	0.059±0.008	1.169±0.081	1.701±0.109	0.499±0.052	1.228±0.024	0.053±0.017	0.026±0.002	0.354±0.008
和歌山県 和 田 神 第九	118	0.263±0.029	0.138±0.011	0.049±0.008	1.403±0.069	0.532±0.048	0.764±0.031	1.101±0.018	0.056±0.016	0.029±0.002	0.401±0.017
和歌山県 和 田 神 第十	84	0.246±0.055	0.136±0.010	0.054±0.009	1.488±0.154	0.665±0.056	0.782±0.071	1.116±0.023	0.037±0.026	0.018±0.004	0.291±0.009
島根県 加 茂	20	0.154±0.008	0.092±0.009	0.018±0.003	0.943±0.029	0.269±0.016	0.066±0.003	0.407±0.010	0.144±0.019	0.022±0.001	0.269±0.017
島根県 津 井	30	0.150±0.002	0.068±0.003	0.015±0.002	0.919±0.033	0.305±0.010	0.103±0.003	0.046±0.013	0.123±0.007	0.022±0.001	0.538±0.006
島根県 久 見	31	0.142±0.004	0.061±0.002	0.039±0.003	0.981±0.048	0.398±0.013	0.001±0.002	0.093±0.015	0.229±0.010	0.023±0.002	0.317±0.006
大分県 網 走 第一	41	0.216±0.017	0.045±0.003	0.428±0.057	6.897±0.806	1.899±0.220	1.572±0.180	0.325±0.088	0.622±0.099	0.035±0.002	0.418±0.011
大分県 網 走 第二	33	0.221±0.021	0.045±0.003	0.450±0.003	7.248±0.668	1.917±0.194	1.660±0.173	0.355±0.057	0.660±0.105	0.035±0.002	0.419±0.009
大分県 網 走 第三	32	0.634±0.047	0.140±0.013	0.194±0.026	4.399±0.322	6.614±0.077	3.182±0.189	0.144±0.031	0.240±0.041	0.038±0.002	0.451±0.011
大分県 網 走 第四	1	0.013±0.140	0.211±0.026	0.126±0.016	3.609±0.231	0.305±0.067	4.002±0.174	0.109±0.021	0.137±0.028	0.040±0.004	0.479±0.017
大分県 網 走 第五	29	1.074±0.110	0.224±0.024	0.122±0.012	3.469±0.301	6.468±0.408	4.102±0.197	0.101±0.022	0.133±0.025	0.040±0.003	0.461±0.014
大分県 網 走 第六	25	0.653±0.066	0.141±0.016	0.189±0.030	4.398±0.425	6.665±0.096	3.234±0.264	0.151±0.033	0.245±0.050	0.037±0.002	0.448±0.015
大分県 網 走 第七	30	0.313±0.023	0.127±0.009	0.065±0.010	1.489±0.124	0.686±0.051	0.686±0.052	0.175±0.018	0.102±0.020	0.028±0.002	0.373±0.009

又: 平均値, σ : 標準偏差値, *: オクスアン酸

表 1-3 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原産地 原石群名	分析 個数	Ca/K $\bar{X} \pm \sigma$	Ti/K $\bar{X} \pm \sigma$	Mn/Zr $\bar{X} \pm \sigma$	Fe/Zr $\bar{X} \pm \sigma$	Rb/Zr $\bar{X} \pm \sigma$	Sr/Zr $\bar{X} \pm \sigma$	Y/Zr $\bar{X} \pm \sigma$	Nb/Zr $\bar{X} \pm \sigma$	Al/K $\bar{X} \pm \sigma$	Sr/K $\bar{X} \pm \sigma$
佐賀県 原産地	26	0.214±0.015	0.029±0.001	0.076±0.012	2.684±0.110	1.686±0.085	0.441±0.030	0.233±0.039	0.287±0.029	0.027±0.002	0.380±0.008
長崎県 久喜ノ庄	37	0.168±0.012	0.066±0.002	0.034±0.003	1.197±0.030	0.403±0.012	0.905±0.004	0.114±0.012	0.308±0.008	0.024±0.002	0.294±0.008
岩手県 岩手川	28	0.161±0.011	0.064±0.002	0.034±0.003	1.209±0.032	0.485±0.008	0.602±0.004	0.110±0.016	0.322±0.010	0.025±0.002	0.394±0.006
岩手県 岩手川	29	0.138±0.010	0.029±0.002	0.037±0.002	1.741±0.063	1.860±0.076	0.120±0.012	0.193±0.038	0.652±0.006	0.026±0.002	0.298±0.010
岩手県 第一	23	0.218±0.010	0.029±0.002	0.065±0.013	2.692±0.125	1.674±0.064	0.439±0.027	0.284±0.047	0.266±0.028	0.027±0.002	0.359±0.012
岩手県 第二	17	0.176±0.016	0.020±0.004	0.032±0.002	2.364±0.389	1.677±0.245	0.308±0.074	0.277±0.056	0.210±0.050	0.026±0.002	0.361±0.010
岩手県 第三	16	0.245±0.019	0.069±0.006	0.045±0.012	1.975±0.240	0.878±0.099	0.421±0.031	0.130±0.030	0.145±0.023	0.026±0.002	0.358±0.013
岩手県 第四	22	0.287±0.019	0.067±0.004	0.044±0.007	1.986±0.106	0.765±0.074	0.464±0.034	0.115±0.023	0.117±0.018	0.028±0.001	0.367±0.007
岩手県 第五	44	0.339±0.014	0.069±0.005	0.042±0.007	1.894±0.065	0.539±0.022	0.594±0.035	0.177±0.018	0.117±0.014	0.029±0.002	0.374±0.009
岩手県 第六	25	0.248±0.017	0.058±0.008	0.057±0.007	1.884±0.065	0.832±0.092	0.483±0.026	0.112±0.021	0.152±0.017	0.026±0.002	0.363±0.007
岩手県 第七	17	0.327±0.030	0.069±0.017	0.045±0.007	1.832±0.074	0.653±0.068	0.488±0.030	0.090±0.030	0.093±0.023	0.027±0.002	0.356±0.012
岩手県 第八	40	0.192±0.020	0.027±0.003	0.080±0.016	2.699±0.215	1.780±0.154	0.413±0.065	0.312±0.055	0.259±0.040	0.027±0.002	0.358±0.008
岩手県 第九	22	0.414±0.012	0.073±0.006	0.102±0.015	1.221±0.094	1.221±0.094	1.861±0.124	0.133±0.047	0.261±0.034	0.031±0.002	0.380±0.010
岩手県 第十	19	0.257±0.035	0.062±0.009	0.054±0.009	1.939±0.131	0.812±0.113	0.436±0.052	0.101±0.029	0.145±0.037	0.028±0.002	0.364±0.011
岩手県 第十一	25	0.161±0.011	0.051±0.002	0.037±0.006	1.718±0.056	0.948±0.030	0.179±0.018	0.191±0.026	0.137±0.019	0.024±0.002	0.340±0.006
熊本県 小南	30	0.317±0.023	0.127±0.005	0.063±0.007	1.441±0.070	0.611±0.032	0.703±0.044	0.175±0.023	0.097±0.017	0.023±0.002	0.320±0.007
熊本県 小南	30	0.261±0.016	0.214±0.007	0.034±0.003	0.788±0.053	0.326±0.012	1.278±0.015	0.069±0.012	0.031±0.009	0.021±0.002	0.243±0.008
熊本県 小南	44	0.258±0.009	0.214±0.006	0.033±0.005	0.794±0.078	0.329±0.017	1.275±0.010	0.066±0.011	0.033±0.009	0.020±0.003	0.243±0.008
宮崎県 宮ヶ岳	21	0.261±0.012	0.211±0.008	0.032±0.003	0.790±0.038	0.324±0.011	0.279±0.017	0.064±0.011	0.037±0.006	0.025±0.002	0.277±0.009
宮崎県 白木	40	0.197±0.020	0.104±0.008	0.025±0.005	1.495±0.073	1.948±0.087	0.348±0.028	0.163±0.023	0.033±0.017	0.019±0.001	0.273±0.007
宮崎県 藤ノ木津	47	0.207±0.015	0.094±0.006	0.070±0.009	1.521±0.075	1.060±0.048	0.418±0.020	0.266±0.034	0.063±0.024	0.020±0.003	0.314±0.011
宮崎県 藤ノ木津	33	0.261±0.015	0.094±0.006	0.066±0.010	1.743±0.095	1.242±0.060	0.753±0.039	0.205±0.029	0.047±0.036	0.022±0.002	0.323±0.019
鹿児島県 日女	42	0.262±0.018	0.143±0.006	0.022±0.004	1.176±0.040	0.422±0.028	0.408±0.025	0.100±0.018	0.029±0.013	0.019±0.001	0.275±0.006
鹿児島県 日女	37	0.266±0.021	0.140±0.006	0.019±0.002	0.705±0.064	0.705±0.027	1.108±0.015	0.028±0.013	0.019±0.001	0.019±0.001	0.275±0.006
鹿児島県 上牛	41	0.629±0.098	0.804±0.037	0.053±0.006	3.342±0.215	1.188±0.013	1.105±0.056	0.987±0.069	0.022±0.009	0.036±0.002	0.301±0.011
鹿児島県 平木	34	1.944±0.064	0.912±0.028	0.062±0.005	3.975±0.182	1.184±0.011	1.786±0.049	0.993±0.010	0.021±0.010	0.038±0.003	0.408±0.010
鹿児島県 木場	28	0.514±0.032	0.167±0.008	0.063±0.009	1.524±0.079	0.167±0.038	0.719±0.054	0.115±0.019	0.082±0.016	0.037±0.003	0.523±0.009
鹿児島県 長谷	30	0.553±0.032	0.137±0.006	0.065±0.010	1.815±0.062	0.644±0.028	0.563±0.029	0.146±0.021	0.066±0.020	0.037±0.003	0.524±0.012
JG-1*	127	0.750±0.010	0.202±0.005	0.076±0.011	3.799±0.111	0.993±0.036	1.331±0.046	0.251±0.027	0.105±0.017	0.028±0.002	0.342±0.004

X: 平均値, σ: 標準偏差, *: JG-1 系安山岩

a): Ando, A., Kurawawa, H., Omori, T., & Takeda, E. (1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal* Vol. 8, 175-182.

表 2-1 高岡 1 遺跡出土の黒曜石製遺物分析結果

分析 番号	元 素 比									
	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
45104	.489	.153	.054	1.642	.484	.617	.148	.000	.000	.323
45105	.183	.060	.056	2.528	1.372	.280	.400	.000	.017	.271
45106	.264	.071	.089	2.050	.942	.406	.261	.000	.002	.247
45107	.158	.064	.070	2.511	1.337	.283	.333	.039	.017	.268
45108	.250	.069	.084	2.019	.960	.422	.254	.000	.015	.255
45109	.249	.073	.081	2.129	.940	.446	.274	.000	.015	.263
45110	.246	.072	.066	1.952	.964	.436	.263	.029	.015	.253
45111	.255	.074	.072	2.104	1.039	.405	.228	.000	.017	.269
45112	.257	.069	.090	2.076	.955	.455	.271	.040	.016	.264
45113	.248	.077	.077	2.123	1.022	.479	.285	.057	.016	.261
45114	.248	.073	.095	2.173	.944	.460	.251	.000	.016	.263
45115	.266	.076	.093	2.115	1.000	.417	.244	.000	.018	.271
45116	.255	.075	.088	2.303	1.112	.485	.224	.040	.018	.272
45118	.259	.078	.088	2.177	.923	.418	.268	.027	.015	.260
45119	.253	.070	.058	2.243	1.096	.456	.225	.000	.018	.261
45120	.448	.138	.061	1.609	.405	.560	.140	.000	.020	.336
45121	.455	.144	.054	1.577	.485	.594	.138	.000	.021	.326
45122	.255	.076	.077	2.041	1.002	.445	.235	.024	.017	.276
45123	.206	.069	.068	1.561	.704	.306	.154	.044	.015	.241
45124	.251	.070	.076	1.964	.942	.410	.211	.000	.017	.267
45125	.249	.074	.067	2.037	.914	.440	.242	.000	.017	.256
45126	.263	.071	.081	2.092	1.025	.463	.227	.057	.014	.265
45127	.493	.161	.049	1.736	.399	.595	.137	.022	.021	.350
45128	.258	.076	.102	2.078	1.009	.428	.230	.000	.017	.263
45129	.482	.164	.047	1.607	.392	.539	.143	.000	.022	.345
45130	.466	.160	.056	1.653	.444	.565	.132	.000	.023	.340
45131	.250	.069	.066	1.970	.954	.406	.235	.000	.017	.281
45132	.258	.073	.077	2.131	1.004	.416	.280	.037	.020	.269
45142	.264	.079	.079	2.133	.959	.405	.211	.054	.016	.264
45143	.471	.153	.064	1.831	.479	.624	.159	.000	.022	.346
45144	.160	.061	.102	2.810	1.395	.263	.293	.000	.019	.277
45145	.451	.138	.054	1.825	.422	.589	.183	.000	.023	.361
45146	.245	.069	.075	2.170	.953	.387	.231	.000	.017	.271
45147	.254	.072	.078	2.059	.994	.406	.253	.029	.018	.262
45148	.265	.079	.096	2.296	1.082	.460	.179	.037	.017	.266
45149	.488	.158	.058	1.614	.399	.567	.136	.025	.021	.332
45150	.264	.069	.074	2.061	.975	.410	.226	.000	.020	.279
45151	.261	.074	.073	1.923	.948	.432	.246	.000	.017	.256
45152	.242	.071	.062	2.001	.986	.410	.291	.034	.016	.257
45153	.461	.147	.051	1.685	.497	.656	.162	.000	.020	.345
45154	.250	.073	.070	2.114	.998	.407	.261	.036	.016	.274
45155	.185	.059	.075	2.966	1.536	.301	.284	.055	.018	.285
45156	.454	.151	.066	1.783	.478	.624	.144	.038	.022	.339
45158	.229	.081	.092	1.957	.895	.428	.214	.000	.017	.272
45159	.257	.075	.077	2.191	1.034	.449	.255	.019	.015	.259
45160	.259	.074	.084	1.958	.981	.450	.262	.029	.017	.267
45161	.233	.071	.083	2.301	1.057	.490	.286	.000	.015	.265
45162	.253	.073	.071	2.068	1.013	.427	.252	.000	.018	.267
45163	.244	.068	.072	2.131	.904	.439	.282	.021	.018	.273
45164	.267	.074	.070	2.004	.965	.422	.218	.040	.017	.262

表 2-2 高岡 2 遺跡出土の黒曜石製遺物分析結果

分析 番号	元 素 比									
	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
45165	.275	.070	.077	1.964	.998	.395	.239	.000	.016	.256
45166	.252	.074	.074	2.138	.937	.398	.214	.000	.017	.259
45167	.259	.072	.074	2.264	.946	.458	.230	.000	.016	.259
45168	.257	.070	.089	2.147	.989	.435	.236	.000	.015	.256
45169	.477	.159	.065	1.619	.445	.570	.150	.000	.020	.335
45170	.460	.160	.054	1.548	.407	.563	.160	.000	.020	.347
45171	.181	.053	.078	2.017	.981	.437	.201	.050	.013	.194
45172	.448	.148	.069	1.755	.467	.591	.164	.000	.021	.336
45185	.263	.070	.077	1.959	.910	.401	.234	.108	.015	.255
45176	.446	.141	.059	1.600	.422	.564	.150	.000	.019	.331
45186	.465	.150	.055	1.622	.452	.604	.162	.032	.021	.324
45187	.479	.155	.046	1.574	.416	.587	.158	.000	.022	.349
45175	.241	.071	.067	1.642	.792	.332	.206	.000	.016	.261
45174	.459	.156	.057	1.674	.465	.624	.191	.019	.022	.326
45188	.250	.076	.072	1.986	.981	.405	.226	.000	.017	.267
45189	.247	.071	.113	2.023	1.008	.406	.241	.000	.016	.265
45190	.173	.048	.073	1.914	.951	.424	.228	.000	.012	.195
45191	.257	.069	.077	2.023	.954	.450	.251	.030	.017	.267
45192	.253	.069	.075	2.045	.888	.435	.223	.000	.017	.260
45193	.242	.070	.056	2.063	.997	.435	.255	.000	.016	.261

表3-1 高岡1遺跡出土の黒曜石製造物の原材産地推定結果
(北海道豊浦町)

分析番号	遺物番号、出土区、層	原石産地(産率)	判定	時代時期 (伴出土副葬式)	遺物品名 (備考)
45104	1-73, J-53-a, VI	豊泉(13%)	豊泉	縄文時代中期	石
45105	2-99, J-53-c, VI・風倒	白滝第1群(2%)	白滝		〃
45106	3-15, K-53-a, I	赤井川(24%)	赤井川		〃
45107	4-19, J-54-d, 〃	白滝第1群(2%)	白滝		〃
45108	5-8, I-51-c, 〃	赤井川(14%)	赤井川		〃
45109	6-110, K-54-a, VI	〃(24%)、戸門第1群(1%)	〃		〃
45110	7-17, J-57-a, 〃	〃(4%)、〃(6%)	〃		〃
45111	8-61, K-54-a, 〃	戸門第1群(6%)、赤井川(11%)	〃		〃
45112	9-17, I-54-c, 〃	赤井川(30%)、戸門第1群(2%)	〃		〃
45113	10-2, K-56-d, I	〃(24%)、〃(16%)	〃		〃
45114	11-5, K-56-d, 〃	赤井川(9%)	〃		〃
45115	12-4, J-56-d, 〃	〃(8%)	〃		〃
45116	13-2, F-61-a, 〃	戸門第1群(34%)、赤井川(4%)	〃		〃
45118	14-49, K-53-d, VI・風倒	赤井川(27%)	〃		〃
45119	15-7, I-53-b, I	〃(2%)	〃		〃
45120	16-8, J-53-b, 〃	豊泉(17%)	豊泉		〃
45121	17-41, J-54-b, VI・風倒	〃(7%)	〃		〃
45122	18-149, K-53-a, VI	赤井川(3%)、十勝三股(1%)、戸門第1群(4%)	赤井川		〃
45123	19-6, K-53-a, I	赤井川(DP=61)	〃		〃
45124	20-47, K-54-c, VI	〃(2%)	〃		〃
45125	21-62, J-56-a, 〃	〃(3%)	〃		〃
45126	22-62, K-52-d, 〃	〃(7%)、戸門第1群(7%)	〃		〃
45127	23-5, K-54-c, I	豊泉(65%)	豊泉		〃
45128	24-20, J-56-d, VI・風倒	赤井川(1%)	赤井川		〃
45129	25-24, K-56-b, VI	豊泉(9%)	豊泉		〃
45130	26-3, K-52-a, I	〃(17%)	〃		〃
45131	27-16, I-55-c, VI	赤井川(3%)	赤井川		〃

表3-2 高岡1遺跡出土の黒曜石製遺物の原産地推定結果
(北海道釧路町)

分析番号	遺物番号、出土区、層	遺物	原産地(産率)	判定	時代時期 (伴出土器様式)	遺物品名 (備考)
45132	28-27, J-56-d, VI	赤井川(60%)、十勝三股(23%)、戸門第1群(11%)	赤井川	縄文時代中期	石	槍
45142	29-25, I-57-c, VI・風岡	〃(11%)	〃	〃	〃	〃
45143	30-9, K-53-b, I	豊泉(61%)	豊泉	〃	〃	〃
45144	31-109, K-51-a, VI	白滝第1群(12%)	白滝	〃	〃	〃
45145	32-80, K-51-a, III	豊泉(19%)	豊泉	〃	〃	〃
45146	33-10, K-56-b, I	赤井川(11%)	赤井川	〃	ナ	イフ
45147	34-5, J-57-a, 〃	〃(27%)、十勝三股(2%)、戸門第1群(6%)	〃	〃	〃	〃
45148	35-25, K-56-b, VI	〃(0.2%)、戸門第1群(1%)	〃	〃	〃	〃
45149	36-8, K-54-b, I	豊泉(63%)	豊泉	〃	〃	〃
45150	37-20, K-54-c, 〃	赤井川(8%)	赤井川	〃	〃	〃
45151	38-30, J-54-d, 〃	〃(1%)	〃	〃	〃	〃
45152	39-37, K-51-a, 〃	戸門第1群(13%)、赤井川(5%)、十勝三股(4%)	〃	〃	〃	〃
45153	40-7, J-54-c, 〃	豊泉(5%)	豊泉	〃	〃	〃
45154	41-20, K-53-d, VI・風岡	赤井川(40%)、十勝三股(10%)、戸門第1群(10%)	赤井川	〃	〃	〃
45155	42-7, K-54-c, I	白滝第1群(2%)	白滝	〃	〃	〃
45156	43-154, K-53-a, VI	豊泉(84%)	豊泉	〃	石	鎌
45158	44-14, I-54-c, 〃	赤井川(0.1%)	赤井川	〃	〃	〃
45159	45-51, K-51-a, I	〃(29%)、十勝三股(14%)、戸門第1群(15%)	〃	〃	〃	〃
45160	46-50, K-51-a, 〃	戸門第1群(25%)、赤井川(1%)	〃	〃	スクレイパー	〃
45161	47-16, J-51-b, 〃	赤井川(10%)、戸門第1群(9%)	〃	〃	〃	〃
45162	48-21, K-54-a, 〃	〃(4%)、十勝三股(2%)、戸門第1群(5%)	〃	〃	〃	〃
45163	49-13, K-58-a, VI	〃(39%)、戸門第1群(1%)	〃	〃	〃	〃
45164	50-28, J-57-b, 〃	赤井川(6%)	〃	〃	〃	〃

表3-3 高岡2遺跡出土の黒曜石製遺物の原材産地推定結果
(北海道豊浦町)

分析 番号	遺物 番号、出土区、層	遺物 産地(産率)	判 定	時 代 時 期 (伴出土器様式)	遺物品名 (備考)
45165	1-2, G-81-b,	赤井川(1%)	赤 井 川	縄文時代早期	石
45166	2-10, H-78,	〃 (5%)	〃	〃	〃
45167	3-6, H-78,	〃 (3%)	〃	縄文時代中期	〃
45168	4-11, H-78,	〃 (30%)	〃	〃	〃
45169	5-2, G-80,	豊泉(25%)	豊 泉	〃	石
45170	6-6, I-81,	〃 (3%)	〃	〃	ナイフ
45171	7-3, G-79,	赤井川(DP=52)	赤 井 川	〃	スクレイパー
45172	8-6, H-78-b,	豊泉(43%)	豊 泉	〃	〃
45185	9-14, I-78,	赤井川(18%)	赤 井 川	〃	石 鏃 ?
45176	10-7, I-77,	豊泉(23%)	豊 泉	〃	石 鏃
45186	11-2, I-78,	〃 (62%)	〃	〃	〃
45187	12-6, G-79,	〃 (24%)	〃	〃	〃
45175	13-4, H-77-c,	赤井川(DP=54)	赤 井 川	〃	原 石
45174	14-7, K-79,	豊泉(34%)	豊 泉	〃	フレイク
45188	15-2, K-78-b,	赤井川(1%)	赤 井 川	〃	〃
45189	16-8, K-78,	〃 (0.1%)	〃	〃	〃
45190	17-17, I-79,	〃 (DP=80)	〃	〃	〃
45191	18-24, H-78,	〃 (18%), 戸門溝1群(1%)	〃	〃	〃
45192	19-14, I-78,	〃 (10%)	〃	〃	〃
45193	20-4, K-78,	〃	〃	〃	〃
		戸門溝1群(5%), 赤井川(2%)			

VII. まとめ

高岡1、2遺跡における時期別の土器分布について

平成5年度からの調査は本年度をもって終了した。高岡1・2遺跡から出土した土器は、縄文時代早期～後期中葉、続縄文時代のものがある。出土点数が多いのは縄文時代早期、中期のもので、確認された遺構もすべて、それらと同じ時期であることから、本遺跡の主體的な時期は縄文時代早期、中期であると考えられる。

ここでは、高岡1遺跡の各地区と高岡2遺跡の包含層出土の土器のうち、口縁部の残存している掲載資料について、大グリッドごとの時期別分布図を作成した。等高線の途切れた部分は道路、建物等により削平をうけたものである。これらから、古別川の両岸における人間の活動の痕跡の時間的な移り変わりをみていきたい。

I群 a-2類 条痕文系平底土器(図VII-1-1)

平成5・6年度調査の川東地区のみに分布が認められる。この調査区は東側が町道、南側が砕石工場による削平をうけている。

I群 b類 縄文、組紐瓦痕文、貼付文等のある土器群(図VII-1-2)

平成5・6年度調査の川東地区、本年度調査の高岡2遺跡(ただし胸部破片である)に分布が認められる。この時期の遺構は、住居跡(H-1・3・4)、土壇(P-1~5・7)があり、すべて川東地区で確認されている。

II群 b類 円筒土器下層d式(図VII-1-3)

川東地区のみに分布が認められる。

III群 a-2・b-1類 サイベ沢VII式・見晴町式・榎林式・天神山式(図VII-1-4)

この時期のみ全調査区に分布が認められる。上記の4型式の土器のうち、大半がサイベ沢VII式と見晴町式である。この時期の遺構は、住居跡(H-5・7)、土壇(P-6・NP-1・WP-4・5)があり、川東、北、川西地区で確認されている。

III群 b-2類 大安在B式・柏木川式など(図VII-1-5)

北地区以外の全調査区に分布が認められる。川西地区から最も多く出土している。

III群 b-3類 ノグダツII式・煉瓦台式(図VII-1-6)

北地区以外の全調査区に分布が認められる。本分類の土器が、床面からまとも出土した遺構は住居跡のH-2、WH-1・5・10である。これらは川東、川西地区で確認されている。

III群 b-3類 北筒式(トコロ6類)(図VII-1-7)

川西地区・高岡2遺跡に分布が認められる。この土器はノグダツII式、煉瓦台式に伴うとされているが、本遺跡では明確な共存関係はつかめなかった。北筒式が川東、中央地区にはみられないことは興味深い。

IV群 a類 余市式・トリサキ式(図VII-1-8)

川東地区、高岡2遺跡、川西地区に分布が認められる。川西地区のものはIII群 b-3類に分類したが、そのなかで新しい特徴が認められるもの(余市式)について記載した。ただし、K-52区のものにはWH-7、L-55区のものにはWH-3出土のものである。高岡2遺跡では、曲線的な沈線文が施されるもの(トリサキ式)もあり、川西地区のものより新しい

とおもわれる。

IV群b類 ウサクマイC式・手稲式(図VII-1-9)

中央地区と川東地区の、古別川に近いところに分布が認められる。最も多く出土したのは中央地区で、ウサクマイC式、手稲式などがみられる。この時期の土器は、中期、早期のものについて多く出土した。この時期と考えられる焼土(CF-1)が中央地区で確認されている。

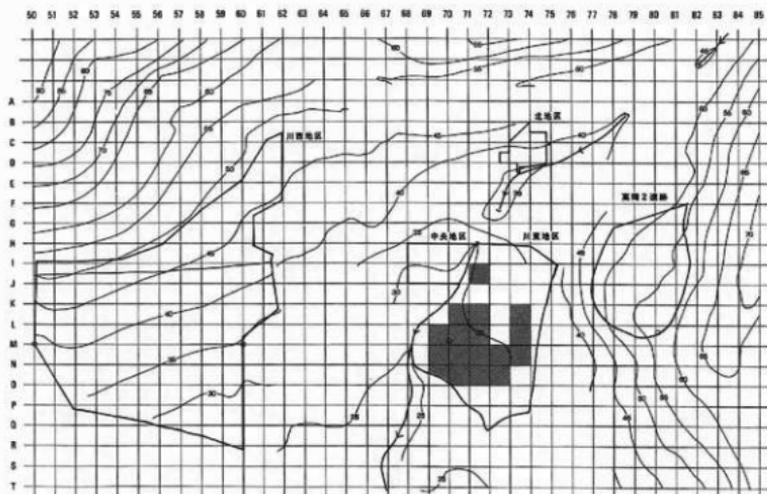
VI群c類(図VII-1-10)

川東地区のみに分布が認められる。後北C1式と考えられるものである。

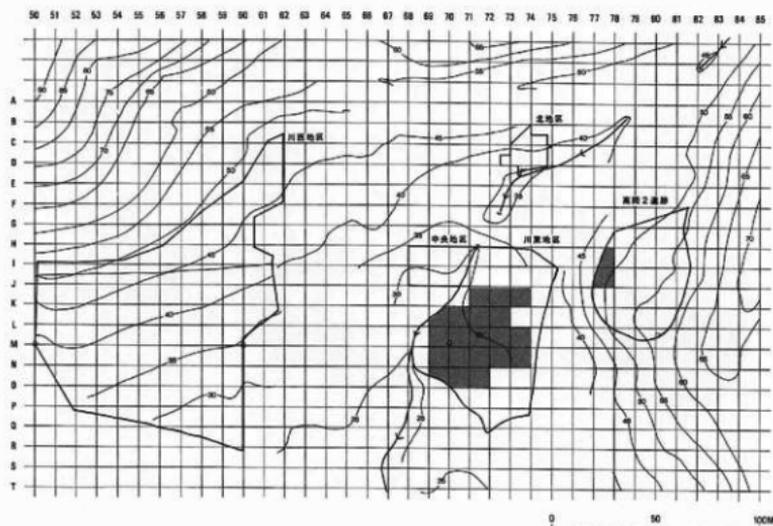
以上、時期による分布の推移について概観してきたが、これらをまとめると以下のとおりである。

古別川の両岸は、縄文時代早期前半期、川の東側で人間の活動がはじまる。同後半期には住居がつくれ、定住的な生活がなされていたとおもわれる。中期中葉には川の両岸の広範囲において人々の生活が営まれ、その後、北側にはみられなくなったものの、中期の末葉までの時期、最も数多く住居がつくられていたようである。後期中葉は古別川近くに生活の痕跡がみられる。前期、後期初頭、統縄文時代は資料が少なく定かではない。

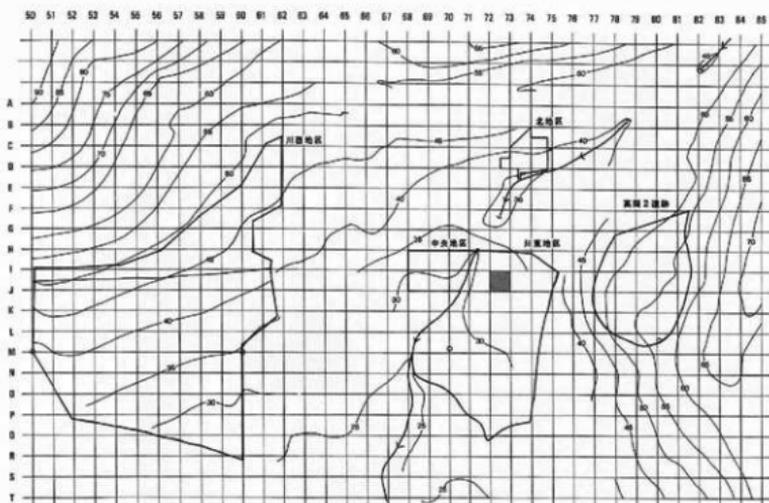
(末光正卓)



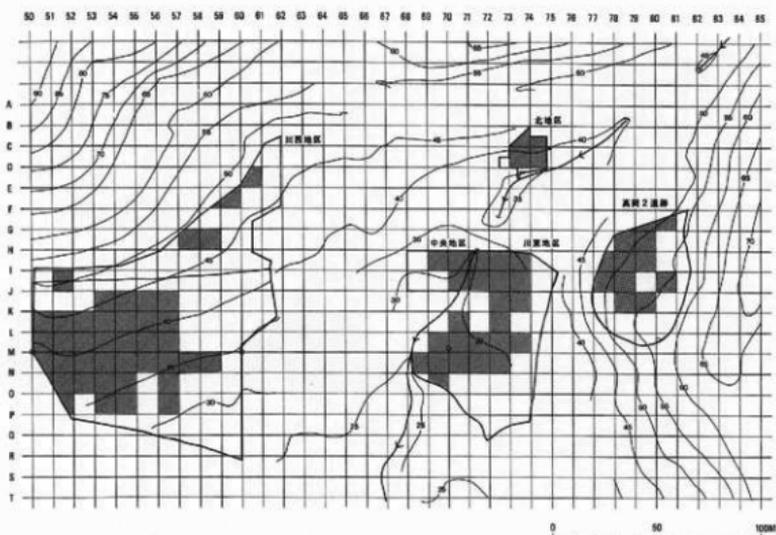
図VII-1-1 I群a類土器の分布



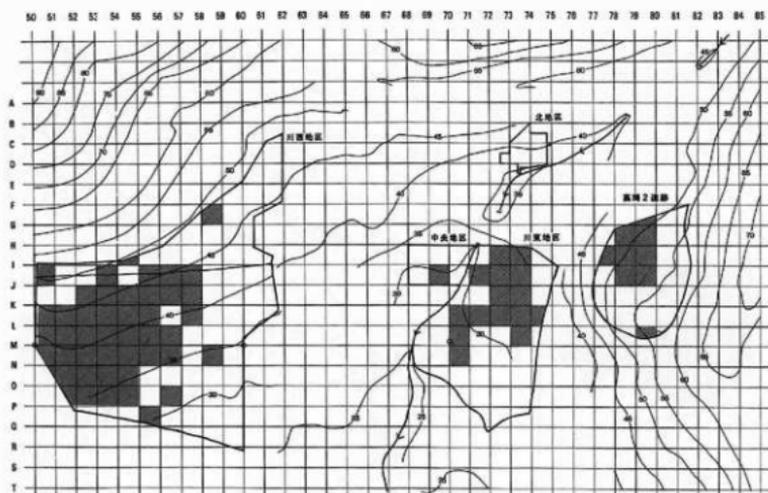
図VII-1-2 I群b類土器の分布



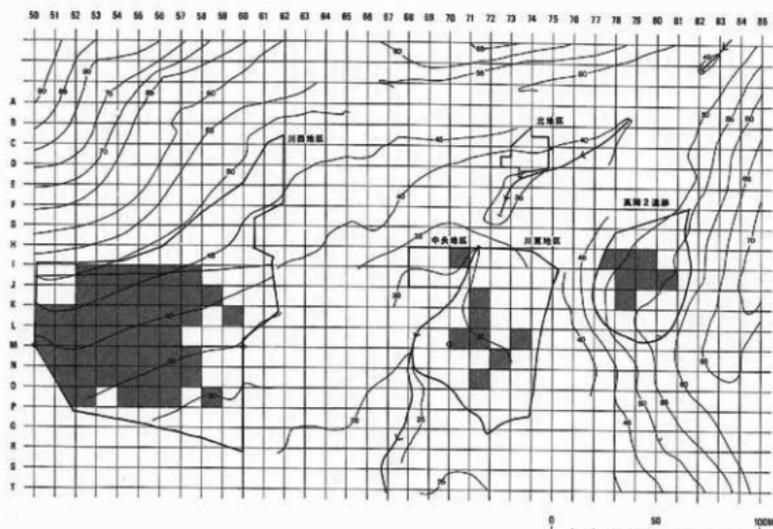
図VII-1-3 II群b類土器の分布



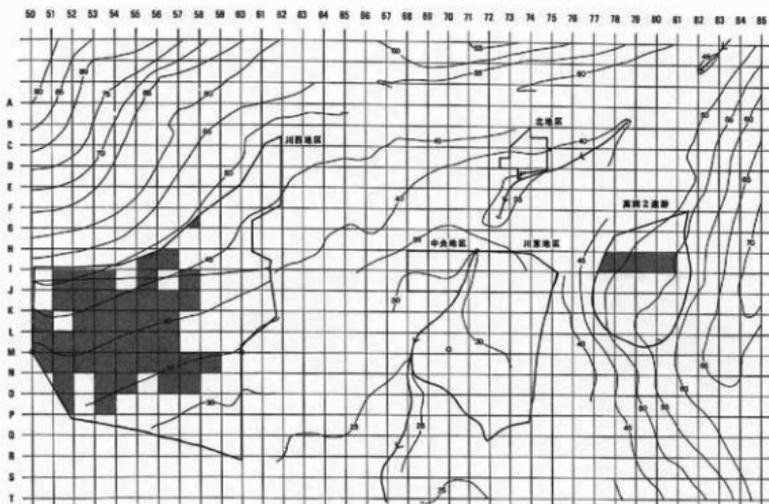
図VII-1-4 III群a-2・b類土器の分布



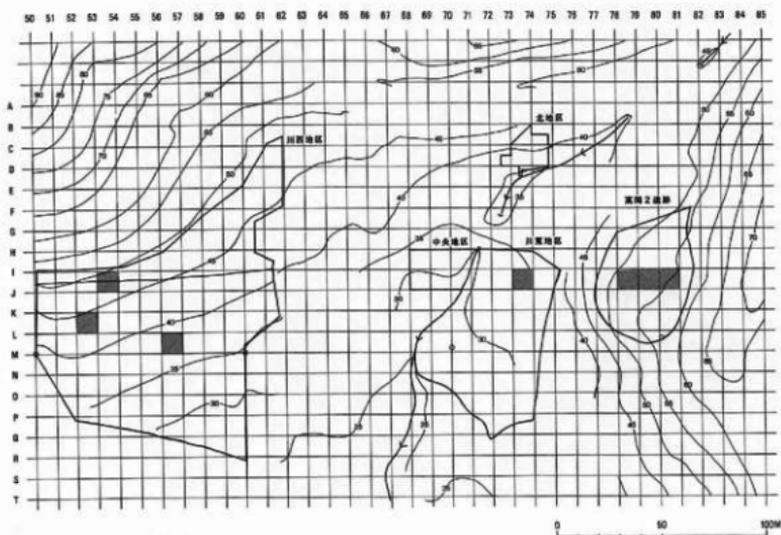
図VII-1-5 III群b-2類土器の分布



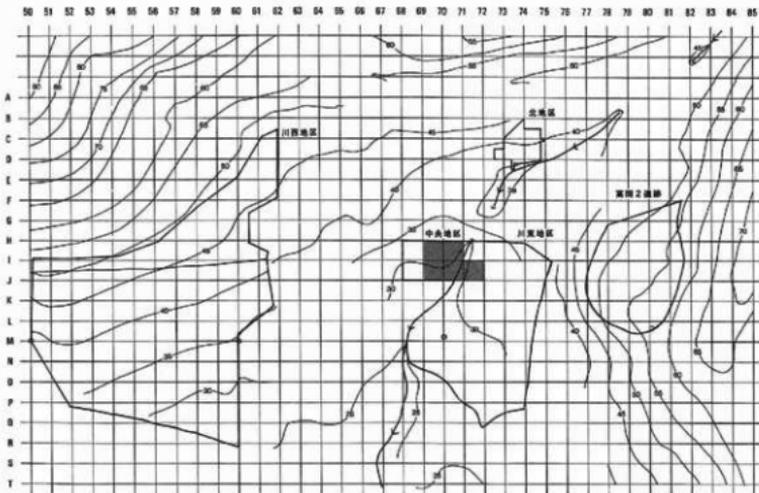
図VII-1-6 III群b-3類・ノダップII式、煉瓦台式の分布



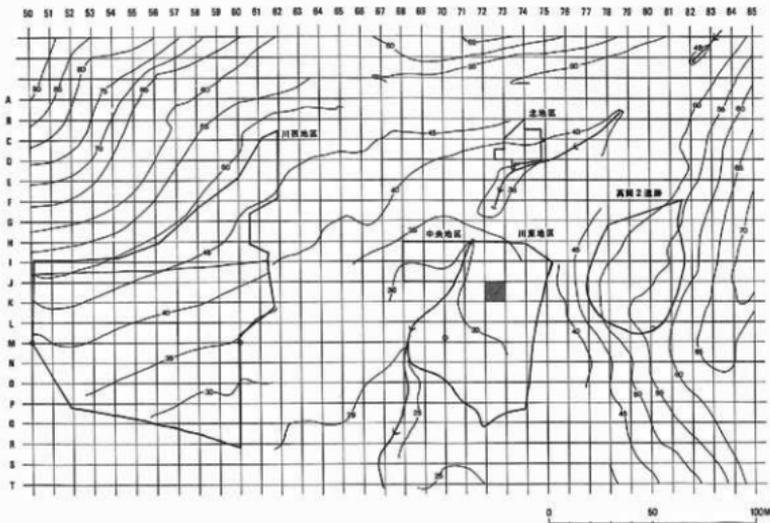
図VII-1-7 III群b-3類・北筒式の分布



図VII-1-8 IV群a類土器の分布



図VII-1-9 IV群b類土器の分布



図VII-1-10 続縄文土器の分布

写 真 图 版

高岡 1 遺跡 図版 1～48

高岡 2 遺跡 図版 49～59



調査前状況



包含層調査状況



全完掘状況



遺構調査状況



遺構調査状況



WH-7 完掘



WH-7 南北土層断面



WH-7 石組み炉



WH-13 石組み炉

図版 4



WH-8 完掘



WH-8 南北土層断面



WH-10 覆土遺物出土状況



WH-10 完掘



WH-11 覆土遺物出土状況



WH-11 完掘



WH-12 完掘



WH-14 完掘



WH-15 完掘



WH-18 完掘



WP-4 覆土遺物出土状況



WP-4 完掘



WP-5 覆土遺物出土状況



WP-5 完掘



包含層調査状況



包含層調査状況



包含層調査状況

图版 8



包含层 K-55-a 区 遗物出土状况



包含层 K-55-a 区 遗物出土状况



包含层 K-57-b 区 遗物出土状况



包含层 J-56-c 区 遗物出土状况



包含层 J-53-d 区 遗物出土状况



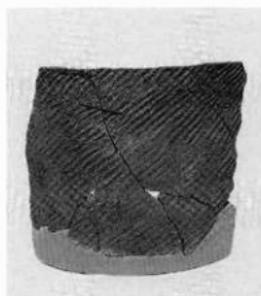
包含层 K-54-d 区 遗物出土状况



WH-7 出土の土器



WH-7 出土の土器



WH-10 出土の土器



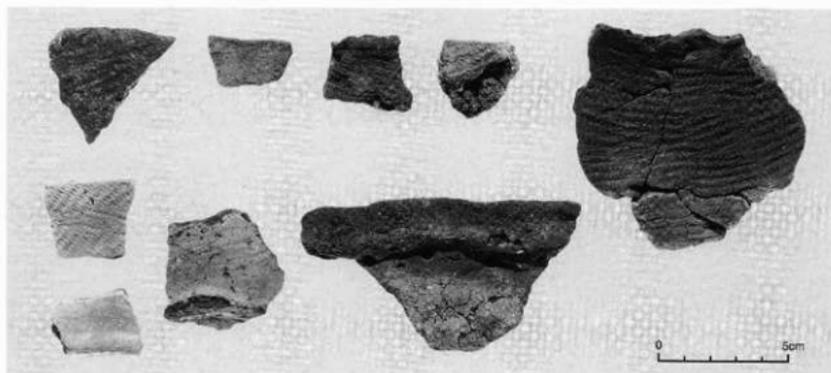
WH-7 出土の土器



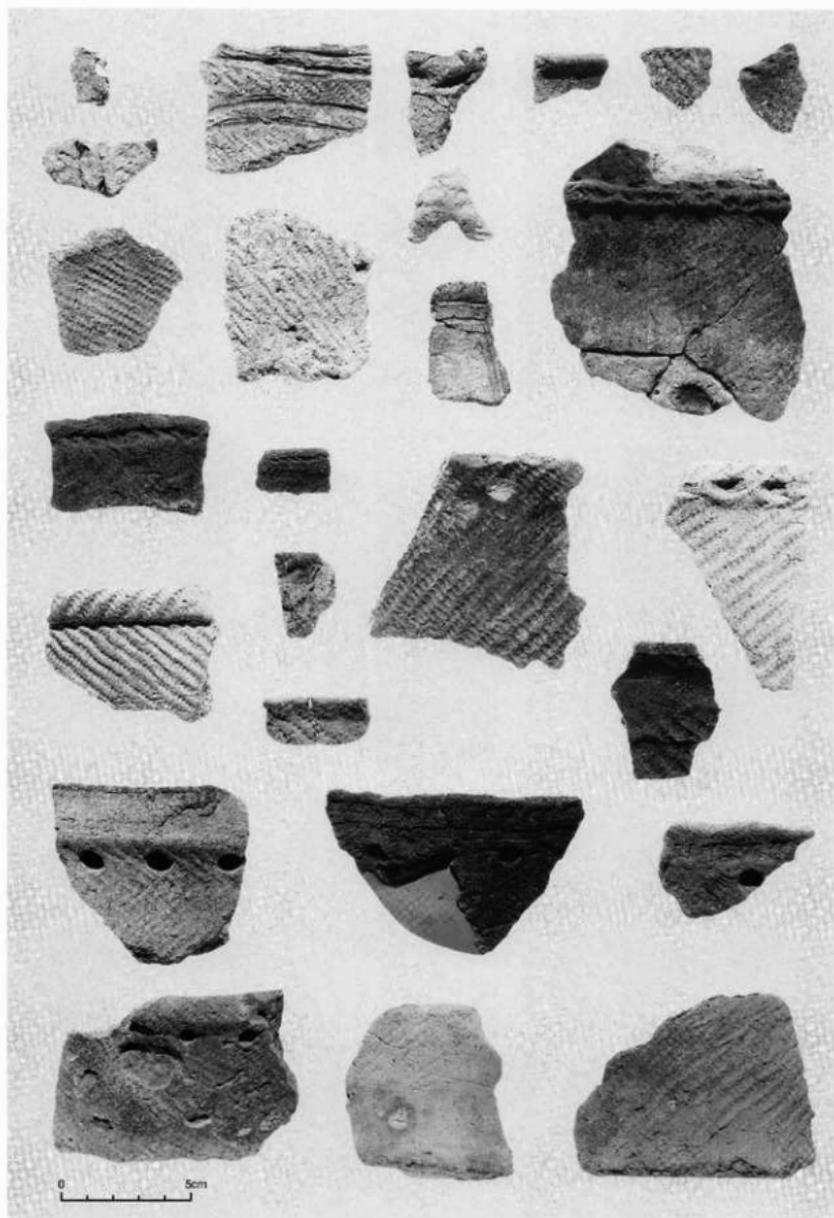
WH-15 出土の土器



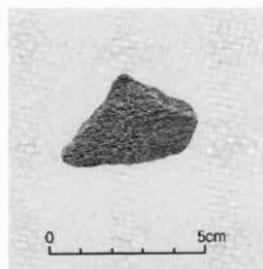
WP-5 出土の土器



WH-8 出土の土器



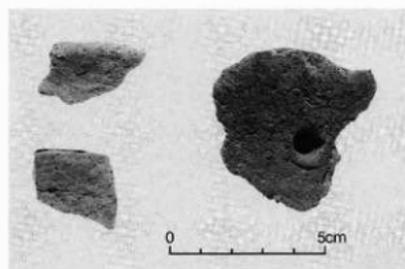
WH-7 出土の土器



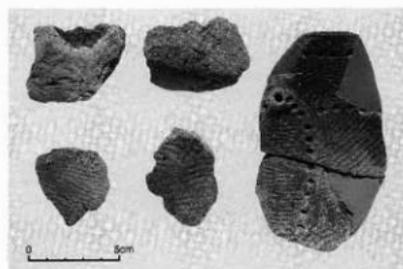
WH-9 出土の土器



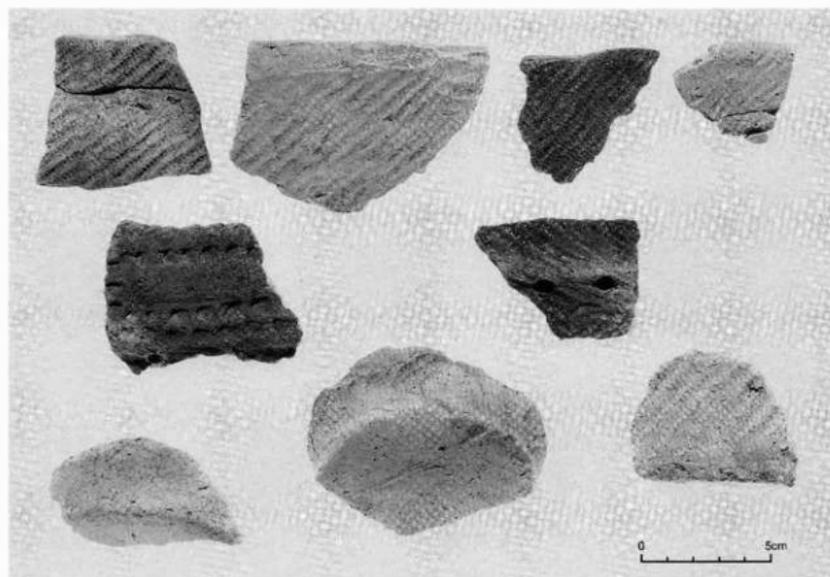
WH-10 出土の土器



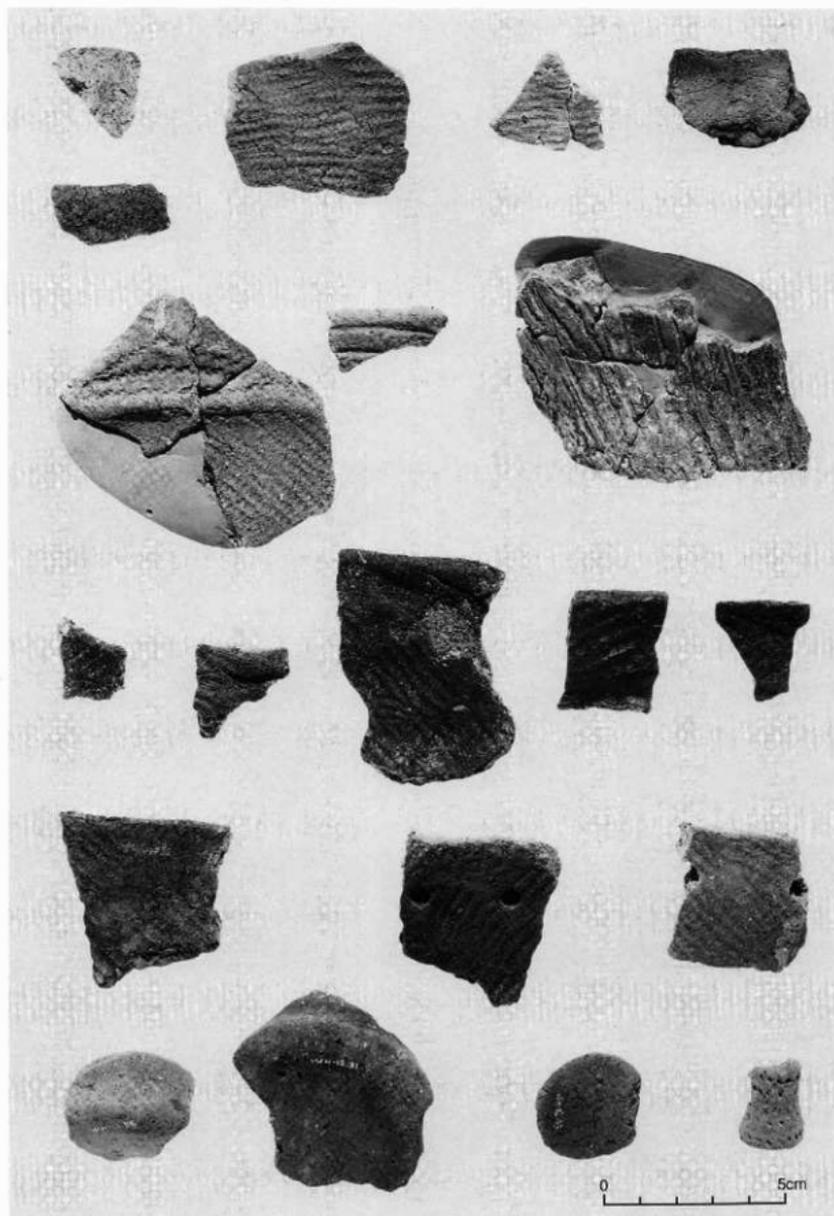
WH-13 出土の土器



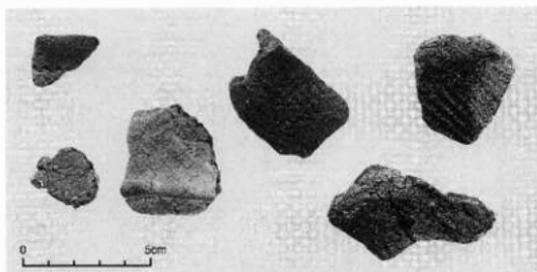
WH-14 出土の土器



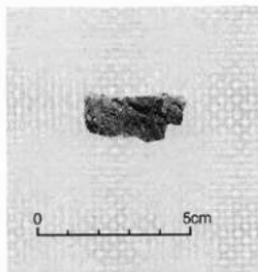
WH-11 出土の土器



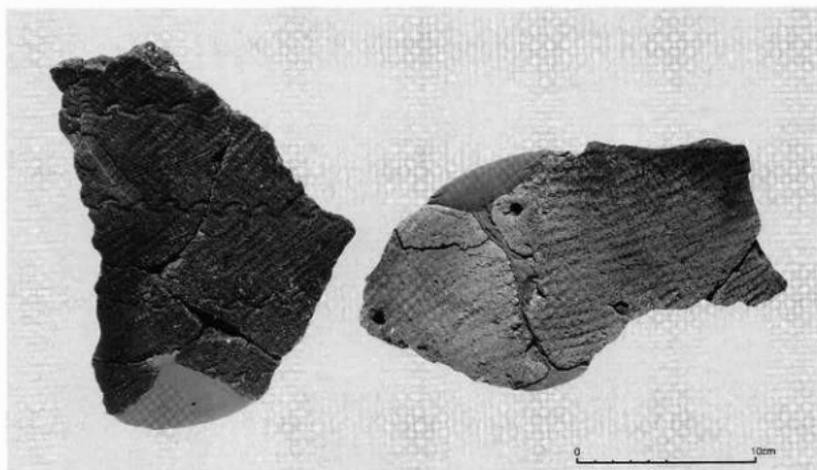
WH-12 出土の土器



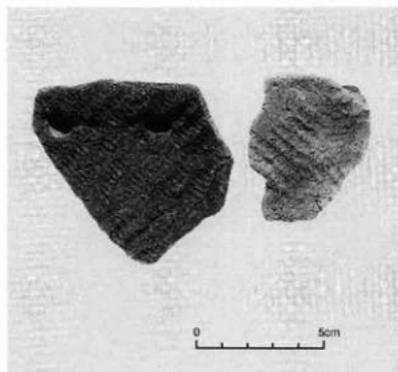
WH-15 出土の土器



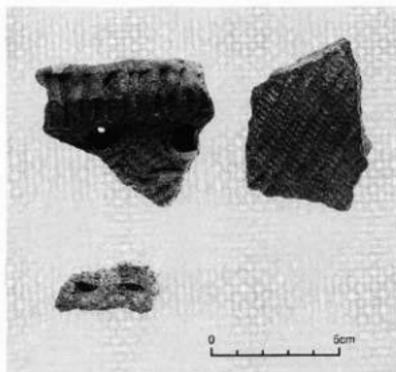
WH-16 出土の土器



WH-17 出土の土器



WH-17 出土の土器

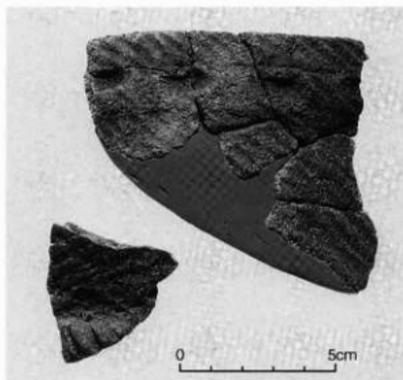


WH-18 出土の土器

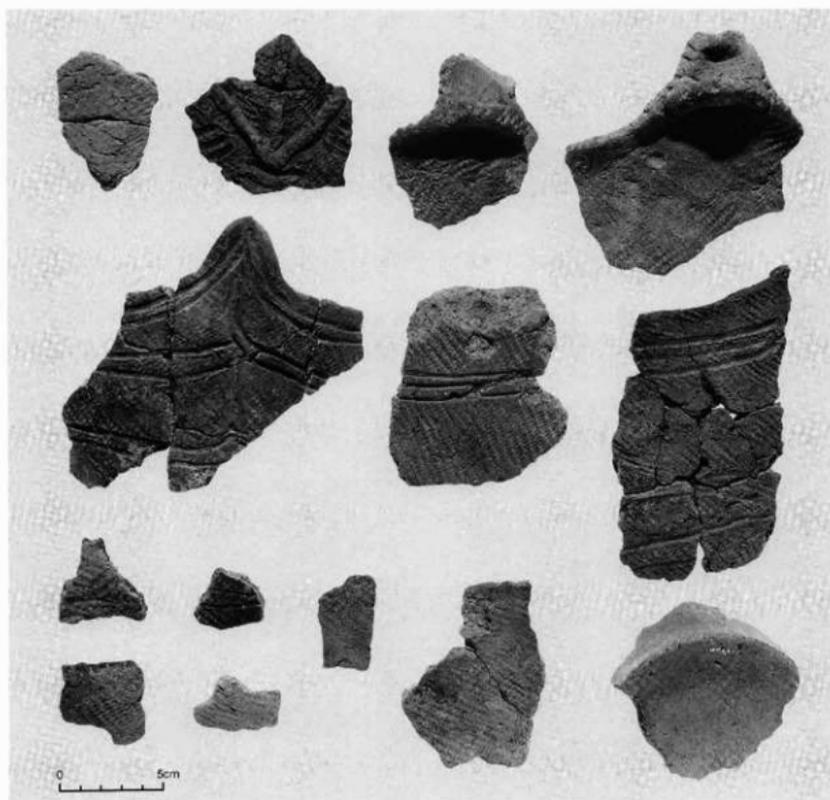
図版14



WP-4 出土の土器



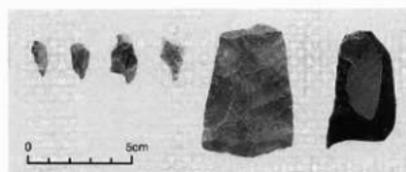
WF-9・10 出土の土器



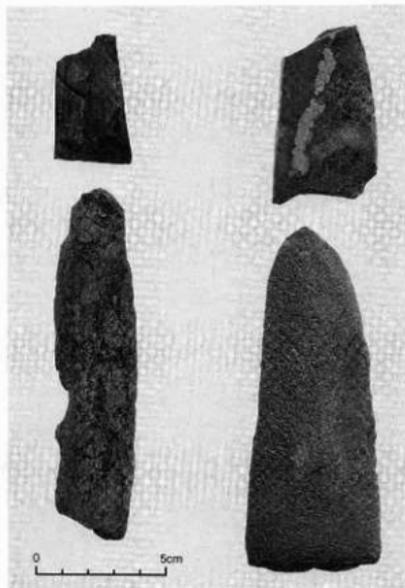
WP-4 出土の土器



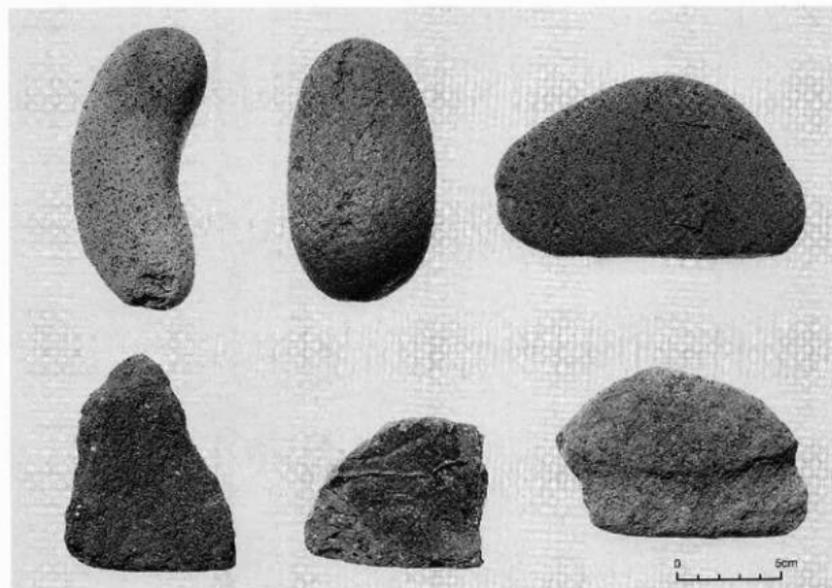
WH-7 出土の石器



WH-7 出土の石器

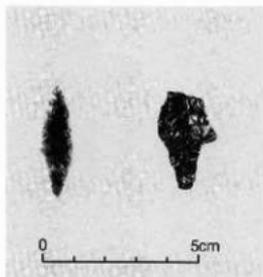


WH-7 出土の石器



WH-7 出土の石器

図版16



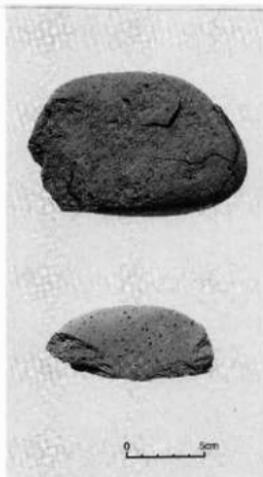
WH-8・10 出土の石器



WH-12 出土の石器



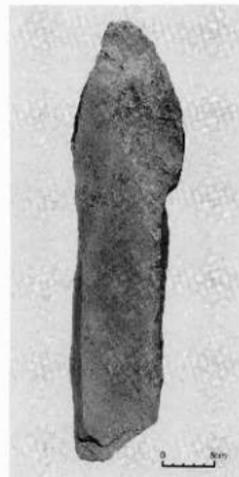
WH-12 出土の石製品



WH-12 出土の石器



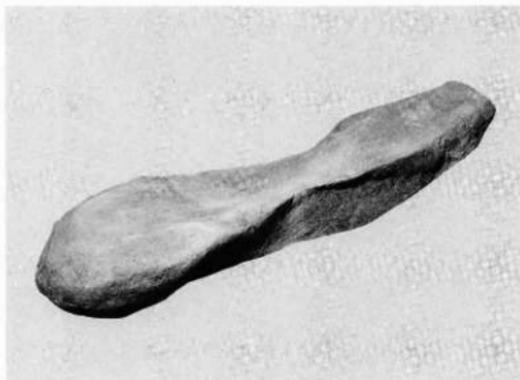
WH-12 出土の石器



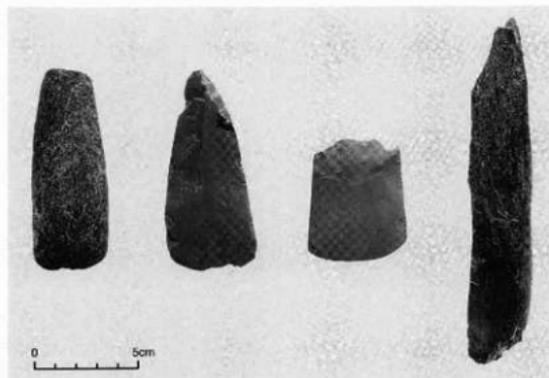
WH-12 出土の石器



WH-11 出土の石器



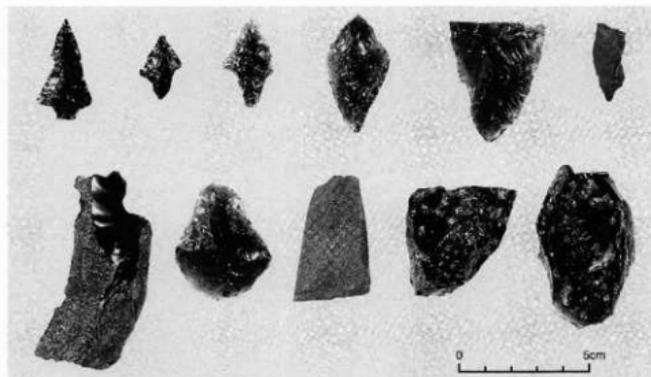
WH-11 出土の石器



WH-14 出土の石器



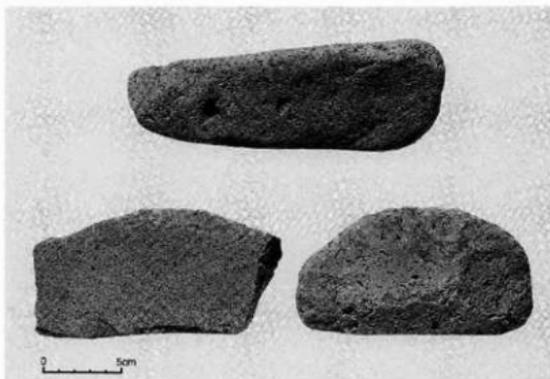
WH-16 出土の石器



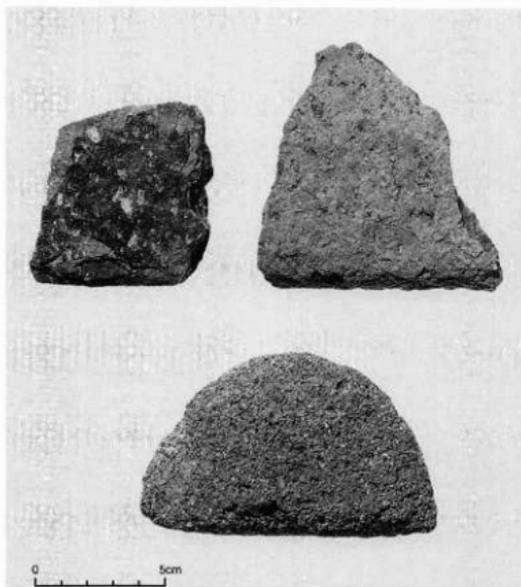
WH-15 出土の石器



WH-18 出土の石器



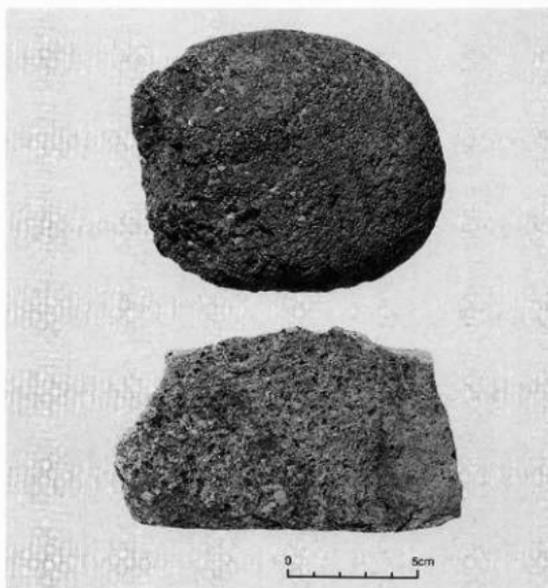
WH-18 出土の石器



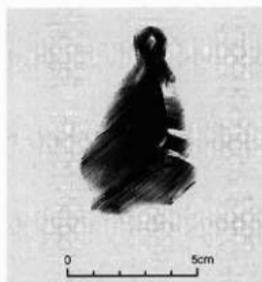
WP-4 出土の石器



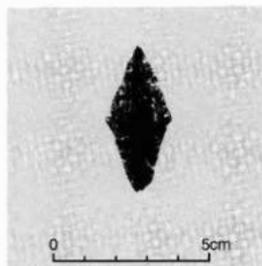
WP-4 出土の石器



WP-5 出土の石器



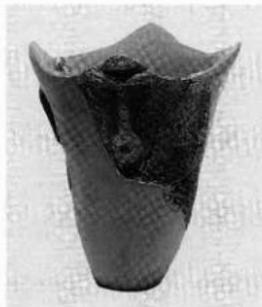
WP-5 出土の石器



WF-7 出土の石器



包含層出土の土器(Ⅲ群 a-2 類)



包含層出土の土器(Ⅲ群 b-1 類)



包含層出土の土器(Ⅲ群 b-1 類)



包含層出土の土器(Ⅲ群 b-2 類)



包含層出土の土器(Ⅲ群 b-2 類)



包含層出土の土器(Ⅲ群 b-2 類)



包含層出土の土器(Ⅲ群 b-2 類)

図版20



包含層出土の土器(Ⅲ群b-3類)



包含層出土の土器(Ⅲ群b-3類)



包含層出土の土器(Ⅲ群b-3類)



包含層出土の土器(Ⅲ群b-3類)



包含層出土の土器(Ⅲ群b-3類)



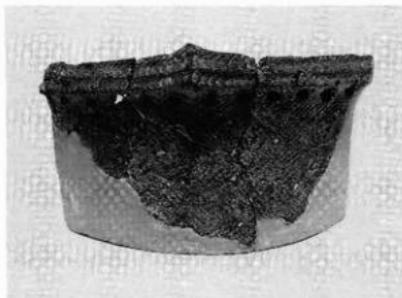
包含層出土の土器(Ⅲ群b-3類)



包含層出土の土器(Ⅲ群b-3類)



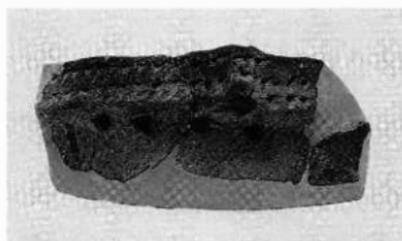
包含層出土の土器(Ⅲ群b-3類)



包含層出土の土器(Ⅲ群b-3類)



包含層出土の土器(Ⅲ群b-3類)



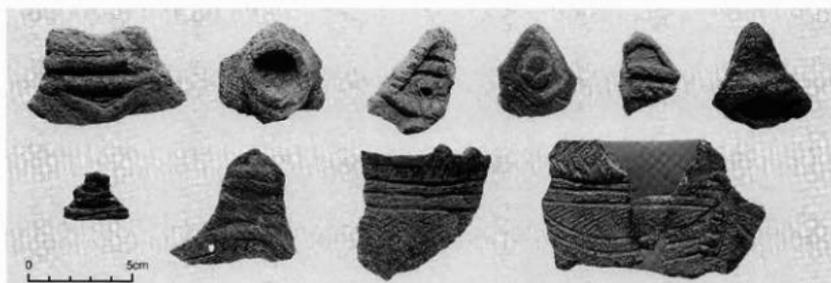
包含層出土の土器(Ⅲ群b-3類)



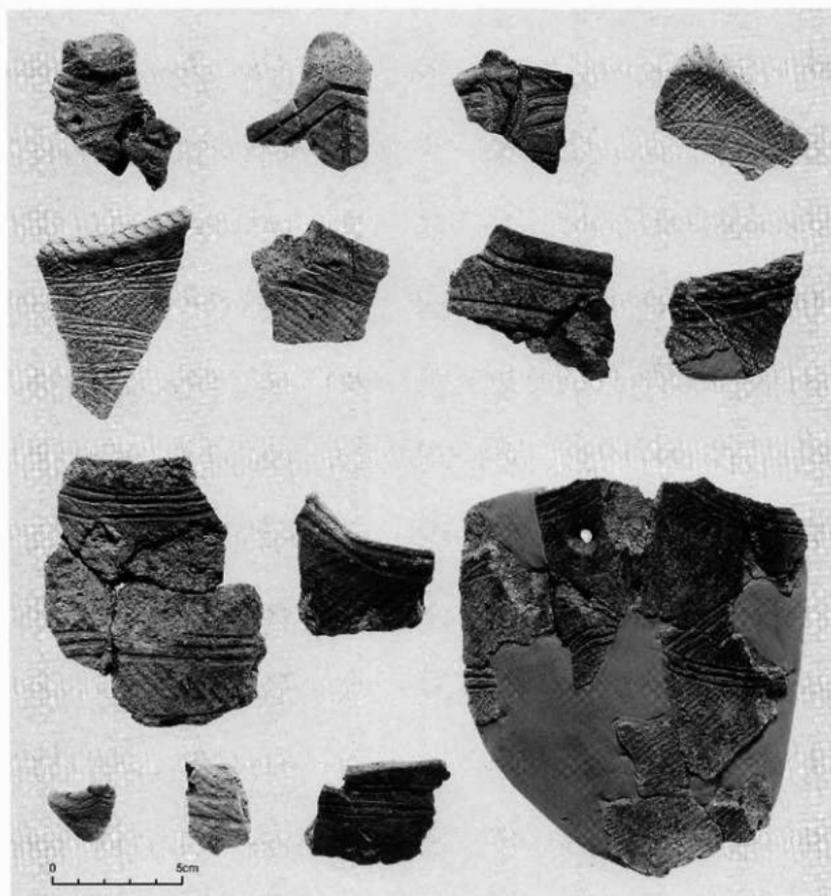
包含層出土の土器(Ⅲ群b-3類)



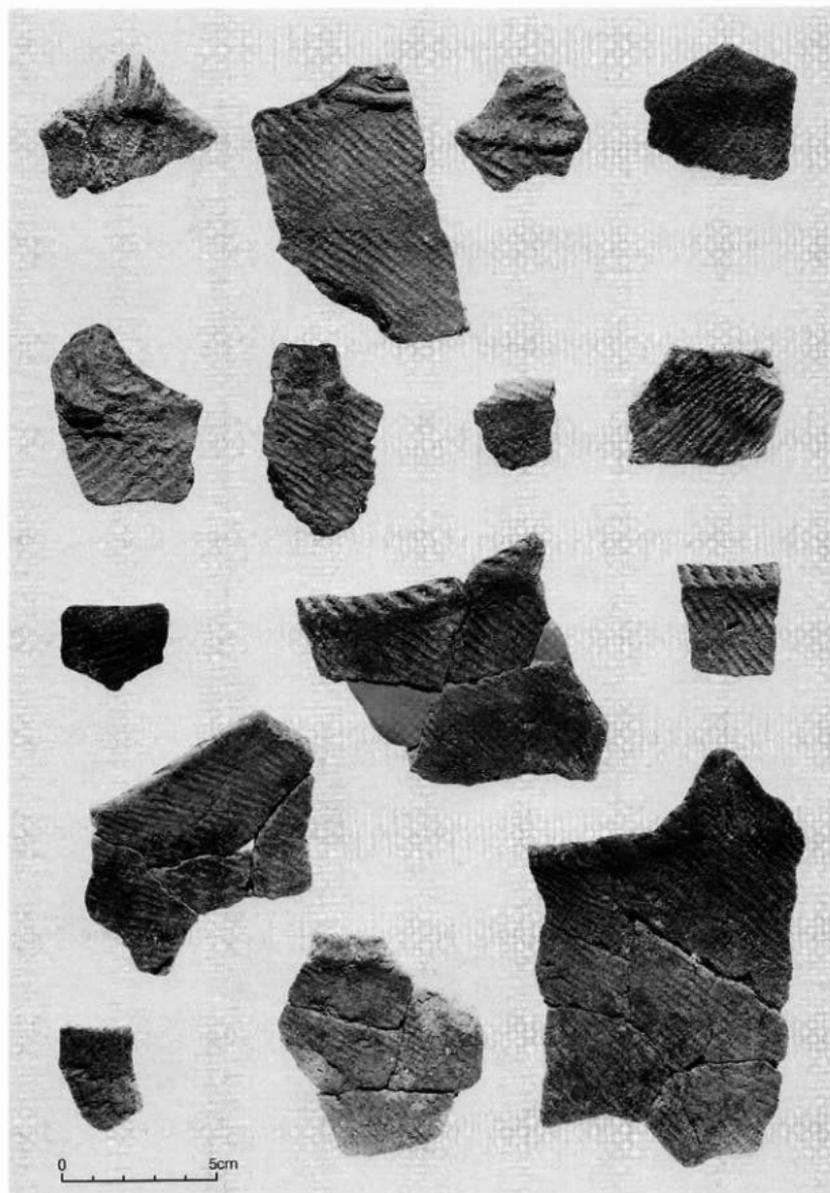
包含層出土の土器(Ⅲ群b-3類)



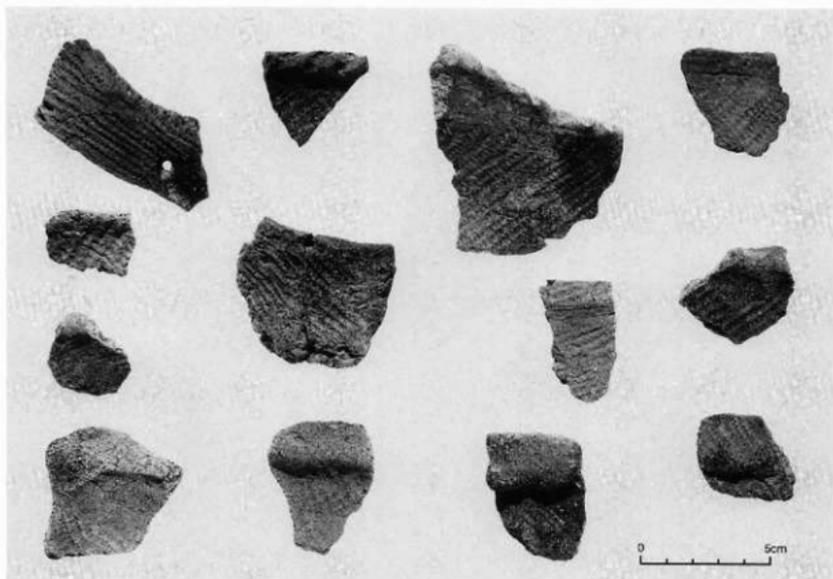
包含層出土の土器(III群 a-2類)



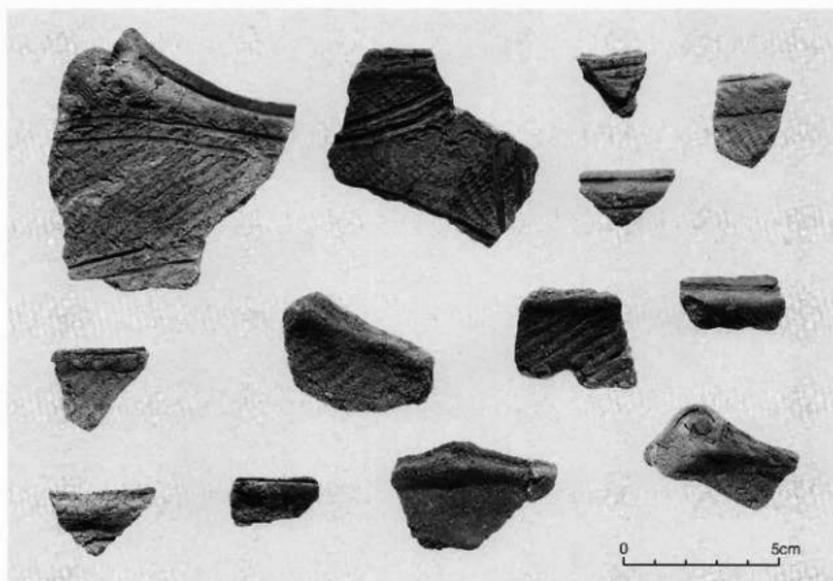
包含層出土の土器(III群 a-2類)



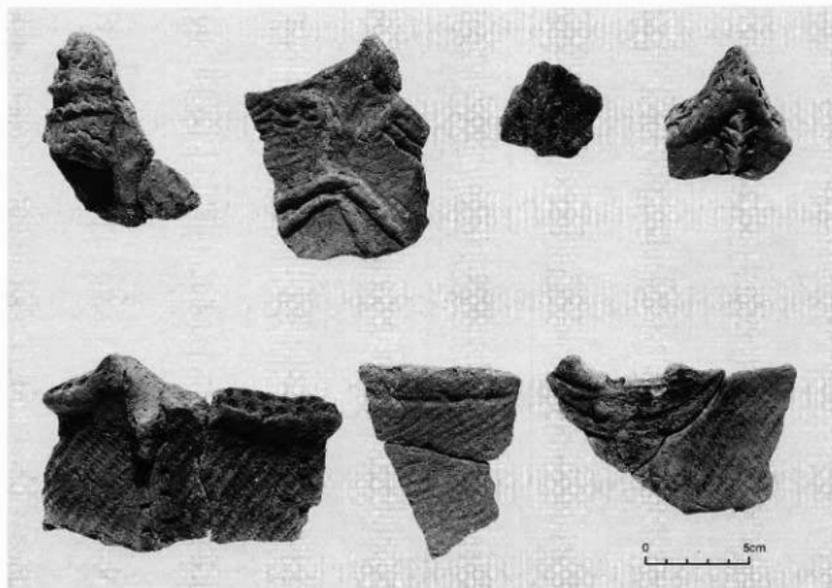
包含層出土の土器(Ⅲ群b-1類)



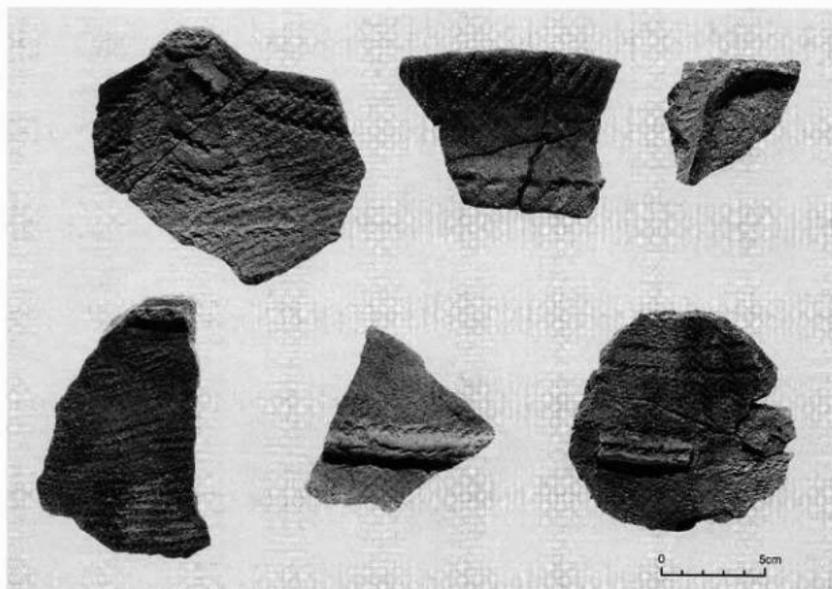
包含層出土の土器(Ⅲ群b-1類)



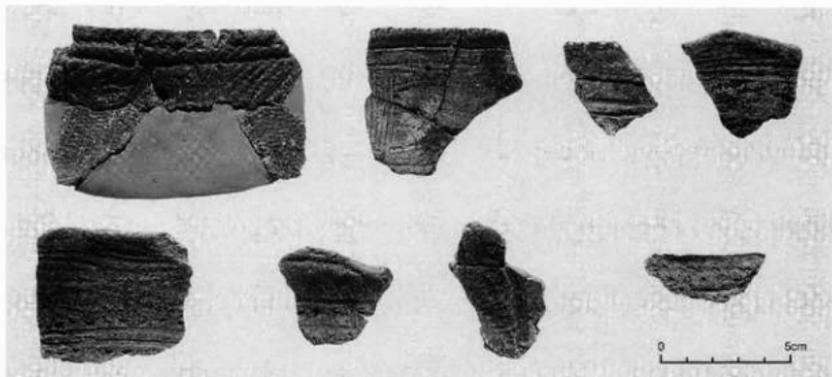
包含層出土の土器(Ⅲ群b-1類)



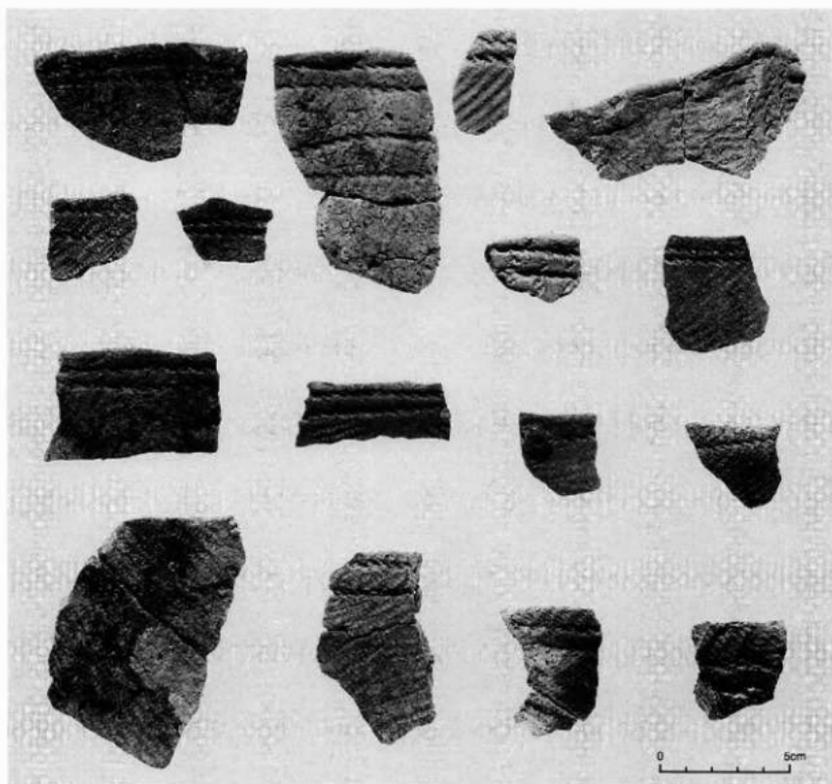
包含層出土の土器(Ⅲ群b-1類)



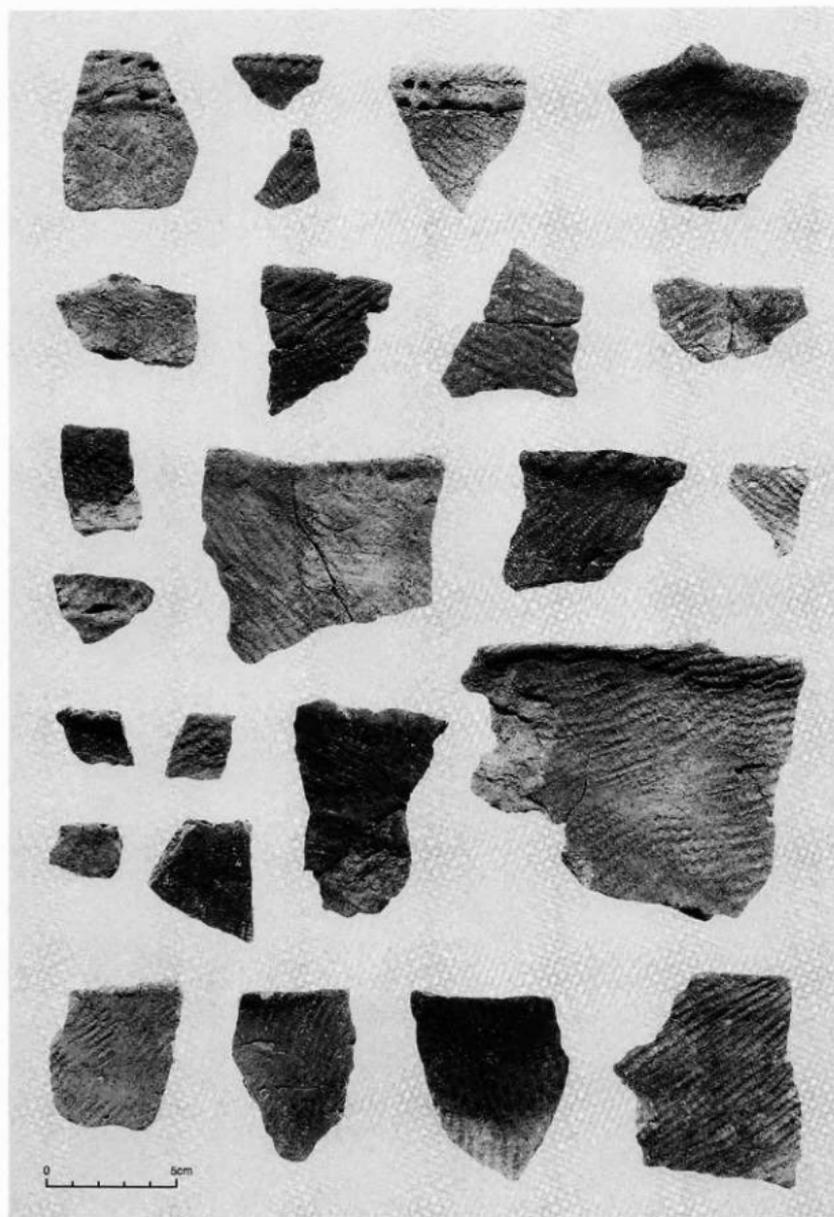
包含層出土の土器(Ⅲ群b-2類)



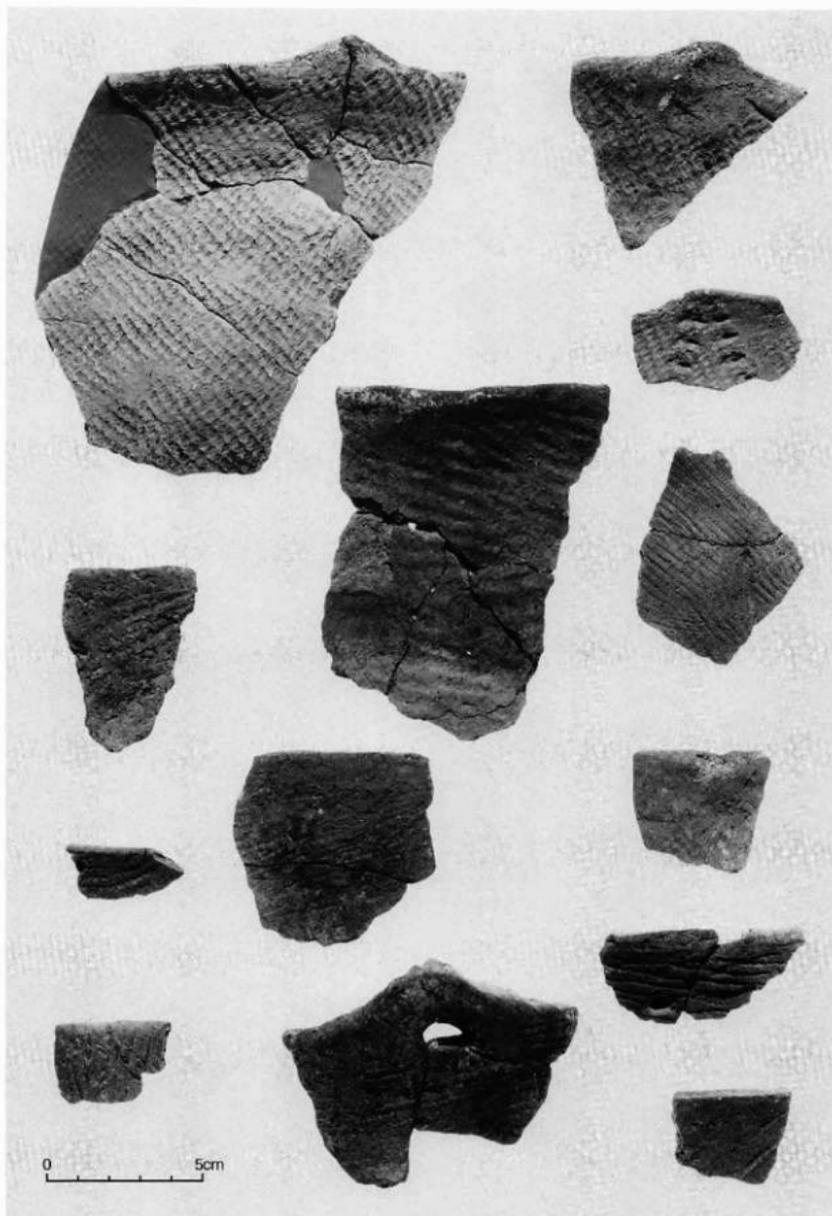
包含層出土の土器(Ⅲ群b-2類)



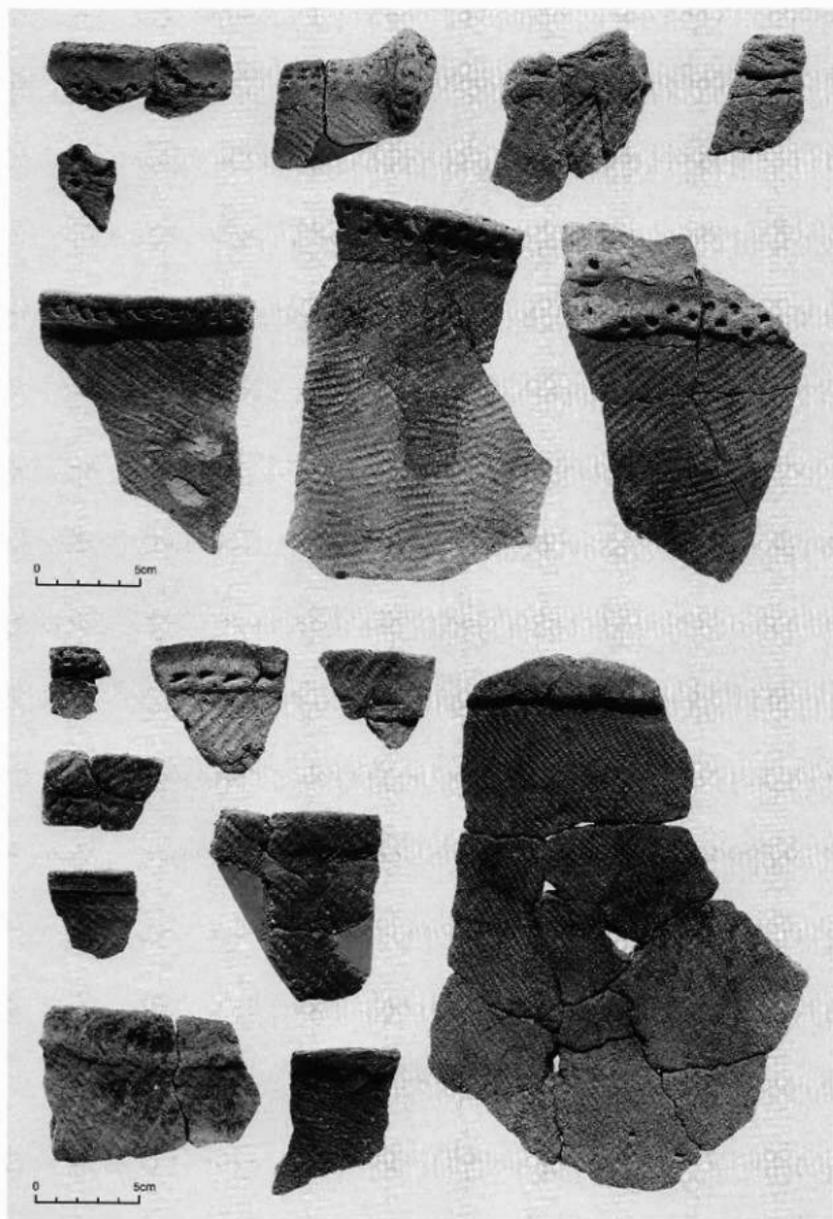
包含層出土の土器(Ⅲ群b-2類)



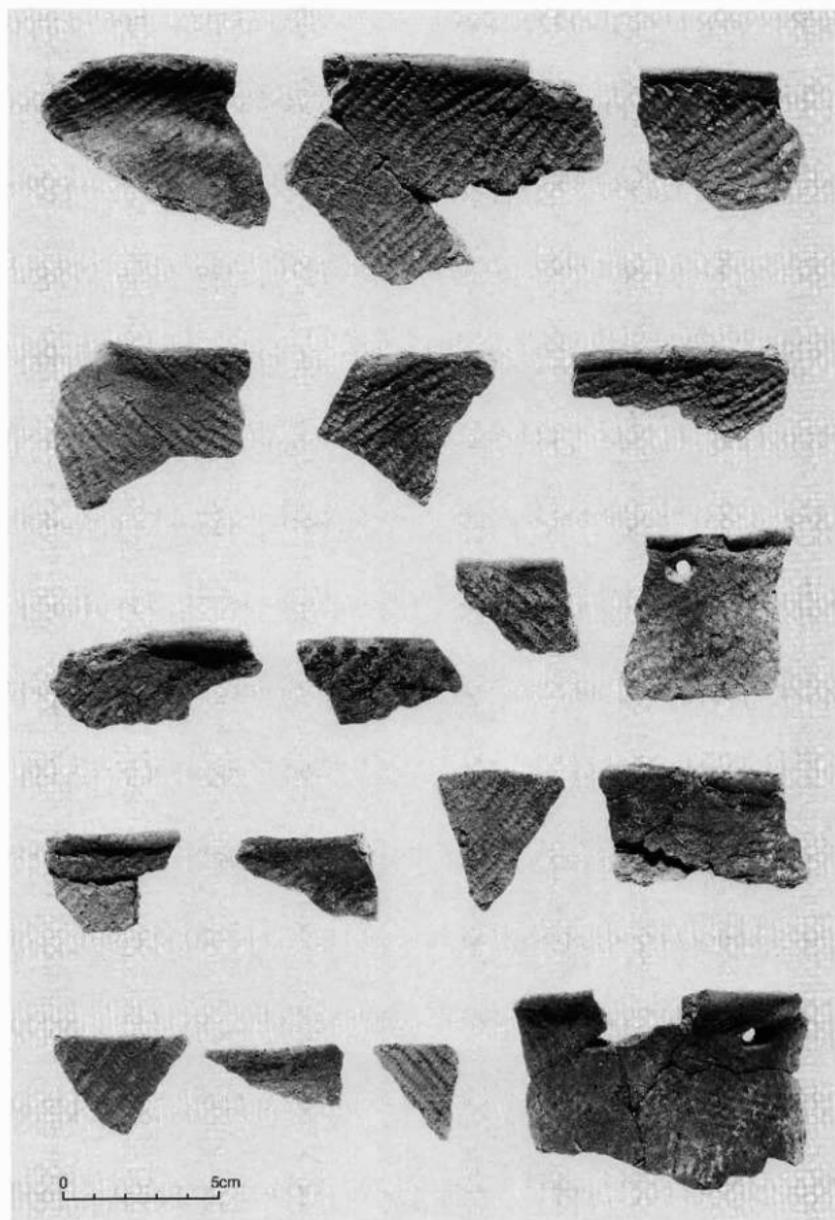
包含層出土の土器(山群b-2類)



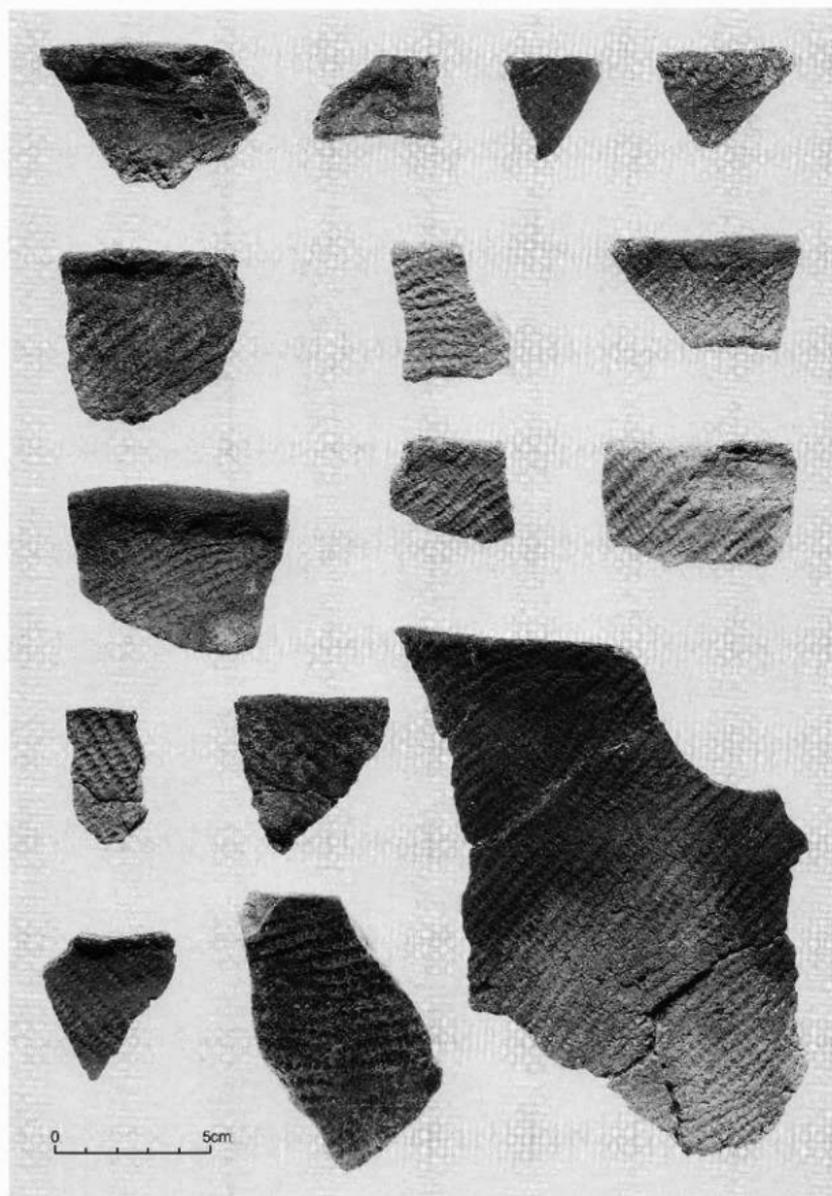
包含層出土の土器(Ⅲ群b-2類)



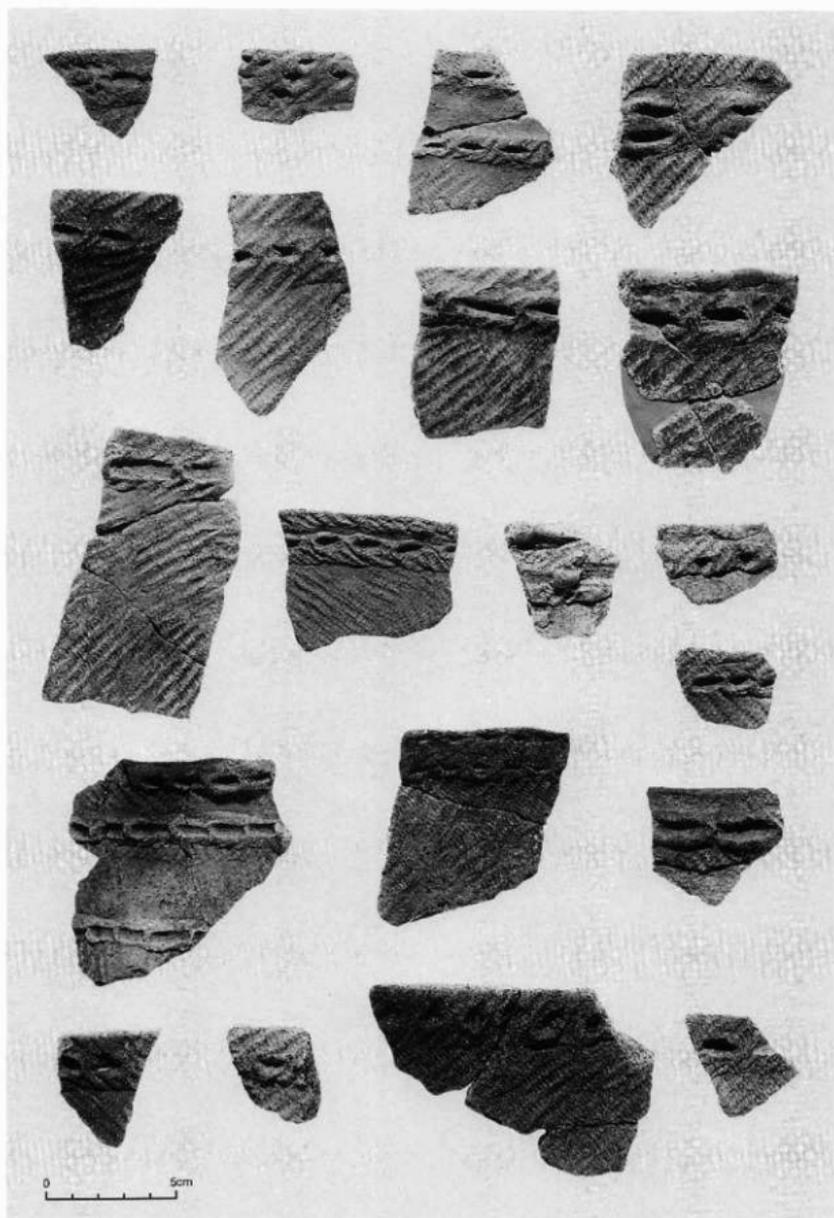
包含層出土の土器(III群b-2類)



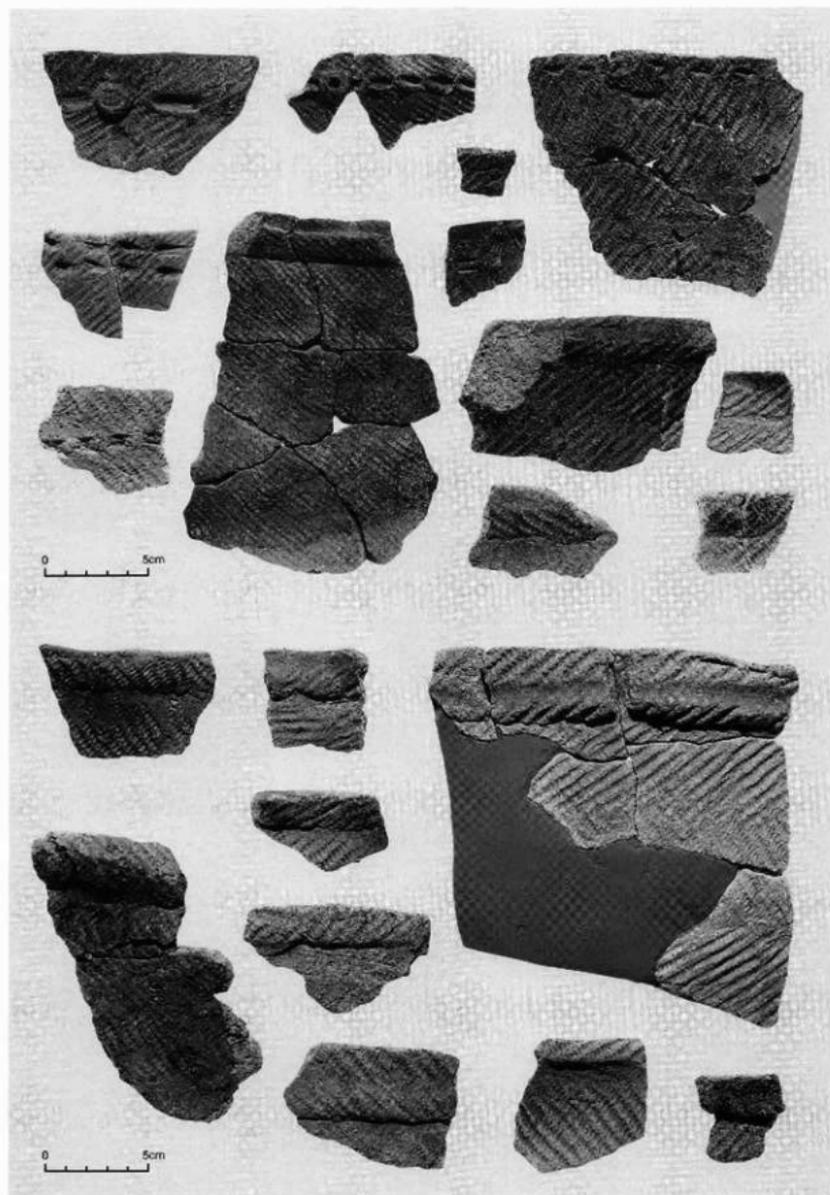
包含層出土の土器(III群b-3類)



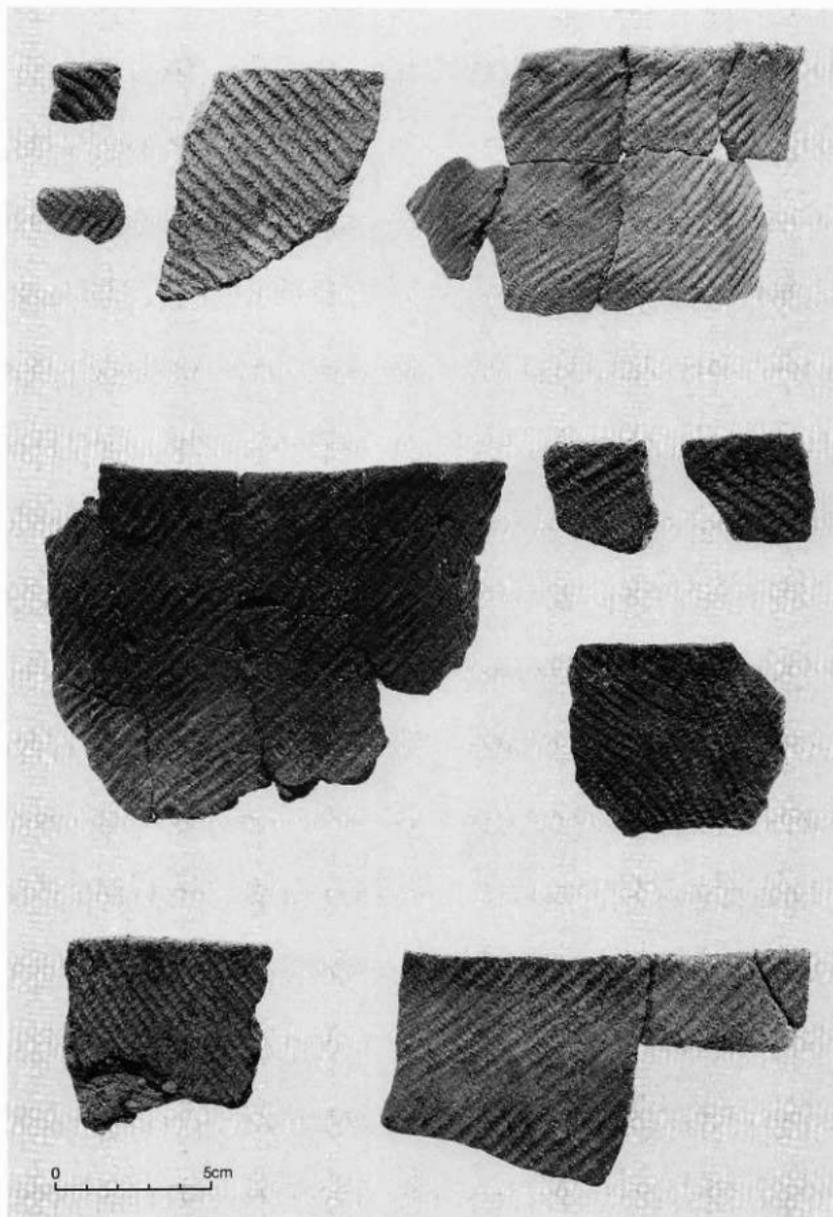
包含層出土の土器(Ⅲ群b-3類)



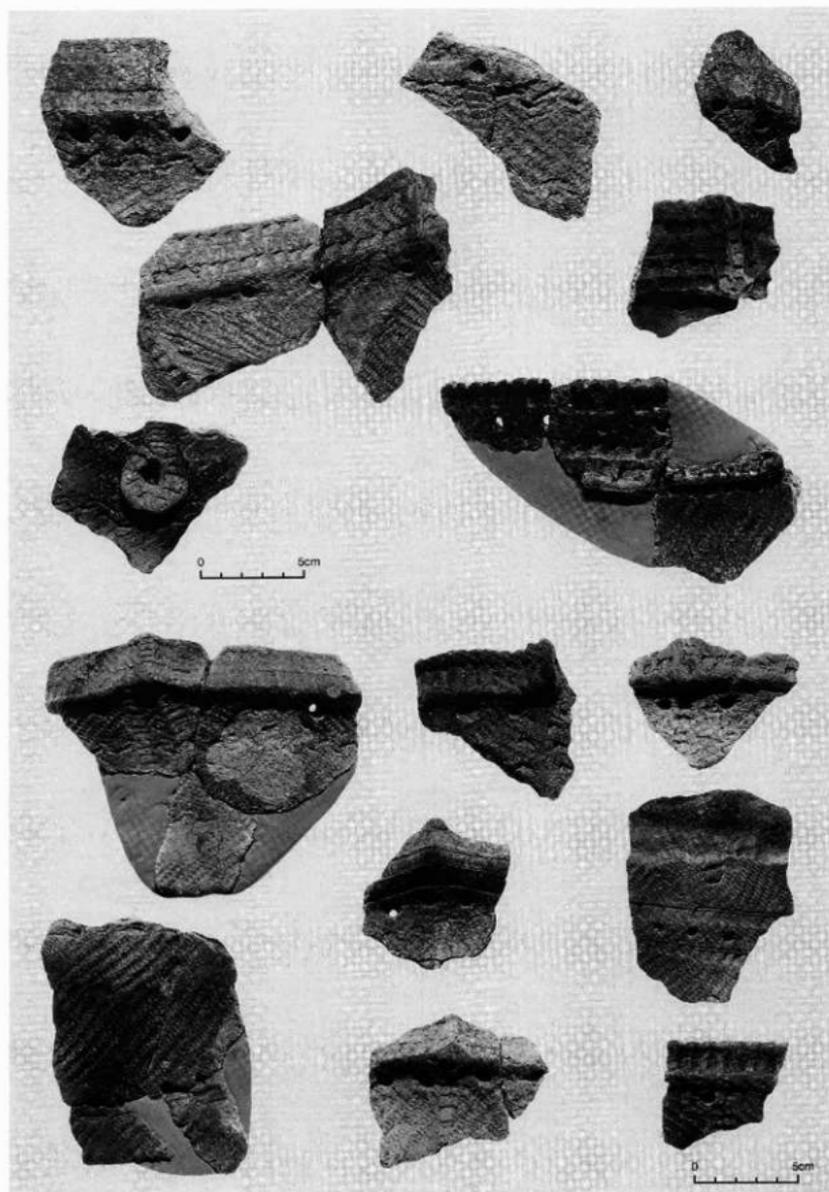
包含層出土の土器(Ⅲ群b-3類)



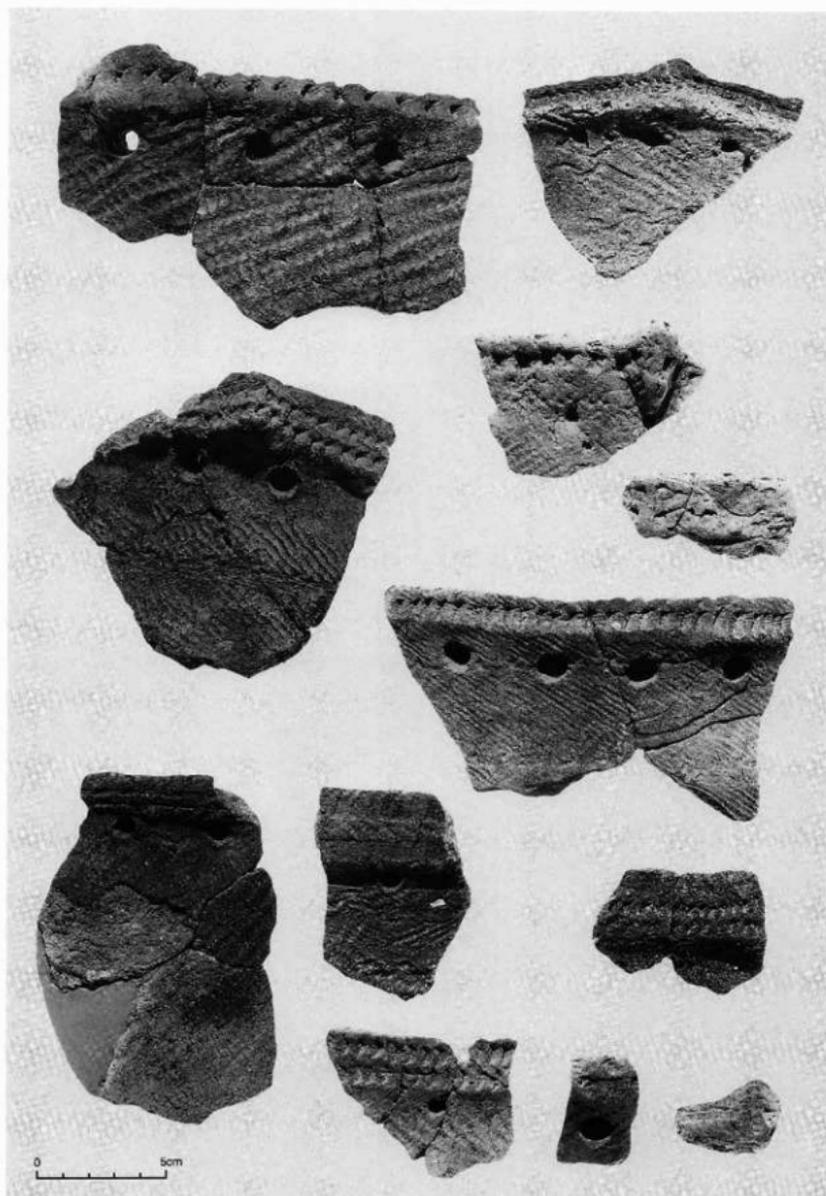
包含層出土の土器(Ⅲ群b-3類)



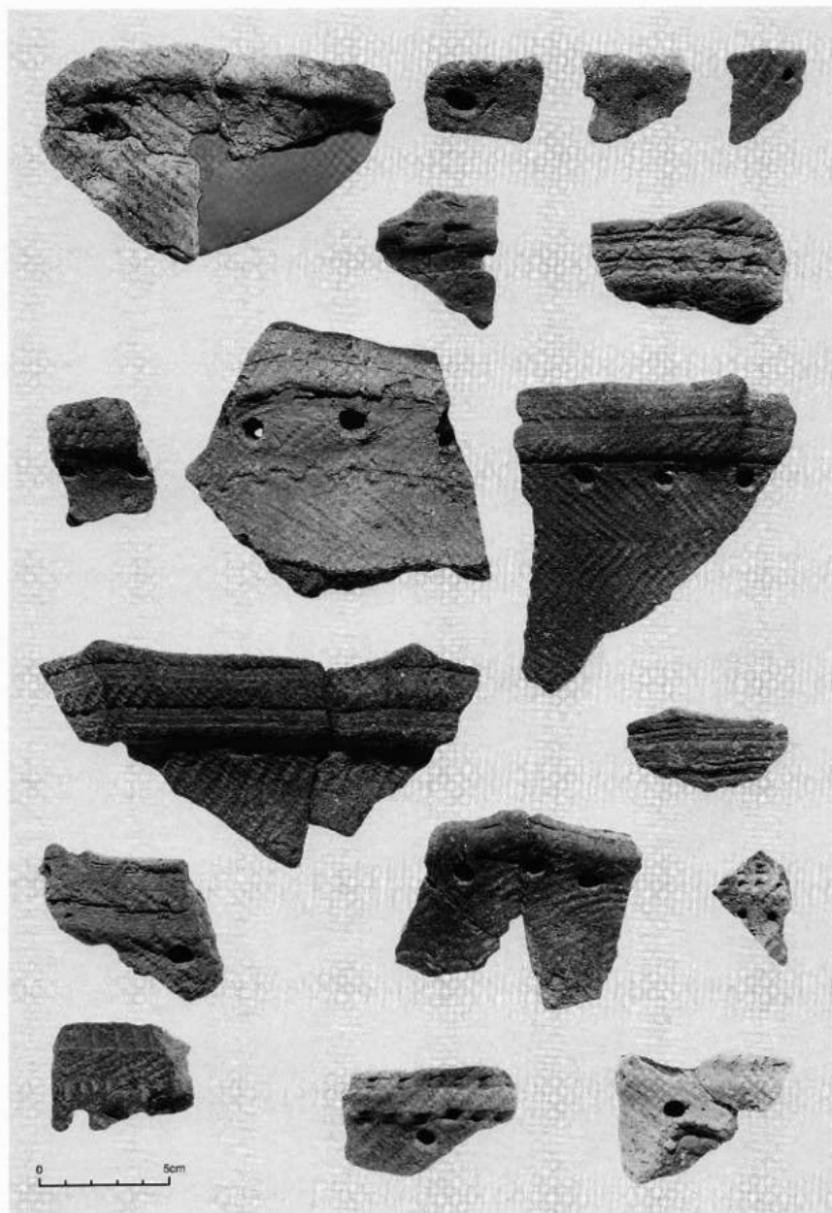
包含層出土の土器(Ⅲ群b-3類)



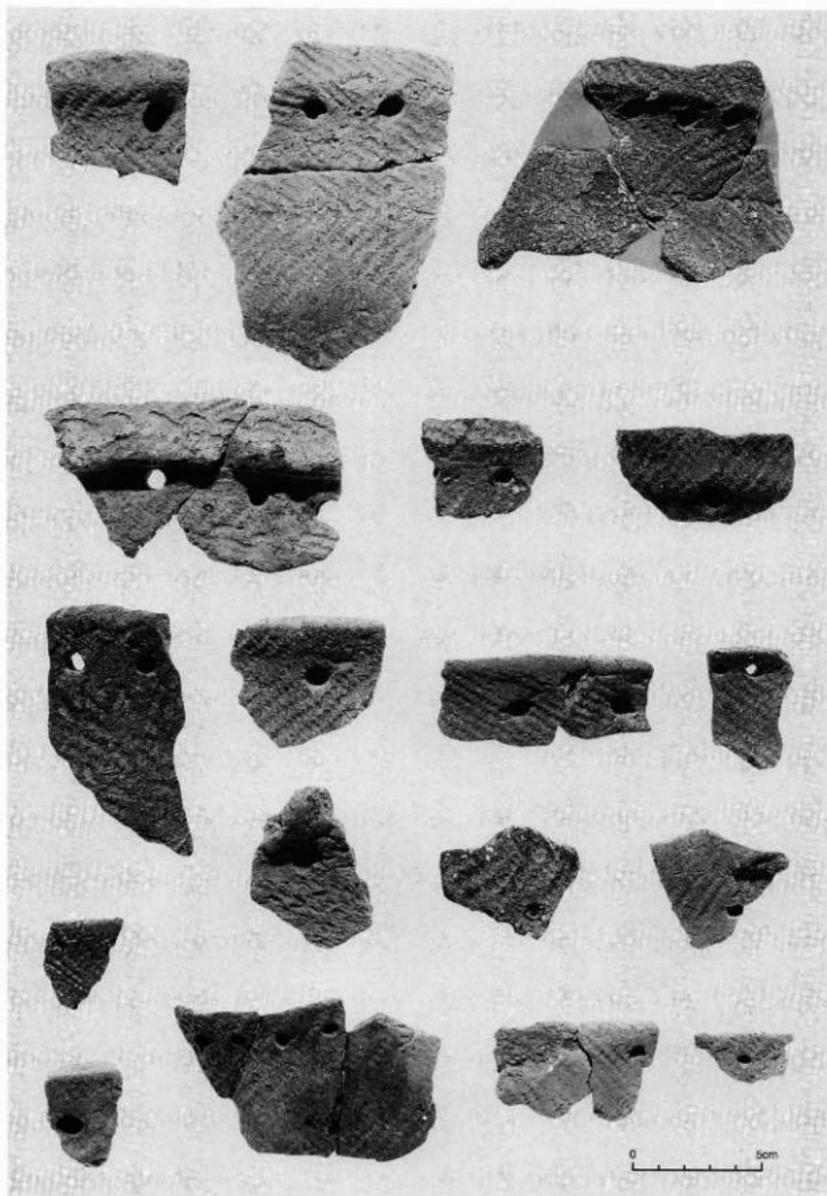
包含層出土の土器(Ⅲ群b-3類)上:北筒式a・b類 下:北筒式b類



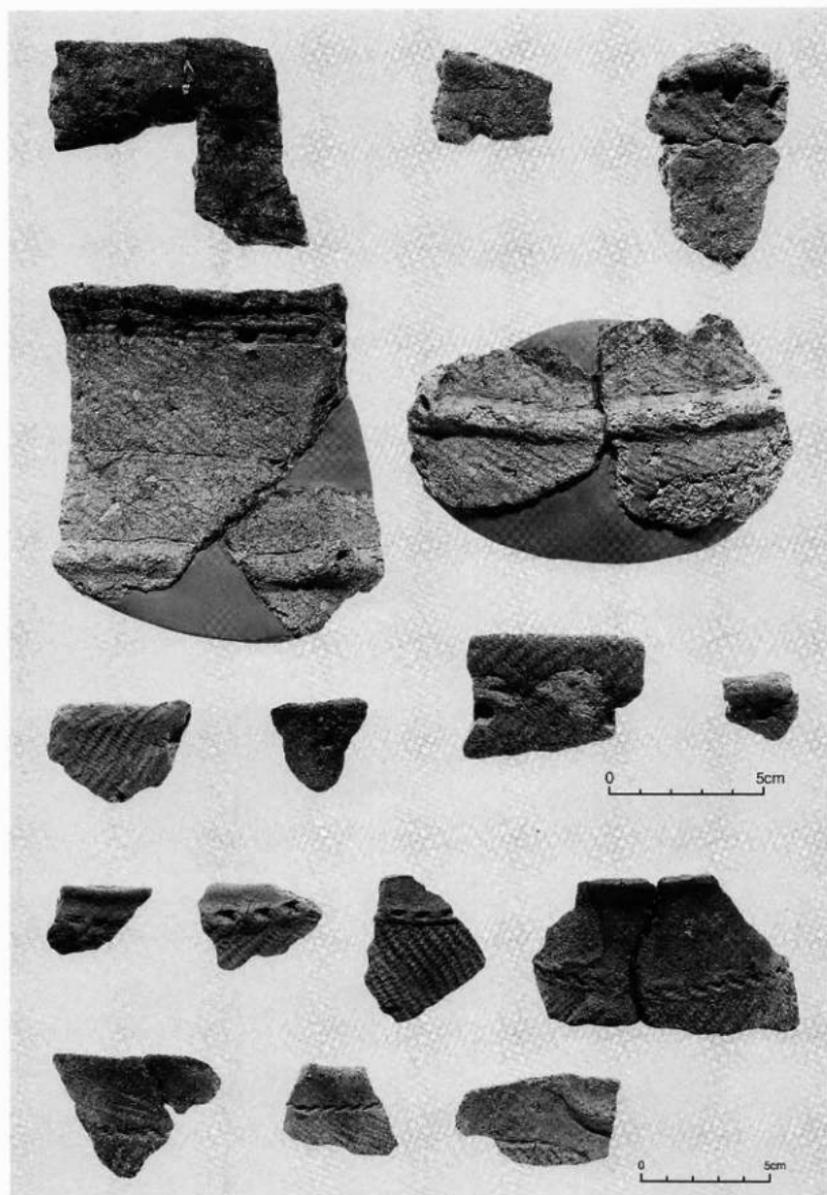
包含層出土の土器(III群b-3類)



包含層出土の土器(山群b-3類)



包含層出土の土器 (Ⅲ群b-3類)

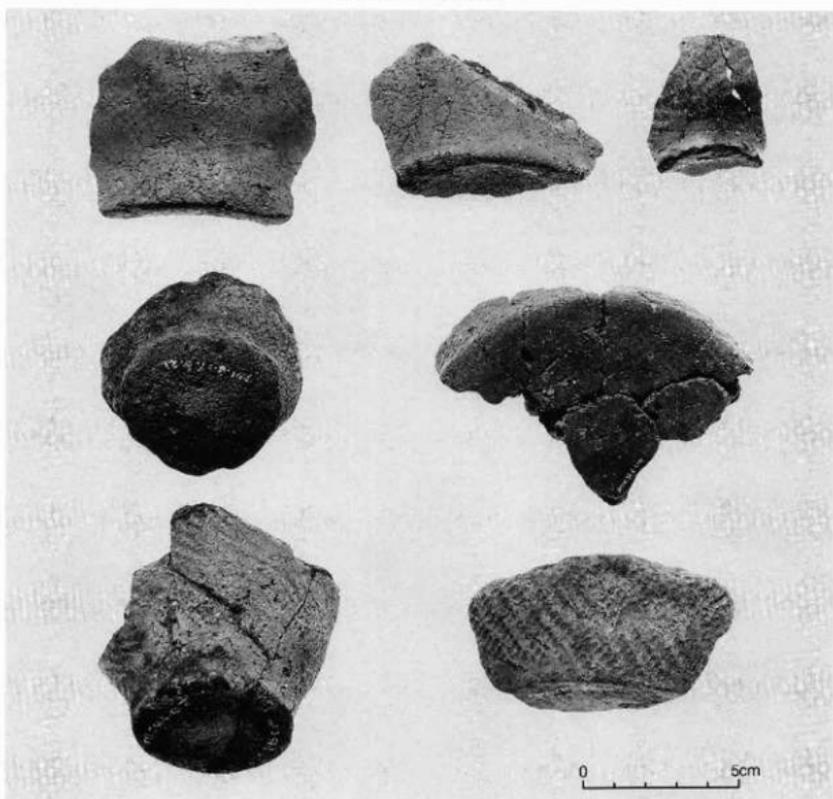


包含層出土の土器(Ⅲ群b-3類)上:北筒式 下:大木系

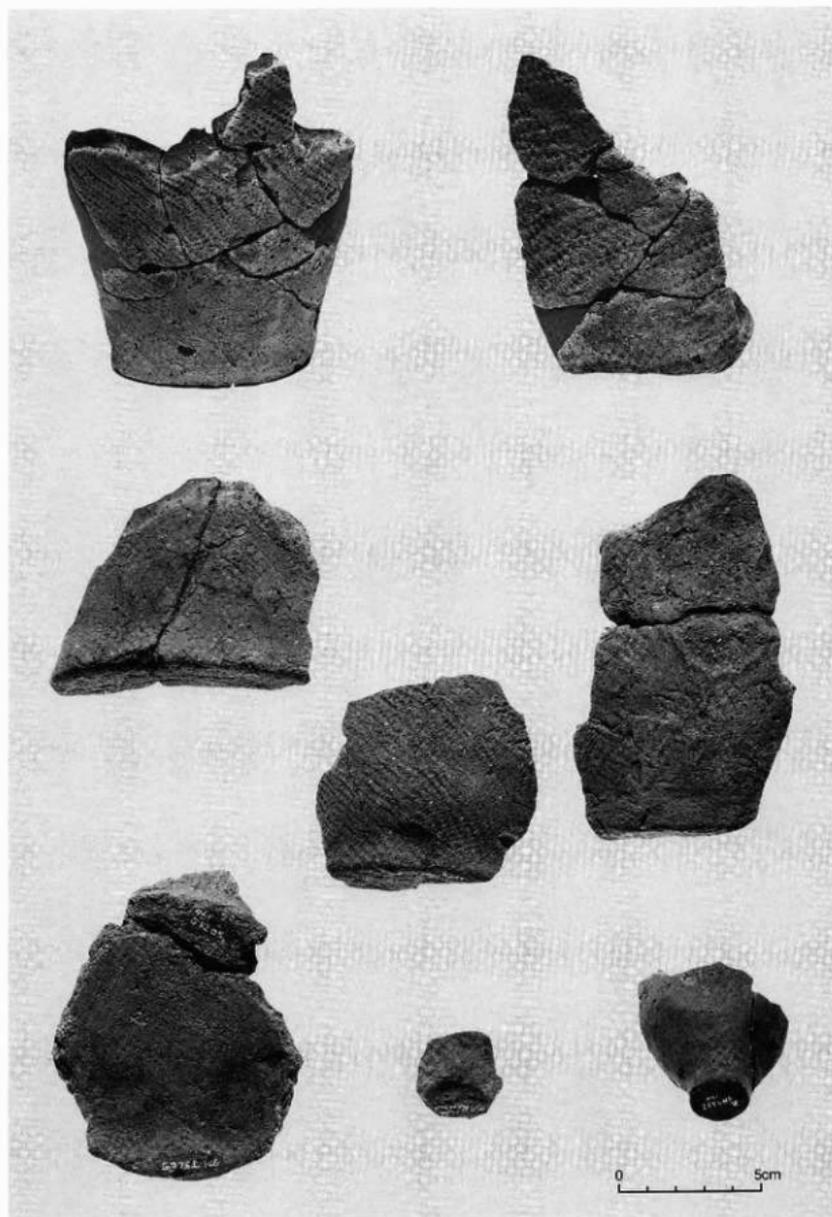
図版40



包含層出土の土器(胴部)

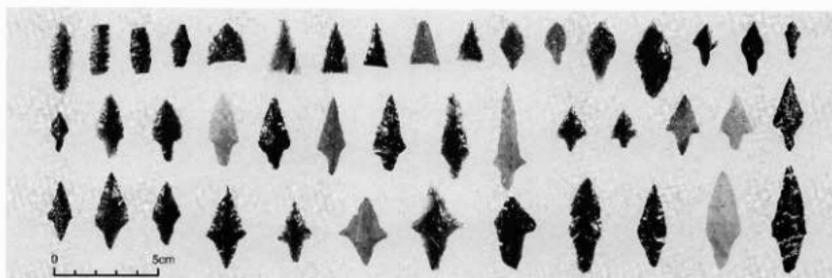


包含層出土の土器(底部)

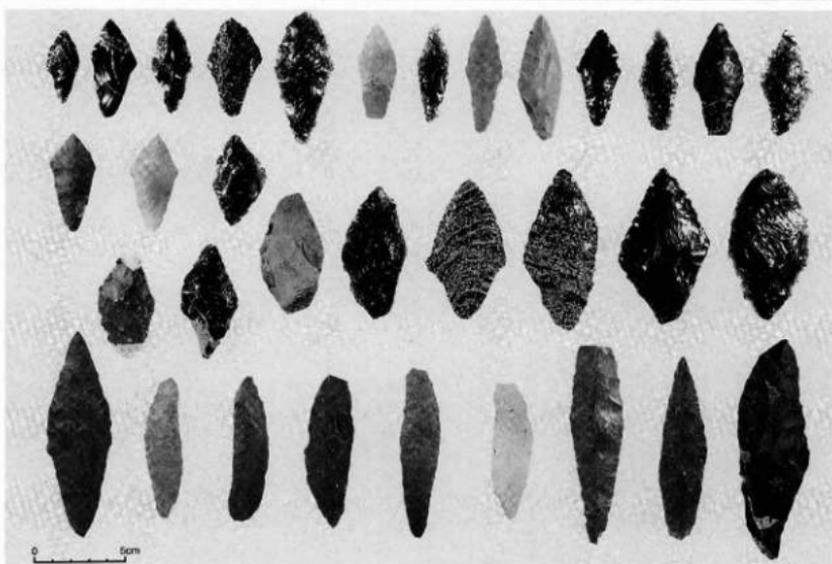
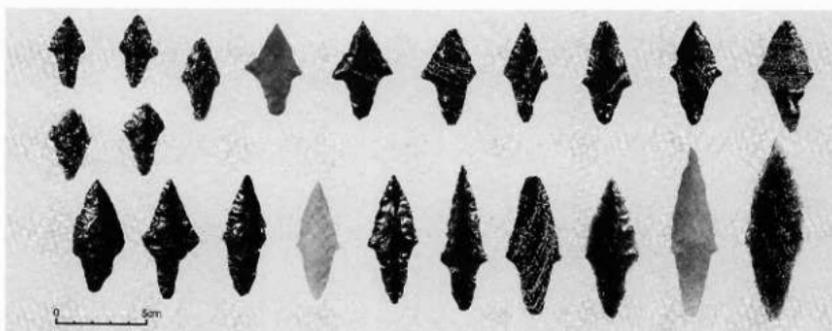


包含層出土の土器(底部)

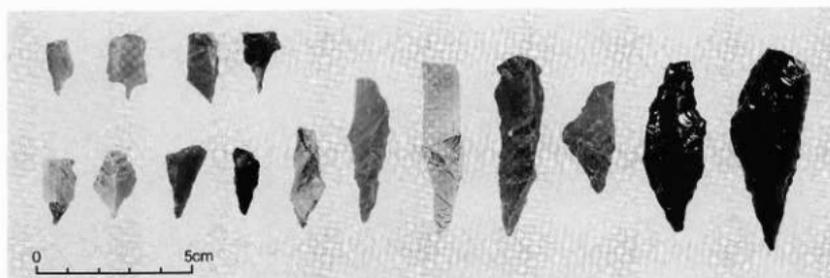
図版42



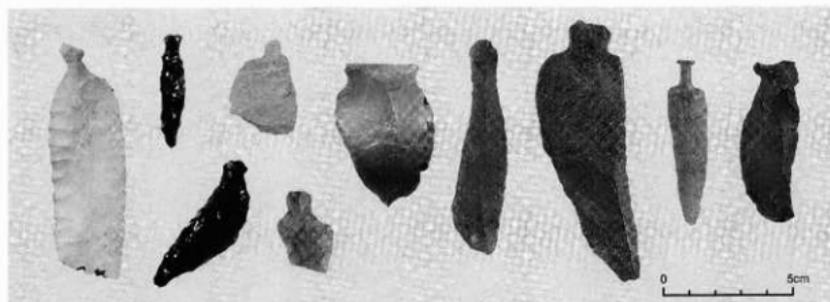
包含層出土の石器(石鏃)



包含層出土の石器(石槍)



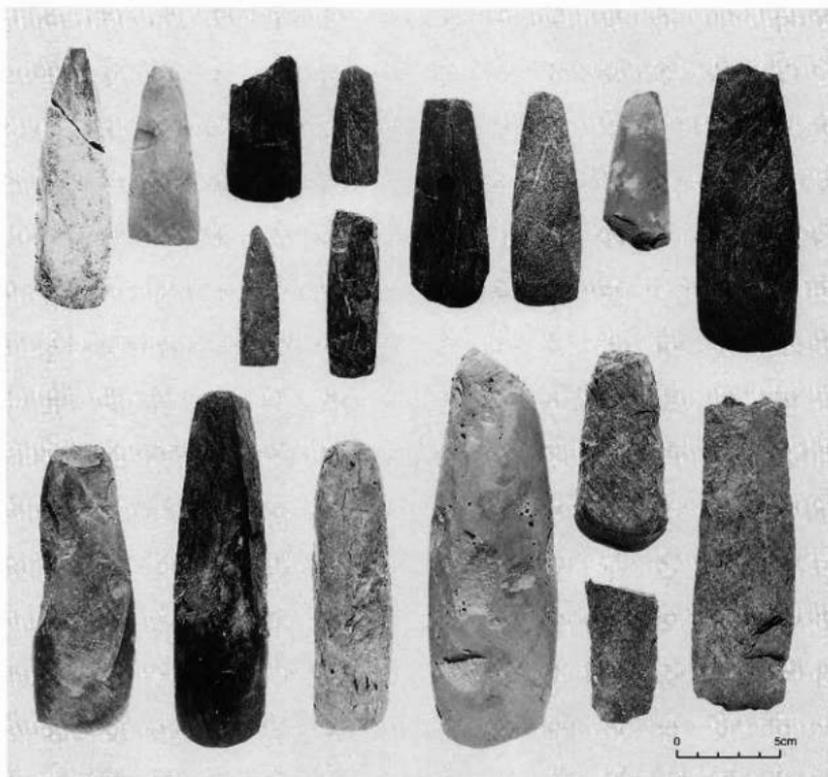
包含層出土の石器(石鏃)



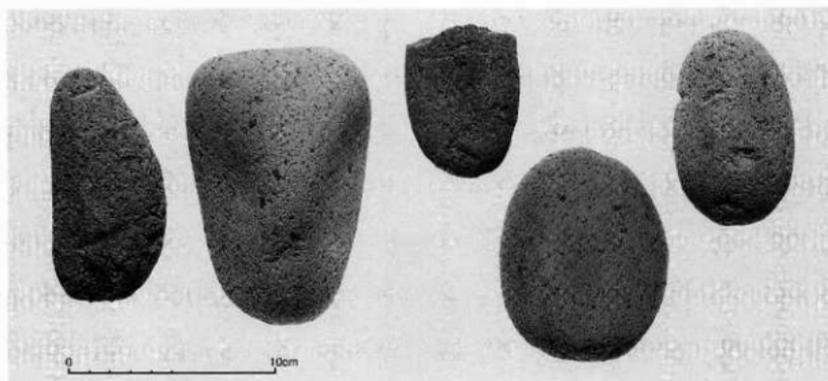
包含層出土の石器(つまみ付きナイフ)



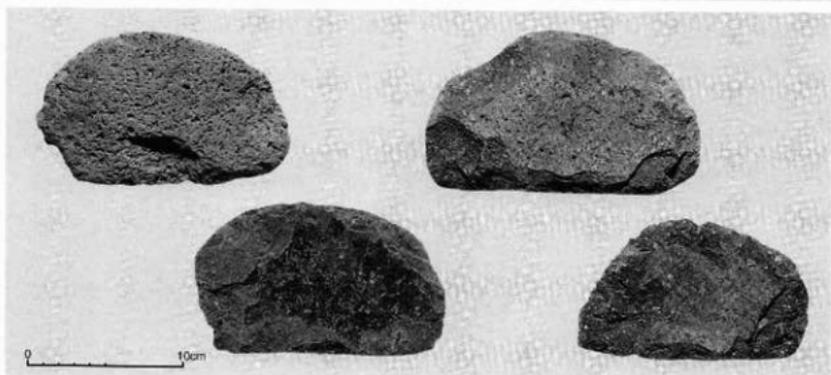
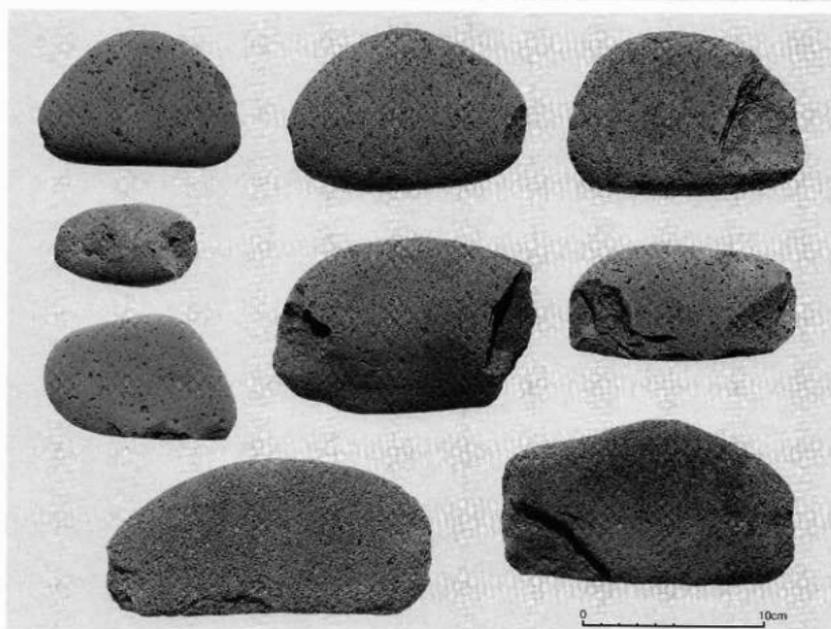
包含層出土の石器(スクレイパー)



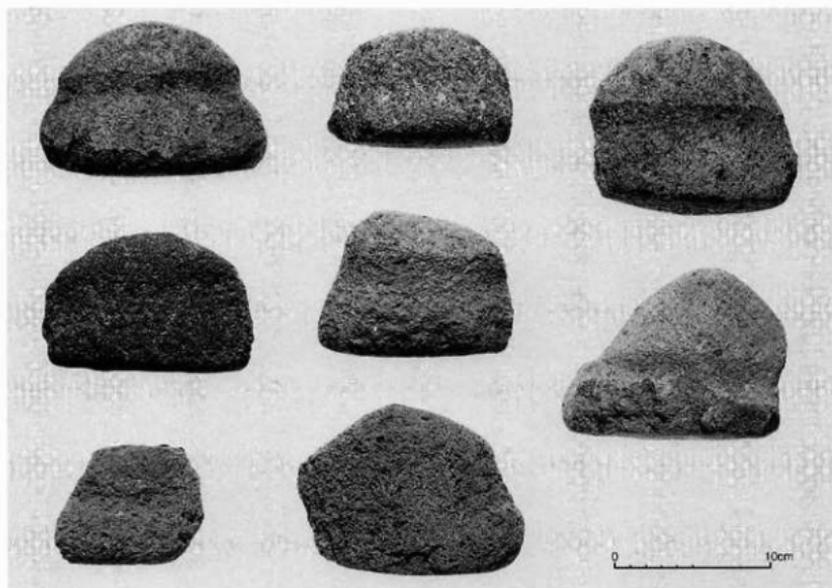
包含層出土の石器(石斧)



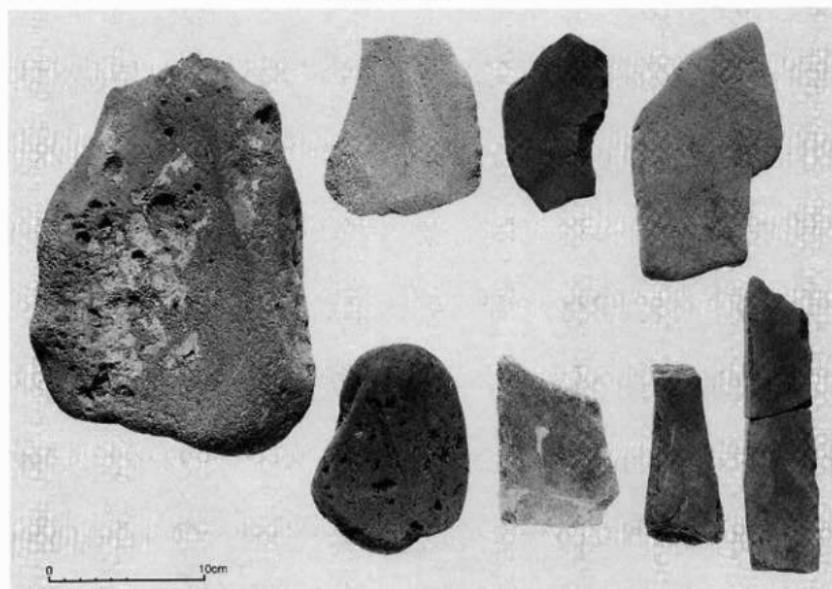
包含層出土の石器(たたき石)



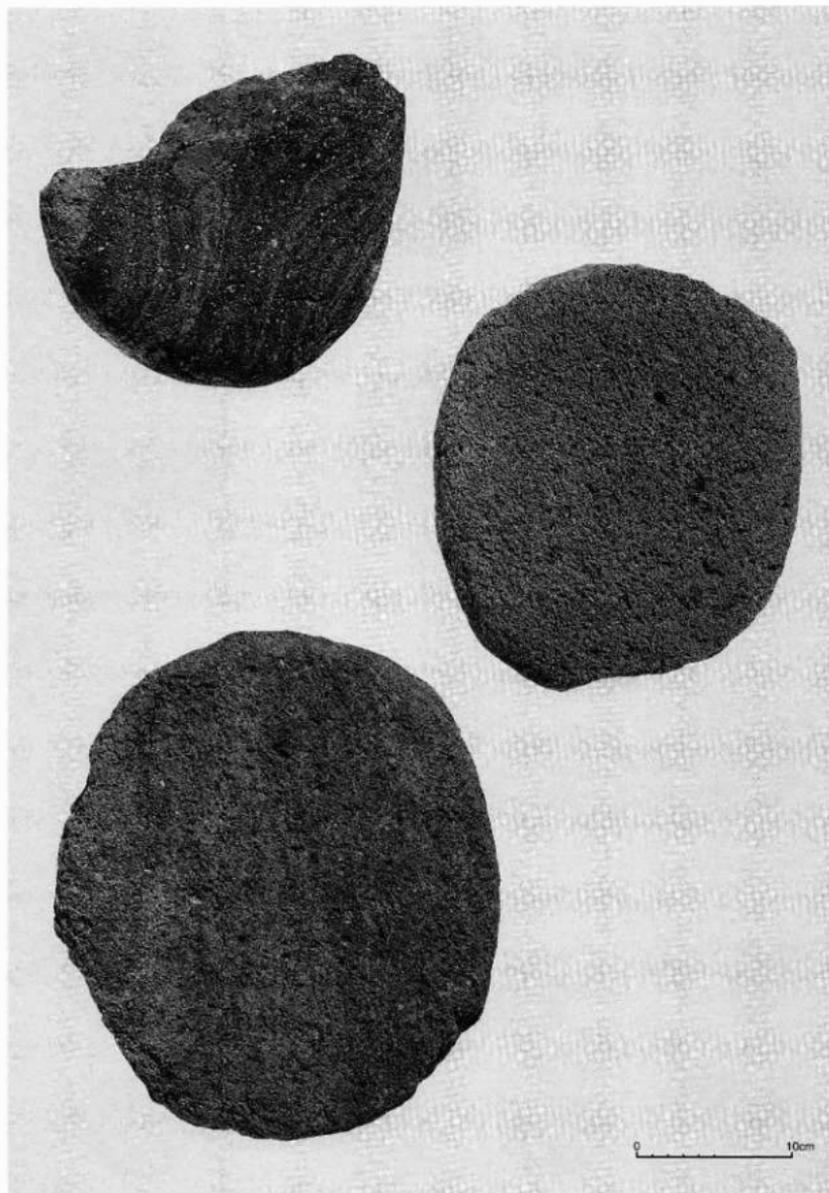
包含層出土の石器(すり石)



包含層出土の石器(すり石)

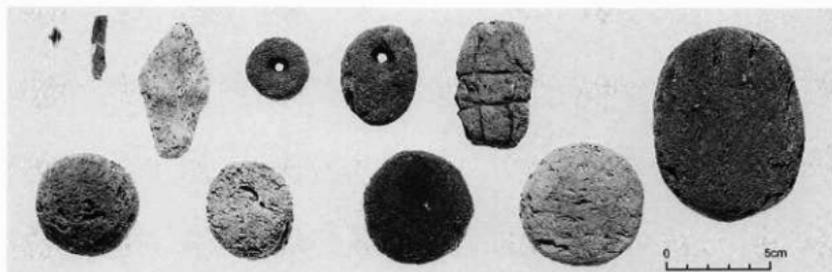


包含層出土の石器(石皿・砥石)

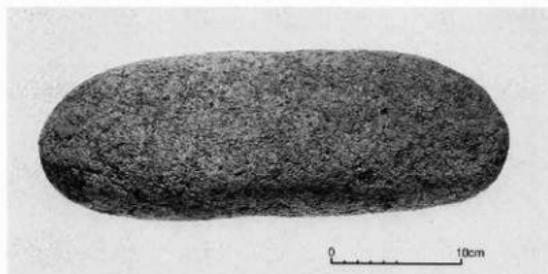


包含層出土の石器(台石)

図版48



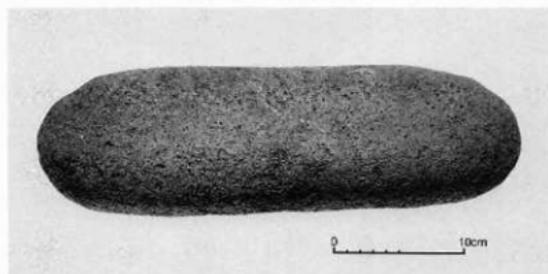
包含層出土の石器(石製品)



包含層出土の石器(棒状すり石)



包含層出土の石器(石製品)



包含層出土の石器(棒状すり石)



包含層出土の石器(石製品)



包含層出土の石器(石核)



調査前全景



包含層調査状況



包含層調査状況



包含層調査状況



Gライン・土層断面



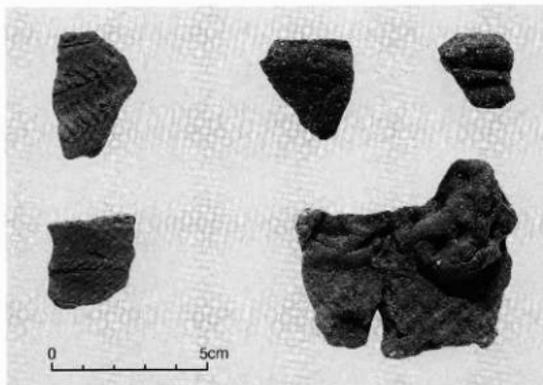
北半部完掘状況



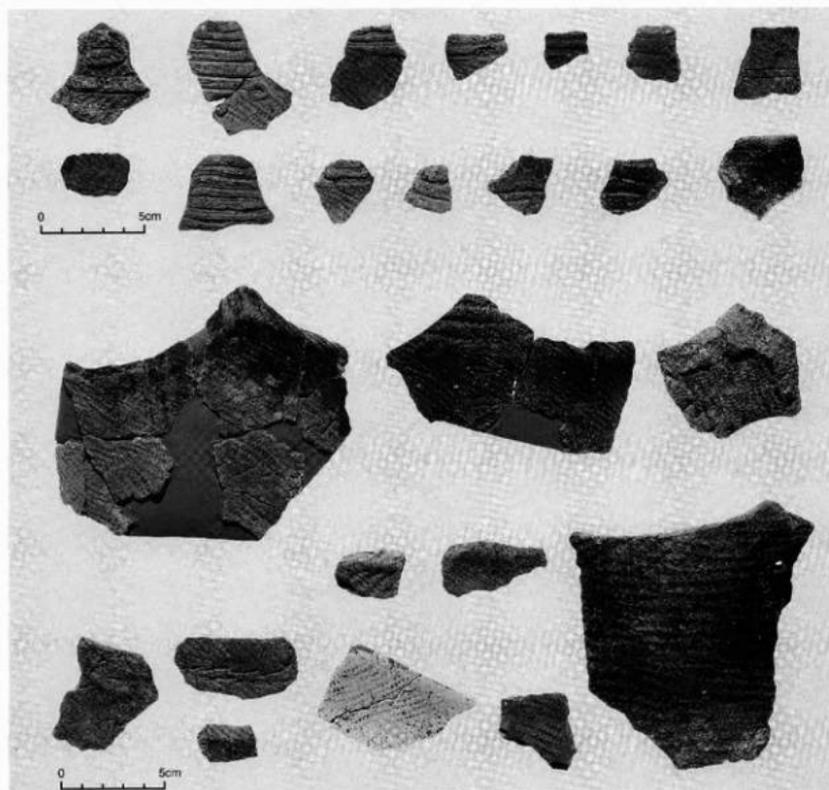
全完掘状況



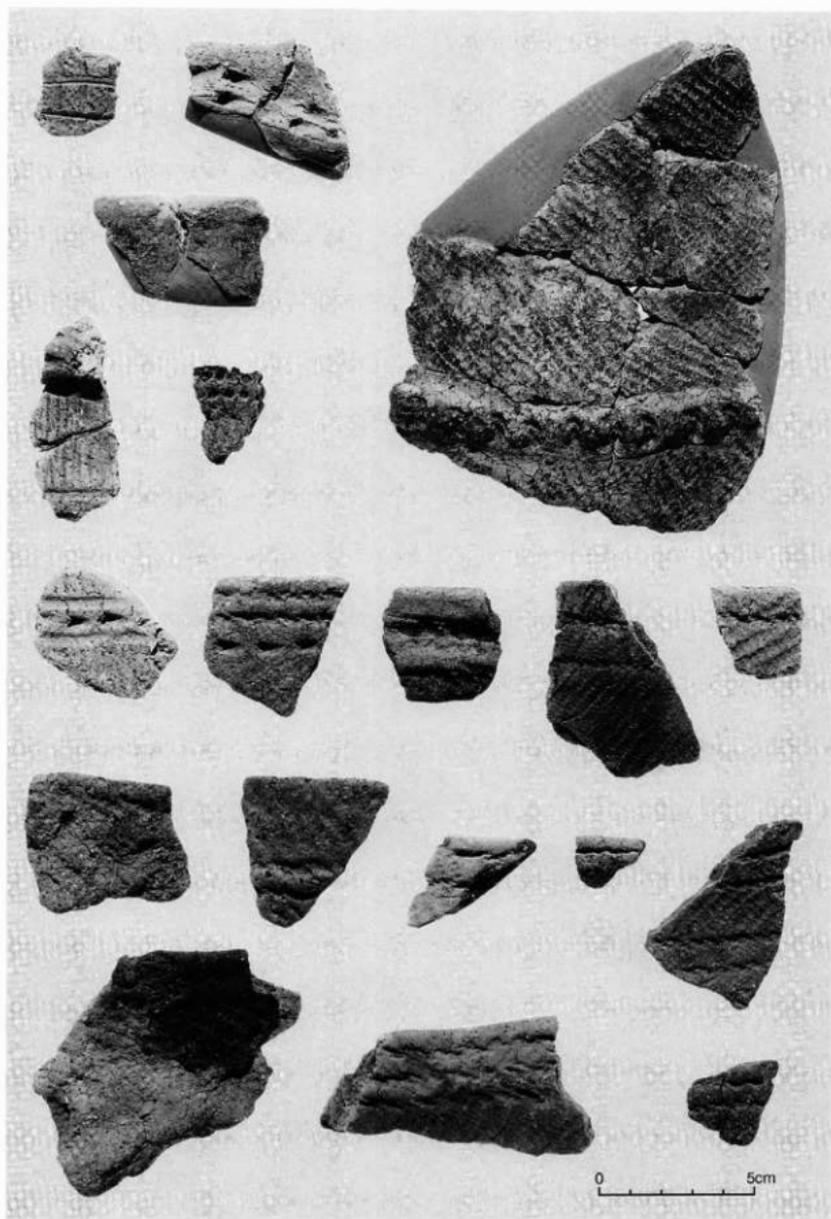
包含層出土の土器(IV群a類)



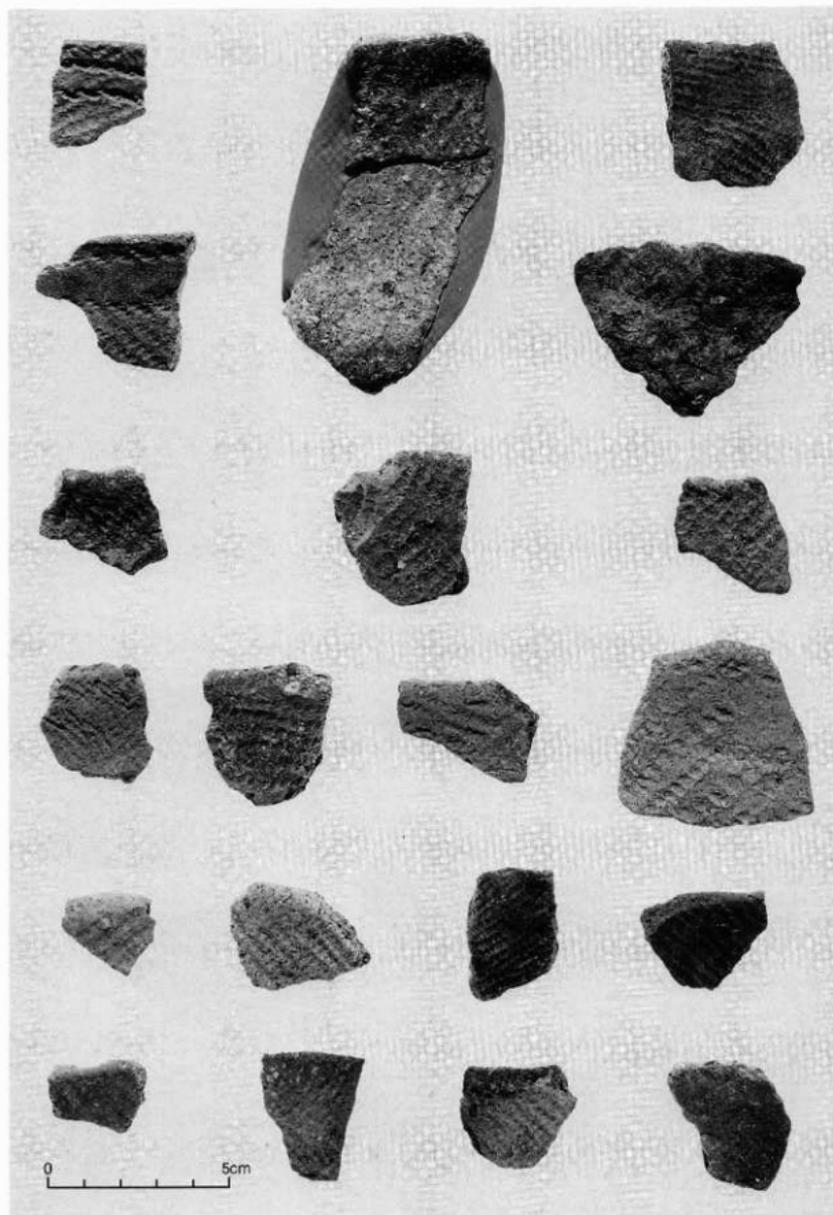
包含層出土の土器(I群b-4類・III群b-1類)



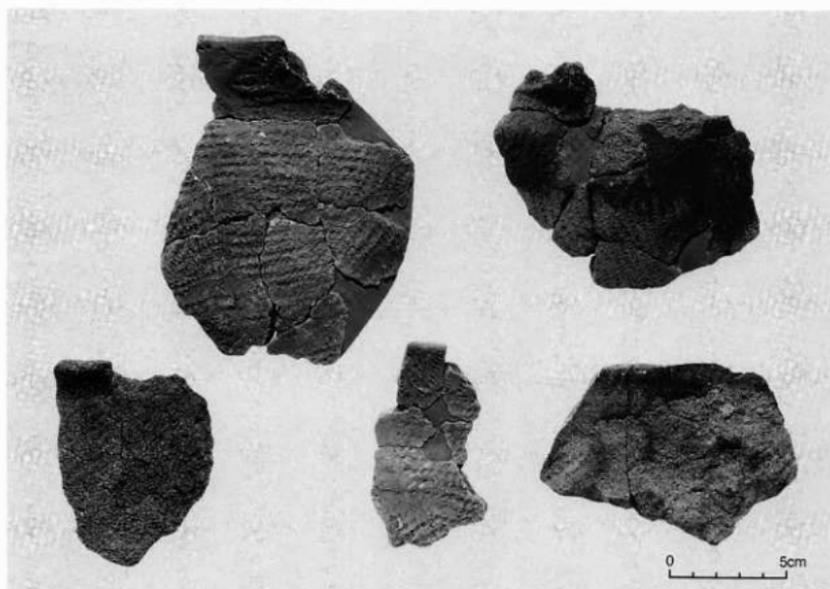
包含層出土の土器(III群a-2類・III群b-1類)



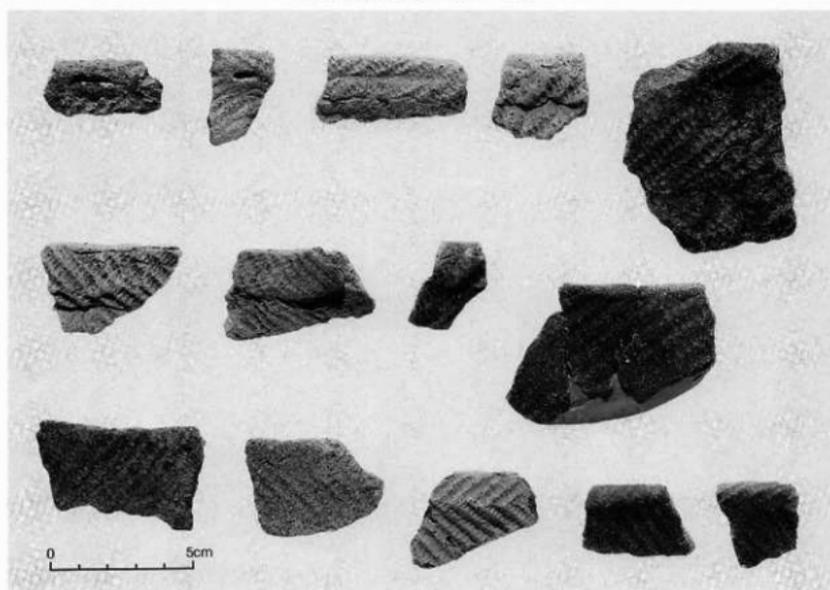
包含層出土の土器(Ⅲ群b-2類)



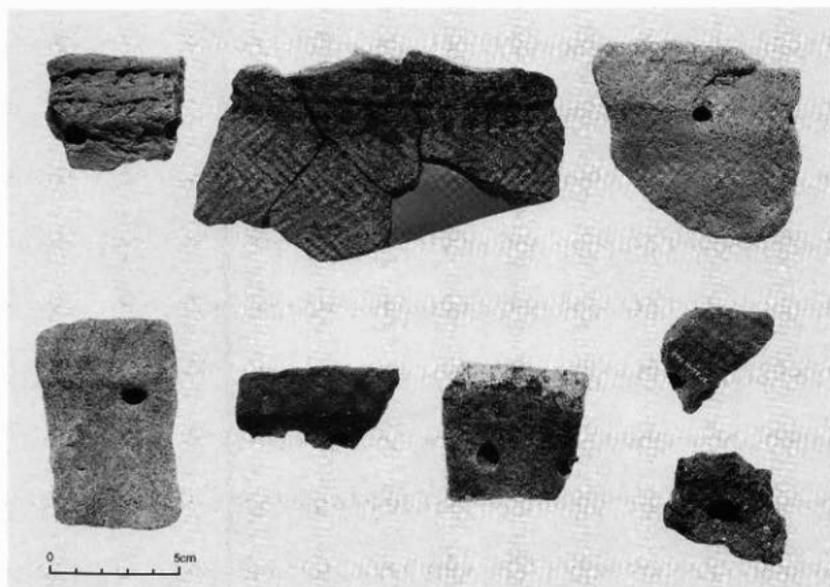
包含層出土の土器(Ⅲ群b-2類)



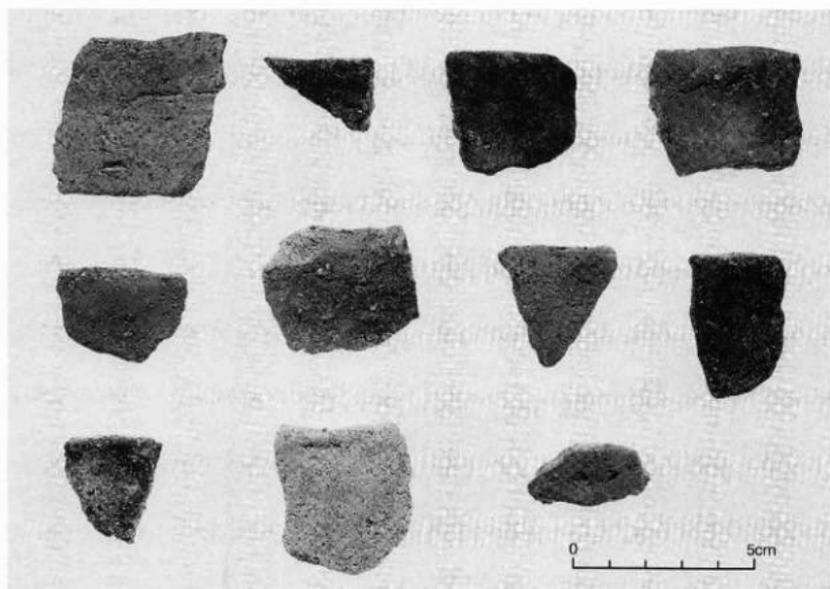
包含層出土の土器(Ⅲ群b-3類)



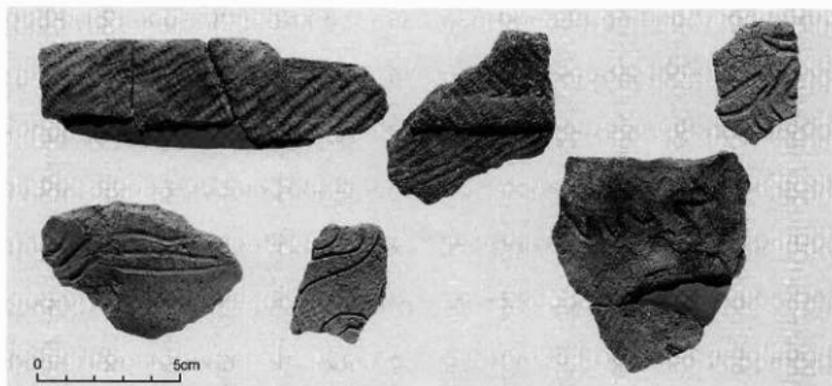
包含層出土の土器(Ⅲ群b-3類)



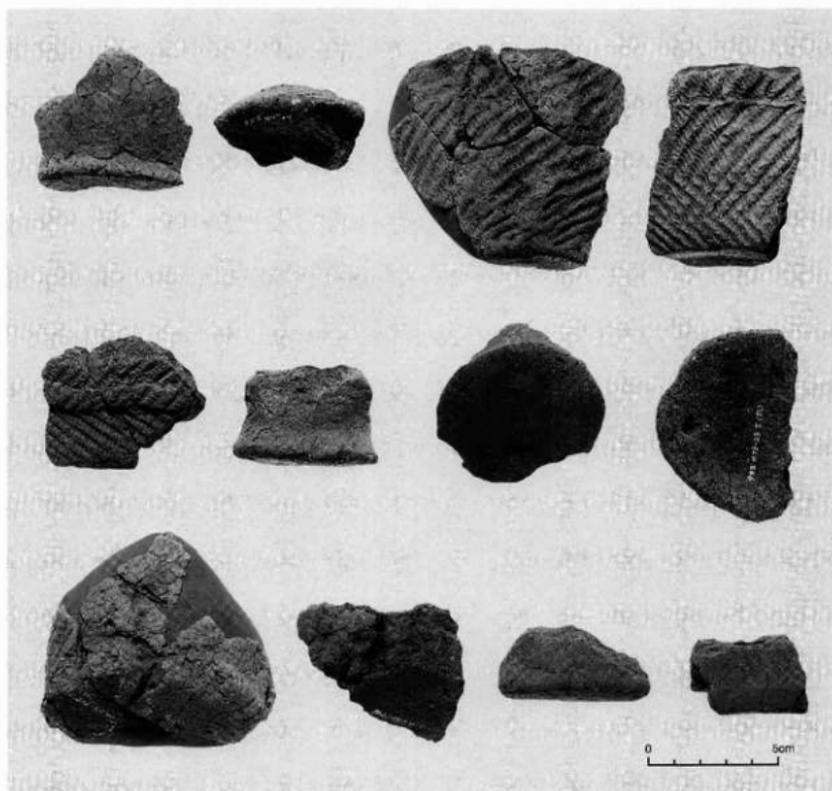
包含層出土の土器(Ⅲ群b-3類)



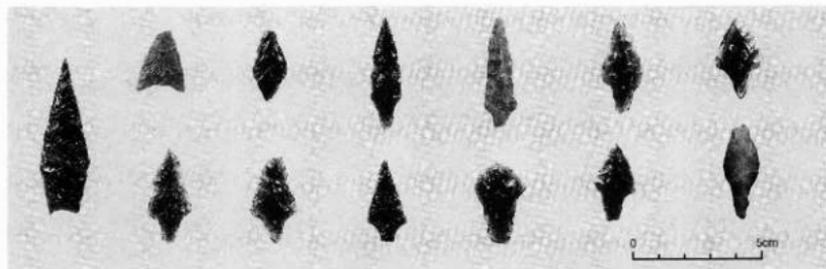
包含層出土の土器(無文)



包含層出土の土器 (IV群 a類)



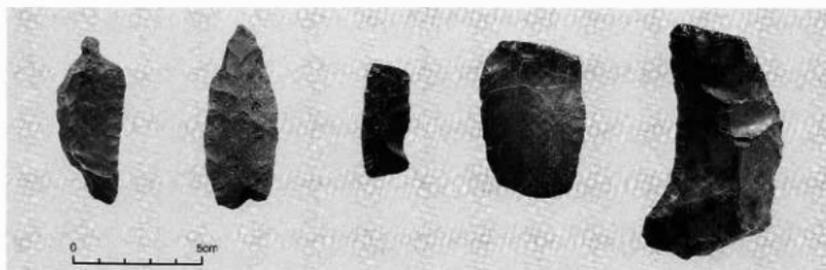
包含層出土の土器 (底部)



包含層出土の石器(石鏃)



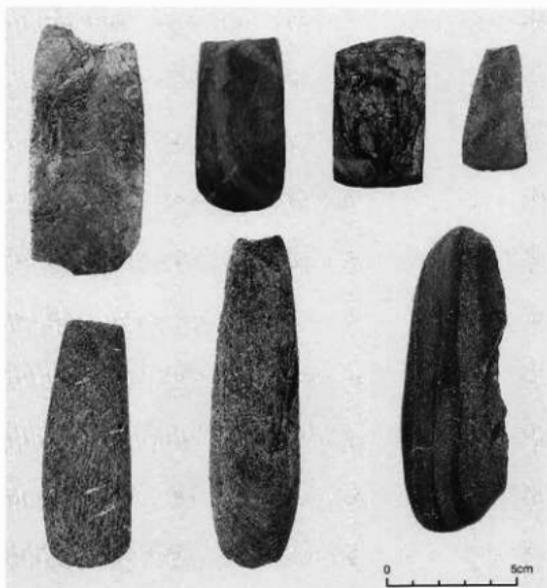
包含層出土の石器(石鏃)



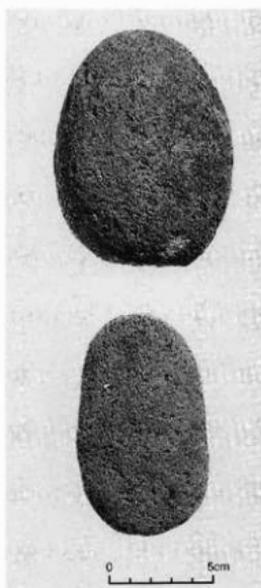
包含層出土の石器(つまみ付きナイフ・スクレイパー)



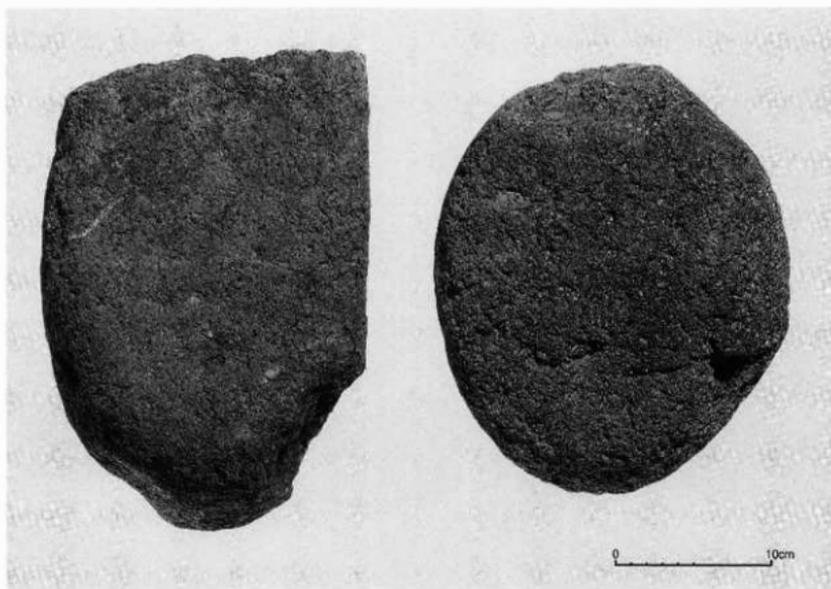
包含層出土の石器(石核)



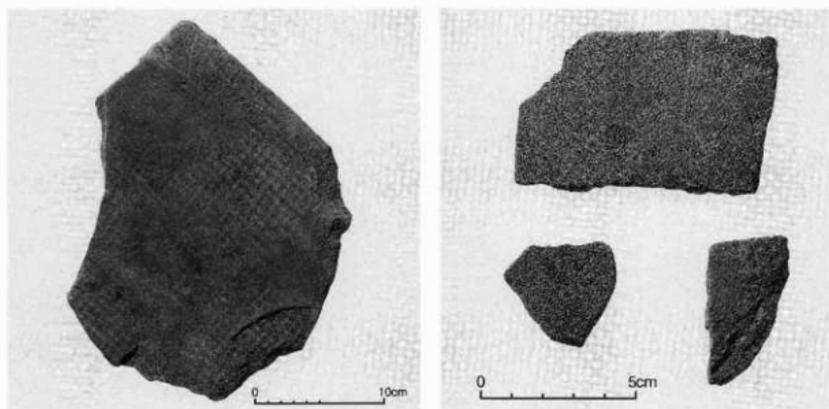
包含層出土の石器(石斧)



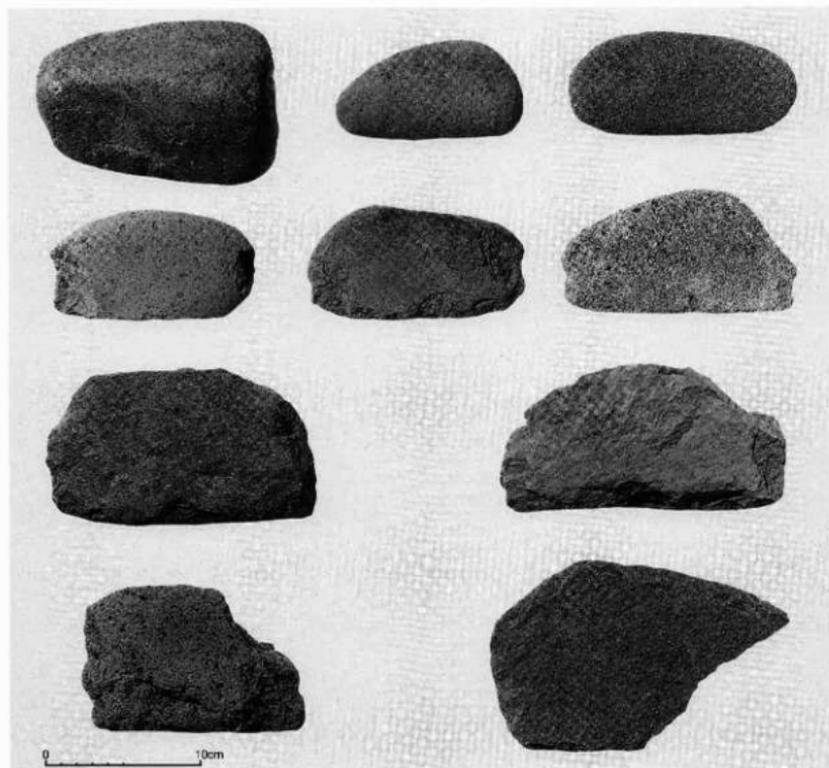
包含層出土の石器(たたき石)



包含層出土の石器(台石)



包含層出土の石器(砥石)



包含層出土の石器(すり石)

抄 録

ふりがな	とようちよう たかおかいらいせき 3 * たかおかいせい				
書名	豊浦町 高岡1遺跡(3)・高岡2遺跡				
副書名	北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査				
巻次					
シリーズ名	財団法人 北海道埋蔵文化財センター調査報告書 (北埋調査)				
シリーズ番号	106集				
編著者名	立川トマス、末光正卓、袖岡淳子				
編集機関	財団法人 北海道埋蔵文化財センター				
所在地	〒064 北海道札幌市中央区南26条西11丁目 TEL 011(561)3131				
発行年月日	西暦1996年3月31日				
ふりがな	たかおか1				
所収遺跡	高岡1				
ふりがな	ほっかいどう あぶたぐん とようちよう たかおか				
所在地	北海道 虻田郡 豊浦町 高岡				
コード	市町村 01571	遺跡番号 J-05-17			
位置	北緯 42度35分20秒		東経 140度41分55秒		
調査期間	19950508~19951027				
調査面積	5,500㎡				
調査原因	道路(北海道縦貫自動車道)建設に伴う事前調査				
ふりがな	たかおか2				
所収遺跡	高岡2				
ふりがな	ほっかいどう あぶたぐん とようちよう たかおか				
所在地	北海道 虻田郡 豊浦町 高岡				
コード	市町村 01571	遺跡番号 J-05-18			
位置	北緯 42度35分20秒		東経 140度41分55秒		
調査期間	19950508~19950616				
調査面積	2,330㎡				
調査原因	道路(北海道縦貫自動車道)建設に伴う事前調査				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高岡1遺跡	集落 散布地	縄文時代	(本年度調査分) 竪穴住居跡 12軒 土壌 3基 焼土 12ヶ所	縄文時代中期の土器・石器等	豊原産 の黒曜石
高岡2遺跡	散布地	縄文時代	なし	縄文時代早期、中期、後期の 土器・石器等	豊原産 の黒曜石

財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第106集

豊浦町 高岡1遺跡(3)・高岡2遺跡

—北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成8年3月27日 発行

編 集 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒064 札幌市中央区南26条西11丁目

Tel (011)561-3131

Fax (011)561-0458

印 刷 三陽印刷株式会社

〒063 札幌市西区西町北15丁目1番12号

Tel (011)661-2311